

奇譚アラス

6月号



1963・6

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



世界日報

四馬孝・案並に画

日本版 サド侯爵悦虐絵巻

画の大きさ A5判

21幅×15幅(本誌の大きさ)
九枚一組五〇〇円(送共) 略号「さ9」

豊満なアイデアと過激無比の風情を以て一世を驚愕した四馬孝の制作意欲を燃えさせた狂気の制作約半世紀にわたる口絵に於ける種々なる通集販売の完成にいたりました。これにより分譲します。

この中で一般書店にては一切販売いたしません。是非直接お申込み下さい。内容はサド侯爵と自稱する或る億方長者の青年が、美貌のうら若き女性を背景として、美観のうら若き一りの華麗に訓練し、虐待するとの完全絵画化であります。



「日本版サド侯爵悦虐絵巻」解説
一、女体食卓(大テーブルの中央に股を開いてアグラの脚にされた全裸の美女が仰向けに寝かされてい

いだが前が、その白い肌をくねらせたり狂うのだ)
六、浴室の女神(むちちりと肉のついた女体がダグと巻いた太い縄で水を吸って縮み、足を釣られた女



連続吊り責フォートの決定版、未発表の秘蔵版

梨花悠紀子吊責写真特集

第一集

逆エビ吊り

略号(りつ1)

A5判 (21×15) 感光紙焼付
八枚一組 五〇〇円(送共)

第二集

逆胴吊り

略号(りつ2)

A5判 (21×15) 感光紙焼付
八枚一組 五〇〇円(送共)

吊責にあえぐ美人モデル梨花悠紀子嬢の裸身があまりとくなく、あらゆる角度から鮮鋭なるレンズによってキャッチされた、その全身の悦虐の表情を、皆さまの目のあまりに見ていただくために、A5判(21幅×15幅)の大きさに彫大いたしました。宙にういた梨花嬢の悦の姿態は、大きな画面と相まって刻明に手にとるように眺めることが出来る吊責フォートの圧巻であります。この全写真集は、吊責愛好の梨花悠紀子ならではの到底実行できないであろうと思われる強烈なものばかりであります。



全身をぐるぐる巻きに縛られて吊り責めにされてみたいというのは、マゾヒスト梨花悠紀子嬢の第一の念願でした。彼女の願う強烈にして苛烈な本格的な吊責。彼女の思ふままに、何ら手心を加えることなく、S派の第一人者辻村隆がビシビシと縛り上げて滑車により吊上げた連続場面です。

第一集(逆エビ吊り)
両手首は後手に括られて、曲げた両足首と共に逆エビに緊縛された梨花嬢の肌には深々とロープが喰い込んでいます。ギリギリ、ギリギリと滑車を引き上げるとううう、と、思わず彼女の口から悲鳴が洩れ、じりじりと全身が浮き上ると、苦悶の表情が彼女の顔面から、次第に足の爪先まで伝ってゆく。高々と吊り上げた美しい逆エビの裸身――
第二集(逆胴吊り)
ヒューツという悲鳴も口にかまされた狼ぐつわによつて、くぐもつてしまふ。縄は徐々に滑車によつて巻き上げられて頭を下にした全身は宙に浮いてきた。二の腕に、太股に、胴体にひどい程埋れてしまふ縄目。宙ぶらりんとなった裸身が吊り縄を中心として、ゆるく回る。時間が経つにつれて苦痛が次第に増してくるが、彼女はまだ頑張っている。



凄絶！とおきのおきの未発表吊り責め写真の秘作、ここに堂々発表乞御期待

Mフオト・シリーズ(分譲品)粒選り新版写真紹介

先月号で御申込みの如何によつてはMフオトの分譲を中止するといふことを発表しましたところ、三、四の熱心なMファンの方々から、早速お申込みがあり、絶対に中止しないようにとのお申出がありました。然し大勢としては、やはり依然としてS関係に比較して非常に少い割合でした。

Mフオトのお申込みが非常に少いということの原因として考えられることは、第一にSに比して絶対数が少いということ。これは当然でしょうが、原稿、読者通信、或は同好者を紹介してほしいといった書面はSよりも多いのです。だから、Mの方はSに比してフオトを必要としないか、或は必要としても経済的に購入の余猶がないものか。

理由はいづれにしましても、少数とはいえ熱烈なファンの要望し得られることでありますので、ここに全部新版のマゾ写真をMフオト・シリーズとして発表することにいたしました。

すべて或種の都合により誌上公開を許されないものばかりです。で、分譲品としました。同好の方々の御鑑賞を得ましたならば幸いです。

犬の生態

略号 (そろ)

大手札 三枚一組 三〇〇円

絹川文代、杉 早夫

犬になった人間が絹川文代嬢によつて、どのようにいたぶられるか。マゾヒストの愛読者杉早夫を用いて実験したフオト。

足の味覚

略号 (そは)

大手札 三枚一組 三〇〇円

絹川文代、杉 早夫

ふっくらとした白い素足が犬奴の口に差し出される。ペロペロと如何にも美味しそうに舐める光景肉づきのよい足指の表情がMの味覚をそそる。

長靴は悶ゆ

略号 (そに)

大手札 四枚一組 四〇〇円

絹川文代、高田 一

革の長靴を穿いた絹川文代嬢の暴虐の下に呻吟するM男。長靴フティッシュのMにとって、これほど刺戟的で心を揺さぶる趣向はないだろう。

灰皿の男

略号 (そほ)

大手札 四枚一組 四〇〇円

絹川文代、高田 一

灰皿を持って仰向けに寝ころんで捧げている男の上に跨って坐った絹川嬢が悠然として煙草をくゆらせている。煙草の灰は男の顔に胸の上に、容赦なく落ちてくる。

足舐の構図

略号 (そへ)

大手札 四枚一組 四〇〇円

絹川文代、小沼正三

真白い絹山嬢の足が乱暴に小沼の口の中に押し込まれる。この汚辱に耐えて、素足の指の股を舐めつくすMの生態。

縛りの過程

略号 (そと)

大手札 四枚一組 四〇〇円

絹川文代、高田 一

後手高小手首縄に絹川文代嬢から縛られるM男。やがて身動きの出来ぬ厳しい縛しめに観念した彼が女王様のお尻の下になって喘ぐ有様。

使役の凌辱

略号 (そち)

大手札 四枚一組 四〇〇円

絹川文代、高田 一

ハイヒールを戴いて女王様の真白い素足におはかせする使役の凌辱に、嬉しさをかくすことのできない奴隷が、嬉々として奉仕するのを冷然として見下している女王様の美しい視線。

なぶり者

略号 (そり)

大手札 五枚一組 五〇〇円

絹川文代、高田 一

犬のようにチンチンをしてお菓子を貰う男、首に犬輪をつけられて鎖を引っぱられながら顔を足蹴にされる男。平伏した頭を土足で踏みにじられる男。女王様のお尻の下で椅子となつていつまでも、よしとお許しがでるまで辛抱する男。なぶり者のM男の生態があますところなく活写されている。

おいしい足

略号 (そめ)

大手札 四枚一組 四〇〇円

絹川文代、小沼正三

女御主人様の美しい素足を舐めさせて頂くことの大好きな犬は、這いつくばって、出された御主人の指先を丹念に舌で舐めてゆく。

第一 グラビヤ

美貌への冒瀉と汚辱
鼻のいたぶり
赤のテープと黒のアミ
鼻責めの第一段階
夫人被虐図
痛打に耐えかねて
柔肌と縄のコントラスト
白の祭壇に上ったイケニエ
令嬢夢幻の構想

絹川文代
梨花悠紀子
梨花悠紀子
関谷富佐子
大塚啓子
大塚啓子
典子

巻頭口絵

アイデア画「くっつわ」
四馬孝「女体洗礼式」
傑作画「口中蠟燭責め」
妊婦の切腹（豪勇・巴御前）
女体切腹「娘覚悟の切腹」
新人責画「二本の煙草」
マゾ画「奥方小姓を馬にする」
MS画「浴槽の女神」

四馬孝・画
四馬孝・画
滝れい子・画
四馬孝・画
黒川不二夫・画
滝れい子・画
四馬孝・画

第二 グラビヤ

フアツションモデルの悦虐プレイ
（イ）狙った美しいベット
（ロ）可愛いSの関係
マゾ・「スロースをかぶせられる」
フォト「人間椅子の恍惚境」
エビしほりへの序曲
責めの疲れに呆けて
豊満への羨望と抵抗

三木コンビ
浜田文代
絹川文代
梨花悠紀子
水本茂美
大塚啓子



風俗文献研究 白首百態

女が動物にかえるとき
読者異常体験記 熱い鞭
KK通信 マゾヒズム難考
サジスチック ストーリー 元美の反抗
サジズムと変形譚

樋口逸馬
羽村京子
狩井麗作
大倉安男
大倉忠
千草恵夫
諸岡堅雄
川野京輔
飯森潔

当代女 武勇伝

風俗読物「剃刀と美女」
サジスチック ストーリー 薔薇虫
女体切腹秘話 遙かなる山河（後篇）
読者体験記

諸岡堅雄
川野京輔
飯森潔
新宮明夫
辻村隆
岡平吉夫
芳野眉美
万田不仁
葉村佳子
久治

「奇譚三十九夜」物語（第二十五夜）

女相撲雑感
ガン作・マニヤのノート
絹世と私——被虐愛さんげ——
〔告白〕夢見る乙女の想いと願い
創作 砂土の塔
我が妻・奈津子の記
読者通信

辻村隆
岡平吉夫
芳野眉美
万田不仁
葉村佳子
久治

我が妻・奈津子の記
読者通信

画の大きさ A5判

(21纏×15纏) 感光紙焼付
六枚一組 五〇〇円、略号(か6)

一、廻上のいけにえ、(台上でエビのように二つ折りにされた全裸の女体に今まさに加えられようとする浣腸器の悪魔のような跳梁をじっと耐える彼女。)

二、高圧空気浣腸、(百ワットの電光に明るく照らし出された女体に、高圧ポンプの先から、空気がドンドン送り込まれる恐怖が鮮やかに描き出される。)

三、蛙腹の注水実験、(手と足を鎖に吊られて宙に浮いた白々とした女体。その鼻孔にはイリガートルの嘴管が水をどくどくと腹の中へ注ぎ込んだ。)

四、浣腸責の最高頂、(竹の棒によって、両足を八の字に開かされたイケニエは、目の前にある恐ろしい器具に、思わず全身を硬直させてしまった。)

五、排泄に耐える、(豊満な張りきれぬばかりの女体を一本の柱に宙じばりにされて、浣腸の洗礼を受けた彼女が便器を前にして耐えに耐えぬく悲壮感。)

六、奇妙な便器、(彼女の体内には、五〇CCのグリセリンが注入されて荒れ狂っている。奇妙な型の便器が彼女の使用を待って、あざ笑っている。)



四馬孝・案並に画

女体浣腸嗜虐場面図

(うら若き麗人、強制的に浣腸を施される図)



◎浣腸愛好者のために、特に浣腸を主題としたショットキングな場面ばかりを四馬孝画伯の豊富なアイディアによって描面して貰った力作揃い、従来兎角口絵から締め出され敬遠され勝ちだった浣腸のテーマを、ここに見事に完全に絵面化されました。

女性に對する浣腸について大きな関心を抱いている方々から久しい間に亘っての要望も、いよいよこの制約のたぐひに果し得ませんでしかなかったが、浣腸ファンの見果てぬ夢の一端でも満足して頂こうと、ここに四馬氏を煩して、女体浣腸の興味の場、背景、小數々の変化ある姿態、背景、小

道具等によって、美しい画集として完成して頂きました。浣腸マニアの方々は勿論のこと、Sマニアの方にとっても、非常に興味がある画面の展開がたのしみです。どうか、浣腸マニアのため、特に作成したこの画集を、引續いて刊行するためにも、御支援下さるようお願いいたします。









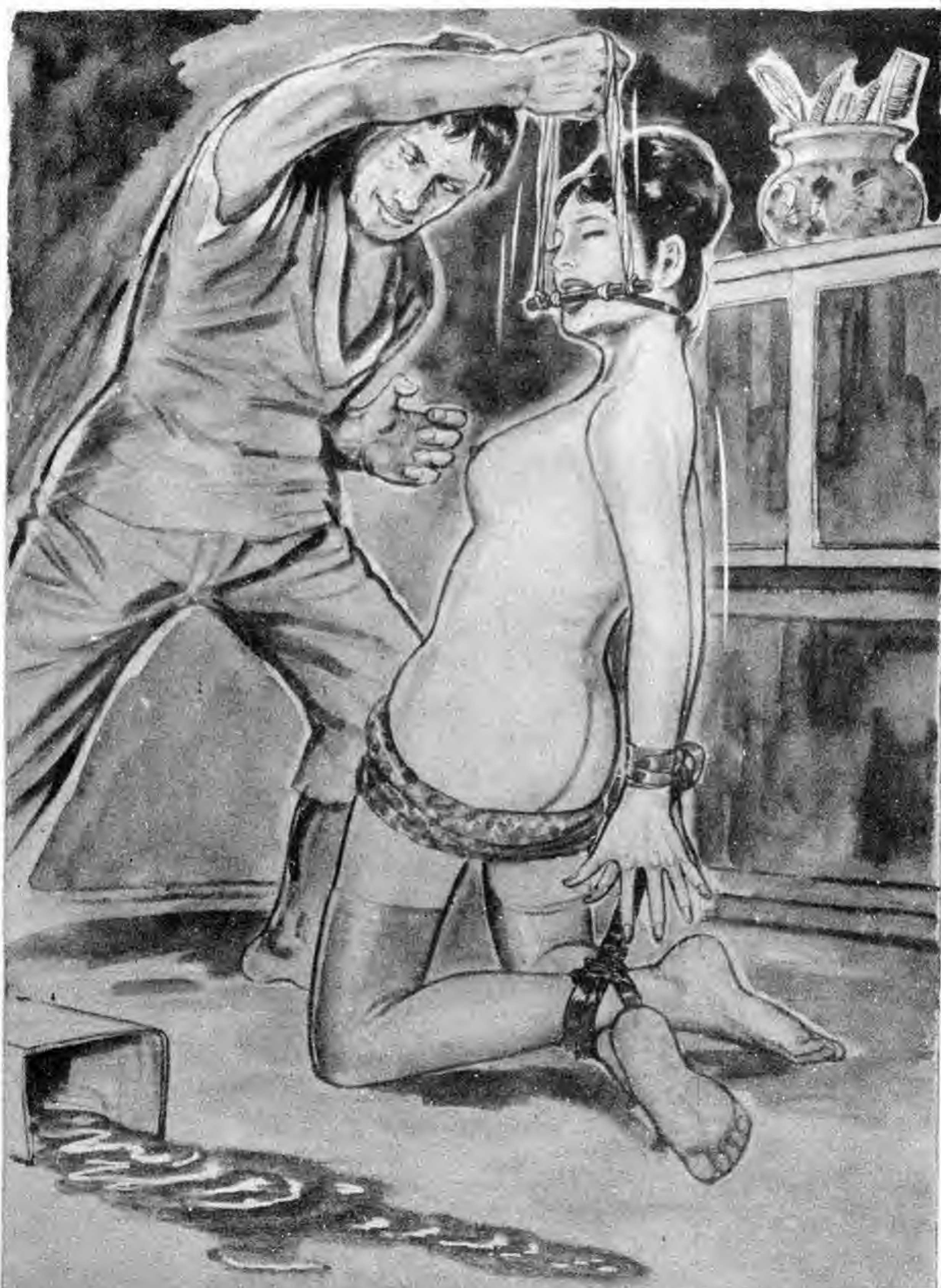


5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100





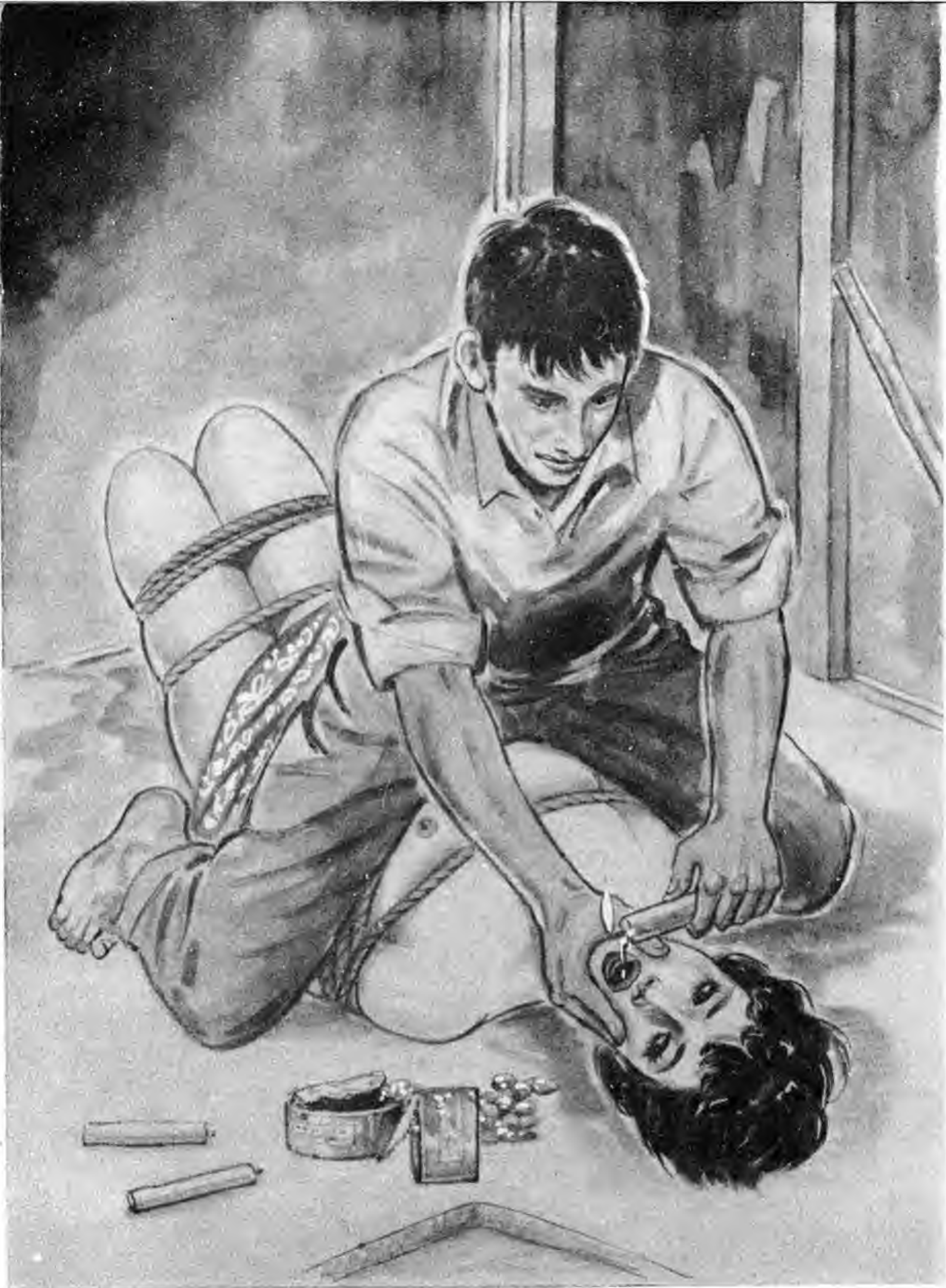




女体の洗礼式

四馬孝・画





口中蠟燭責め



妊婦の切腹（豪勇・巴御前）



覚悟の切腹

四馬孝・画

二本の煙草

黒川不二夫画



小姓を馬にする奥方

瀧 子 画



浴槽の女神

四馬孝・画



















新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1963年 6月号

(第17巻 第6号 通刊 第177号)



或る緊縛ポーズから

絹川文代



風俗文献研究

白首百態

樋口逸馬

Ⅱ 新政府は頭痛鉢巻Ⅱ

明治時代の流行語で、現今ではほとんど死語になっているものに「警八風」と言う言葉がある。その意味は私娼が客と同衾している最中を警官にふみ込まれる事で、警察令第八条を適用すると言うところから来たものだ。

徳川幕府は三百年を通じて私娼撲滅に大童だった、それより先きに幕府の息の根が止った。明治新政府はこれをその儘うけ継いだ

上に更に維新で失業した武士の妻女や娘で街娼に転落したものまでも引受けたのだから私娼問題には頭痛鉢巻だった。

そこで、多事多難の新政府は、とりあえず旧幕府時代の制に倣って、これ等の密淫売を檢舉しては吉原その他の遊廓に払い下げたのである。明治八年四月四日、東京府知事大久保一翁の名によって布告された「東京府達第八号」がこれで、その第一条に、

隠売女ノ所業致候者ハ娼妓鑑札下ノ上吉原

根津其他四宿貸座敷渡世ノ者へ相預取締可為致事

とある。そして、その年期は一年間で、再犯の場合は女の保証人が五円以上十五円の罰金を支払わされ、若し払えない時には体刑として当時「女工場」と称し女郎に簡単な裁縫や読み書きを教えた娼妓学校や微毒病院の雑役をやらされた。

この様な苛酷を極めた、しかも反時代的な方法によらなければ私娼の取締りが出来なか

ったほどその跳梁は猛烈だったのである。

Ⅱ高官を手玉に

取るパンマの元祖Ⅱ

何しろ江戸から東京と名が変ったばかりの頃とて、各所にはまだ旧幕時代の所謂「岡場所」が残っていた。

赤坂と言えば、後には東京一流の花街として、各界の名士が一夜に千金を投じて豪遊を極めた場所となったが、明治初年には、曾て「麦飯」と言われた幕府当時の賤娼と大差のないもので、明治六年九月二十四日の郵便報知新聞が、

此頃府下に表は芸妓と号し其実売女同様の所業する者各所に繁盛すると雖も別して赤坂の土地を甚しとす、茶亭吉池玉川其他の料理屋等皆店舗に同じく各客芸妓を招き僅に金一円を以て直に閨房に伴うことを得と伝えている様に場末の密淫窟だった。

これも明治初年の話で、新橋の近くにおとめと言う眼あき按摩がいた、「パンマ」の元祖とも言ふ可き女が、この頃すでに活躍していたのも面白い。

然も彼女は芸妓にも稀な美貌で当時の顯官を相手どり、得意のマッサージで相手をふら

ふらにした上で誘惑すると言う戦法だから、その人気は大したもの、按摩賃は二十五銭と言う当時としては筈棒に高価なものだったにも拘らず、お座敷が応じきれない程の大繁昌振りを示した。

夏などは真白い肌が透いて見えるスキヤを着て、横臥している男の傍に、その豊満な匂うばかりの肉体をびったりとくっつけてのサービスには大抵の殿方はひと堪りもなく悩殺されてしまった。

女にかけては目のない伊藤博文や井上馨などは大のおとめ最負であった。

多忙の上に金もないから芸妓など相手にする余裕はないと言って盆栽に芸妓の名前をつけて楽しんだと言われる大隈重信なども彼女のサービスで悦に入った一人だ。

こんな調子だから、彼女は按摩と言っても氣位が高く、氣が向かなければ、大官や富豪連の呼出しにも「お座敷が忙しくて上れません」と無遠慮に断った程だった。

ⅡネロネロヨロシイⅡ

現代人の常識では到底理解出来ない様な事が明治時代には平気で行われた。次に転載した新聞記事などもその一つだ。

明治二十一年七月三十一日 朝日新聞

飼犬に身代を喰われる

本所小泉町辺にて日傭稼をする長谷川仙吉(四五)と言う男は女房お照との中に子供の四人もある者なるが性質犬を好み親子夫婦は三度の食事を一度二度減しても、日頃飼ひ狎らしたる二匹の犬には、パン牛乳を買って喰わせ大抵の病気の時も犬がチンチンやお招きをすれば直ぐに癒るという程なるが此頃の不景氣夜昼となく稼いでも家族はもとより飼犬の食糧にさえさしつかえければ、或時お龍(十七)お幸(十四)と言う二人の娘を招き(中略)妾共も犬の為とあるからはどんな苦しい勤でも厭いはせぬと答えしより仙吉は二人の娘を馬喰町の旧郡代の春本へ矢場奉公に住込ませ云々。とある。

周知の通り旧幕時代に幕府の直轄地であった馬喰町四丁目には民政を取扱う郡代屋敷があったので、明治に入っても此辺を俗に「郡代」と称し明治十八年の移転命令で浅草觀音境内の奥山から追払われた矢場女が多く集つて盛んに風紀を紊した場所だ。

明治十年頃、東京で流行した「おやまかチヤンリン節」の一節に、

楊弓ひくとて矢竹に通う

やっぱりお尻が其的だんべ

オヤマカチャンリン

とあるのは彼女等の擬装売春を諷したものだ。この他に、麦湯、甘酒などの看板をかけた女達が通行人を盛んに引っ張ったので政府は明治十一年に「行通妨害」を理由に取締りに乗出した。

こう言った種類の女は横浜にも盛んに出没し、就中、吉田、野毛、弁天通り、元町辺の夜店の賑いを当て込んで嫖客の袖を引いた。

横浜は外国商館が多い関係から、外人相手の私娼が、怪し気な英語を使って異人さんの懷中を狙った事は、戦後のパン嬢とよく似ていた。

横浜街中を夜行するに西洋商館の傍には多く窺窺たる者ありて情人を待つが如し、はじめは思えらく、是れラシャメンの納涼に托して私遇の約を履まんとする者なるべしと、その側に至るに及んで彼の妹なる者忽ち洋人に声を掛けて云わく「コンパンハ・アナタスケベーヨロシイ・ワタクシ・アナタハウス・マロマロ・アナタ・ネロネロヨロシイ」と是巫山神女の亜流にして其語宜しく意を以て解すべし。

(明治七年九月四日東京日々新聞)

Ⅱ銀座のひっぱりⅡ

政府は「捕縛せる淫売女の恥部を強制診断し、感染者は入院せしむ」と言う方針のもとに明治十二年二月に最初の東京全市一斉狩込みを行った。これは一つには、検徴を極度に恐れていた女達に対する効果を狙ったものでもあろう。続いて翌十三年十一月には銀座街頭の淫売狩を行った。

今でこそ最新流行の尖端を行く銀座も明治初年にはまだ東京市内に入っておらず、あの辺一帯には私娼窟が散在していた。明治五年頃の東京日々新聞の記事には府下銀座二丁目里俗「いろは長屋」と言われた曖昧屋の女が当時出入りした多くの書生が半可通の英語を振り廻すのに刺戟されて英語の勉強を初めたとあり、明治八年には新富町、築地入舟町辺の密淫売窟、臨検を喰い、嫖客は酒盃を抛り出して逃げたと言う様な話もある位だ。

当時、銀座は俗に「煉瓦」と言われ、両側は明治四年に起工し八年頃に完成した煉瓦造りの店舗が並んでいたが工事の不完全な為に湿気がなかなか抜けないのと、一つには外人が設計した関係から畳を敷くのに具合が悪い

と言うので住む者が少く空家には見世物や屋台の飲食店が並ぶ様な始末だった。

併し間もなく「煉瓦」は東京名物の一つとして、お上りさん達が郷里への土産話に東京見物のたびに一度は必ず訪れる盛り場となった。それと同時に、この頃は瓦斯灯の明るい銀座四丁(交叉点から京橋の間)へ「ひっぱり」と言われた淫売婦が現われ客をくわえては木挽町や東中通り辺へ連れ込んだ。

明治十三年十一月十九日の読売新聞は「銀座街の淫売狩」と題して当時の模様を次の様に報じている。

近ごろ物価が高価ゆえ淫売女の数が大層増し銀座通りを夜歩くと淫売女と引手の中を押し分けて行く程だが一昨夜は京橋分署の所轄内にて三十余人拘引になりました。

当時、新橋辺にはまた俗に「地獄屋」と言われた魔窟があつて、この方は婆さんが街頭に出て客引をやっていた。

明治十五年に出版された「銀座小誌」によると、

旅客ノ曖昧。

客怪道然則地獄屋ナル者果シテ何ノ営業ヲ為ス乎。房丁道フ小可亦実ニ之ヲ知ラズ。官人若シ其詳ナルヲ知ラント欲セバ宜ク新

橋ノ老婆ニ就テ尋問一遍スベク言ヒ訖ツテ
匆匆室ヲ出デ云々。(原漢文)

明治五年に新橋横浜間の鉄道が開通したのは周知の通りだが、以来、駅周辺には大小の旅館が並んでいた。投宿客の中には旅情の徒然に番頭を通じて一夜の歓楽をもとめる者もあったのは当然だ。

更に同書は、取締りの目をかすめて暗中飛躍する老婆の様子を、

角灯一嚇。

此ノ如キ事素ヨリ僕ノ願フ所知ラズ他ノ青春幾何ゾ、老婆人ノ来ルヲ恐レテ路傍ノ暗キ処ニ引キ乃チ道フ年増(二十五六以後齒ヲ染ル者ヲ言フ)新造(少女之俗称)大爺ノ撰フ所ニ任ス。甲耳ヲ歌テ這ノ妙語ヲ聴テ進ミ来テ声ヲ柔ゲ道フ大嬢請フ前罪ヲ宥ルシ枉テ僕ノ為メニ一個ヲ周旋セヨ僕当ニ之レニ厚ク酬ユ。老婆此ノ言ヲ聞ク。諾一諾一漢ヲ伴ヒ早卒横街ニ向ヒ去ル。行ク二三丁路狭キ所ニ入ル。(原漢文)

これ等地獄は、権妻風、芸妓風或は若い女の中には当時流行の女学生風と言った様に、服装は嫖客の好みに応じてさまざまだった。場所も新橋以外は浅草寺地内、神田小川町、淡路町、佐柄木町、明神下、美倉橋辺から和

泉橋と昌平橋の中間、下谷佐竹原その他八十八カ所にもものぼった。

その構えも煙草屋、小間物屋或は遊芸の師匠の看板をかけたもの、さては官員さんの住いと思われる様なシモタ屋もあった。

金龍山の「地内密売女」と言う都々逸の文句に、

へ生馬どころかおまわりさんの
目をぬくちこくの
あらがせぎ
とある。

彼女等の親方兼「ひも」を「道場頭」と言い、佐竹原、神田豊島町辺の女の如きは、商売道具である衣類、装身具或は家具等を買うために金が必要な場合は身体を抵当にして五



円について五分と言う高利の金を借り様な始末で、前借のある女は道場頭の意の儘に言うに忍びざる様な事も甘んじてやらなければならなかった。

Ⅱ 苦痛の谷間Ⅱ

これ等の私娼も幾度かの取締りで明治末期には可成り姿を消した様だが、その反面この頃から大正時代にかけては浅草千束町一帯の私娼窟全盛時代で、「白首」と言えばこれ等の女達を意味する程に有名なものだった。

これ等の私娼窟は、関東大震災で壊れた六区の十二階を中心にしていたところから、俗に「十二階下の女」とか単に「十二階」とも言われ、当時の文学的表現を借りれば「苦痛の谷」であり、三千余人もの売春奴隷が苛酷な抱主の搾取に日夜苦しんでいたのである。

表看板は「銘酒屋」「新聞縦

覧所” “造花屋” “絵葉書屋” “基会所” 等
さまざまだが、その実態は、

銘酒店の看板を掲げていても半ダースとまとまった麦酒が有るでなく、新聞縦覧所の軒灯を出していても三種以上の新聞紙を見

勢いことに抜目のない家主は火鉢、茶簞筒、蒲団其他營業用の家具一切附の一日七、八十銭の家賃で相当の家を貸すのでこの商売を始める者は非常に便宜を得て特に増加の度を速やかにしている傾向も見える。

言う “警八風” の話から始めよう。

Ⅱ 白首と風Ⅱ

改めて言うまでもなくこの “風” には、以下に述べる白首の打あけ話の様に、ちゃんと手が打ってある。

警察の風俗係が戸籍調べに來た時は、

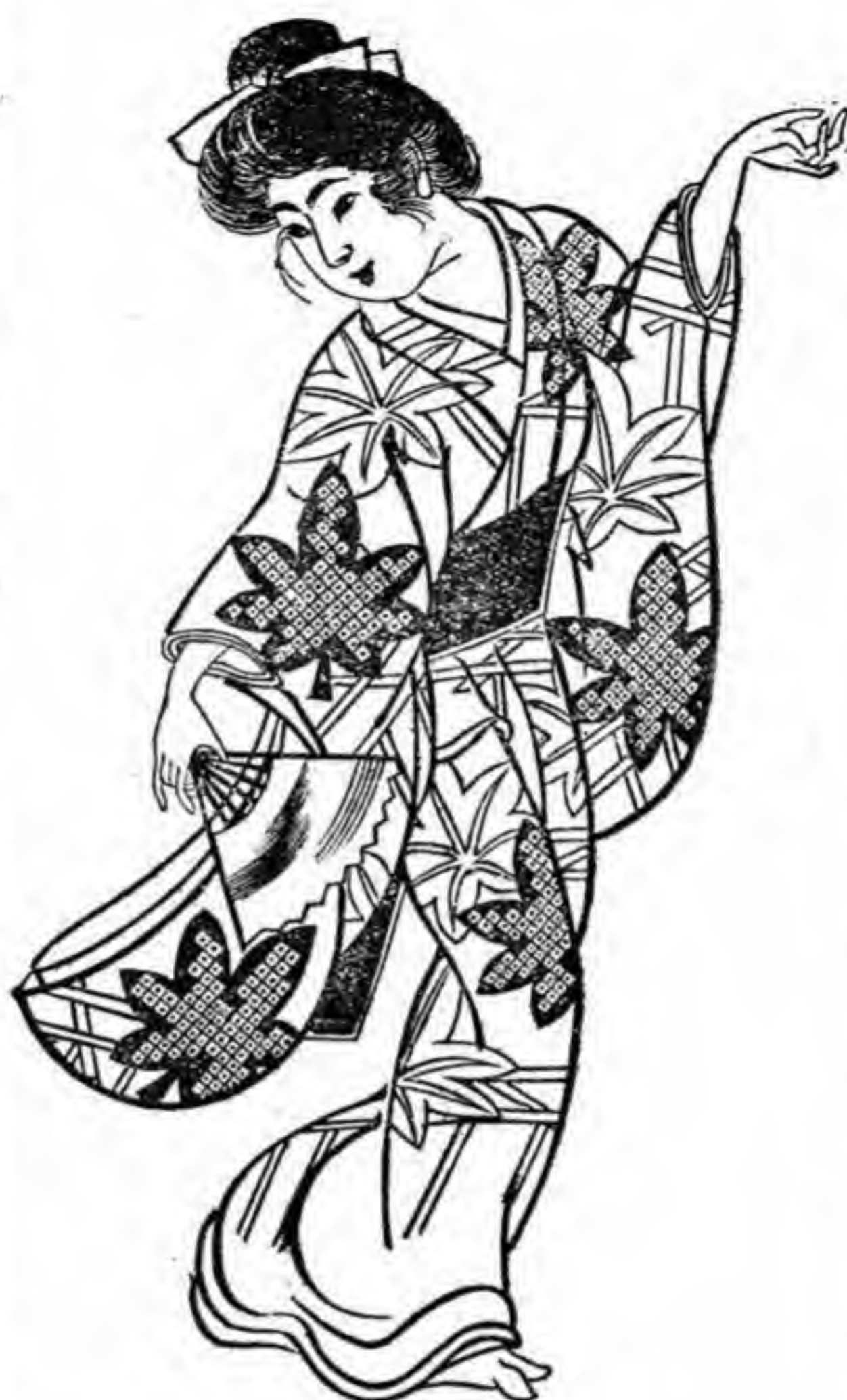
“これはほんの半帖代りで、なんかと木綿のを二、三枚も差上げると其中にアそれ例の紙の二、三枚も……最も一番安価い紙の方よ（一円紙幣の意）。”

更に街頭へ出て客を引っぱる場合に派出所の巡查に対する鼻薬に就いて彼女は、

“箱番は箱番で、刑事上りの外交官があるのよ、それが色んな方法でネ、それ、どうかして呉れるから心配もないけれど、でも時にア突然に舞込まれてね、やられるけれど風が良い時と悪い時と薬の調合で違ふ事もあるしね、仲々むつかしいものよ”

警察と売春業者の馴合は、周知の通り公然の秘密になっていたが、時には警察に虐められた者が、その腹いせに醜状を暴露する事もあった。

大正二年四月二十七日の都新聞投書欄には次の様な投書が載っている。



ること出来ず看板はほんの申訳ばかりで、いずれも三人乃至五、六人の化粧のものを抱えて春を売らせるのが商売の所なれば同じ届けるなら届け放しでよろしい新聞縦覧所を看板にするにしかずと言う。

（中略）観音堂裏や活動写真裏よりも近時頗る猛烈に客を取っているのは十二階下の十一迷路に散在する千束町組である。と当時の記録にある通りだ。そこで、先ず最初に彼女等が何より恐いと

読者と記者

車夫の妻より

記者様私は車夫の家内でございます。宿は象瀉署から鑑札を受けて夜昼油汗を流して稼ぎ、私は些細な内職をしてそれを助けて子供を入れて三人の生活をようようの事で立てているのでございますが、警察の仕うちが如何にも厳しくて口惜しくてなりません。宿は永年車を挽いておりますが、象瀉の警察ほど苛い警察は無いと口惜しがっております。車を挽きながら客を勧めても罰金、一寸と立停っても罰金、月のうちに五十銭ぐらひの罰金を四度も取立てられては如何にしても夫婦と子供が暮して行かれません。よう。（中略）象瀉町の警察は千束町の淫売ばかり庇って其の附届けに涎を流していますとか申してます。（以下略）

因みに右の投書は女房の金釘流で書かれたものだが、それは兎も角として再び白首の話に戻ると、大正五年五月、警視総監西久保弘道の命令で千束町の魔窟掃蕩の際に象瀉署が救世軍に感化を依頼した十六歳の少女はこれまで密淫売で三回もむされた（拘留）相だが、彼女は検挙された時の模様を、

「そうです、源さんはろつ（合図）をしたと言うんですが、お豊さんが気が利かなかつたので、やちば（同衾中）を押えられてしまったのよ」

と言っている様に、彼女等には見張りの男がそれぞれついていて巡査が来る様な時は合図をして逃がす様にしている。

またこの時検挙された千束町二丁目松葉屋の女は、

「警察署へ拘留されている中はお巡さんからはサンザン罵れるし、警部さんからは厳しく叱られます。おまけに監房と申したらむさぐるしいことこの上なしで南京虫や蚤にさされます。其辛惨と申したらとてもお話になったものではありません」

Ⅱ 魔窟と言う所Ⅱ

この様な次第だから銘酒屋の女将などには凄い女がいた。

明治の終りから大正にかけて「羽衣お国」と異名をとった女などは公園界隈で鳴らした姐御で背中から両腕にかけて一面に天人が羽衣を着て舞っている図を彫っていた。

刺青の動機は無銭遊興をする愚連隊に対する防御策で、相手がさんざん遊んだ揚句の果てに腕をまくって刺青でもちらつかせ乍ら啖呵でも切ろうものなら彼女は忽ち双肌ぬぎになつて見事な背中中のモンモンを見せ反対に相手の度胆を抜いた。

浅草六区に「スリ横丁」と称した一角があった。この露路で銘酒屋を始めた者は誰でも不思議に失敗するところから、誰が言うともなくこの名前が出来たのだが、此処の銘酒屋の主人赤羽長作の告白によると

何にいたせ渡世が悪商売と来ておりますので悪銭も随分絞り上げますが其かわり、又悪銭身につかずで年中苦しみ通してあります。（中略）これはなぜかと申すに、第一土地の無頼漢、博徒、謀者（刑事の手先）其他それぞれ其筋への遺物がいります。

先ず浅草千束町附近に軒を並べています銘酒屋、新聞縦覧所、囲碁会所、矢場等を数えますれば約千軒は確にあると思います。

そこで仮に一軒について平均四人宛の淫売婦が抱えられているものとしましてならばざっと四千人であります。是等の売淫婦は吉原の女郎などとは性質が違ひまして極く極く種の悪い大阪、神戸は勿論、有ゆる淫売窟を股にかけた俗に申す莫連女で、酔でも陶酔でも食えぬ奴ばかりであります。客種も全然吉原などと違いこれも又極く悪い掏摸や窃盗が主であります。先ず私共の考

えでは浅草千束町という所は悪漢の製造場で掏摸や窃盗もつまりは山千、海千の淫売婦にだまされて次第に腕が達者になるのだらうと思われます（中略）実に可愛そうなのは十三、四歳のまだ肩揚げのとれぬ少女を誘拐して参ってそれを彼の莫蓮女どもが賺したり脅かしたり様々の手段によって無理往生に客を取らせることです。思えば罪な業であります。

当時は東京を始め大きな都会には到る所に奉公人の口入をする周旋屋があったが、魔窟に落ちて来る女の殆どが誘拐された者だった

とは某周旋屋の偽らざる告白だ。

この誘拐手段の一つは、所謂「朦朧車夫」と旅館の客引とが結託して田舎娘をだますのと、もう一つは「出漁師」と言う奴で、この方は悪周旋屋が女工募集人に化けて地方に出張し朴訥な貧農を口車に乗せその娘連れ出し、出漁師の仲間を転々し最後に私娼窟へと売飛ばす方法だ。

おわりに誘拐の記事を一つだけ転載してこの稿を終る。

大正八年三月十五日 東京日々新聞

工女を誘拐した詐欺犯人

懲役八カ月に処せらる

前橋市一毛町木賃宿佐々木亀吉方寄留佐々木駒吉（三八）が佐波郡伊ヶ崎町星野製糸工場の工女埼玉県生れ阿左見ちよ（一九）を誘拐し昨年十二月二十七日栃木県佐野町乙種料理店金子たね方へ酌婦に売飛ばし百円を騙取せる文書偽造詐欺被告事件は二十二日前橋区裁判所にて懲役八カ月に処せらる。

因みに、大阪府衛生課が明治四十年以後の私娼の前職を調査したものとすると、転落の筆頭は女工である。

女が動物にかえるとき

羽 村 京 子

朝日新聞の連載小説、石坂洋次郎の「光る海」第九十回（二月二十二日）に、葉山和子という若い女性が、大学時代のボーイ・フレンドの奥さんで妊娠九カ月になる栄子という女性に、赤ちゃんの胎動を自分の感覚で経験したことがないから、妊娠したオナカに触ら

せてほしいと頼むところがあります。栄子は自分の大きなオナカにじかに和子の手を当てさせた後、感動した和子にむかって次のように言うのです。

「……自分が原始化され、動物化されて、こわいとか嬉しいとか哀しいとか、こまやかな

日常の感情、それから論理のおった思考などを、すっかり失って、本能だけで動いている生物のメスの自覚で、身体中が充実している感じなのよ。……」

この栄子の気持は、子供を産んだことのあつた女として、わたし自身が心の中で感じているものとまさにピッタリです。女が動物にかえるとき——それは妊娠して、大きくなったオナカの中に胎動を感じるときなのです。石坂先生は、それをうまく表現しています。

女が動物にかえる——それはどういうときでしょう。わたしはそれが、女が男性のフ

エティシユ（物神）になるときだと思うのです。自然の神秘、女性の肉体の神秘が、たくましい男性の種族保存欲を、女体という物的対象への物神崇拝（フェティシズム）としてあらわれさせるのです。女体へのフェティシズムは、現代の社会では、巨大なマス・メディアの媒介によって、女性の側の、自分の肉体にたいするナルシシズムをつくり出します。その場合問題になるのは、あくまで、自然の創造物であるところの女性の肉体、動物のメスとして機能するところの女体というもののなのです。

その「物」としての女体、それにたいする物神崇拝が、妊娠によって女性にとくに強く自覚されること、男性の中にも、ものごとをおそれることなく赤裸々に直視しようとする人には、妊娠とか妊婦にたいする関心が避けることの出来ないものになることは、奇巧誌上で証明されていることではないでしょうか。ことに最近の産児制限の普及のために、男性（および女性）の種族保存欲が十分に満足させられないときには、妊婦のヌードへの関心が、潜在的には、うんと高まっていると言えないでしょうか。このごろまた、若い夫婦の間では、子供を少なくとも三人や四

人ぐらいはもちたい、という意見が多くなりつつあると聞いています。せいぜい二人ぐらいいしか産まなかった、現在三十歳前後のわたしたちは、戦後の苦しい生活の必要から、大切な本能をおさえつけて来たのです。

人間が自由になるとき、そういうとき（ここにしたいがために）女は、大っぴらに動物にかえるものでしょう。人間が人間になることと、人間（女）が動物になることは、もちろんちがいますが、人間の自然が、解放と同時に、そういう形でもあらわれて来ることは避けられないことなのでしょう。戦争直後のベビー・ブームと、最近の生活の安定にともなう考え方の変化——これはまだ一部であるにすぎないでしょうが、アメリカではとくに早くあらわれています——はこうしてつくり出されました。

人間の自然は、それが抑圧されるとき、奇妙な形で自己を実現するものです。現代では主として経済的条件のため、人間の自然の欲望が不当に抑圧されています。科学と技術の発展が欲望の抑圧を可能にしますし、大衆社会のマス・メディアに氾濫する商業主義が人びとの消費欲望をかりたてて、欲望充足手段を、そちらの方にもって行ってしまいうからで

す。いきおいとり残された人間の自然は、人間に復しゅうすることになるわけです。

奇妙な形で、とわたしは申しました。わたしは、ここでむずかしい理くつをこねて、論文を書くこうとしているわけではありません。日ごろ考えていることを、つい脱線して書いてしまいましたが、一つのまとまった考え方を整然とのべる能力などないのです。奇妙な形をとってあらわれるいろいろな傾向を、人間の自然から説明することなど、わたしの力ではとうてい出来ないことですわ。

わたしは石坂先生のことばを借りて、妊娠九カ月の妊婦が、「本能だけで動いている生物のメスの自覚で、身体中が充実している感じ」をうったえるとき、女が動物にかえるのだと申しました。少なくともそれは、女が自分が動物にかえたと自覚するときだと思います。わたしの言いたかったのはこのことだけ、そしてわたしは、子供を産んだことのある女として、それにまったく共感できるということを申し上げたかったです。マゾ——ナルシストとしてわたしは、原始時代に豊作をねがった人たちが、妊婦の像をつくったように、妊娠した女体が現代でもフェティシユになりうることを言いたかったのです。

〔読者異常体験記〕

熱 い 鞭

狩 井 麗 作

全く怖ろしい程の強烈な刺激だった。もう二度と味わうことの出来るかどうか分らない体験。私はそれをうまく伝える事が出来るか、どうかを危ぶむ。しかし私は黙っているのが恐ろしい。でないと気が狂ったまま、何時迄も正常に戻れそうにない。

話と言うのはこうだ。

つい最近、私は所用で別府に出向いた。久しぶりに仕事がうまく片づいて、私は予想以上の金を手に入れる事が出来た。多忙に追い廻され長いこと、ゆっくり遊ぶ事を忘れていた此の頃である。別府の滞在予定は、あと一晩と八時間。私の身内には、荒々しい欲情と好奇心が渦をまいて湧き上って来た。別府は

東洋一の温泉郷である。そして現在では、歓楽の巷としても又特筆すべき都市であり、更に東洋のモナコとして国際都市としても知られている。

冬の日暮れが近づく、市街一帯に、妖しくも豪華なネオンがまたたく。今夜は一つ、特別念入しり探訪をやってみようと思い立った私は、Kホテルをあとにして目抜の通りに出た。SYと言う行きつけの酒場で、マーティニを一杯やって、さて、どうしようかと雑踏にもまれて歩き出した。友人から進められていた水中パレースクを見ようかと考える。これは、某キャバレーの特別ショーとして、その道の人に知られている。四方をガラ

ス張りにした温泉プールに美女をオールヌードで、泳がせるのである。それも、単なる水中レビューだけではなく、特別の演し物がある。一応のショーが済んだ後、小人のジョーとか言う男が出て来て、これが美女たちのペットになるわけである。しかも美女達は、この小男を温泉プールの水中に無理に沈め、小人がアップアップ溺れるのを、皆で寄って、小突き廻しなぐさみものにするのである。マゾヒスティクな見せ物として注目されているらしい。

私は歩き乍ら、そのキャバレーのある方向を目指していた。しかし、少々私の趣味に合わないなと思った。何故なら、私は、マゾヒ

ストでなく、サジストの方だ。美女が小男をいじめるのでなく、みにくい小男が、美女の身体にへばりついて死ぬ程の苦しみを与えるのだったら、どんなに素晴らしいだろうかと思うのである。水中にもだえる女の肢体。溺れかけて乱舞する美女。それをニタニタと笑い乍ら、追い廻し、いじめる小男。私は胸の奥が、ドキリと熱くなるのを覚えた。

F通りには割に書店が多い。時間が早いので、その中の一つの店をのぞいた。此の店はなつかしいのである。今から十年前、昭和二十七年十一月に、はからずも、この書店で、奇クの十二月号を見つけ出して買ったのである。奇クとの顔合せ、そして、それから私の急速な発展を考える時、何だか昔の恋人に会う程の感慨を催すのである。

その日は、奇クはなかった。もう置いてないのかなと、書棚の所を探してみると、端っ

こに、他の下らない雑誌に混って、三月号が一冊積み重ねられている。もう売れてしまったのかな、それとも、堂々と並べるには、気が引けるのだろうか、等考え乍ら、ゆっくり手に取ってパラパラとめくってみた。勿論、三月号は、とくに自宅の方に郵送され読了済みなので買うつもりはない。ただ、手にとって、みたかったのである。秘密の仲間に出会うようなものだ。やがて、それを元に

戻して、外に出た。ネオンが美しい。私の懐中には、かれこれ二万程のキャッシュが今夜の遊びに快よい、御用立の態勢をととのえているのである。私の中にゆったりとした野心が、ふくれ上って来ていた。

書店を出て十メートル程も歩いた頃、そっと物も言わず一人の女性が寄りそって来た。パン嬢だな、と思った。ストリートガールの多い街だし、私も馴れている。肩を並べ乍ら、向うが話かけるのを待った。しかし彼女は無言なのである。私は初めて彼女に注意を向けた。パン嬢



にしては、あまりにノーブルであり、第一服装が違う。彼女は、黒の短か目のオーバーをすらりとのびた身体に着けて、頭には同じく黒のベレーをま深くかぶっている。

オーバーの下から、タイトのスカートが二インチ程出ているのが、すばらしくシックである。

すらりとのびた脚が何の乱れもなく、スツスツと前へ出る。ハイヒールも勿論黒パンプス、一見上品なマドモワゼルである。私は彼女の顔を見た。鼻すじの通った色の白い顔、切れ長い瞳が真正面を向いたまま大きく開かれている。お嬢さんにしては、少し年が過ぎてるようでもあり、マダムにしては、清潔すぎる。私は分らなくなった。五十メートルも無言のまま並んで歩いた。私は我慢出来なくなって、つぶやいた。

「僕に……用があるんだったら言い給え、……誘って呉れるの」

直接返事をせず、低いがはっきりした口調で

「KK見てらしたのね」

それだけ答えた。私は、本当に驚いた。すぐには、言葉が出ず、黙ってうなづいた。

「偶然、前を通ったの。貴男と、K誌を見た

わ。わたくし、七時間ほど余裕があるの」

彼女の声は落着いて、きれいなまるみに透きとおっている。私は、次第に事情が分つて来た。チャンスだ、と言う興奮が頭に逆上して来た。と同時に、相手の意図を計りかねて非常な失策をやるのではないかと、自分自身が不安になるのだった。私は、もう一度、はっきり相手を確かめる為に、殊更、態度を崩して、いつもストリートガールに最初に問うような口調で、

「ハウ、マッチ？」

とたずねてみた。

「ネバ、マインドですわ」

彼女は変らない口調で答え、初めて、私の方をまともに向いて、足を止めた。

「ホテルがあるの。来て下さるわね」

と綺麗に笑った。私はすっかり魅せられてしまった。ハイヤーを拾うと、彼女が行先を告げた。静かな通りを曲がって静かなホテルに着いた。

部屋に入ると、スチームが通っているのか暖かである。ボーイが、グラス二つとコニヤックの瓶を持って来ると、一言もしゃべらず引き下った。私達は初めて、テーブルに向き合って腰かけていた。

私は、グラスに酒を注いだ。彼女は、純白のセーターを着ている。

「KKを知ってるんだったら、僕等は親しくなれるかも知れないね」

私は、強引に前へ進むことに決めた。

「ええ。でも、私を何と違って？ 変な女ですわね。商売女みたい」

と言うと、首をすくめて笑った。ノーブルな顔が笑うと、あどけない位可愛い。

「君の今夜のやり口は、そう変らないよ」と私も笑った。

「初めてなの。私の身の上話しましょうか」

「おきまりの身の上話は、ごめんだな。でも君が話す分には構わないし、変ったのが、聞けそうな気もするな」

「わたし、オンリーなの。彼は少佐ですわ。

ひどい嫉妬やき。それにアブなの。もう一年になるわ。別れたいんだけど……この頃は、何だか宿命みたいになって来たわ」

「それで、君のうつぶん晴らしの浮気って訳だな。さっき七時間しかないって言ってたのは」

「浮気じゃないわ。今迄、浮気はしない。ただ、彼に復讐をしようと思っていたの。貴男が初めて。ふっとこんな気になっちゃった。

七時間って言ったの、あれは嘘。明日のひる迄暇だわ。ただ何となく……ラッキーセブンでしょう」

と又笑う。私にはまだよく分らない。

「貴男を驚かせてあげるわ。こんな奇妙な仕置きを受けている女がいるなんて、きっと驚くわね」

「一体何のこと？」

私には、彼女の意図が分らない。やむを得ず、コニヤックの杯を重ねた。

「お風呂お召しなさいな。わたくし、別に入るわ。すんだら隣のベッドルームで待つわ」
こともなげに言う、先に立って、別室に消えた。彼女の後姿をゆっくり観察して、その美事な肢体にうなった。ぐっとくびれたウエスト。むっちりとした円みのあるヒップ。背も高い。私はも一度目をつぶると、チャンスだとつぶやいた。

綺麗な温泉でゆっくり身体を暖めると、ガウンをまわって部屋に戻った。

ベッドは豪華なものである。彼女は先に戻っていて、クリーム色のガウンをすっぽりまとったまま、ベッドに腰かけて、ブラシで髪をすいていた。

「断って置くけど、私、あの方は駄目なの。」

その点では、貴男の期待を裏切ってよ。でももう、止しましょう、この話。もう少し待ってて」

私は彼女の前に立った。

「ブラシを置くと、彼女も私の前に立った。」

そして、無言のまま静かにガウンを脱いだ。

ゆっくりとガウンが足もとに落ちた時、私は

「あっ」と声をあげた。

彼女は、素肌であった。いいえ、ただ一ヶ所、まわっている。白く大理石のように匂い立つ肢体の腰に、真紅のベルトがまきついてある。よく見ると、そのベルトは、何と奇妙な形をしていることか。ウエストに一まき。そして、ストリッパーのパタフライのように男子の褌と言った方が正確かも知れない。縦に、今一本のベルトが、ぐっと股を締め上げている。そして更によく観察した時、私は目を見張った。それは、中世にあった貞操帯だったのである。何とびつたりとしたベルトだろう。

「驚いたでしょう。彼の嫉妬の創造物だわ」
ほっと吐息をつく、彼女はベッドに身を投げた。そして急に熱っぽい真剣な顔になって

「ねえ、お願いです。私を、私の身体を、こ

のベルトでぶって頂戴。彼がぶつよりも、もっとひどく。そして、私のヒップにあと型をつけて」

ともだえるように訴えると共に、枕もとから、一本の、皮の鞭を取り出した。三十センチ位の棒の先につけられた、幅三センチ位のしなやかな黒皮の鞭。

私は急速な場面の展開に、実を言う、どきもを抜かれていた。しかし、しばらくすると、落着きを取り戻した。そして、眼前の、白い一個の妖しくも悩ましいいきものを見つめている中に、胸の奥から、サディスティクな血が奔流のように溢れ出して来た。私は無言のまま、彼女に近づくと、片脚に手をかけて、ぐっと持ち上げた。真紅のベルトをよく見るためである。それは実に正確に出来ていた。しなやかな、うすい皮で、皮膚に当る裏はビニールが張ってあり、入浴しても汗が出ても、肌を痛めないようにしてある。

何と巧妙な道具を作り出したものであろうか。丁字帯の前の交叉する所に、小さい錠がつけてある。このベルトを取り去るためには一つの鍵が必要なのだ。

私の視線に、秘密のバンドを晒された彼女は、手で顔をおおっている。私は、この奇妙

な貞操帯が、あまりにも、ぴったりと彼女の肢体に喰い込み、それを彼女が観念したように、諾々と身につけているのを見ている中に、何とも知れない憎しみに似たサジスチックな怒りがこみ上げて来た。

「馬鹿。一体何てことを、されてるんだ、洋パン！」

思わず、きたない怒声が咽喉をついて出ると同時に、持っていた脚を思い切り、ドシンとベッドに投げつけると、鞭を手にとった。

私は、手初めに、彼女の腹ともものあたりに、強い鞭を、ふりおろした。ビュッと音を切ると、鞭はピシリと音を立てて、白い肢体に喰いついた。

「あっ」

と声をあげて、彼女は身体をまるめ、両手で下腹と腿を压えた。彼女が自分の身体を防ぎよしたのを見ると私は、余計腹が立って来た。

「何んだ、その恰好は、鞭を使って呉れなん



で、言っただくせに……。ようし、こうしてやる」

憎々しげに言うと、彼女の身体に手をかけて、うつむきに転がした。そして、両腕を後にねじ上げ、ガウンの紐で、ぎりぎりした後手

に縛り上げた。

ベッドに転がされた彼女の肢体は何とすばらしいものであろう。殊にそのヒップの美事な盛り上り。後手の背中が、ウエストでぐっとくびれ、その下には、二つの半円が、むっ

とする程の悩ましいポリウムで盛り上っている。しかも、そのウエストとヒップを十文字に締めている、赤い貞操帯。その白い肌と赤い皮との対照の鮮やかさ。私は思わず、かぶりつきたい衝動をこらえた。

「さあ、お望みの通り、徹底的に鞭をくれてやる」

私は宣言すると、鞭を振り上げた。力まかせに振りおろすと、鞭は彼女の大きい尻に向かって正確に飛んだ。

二度、三度。その度に、彼女は、背中をのけぞらせ、身をゆがめて、痛さに耐えるようだった。しかし、前のように、うめき声は出さなかった。私は次第に、うめき声を出さないのが癪にさわった。一層強く鞭を振った。十回も叩いた頃、彼女は、顔を、ねじ向け乍ら。

「お願いですから……その鞭を、そこに置いてある、火にあぶって……熱くして下さい」

と訴えた。私は、部屋の中を見廻した。すぐ傍に、大きな火鉢に、炭火をうづ高く盛って置いてあるのに、気がつかなかったのである。私は、彼女が何を望んでいるかを、知る事が出来た。

「よし。分ったよ。うんと、こらしめてやる

ために、丁度いい道具が揃ってるわけだな」私も、奇くによって様々な責めを勉強していた。しかし、皮の鞭を火にあぶって熱くする事は、まだ知らなかった。

私は、今は狂気のようになり乍ら、動作だけは、ゆっくりと落着いて、その皮の鞭を、炭火の真上にかざして、皮が焼ける程に熱くした。手がつけれない位になったのを、私は、思い切り振り上げて、背中に打ちおろした。ビュッと風を切って、ベルトは、細いウエストのあたりに、ペタリとまきついた。彼女は首をそらして

「うっ、熱っ」

とうめいた。私は、今度は尻をねらって力一杯振った。ピシーリ、美事な臀部に、熱い鞭が喰い込んだ。彼女は又うめいた。

鞭のあとが、赤いミミズバレになって二筋残った。それを見ると、私は、もうとめどない傾斜をころがりおりて行った。も一度、鞭を火に近づけた。皮の焼けるきな臭い匂が立ちのぼる。彼女は後手に縛られたまま、その真白く豊かな肢体を、イケニエのように、ベッドに横たえて、私の鞭を待っている。この名も知らぬ、女は、その高貴な美貌故に、外国人の愛妾になったのであろう。そして、彼

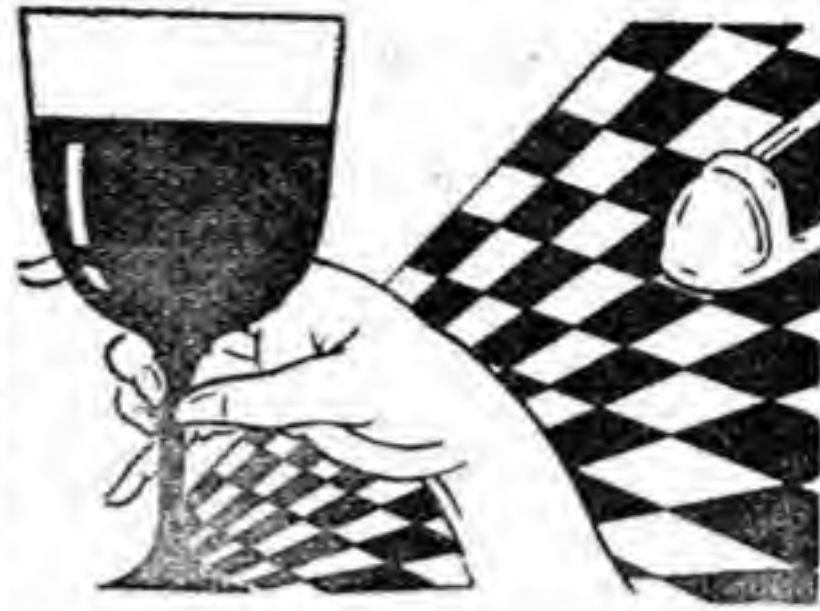
女のおとなしい従順性のために、愛人たる少佐は、かえって計り知れぬ嫉妬に悩まされ、この奇妙な貞操帯をつくった。そして、彼が離れる時には、必らず、この真赤なベルトを素肌につけさせた。しかし、そのような工作をする事は、尚一層の不安をまねき寄せるものである。

あぐくの果には、鞭を振って、泥を吐かせようと責めたであらう。彼女は、初めは反抗しようとしたけれど、彼女の性質は、あまりに素直すぎた。何時しか鞭にも耐えるようになった。しかし、彼女は、何時かは、彼に復讐したいと思うようになった。彼女の内部にめざめたマゾを、少佐以外の男によって満足させる。そして、新しい感覚、マゾの感能をひそかに築いて行った。少佐はこの彼女の変化を知らないであらう。それは、何とコッケイな事であらう。砂は、他の穴から、こぼれ落ちるのだ。

彼女の悩ましい肢体のうめき声を私は聞いた。殆んど燃える程熱くなった鞭を、私は、容赦なく、彼女のヒップめがけて打ちおろした。鞭は、あたかも、火の蛇のように、絹肌の豊かなヒップの上に、まきついて行った。その度に、彼女は脚を曲げ、背をうねらせて

「あつ、あう、つーっ。もう、やめて、うーっお願い」

と、うめき、もだえ苦しむ。



△KK通信△

マゾヒズム雑考

大倉 安男

「まだ、まだ、駄目だ。もっと苦しめたい。僕は……いいか、サディストなんだ。君の運のつきだよ。チャンスは僕のためのものだ」

相変らずの貴誌の御隆盛に対し敬意を表する次第です。数年前、春日ルミ嬢御活躍の頃、二、三回読者欄に投書させて頂いたマゾ男性ですが、つい懐しくなりペンをとった次第です。

思えばマゾヒズムの歴史も、時代と共に推移してゆく様ですが、奇クを通じた歴史的エポックとしては、初期の告白的文章、それもフェチズムから、初歩的マゾ段階の告白、更に当時としてはアブ、グロでしかなかったコプロ的告白と続き、その後、我が崇拜する春日ルミ嬢の出現、それに併行して超大作として神話ともいふべき沼正

三先生の「ヤブー」で代表される家畜化小説が到来します。

その頃よりグラビヤにもマゾ向の写真がチラホラ出る様になり、マゾヒズムの潜在人口が次第に明らかに成って来ます。もっとも、どうやら奇ク編集者は、つい最近までマゾの需要（奇ク購買）は少ないと考えておられた様ですが……。そしてマゾ特集号の出現！ もっとも、これは過去のリバイバルの寄せ集めに過ぎない（失礼！）もので、真の独立対等（サドに対する）とは言えないものです。

そして現在ではグラビヤといい、長編大

私は殆んど、真剣に狂気じみていた。もはや、彼女の尻には、無数のミミズ脹れがついていた。そして、全身に、ネトリとあぶら汗が浮いていた。明るいライトの下で、彼女の肢体は、新しい魚のように、青白く、なめらかにひかっている。前後二十数回、鞭を振った私は、彼女がぐったりとなったのを見てやっと、やめた。腕が、しびれたように、だるく疲れていた。彼女は、今は、後手のまま肢体を、ダラリとのぼして、全く死んだように、ベッドに乗っかっている。

私は汗を拭き乍ら

「まだ許さないよ。いいかい。今夜は一晚中責めてやるんだ」

テーブルの上から、コニヤックの瓶を持ってきた私は、その酒を、彼女の背中から尻にかけて、ふりかけた。丁度、キリスト教の洗礼のように、濃い液体が、赤いミミズ脹れの上に、タラタラと流れると、彼女は、肢体をぐつ、ぐつと、けいれんさせて

「あつ、やめて、痛いわ、うーっ」

と、もがいた。彼女は、何度も死んだようになった。そして、それが過ぎると、又、私をふるい立たせるようにしむけた。

彼女は苦しみ、痛み乍ら、官能に酔い痴れ

小説といい、相当活発になってきました。映画の方でも谷崎潤一郎シリーズが続々映画化され、一つのエポックをつくり出してゐるわけで、これを契機にマゾの分野に入ってくる男共も相当出現する（従って奇くもよく売れる）のではないかと思います。

唯、憂うべき事は、その傾向が物質的なものの代償として行われるという型が多くなっている事です。つまり金持の老人がゆがめられた（？）性に狂っているのを利用して、とことん迄財産を吸い上げる——といった筋が一般的な感覚になると、金のない我々は一体どうなるか、というあわれな妄想にとらわれるわけです。

世の女王様方、実際に行動を起される時には、どうか金銭で貴女の奴隷を選ばないで下さい。我々には若さがあり、奉仕力も充分です。

さて、最近のサロンを読んでいますと、相当精神的夢想的なものから行動へ移りたいと願う人が居られる様ですが、現在衝動的あこがれの望んでいる傾向があるか否か、各人共一つじっくりと考えて見る必要があるんじゃないでしょうか。生意気な様ですが、私の体験を述べますと、高校一年でこの道に迷い込んで後、大学を卒業した年の二年前迄、約七年間、精神的に非常な悩みを持ちつつも、夢中でバックナンバー

を読みあさり、内的には相当マゾ意識が強く固になったつもりでした。そして就職して社会にとび込み、ネオンの輝きに夢中になっていた時に、東京のあるナイトクラブのホステスを頭上に抱く幸運を得ました。

彼女はこの道の知識には未熟で、いわば彼女の心の奥に秘めていた衝動が、私を支配したのでしようが、その時に感じた事は例えば縛られている時一つをとって見てもそんな簡単な事すら、猛烈な苦痛であった事です。最近まで、その苦痛は慣れというものがありませんでした。始めてその苦痛が被支配感となつて思い起されてくる訳です。

彼女は不幸にも今年一月、交通事故で死にました。今となつては数々の苦しみも甘い記憶としてよみがえってくるばかりです。実際に奴隷生活を強いられる苦しみは、はっきり言って単なる夢の実現や衝動的なものでは、決して耐えられるものではないという事は事実です。その行動の最中に御主人様の愛の手加減を……等の事を期待すれば、その人は精神的マゾのみであつて真のマゾヒストとは言えないでしょうし御主人様に愛があるとすれば、それは手加減という形ではなくて、より厳しい方法でもって表現されるものでしょう。

で行つたのである。私自身も、今は、逆にこのアブプレイの中で、のびきならぬ、パートナーを演じつけなくてはならなかったのである。

深更に至る迄。目がギラギラと光り口が乾いた。しかし私のアブの血は、それでも尚強く盛り上り、殆んど、とどまる所を知らなかった。何と言う狂気。何と言う激しい刺戟。泥のように疲れ。そして夜明け近く、二人は前後不覚で眠りについた。

私は、この告白を終る。私の目の前に、あの日の鞭が、まざまざと浮ぶ。その白い肢体と、赤いベルトが。そして、火に焼いた鞭の匂いと、その音が——。しかし、それは一度きりの体験だった。彼女は住所も名前も、明かさないうままに別れた。そして私も又、名刺を渡すことをやめて帰つて来た。この地上のどこかに、彼女は生きて、彼白人の監視の下に生活しているであろう。私は、今一度会いたい。しかし、人生の中での狂気は、そう何度もある事を許されないであろう。若し、彼女と、再会出来る事があつても、再び、あの日のように振舞うことができるかどうか、私は信じる事が出来ないでいるのである。

サジスチック・ストーリー

元 美 の 反 抗

大 中 忠

脚の早い秋の日が影を長く延ばして西に傾いた頃、長いビルの影の中に二人の女学生が外から通ずる地下室の入口に立っていた。二人共セーラー服であるが、学校が違うのか、そのデザインは全く異なっていた。少し年上に見える少女がもう一人の顔を見て、薄暗い階段を下りて行った。

お河童の少女は、何か重大な決心をしているように小さな唇を噛みしめ、その後を追った。セーラー服の下にふくらむ小さな胸の内には様々な気持が渦巻いていた。元美は、今ではすっかり、家庭にそして世間に、反抗的な気持になってしまっていた。そんな時にこのグループからの誘いがあったのだから、彼女は渡りに舟と飛びついてここ迄ついて来たのだが、不良少女のグループに入るのは、何

としても後めたい気持があった。小柳会なんてグループは聞いたこともなかった。しかし兎に角、世間に反抗は出来る。元美は自分の足音が、いやに大きく響くのを気にしながら前を行く久美の後を追った。

階段の切れた所から細い廊下が曲って続き、その行き止りの所に小さな扉があった。久美はその扉を一定のリズムで叩いた。金属の扉が音もなく開くと、中から強い光が廊下にあふれ、元美は一瞬目まいがした。

「新兵？」

中から、小さな声がかかった。光を背にあびたその姿は大きかった。久美が小さな声でそれに答える。元美には聞きとれなかった。

「お入り」

同じ声が二人を中に招じ入れた。元美の背中中でピッタリと戸が閉められると、外部の音は全く聞えなくなった。

広い地下室だ。半分は机や椅子が置かれ、殺風景ながらも、むき出しの壁に絵等がかかっている。他の半分には体操の道具のようなものが置かれているだけだった。

中にいる少女は十人ばかり、皆短いショーツにスリープレスのブラウスを着ているが、ショーツはデニム地の荒いもの、ブラウスは黄色と統一されていた。

「そこにお座り」

二人を室内に入れた背の高い少女が元美を椅子に座らせ、その前に皆集った。

「もう久美から聞いただろうけど、普段は決して小柳会のものだなんて他人に知らせちゃいけないよ。それどころか、行儀の良いお嬢さんになっているんだよ。それから制服は、グループ活動の時だけここで着かえる事、もう入会する決心はついているんだろうね。」

元美は目鼻立ちの整った、その少女の顔を見ながら乾いた唇をなめて、うなずいた。

「入会式は苦しいけど、我慢するわね。」

元美の頭を一瞬恐怖が走ったが、思い切って大きくうなずく。

「そう、じゃ始めよう。クミ、良いかい」

「良いわよ。」

いつの間にか皆と同じユニフォームに着換えた久美が、向うで道具の一つをいじりながら答えた。

「さあ、こっちに来て」

一同はそろそろと机のない方に行った。久美の前には大きな台が据えつけられ、台の下には色々な器具の仕掛が組み込まれているようだった。

「元美さん……と言ったわね。これからは、もう、元美って言うわよ。仲間はみんな呼び捨てなんだから。さあ、元美、入会の儀式をするから服を脱いで」

元美はビクッと体を縮めて、その少女の顔を見上げた。

「儀式なのよ。今迄みんなやったことなのよ。ねえ久美」

「そうよ。一寸恥しいけど、見ているのは、みんなあたいた達だけのよ。」

久美は台の上に附いている金具をいじりながら答えた。

元美はそっとまわりを見回してみた。皆、気の良さそうな友達ばかりだ。彼女は思い切って、セーラー服に手をかけた。

間もなく、元美はパンティー一つの裸で、台の上に横たえられていた。元美の両手足は一杯に伸ばされ、台に固定されていた。白い肌だった。胸のふくらみは可愛く、紅の蕾は小さく締っていた。リーダーの少女が伸ばされた元美の腕の下に視線を止めた。

「元美、もうこれから、ここは取っちゃいけないのよ。自然のままにしとかなくちゃ」

夏の間きれいに取っていた腋毛も、今は短く生えかかっていた。元美は顔を赤らめてうなずいた。

「さて、元美、これから小柳会の一員として会の規則に従うことを誓いますか」

「誓います。」

誓いを言うにとしては、自分の姿は、あさまし過ぎると元美は思っ

た。

「では会員として登録します。一寸苦しいけど我慢して、悲鳴をあげないように」

言いながら元美の口を開かせ、中央のふくらんだ棒を小さな口にくわえさせると金具で台に取りつけた。これで元美は頭も動かさなくなってしまった。

「いいわよ、久美」

元美は一瞬体を縮めた。足元に立つ久美の手が元美の素肌にあれたのだ。だが、それに続く激しい痛みは元美は口中の棒を噛みしめた。鋭い痛みは次々と襲った。元美は、不自由な体を勢一杯もがいた。白い素肌にたちまち汗がふき出した。手首と足首を留めた金具がますますきつく喰い込んだ。元美にとってその苦痛は永遠に続くかと思われた。

やっと久美が身を引いた時、元美はもう体中の力が抜けてしまったようだった。まず口かせがはずされた。疲れ切った少女の目の前に鏡が出された。元美は自分のむき出しになった素膚を見て消え入りたような気持ちになったが、白い肌に小さな緑の模様があるのに目を瞠った。まだ血がにじみ、白い肌を彩っている。小さな柳の筋彫りだった。

元美は自分の肌に刻まれた印を見て、あきらめと、安心感を抱いた。鏡が目の前から去ると、台の下で機械が動き始め、今迄平らになっていた台が、段々立ち出した。体重のかかる足首、それと同時に手首も痛みが加った。

「一寸の間だから我慢して」

勇気づける声を聞きながら元美の裸身は直立の姿勢になった。と

同時にフラッシュが続いて光り、彼女の哀れな姿はフィルムにおさめられた。

「さあ、後一つよ」

台から解放された元美が、ともするとよろめき勝ちになるのを、まわりの少女が抱き起しながら、口々に声をかけた。自由になった元美の両手が再び前で縛り合された。今度はハンカチのような柔い布だったので特に苦痛は無かったが、その布に鎖がつけられ、元美は、両手を上に伸ばした姿にされた。

「始めるわよ。」

リーダーが言うのと、空を切る音が二、三度聞えた。

「いや、いや、もういや、鞭なんかで打たないで。」

元美は思わず叫ぶと、全身を捻じるように動かした。安定を失って、手首に重みがかかった。

「元美、これで終りなのよ。何も、いじめようって言うのじゃないの。皆で一度ずつ軽く打つだけよ。傷にもならないわ。」

前にまわった久美が元美の涙をふきながら言った。

「いいわね、はい」

空を切る音と共に背中に軽い痛みを感じた。元美は目を閉じ、唇を噛みしめていた。打ち手は次々と代り、肩の辺りから、太ももの裏側迄、まんべんなく打たれた。久美の言う通り、大して痛くもなく、痕にも残らなかった。

「さあ終わった。これで元美はもう会員よ」

久美は嬉しそうに元美の手を自由にすると用意してあったユニフォームを着せた。短い、ピッチリしたパンティとショーツ、それにスリープレスのシャツ、すべて素肌につけることになっていた。

「皆を紹介するわね。」

机を囲んで座った少女達の顔はリーダーとその横の元美に向けられていた。皆、明るく、可愛い顔立をしている。これが不良少女グループの集まりかと疑う程だ。

「こっちからミツ、サコ、ユキ、ヒデミ、マツコ、エミ、ユーコ、

トモコ、それに久美と、私は和枝」

和枝は手にしたアルバムを元美の前に置いた。

「さっき、撮った写真はね、この会を売ったりしないようにする為よ。もし裏切ったら、この写真を公表するの。」

「恥しいなあ。」

三造

和枝がアルバムを開けるのを見て言ったのは、小柄なエミだ。

「エミが最初なものね。」

アルバムの最初の夏には、先程の元美と同じ姿のエミが写っていた。肉付きの良い肢体が、無残な姿にされていた。続いて鞭打ちのポーズ。次の頁にはリーダーの和枝、そしてミツ、サコと皆同じポーズにされ、肌と同じような印を刻まれて磔されていた。中に二、三、ここに顔の见えないのもいた。やがて自分の裸身も、この頁を埋めるのかと思うと元美は恥しくなったが、それと同時にほこらしくもあった。

段々雰囲気は溶け込んで来ると、雑談に元美も自然に入って行った。話をしていると矢張り不良少女のグループだ、相当きわどい話も、悪い話も飛び出して来る。アルバムを開



いて、誰それの体は美しいとか、誰それは毛深いとか言った話も出てくる。自分の写真が出て来ても、平気な顔をして見ている者もおれば、エミのように恥しがる者もいた。話がはずみ、笑い声が高まった時、突然扉が一定のリズムで、だが激しく叩かれた。皆はさつと口を閉じて戸口に視線をやった。和枝が立って扉を開ける。外部の音と共に一人の少女がはじかれるように入って床に倒れると、もう一人の少女が続いて入って来た。

「マチ、どうしたの」

「裏切ろうとしたんだよ、この澄子が。」

床に倒れ伏した少女のセーラー服は、所々が破れているし、髪のとれかかる白い横顔には、平手打ちの跡が赤くはつきりと残っていた。

「裁判だね。」

和枝の声に皆はうなずいた。

「良いね、澄子」

倒れ伏した少女は観念したようにうなずくと皆に背を向けて、服をぬぎ出した。パンティ一枚になると、後にまわったユーコが手にした細目のロープで背中にもわした少女の手首を縛り合せ、さらにむき出しになった二の腕から胸にかけても巻きつけて行った。完全に後手に縛り上げられた澄子は改めて、皆の方を向き、コンクリートの床に正座してうなだれた。肉付きの良いむき出しの太ももが、正座の為に余計ボリュームを増して見えた。

「元美は初めてで判らないだろうから、入らなくて良いのよ。」

元美はうなずくと、自分の椅子を横にずらした。そこからは澄子の姿が横から見えるようになっていた。上下に喰い込んだロープの

為、乳房は異様に尖がり、白い肌が緊張していた。二の腕にもロープはくぼみを作り、哀れな少女は小さな両手をしっかり握りしめていた。元美は、今迄、本当に縛られた人なんか、見たことがなかった。学校で面白半分につったり縛られたりしている級友を見たことはあったが、別に何とも感じなかった。それが今、裸身をさらしている少女を目の前にして、縛られるということが、とても美しいもののように思えて来た。この部屋の異様な雰囲気のためか、澄子が色白で肉付きが良い為かは知らないが、被縛の姿はとても美しいと思った。自分もあんな姿にされたいと思った。さっきの写真も後手に縛られた姿だったら自分の体だって、もっと美しく見えたらう……澄子の裸身を見ながら空想をしていた元美は、和枝のきっぱりした声で我に返った。

「判決。有罪と認め、次の五つの罰から二つを選び、その後一時間磔とする。等級はA、鞭打ち、吊し、浣腸、海老、尻責め……どれにする？ 本当なら『特』にする所だけど、裏切り前だったから一等減じたのよ。」

げげんな顔をしている元美に和枝は笑って一枚の紙を手渡した。

小柳会処罰等級

特、次の五つから三つを選ばせた上、入会写真を公表する。

鞭打ち、吊し30分、浣腸、海老縛り、肛門責め。

A、次の五つから二つを選ばせた上、一時間大の字の磔とする。

B、次の五つから二つを選ばせる。

乳房責め、ローソク責め、水責め、毛抜き、尿責め

C、次の三つから一つを選ばせる。



くすぐり責め、毛抜き、
D、次の二つから一つを選ばせる。
縛置一時間、羞恥責

刑罰は、特別の事情がない限りパンティ一枚で行う。但し、全裸と指定のあるものは事情の如何に関らず、一切衣類をつけてはいけない。

元美には判らない刑罰の名前もあったが、兎に角、裏切行為には激しい罰が待ち受けているという事をまざまざと知らされた。その間に澄子は縄を解かれ、自分から両手を揃えて前に出した。観念した様子だが、矢張り体は細かくふるえていた。澄子の両手は高々と吊られ、先程元美が儀式でされたと同じ姿にされた。しかも、今度はやっと爪先立ち出来る程に高く吊られた。伸ばされた腕の下に自然のままの腋毛が豊かに見えた。白い肌と対比的に、その影は美しかった。

澄子は自分で選んだ二つ、鞭打ちと浣腸の刑の一つを行われようとしているのだ。爪先立ちになった為、脚に緊張の線が表われ、肉付きの良いふくらはぎや太ももの横に線状の凹みが出来、むちむちした臀部の両横にも丸い窪みが出来ていた。丸い胸のふくらはぎは張り切って胸全体がふくらんでいるようだ。その二つのふくらみの間に大きい黒子が一つ白い肌に印象的だ。澄子は、仰向いて唇をかみしめていた。

「さあ始めるよ。一人二回ずつよ」

和枝が厳肅な調子で言うと、先程元美の肌を打ったのとは違う鞭を手にした。弾力性の強いその鞭は黒く光っていた。

和枝は二、三度空を切った後、澄子のむき出しの背

に叩きつけた。空を切る鋭い音と、柔肌を裂く音と共に澄子の殺した悲鳴が唇から洩れた。人一倍白い背中中の肌にたちまち赤い筋が横に走った。続いてもう一撃、赤い筋は平行に走った。

澄子は三人目位迄は声を殺していたが、遂に耐え切れずに悲鳴を挙げたのは鞭跡が重なった為だ。初めて打たれる所はまだ我慢出来るが、重なった痛みには耐えられない。

澄子の背中中は一面にみみず腫れが出来、その中の二、三は前に迄回って乳房を責めていた。破れた肌の所々から血がにじみ、白い肌を染めて行った。

「元美、貴女、最後よ。」

あまりのすさまじさに我を忘れていた元美は、手に鞭を握らされると急に恐くなった。

「私？」

「最後よ、二回打つの」

皆の視線を元美は激しく感じた。思い切って、足を進め身構えたが、痛々しい背中を見せ伸び切った裸身が目の前に迫って来て、中々鞭をふり上げられない。思い切ってふり下ろしたが、途中で力が抜け、軽く肌を打ったに過ぎなかった。それでも澄子は垂れていた顔をふり上げてうめいた。吊られた全身がぐらりとゆれる。

「駄目！」

思いがけない程激しい和枝の声に、元美はビクツとした。

「刑罰の時は思い切りやらなくちゃいけないのよ。もし故意にゆるくしたら、その人が代りになるのよ。」

元美は自分が打たれるという恐怖に鞭をとり直し、続けさまに二回澄子の背中に打ち込んだ。その直後、痛々しい肌が目の前一杯に

なるような気がして、元美はしばらく突っ立ったままだった。

「元美、新入りの仕事がもう一つ。」

和枝は手に缶入りの軟膏を渡された。ロープを解かれた澄子は床に裸身を横たえ、マツコに何か飲ましてもらっていた。

おずおず近づいた元美は薬をはれ上った澄子の肌にぬり出した。不気味にはれている肌が指を通じて元美に感じられる。元美の指はすぐに血に染った。近くで見た澄子の肌は、色白の元美にさえもうらやましく感じられる程白く肌理が細かった。その肌は一面汗にぬれていた。

肩から始まって腰迄薬をぬった時、もう澄子は元気をとり戻し始めていた。先程の飲み物、この塗り薬、何で出来ているのか判らないが特別な効き目があった。

薬をぬり終ってしばらく部屋に沈黙が流れた。やがて澄子が体を起すと、ほっとした空気がただよう。

「大丈夫？ 次をしようか？」

和枝がのぞき込むようにして聞くと澄子はうなずいて、

「やって。早く終わりたい」

と、小さいがはっきりした声で言った。

「では浣腸」

澄子は自分から両手を背中に組んだ。ミツが今度は柔い布片でその手を縛った。トモコが部屋の隅から何か持ち出して来た。それを見た元美は顔が赤くなった。ユ一コが机の引出しから浣腸薬を二つ取り出した。

後手に縛られた澄子は台の上に横になると、脚を縮めた。マチがその腰の辺りに立って、二つの薬を続け様に被縛の少女の体内に送

り込んだ。澄子は目を閉じてこの感触に耐えていたが、間もなく、自由な脚を動かし始めた。無防備な腰がふくらみ、伸ばされ、体内の不快感にもだえ出した。

「もう駄目」

澄子が、あえぎながら言ったのは、それからしばらくたってからだ。新しく吹き出した汗が又、肌をぬらしていた。じっと様子を見ていた和枝が

「もういいわ」

と声をかけると、大柄なトモコとヒデミが、不自由な澄子の体を抱き下ろして、用意しておいた器具の上にまたがらせた。澄子は、ほっとした表情だったが、さすがに全身を赤く染めていた。

それから一時間、澄子は大の字に磔られたままだった。責めを受ける少女を背に他の少女達はもう勝手なお喋りをしていた。元美は話に加わりながらも澄子の事が気になり、時々部屋の隅に目をやった。もう背中の痛みは去ったようだ。元美は澄子が可哀そうだったが、一寸うらやましいような気になった。

小柳会の対外活動は夜に限られていた。顔を知られないように皆の住所から離れた所に本部を置き、暗くなってから活躍した。仕事は恐喝……女学生相手のものだった。ショーツにスリープレスのユニフォームの上にオーバーをまとったままだから、冬は相当こたえる。初めてその姿で外へ出た時、元美は自分が素っ裸のままのような気になり、寒さが肌にしみた。しかし和枝は冬に働く事を主張した。冬なら持物も多いから何か取れる。それに、オーバーの襟を立てれば顔も見られないというのだ。

殆どの女学生が、和枝等にとりかこまれると、黙って現金を出し

た。和枝の狙った女学生は必ずと言って良い位相当な金を持っていた。元美が仕事に加わってから二カ月、もうすっかり慣れた頃、和枝は被害者に小柄な女学生を選んだ。その少女を見た時、元美は何か気が進まなかった。色の白い、引き締った体のその少女は、人形のように可愛い顔立ちをしていた。同性の元美でさえも見とれる位の可愛さだ。恐らく中学二年生位だろう。少女は和枝達にとり囲まれた時、一瞬、恐怖を顔に浮かべたが、それきり全く口を開かずうつ向いて鞆を握りしめたままだった。

「痛い目に会いたくなかったら、早く出すんだよ。」

正面のユーコが少女をにらみつけて言った。

「さあ、ぐずぐずせずによこしな。」

マツコが手を伸ばして少女の鞆を取ろうとした。その時、今迄羊のようにじっとしていた少女が、いきなりマツコに体当りを喰わせると、脱兎の様に走り出した。引き締った体が美しく動く。元美はほっとしたような気持になった。だが、和枝は、素早い身のこなしで追いつくと、二、三度平手打ちをすると少女を組み伏せた。皆が追い付いた時、少女はすでに後手に縛り上げられ、狼狽さえはめられていた。和枝の慣れた手付だった。少女のスカートがまくれ上り可愛い脚が付け根迄露わになっていた。

「一寸、痛めてやろうよ。」

和枝は少女を引き起した。白く丸い頬に、平手打ちの跡が痛々しい。和枝は少女に目かくしをした。

「連れて行こうよ。」

ユーコとマツコが少女の腕をかかえ込み、和枝が先に立って歩き出した。元美は少女の後についた。縛り合わされた手首が目の前に

ある。細い手首にハンカチが強く喰い込み、少女は小さな手をしっかりと握りしめていた。紺のセーラー服に白い手首が痛々しい。和枝は裏路をよく知っていた。少女を自分達の地下室に連れ込む迄、誰にも会わなかった。部屋に入ると少女は自由にされたが、まわりはすっかり闇まかれていた。

「随分生意気なことをするじゃない。」

豊かな頬に平手打ちの音が鋭かった。少女は逃げもせず打つにまかせた。白い頬がたちまち赤く染る。

「体を調べてごらん」

たちまち二、三人の手が伸びセーラー服のポケットや腰の辺りまでさぐられたが、何も出なかった。

「鞆は？」

「誰か持って来てない？」

「つかまえた時は持ってなかったよ。」



「じゃ、どこかに捨てたのね、畜生！」
少女の頬にかすかな微笑みが浮んだ。
「仕方がない。身代金を頂きたいんだが住所は体にきこうか。」

少女はたちまち皆にねじ伏せられ服をはぎ取られた。度胸があるのか観念したのか、少女は全く抵抗せずされるにまかせた。手垢で黒ずんだロープがまきついて行った。高手小手に縛り上げられ、脚も揃えて縛られ台に横たえられた少女を見て、元美は改めて感心した。とても美しい体なのだ。小柄ながら、均整のとれた体には若さが溢れ、白い肌は輝いていた。元美は、このメンバーの誰よりも美しい体だと思った。むしろ、神々しい位だ。固くふくらんだ乳房は豊かではあるが少女特有の締りを見せている。腹部は程良く締り、ぜい肉など、全く見られない。豊かな肉付きを見せる腰と太ももだが、脚に流れるに従って、日本人離れした美しい曲線を見せ、足首の締りによって最高点に達していた。少女は固く目を閉じ小さを唇をかみしめていたが、長いまつげを涙がぬらしていた。

「家はどこ？」

和枝は鋭く聞いた。少女は顔は心もち仰向けて答えない。形の良
い鼻の孔が震えていた。

「強情だね。」

いきなり少女の肌に鞭が鳴った。少女は不自由な体をくねらせ、
唇をちぎれる程噛みしめて、これに耐えた。柔い腹部に赤い筋がつ
く。鞭の嵐が小さな少女の体を襲い、少女の白い肌が一面赤くはれ
上っても、とうとう一言も口を開かなかった。だが、さすがに息は
荒く、小さな口を一杯に開けて息を吸い込んでいた。胸のふくらみ
が大きく動き、紅の小さな蕾が震えながら動く。そのふくらみもロ
ープによって厳しく締め上げられ、もがいた為、余計に深く喰い込
んでいた。二の腕と手首を締められた為、もう指先は紫色になっ
ていた。

「あきれた子だね。今日はこれ位にしようか。」

少女は縄を解かれ、左の足首に鉄の輪をはめ隅の鉄柱に留めた。

「元美、見張っててくれる。」

元美は黙ってうなずいた。皆はそれぞれ私服に着代えたと出て行
った。後には痛めつけられた裸の少女と制服の元美だけが残った。
片足をつながれた少女は床にぐったりと倒れ伏したまま荒い呼吸を
続けている。元美はしばらくその姿を見ていたが、思い直して、薬
をとり出して、少女に近付いた。

「御免なさいね。痛かったでしょう。あまりひど過ぎるわ。」

元美は手に薬をとると少女の背中につけた。少女はびくっと体を
縮めた。少女の肌は美しかった。殆どはれ上っていたが、それだけ
に白く残った肌は余計美しかった。薬をのぼしながら元美は、澄子
に薬をつけたことを思い出した。あの時、澄子の肌が美しいと思っ

たが、この少女と比べると雲泥の相違だった。少女の若々しい肌の
温かさが掌を通して元美に感じられた。少女はこの薬が気持ち良い
のか、全く元美に体をゆだねていた。背中を塗り、乳房から腹部へ
も薬はぬられた。鞭打たれていない脚の美しさは傍で見ると倍加さ
れた。全身に薬を塗り終った時、少女は大分薬に息をしていた。

「大丈夫？」

元美はそっと少女の肩に手をかけた。思い切り注意深く扱わない
とこわれてしまいそうな気がしたのだ。少女は目を閉じている。元
美はそっと抱き起した。細い足首を留めてある鎖が音を立てた。少
女の顔は目の前にある涙が頬をぬらししている。その目がぱっちり開
かれた黒目勝ちの丸い目だ。両端の締った唇が開かれ、初めて少女
の声が聞かれた。

「ありがとう」

小さい、可愛い声だった。

「逃がしてあげる。」

元美は明日又この可憐な少女が責められるかと思うと耐られなか
った。少女が目を輝かしたのを見て、足首の鎖をはずしにかかった
が、鍵がなくては駄目だ。引出しにも戸棚にも鍵はみつからない。
恐らく和枝が持っているのだろう。元美は再び鎖にとりかかった。
幸い足首の輪と鎖とのつなぎ目が錆びて、もろくなっている。元美
は一生懸命にそこに力を込めた。少女は心配そうに元美の手許をの
ぞき込んでいる。少女の細い足の指に桜色の小さな爪が光る。

「とれた」

元美は思わず声を出した。錆びていた金具がポロリとはずれたの
だ。

「この輪は我慢してね。家に帰ってから」

少女は黙ってうなずくと、急いで服を着始めた。今迄素肌を曝していたのに、服を着る時の方が恥しそうだ。裸の清らかな美しさに魅せられた元美だったが、セーラー服を着た少女の美しさに、もう一度元美は見とれた。足首の輪だけが、グロテスクだった。元美は自分もオーバーをはおると少女を抱くようにして扉を開けた。「あっ、そうだ。悪いけど目隠しだけさせてね。」

元美は目隠しをした少女をしっかりと抱きしめて歩き出した。少女も元美に体をまかせてくるようだった。服を通して少女の体の温みが伝わってくるようだ。艶のある髪から陽の匂いがただよって来た。

和枝程裏路を知らない元美は、元の場所に来るのに、随分苦労した。

「家に近いの？」

「すぐ、そこ、一緒に来て」

「駄目、私は悪い子よ。貴女をこんな目にあわせたのは、私の仲間だもの」

言々と元美は、少女から身を離して走り出した。これ以上少女と話していると、この少女を離せないような気持ちになりそうだった。

あの少女は心も身体も清らかで美しいけど、私は駄目、一緒にいる資格もないのだから。

元美はその夜、部屋には帰らなかった。夜が明けても、一日中。学校へも出ずに繁華街や公園で過してしまった。少女を逃がしたのだからきつと私はリンチに会う。元美の目の前には吊られてもがく澄子の姿が浮んだ。白い肌に鞭の音が響く。その澄子の体が、あの

少女の裸身に変っていた。両手足を縛られ、全身を鞭の下にくねらせる少女の姿を思い出し、あの少女の為にならどんな責めにだって耐えてみせる。もっと苦しくたって。元美は心が少し軽くなった。日が沈むと元美は、ためらわず地下室に向った。一步入ると、すでにメンバーは揃っていた。

「元美、裏切ったのね。」

元美はうなだれた。

「判ってるでしょう。裁判よ。」

元美は澄子の時の事を思い出して服をぬいだ。素肌に部屋の空気がひんやりと冷たい。

皆の視線を肌を感じながらパンティ一枚になった元美は、うずくまると、両手を後に組んだ。その手首にミツが縄をかけて締め上げた。たちまち指先は感覚がなくなって行った。ミツは更に、むき出しになった二の腕と腕に縄を巻きつけて行った。柔い元美の肌に縄は面白い程喰い込んで深い窪みを作った。

元美はうなだれたまま縄尻をとられて床に正座した。肉付きの良い太ももがびったりと合わされ、盛り上っていた。素脚にコンクリートの床は痛かった。うなだれると縄に苛まれた乳房が奇妙な型に歪んでいた。

「元美」

和枝の厳しい声が上から降って来た。

「裏切るつもりで逃がしたの」

「違います。唯、あまり可哀そうだったから。」

「身代金が取れるところだったんだよ。」

「はい、でも……」

「じゃ、ここを知られたんだね」

「いいえ、目隠しをして行きました。」

「ふうん。……」

「少女を逃したら、自分が罰を受けることは知ってるね。」

元美は深くうなだれた。光る黒髪が白く丸い肩から滑り落ちた。

「覚悟が良いね。他にきく事はない？」

和枝は皆の顔を見た。

「では、判決。」

「等級は特。但し、被告が覚悟をきめているし、場所も知らせていなかったから、写真の公表はしない。」

元美は、ほっとした。自分のみじめな姿が他人の視線にさらされるのなら死んだ方がましだと思っていたのだ。特に異性の目にふれるなんて、思っただけでも顔が赤くなった。

「次の五つの内、三つを選びなさい。鞭打ち、三十分の吊し、浣腸、海老縛、肛門責め。さあ、どれ。」

元美の頭の中には責められる自分の体が次々と浮かんだ。

小柳会には二冊のアルバムがある。一冊は全員の入会写真、そしてもう一冊は刑罰のモデル写真が貼ってあった。会員が夫々モデルとなって、責められる姿をはっきりと表わしていた。元美も「縛り置き一時間」というDの項目のモデルにされた。柱に後手にしっかりと縛られた。縄が縦横にからみついていた。元美の頭の中にはアルバムの一頁一頁が浮かんで来た。どれも苦しそうだ。と、あの少女の被虐の姿がダブって来た。そうだ、あの少女の為に同じ責めを受けなければ。

「ムチウチ……」

「鞭打ちと、後の二つは？」

浣腸も肛門責めも嫌だ。同性にしる、そんな所をさわられるなんて考えただけで死にそうな気持ちになる。としたら、後は二つしかない。

「ツルシとエビシバリ」

「鞭打ちと、三十分の吊し、それに海老縛りだね。では始めましょう。」

元美の体の縄は解かれた。手首と白い二の腕に縄目の跡がはっきり残っている。元美は自分で服をぬいだ。マチが両手を前で揃えて縛った。手首が吊られて行くにつれて、元美は人会式の時を憶い出した。元美の体は辛うじて爪先立ち出来る程度に吊された。手首に小肥りの元美の体重がかかった。首を垂れるとあさましい自分の体が見える。腋の下が美しい。

「一人二回ずつよ」

和枝は声をかけ、同時に空を切る鋭い音と共に元美は背中が焼けるように感じ、思わず悲鳴をもらしかけた。本当の鞭打ちはこんなに激しいものなのか。だけど、あの少女も耐えたのだ。元美は背中を焼く鞭の嵐に唇を噛んだ。体中の汗腺という汗腺から汗が吹き出した。垂れた髪の毛が肌にはりついた。美しい姿態をもがらせる少女の姿が浮かんだ。目の前が暗くなって来た。と突然嵐は止んだ。手の縄が解かれた時、床にくず折れた。元美の意識は、遠のいていた。鞭跡にあの薬が塗られ、唇を割って甘苦い薬が流し込まれてもそれが誰の手によるものか元美は判らなかった。しかし、体の中心を刺していた痛みは次第に遠のき、体の中から元気が戻って来たようだった。元美はやっと上半身を起した。

「どう、次にする。」

和枝がのぞき込んだ。

ふたたび元美の両腕は後手に縛り上げられた。鞭跡に縄が痛い。両腕の自由が全く奪われると、元美の脚はあぐらを組まされ、足首を縛り合わされた。更に、足首の縄が肩にかかって、締めつけられた。少女の体はだんだんに曲って行った。握りしめられた指が上を向いて来た。背中の肌は、はち切れそうに伸び切った。柔い少女の体は、殆んど二つ折りになったようだ。尖った乳房が太ももに当る。

元美はやがて襲って来る想像以上の苦しさにうめいた。白い肌が紅潮して来た。再び、汗が吹き出して来た。目に汗がしみる。やがて、赤かった肌が色褪せて来た。それを見た和枝は、急いで縄を解かせた。手足の指が紫色になっている。今迄曲げられていた背中が伸ばされると骨が鳴るような痛みを憶える。元美はぐったりと体を伸ばした。手足の先々に、血がかけめぐるのが判る。血褪せた体が再び赤くなり、やがて自然の白い色に戻った。

「後一つよ。」

元美はうなずいた。苦しかったが、もう二つ迄耐えたのだ。もう背中には痛くない。元美は再び両手を後にまわした。先程と同じ後手縛り、それに今度は太ももの付け根や腰にも縄がまわされ、丁寧に長さが調節された。元美は、もう恥しさは感じなかった。あの少女の裸体が美しかった事を思い出していた。やがて上で滑車のまわる音が聞えると、元美の体は徐々に床から離れて行った。最後に足が宙に浮くと、胸と腰に、ぐっと重みが加わった。上手に調節された縄は、平均した重みをかけていた。むっちりとした太ももが縄にくびられている。元美の脚は皆の目の高さにあった。

小柳会の刑罰に定められてはいたが、吊りを選んだのは元美が初めてだった。薄暗い片隅に電灯の光を受けて元美の白い全身が浮んでいた。

元美は皆を見下ろしながら、あの少女を逃がして良かったと思っただ。裸で縛られている私の体美しいでしょうと言いたくなった。縄目の痛みも段々気にならなくなってきた。いくらでも責めさせてあげるわよ……。元美は心の中で、こう叫んでいた。

(終)

本誌二月号の読者通信に東京の△K生▽氏

が女奴隷を半獣に仕立てたら面白かうと書いておられるが、なかなか、興味深い御意見である。ここで興味深いと言ったのは、私も常々そんな事を考えていたので、矢張り似た様な事を考える人はあるものと思ったからなのであって、必ずしもK氏の意見にすべて

賛成だという意味ではない。

私が考えていたのは、マゾヒズムに変形譚がしばしば登場するのに、サジズムに変形譚が皆無といってよい位少ないのは何故だろうか、という事なのである。例えば本誌にかつて連載された「家畜人ヤプー」とか「黄色オラミ」などはマゾヒズム変形譚の典型といえ

るだろう。それに対して、サジズム小説の典

型とも思われる「魔教団NO8」は、遂に変形譚にはならなかった。勿論、その作家の好みというものは、確かにあるだろう。「宇宙

のどこかで」も変形譚にはならなかった。勿論、その作家の好みというものは確かにあるだろう。「宇宙のどこかで」が変形譚で

はないように。だが問題はそれだけにとどまるであらうか。私は、変形譚はサジズム小説においては、成立し得ないのでないか、という気がしてならない。それはお前の好みさ、と言われれば引き下るより手はないが、以下

に私なりの考えを述べて見ようと思う。

サジストの心は常に加虐の対象に向い、マゾヒストの心は常に加虐される自己に向けられているとは言えないだろうか。サジストは対象の苦悶の中に自己の優越性を感じるのに対して、マゾヒストは、自己の苦痛の中に自己の存在を確かめる。極端に言えば、サジズムは対象が中心であるのに対して、マゾヒストは、あくまでも自己が中心なのである。だから、サジストは絶えざる不安にさいなまれマゾヒストは豊かな自足の中にうずくまっている事ができる。

このように考えてくれば、結果は明らかである。即ち、サジズムの対象になるものは、常に美しくなければならぬ。美しくあって



サジズムと変形譚

千草 忠 夫

こそはじめてサジズムの対象となり得るのである。サジストが美女を馬にして喜ぶのは、美女が馬のように使役されるからであって、決して馬になることを望んでいるわけではない。たとえ半人半馬の美女をこしらえたにせよ、サジストの興を呼ぶのは、それが作られる過程であって、その結果作りあげられたものではない筈である。

これに対して、マゾヒストはどうであろうか。私はマゾヒズムに関しては無知に等しいから、単に憶測にとどまるものだが、以上からの推論に従って判断すれば、マゾヒストの変形願望は、純粹に主観的なものであって、自分を責める相手の気持を忖度しない、僭越の沙汰ではないかと思う。何故ならマゾヒス

トが相手にしいたげられ、相手の意志に服従するのをもって自己の満足とするのならば、そこに自己の意志をさしはさむ余地は毛頭ない筈だからである。従って自己表情もあり得る筈がない。しかるに

現実として変形譚があり、マゾヒズム小説があるという事は、マゾヒズムの本質が、傲慢ともいえる自己主張に存する、という事の証在ともなるのである。

少し話はわき道にそれたが、このように考えれば、サジズム小説に変形譚がなく、マゾヒズム小説にそれがよく現れる理由が明らかになるであろう。世のサジストの求める美が現実の女性の有する美の上に固着してしまっている以上、それを不具なものに変形してしまいう事は、とうてい、耐えがたい事なのである。変形する位ならば、むしろ対象を殺す事によって、永遠に変らぬ姿に変形する事をのぞむのが自然であろう。私は『K生』の御希望が、おそらく永遠にかなえられる事はないのではないかと考えるのである。

当代女武勇列伝

諸岡堅雄

一

卓上の直通電話のベルが勢いよく鳴った。

「もしもし。諸岡先生でいらっしゃいますか？」

声の主が、浦里晴子であることはすぐ分かった。当今の流行語というハスキー・ヴォイス水谷良重とそっくりのしやがれ声だからである。

「ああ、チャッピーか」

とぼくは答えた。これは「おちゃっぴい」を英語なまりにした彼女の愛称だ。

「ええ。そうよ。ちよっとご相談があるの。」

今晚あいてない？」

「今晚は会があるからだめだ。そんなに急ぐのか？」

「そう。とつても急ぐの。急用なのよ」

「電話じゃだめなのか？」

「そうねえ」

と答えてから、電話口でだれかと話し合っているらしい。そこでぼくは

「だれかそばにいるの？」

ときいてみた。

「うん。加代ちゃんよ」

旧姓大石加代子。結婚してからは三隅加代子。晴子とおなじ雑誌社に勤めているが、加

代子のほうが四年先輩だ。『主婦の世界』社のO編集長がぼくの後輩であるところから二人をこの雑誌社に紹介し、いまでは二人ともあっぱれ腕利きの婦人記者になっている。

「加代っぺなら遠慮はいらない。電話で用件を話してごらん」

「うん。そうするわ。実はね。いまチャッピーに危難がふりかかるうとしているのよ」

「ほう。それは大変だ。何かしくじりをやって首の座にすわってるのか？」

「ううん。そうじゃないの。このチャッピーを殴るっていう男が現われたのよ」

「ほう。チャッピーを殴るって？ そいつは

痛快じゃないか。頼母しい男性が出現したものだね。はっはっは」

思わず大声をあげて笑ってしまった。晴子はぼくらの間で「女三四郎」と異名をとる女武者だ。当時腕前は初段だったが、間もなく結婚し、二、三年の間にするすると三段の免状をとったぐらいだから、この頃から強かったし、スジもよかった。「女の初段なんて知れたもんだろう」と多寡をくくって向っていった若い記者連中は、例外なく叩き伏せられた。彼女の現在の夫君K君も、投げとばされた連中の一人である。しかしポール・スウィージーの「ソーシャリズム」の原書講義の美事さですっかり彼女を魅了し、美しくも遅いこの女性を妻にすることができた。

話が横道にそれてしまったが、とにかくこの女三四郎が、「危難が迫っている」とあわてて電話をかけてきたのだから、思わず快哉を叫んでしまったわけだ。

二

「あら。チャッピーの困ってんのが、先生にはそんなに愉快なの？」

こっちが大声あげて笑ったのが、いささか不満らしい。

「殴るって言われたって、黙って殴られてる君じゃあるまい」

「そうよ。男を殴ってやったことはあるけど、殴られたことはないわよ」

「それなのに危難が身に迫ってるってどういう意味なんだ？ いったい相手はだれなの？ 銀座か新宿あたりの暴力団か」

「ううん。社のMさんよ」

「主婦の世界」社のMなら知っている。年はもう三十五、六。妻子もある中年の記者だ。

「へえMが？ なんてまた？」

「仕事上の怨みらしいの」

「そうかい。それにしてもチャッピーを殴るうなんて、あの男、意外な勇気の持ち主じゃないか」

「先生のバカ……感心してる場合じゃないわよ」

「でも、あの男に君が殴れるわけがない」

「だけど殴るって公言してんだから、やるとおもうわ。あした熱海でうちの編集だけの慰労会があるの。その席上であたしに恥をかかせるって戦法らしいの」

「ほう」

「でも、男と女がみんなの前で殴りっこするなんて、みっともないとおもわない？」

「あんまりいい図じゃないね。いっそ相撲でもとって勝負をつけたら？」

「ほっほ。いかになんでも、女が四股は踏めないわ……それでね。さっき加代ちゃんとも相談したんだけど、Mさんと柔道で片をつけることにしたの」

「ふん。それもいいが、もしMがいやだといったらどうするの？」

「Mさん、あれでも大学時代に柔道をやり、初段だそうよ」

「ふむ。あのMがねえ。しかも有段者か……それでチャッピーは勝つ自信があるのか」

「止してよ。負けっこないわよ。先生の奥さんたちがって、あたしには実戦の経験があるんだから……」

おそろしいほどの自信である。

「あらー。ごめんなさい。いまの発言は取消し。奥さんにいわないで……お願い。チャッピー叱られちゃうから」

人の細君を引合いに出したことに気をとがめたか、あわててこう謝ったが、しかしそれは彼女のいう通りで、妻のは畳の上のお嬢さん柔道で、晴子みたいに幾度か暴漢を地べたに叩きつけるといった勇しいことはしたことがない。若い頃いたずらを仕掛けた痴漢の

利腕を振じ上げて交番へ突き出したぐらいが唯一の武勇伝、晴子のいう「実戦の経験」だった。

「いや。気にすることはない。しかし相談とは何んだ？」

「その相談というのは、先生からO編集長に今のこと、あらかじめ了解を求めておいていただきたいの。宴会の席上でどたばたやるけど、どうかお見逃し下さいますようにって」「ああ。それならわけはない。さっそく電話しておこう」

「グート・ダンクシェーン。フィール・グリユック」(どうもありがとう。ではまた) 彼女はドイツ語でそういつて電話を切った。

三

ぼくはさっそく電話でO君を呼び出し、右のいきさつを説明した。彼は武徳会三段の腕前だ。

「おもしろいじゃないですか。大いにやらせましょう。チャッピーの柔道は評判ではきいてますが、実地にみるのは初めてです。しかし狭い部屋じゃ、どうにもならんですな」

「ところが、うまい工合に隣りの大宴会場が土曜日まで空いてるんだそうだ。三隅君が

幹事役で会場の実地検分はすんだし、柔道着も宿の息子たちのを一時借用することにしてあるそうだ」

「手回しがいいんですね。このごろの若い連中には敵わん」

「宴会場は百畳敷の大広間なんで、**「場外」**なしで思う存分あばられるって、はり切っていたよ」

「いやあ。ますますもって顔負けですなあ。ぼくとしては兩人に怪我のないよう注意しましょう」

編集部といっても、三人の婦人記者をふくめて十二、三人。ときどきやる慰労会ではあったが、こんどは晴子の特ダネが直接のきっかけであった。この記事はM記者が最初に手がけたのだが、根気がつかず途中で放棄したのを、彼女が拾い上げて結末をつけた。だから普通なら話合いで円満に解決できるはずなのだが、どういうものか、Mは晴子がきらいであった。よくある虫が好かないというあれである。「女のくせに柔道を鼻にかける奴などブタにでも食われてしまえ」というのが彼の口ぐせであった。

筆をはしよって、急いで宴会場に向うことにしよう。柔道試合が本編の眼目なのだから。

ら。

酒がすすむにつれて案の定、Mが晴子にからんできた。

「浦里君。君は大層柔道を鼻にかけてるようだね」

「冗談は止してよ。ただ健康と美容のためにやってるつもりよ」

「ふふん。健康と美容のためにやってる奴が、バーで喧嘩を買ったり、弱い男とみれば振じ伏せて、柔道の教授料をとったりするものか」

「変なこと言うじゃないの。聞きずてならいいわ」とは言ったものの、瞬間彼女の顔はほてった。R大学時代に茶目っ気を出して乱行したことを、Mがすっかり知っているの、あわててしまったのである。

四

R大学時代、彼女はよく酒を飲んだ。といっても、酒がそんなに好きだったわけではなく、酒で鬱積した気分を発散させたといった方がいいだろう。バーくろがねのマダムとよく気が合った。

「晴ちゃんに来てもらうと、用心棒を雇ったより気が強いわ。木次組もあんなには一目圓

いているようね」

「それは組領のお嬢さんとあたしが仲がいい

からよ。だからあたしに手出ししないのよ」

「それもそうかも知れないけど、やっぱり晴



ちゃんが強いからよ。ステンと転ろがして、むんずと、馬乗りになったときの気持ちったら、堪えないでしょうね。見ているあたしの方がムズムズしてくる」

「ばかねえ、マダムは……。抑えつけたって、いつ揆ね返されるかも知れないんだから、こちだって必死よ。いい気持ちで跨ってなんかいないわよ」

「でも、こないだなんか、あいつを組敷いたまま、あんたうまそうに煙草をのんでたじゃないの」

「馬上の一服？」

「いってから、晴子は

「ふふふっ」

と笑った。

「そうそう。馬上の一服よ」

「あれはあいつがもう抵抗しないと分ったからなのよ。暴れたらあいつのおでこで煙草の火をもみ消すつもりでいたわ」

「あいつは口をあけて、あんたの灰皿代りにされてたわね。まあ、考えてみれば、美しいお嬢さんの股の間で締めつけられれば、男性たるもの抵抗力を失ってしまうんじゃないか知ら」

「でも、あいつは別よ。普通なら暴れるわ」

「その暴れる奴を膝頭でぐいと抑えつける気持ちだったら、また格別でしょうね」

「それほどでもないわ」

Mがさきほど彼女に向って、バーで喧嘩を買ったりといったのは、この辺のことを指したのであった。

五

弱い男とみれば振じ伏せて、教授料をとったという一件も、実は彼女の茶目っ気がそうさせたのであって深い意味はないのである。

「チャッピー、おれに柔道教えるよ」

R大学時代、ボーイ・フレンドのだれかれが彼女にそう所望した。

「教えてやってもいいがタダじゃいやだよ」

「コーヒーぐらいおごるさ」とA。

「チェッ。しけてやんの」

「おれはドライブに連れてってやる。おやじがさいきん手に入れた新型車だ」とB。

「ドライブは悪くないわね」

「しめしめ」

「でも、やっぱりお小遣いが欲しいわ」

「よし。おれは五百円出す。どうだ。チャッピー」とC。

「あら、いかすじゃないの。よしC君に教え

てやろう。でも、ここは狭いわね」

「いいさ。基本だけでいい。それも寝技の……」

「……」

「だめよ。立技をやらずに寝技なんか、やれないよ」

「いや、おれはそれでいいんだ」とCはあくまで食い下がった。

「いやんなっちゃうなあ、こいつ」晴子が溜め息まじりにそういうと、AもBも口をそろえて言った。「チャッピー、そいつはな、チャッピーのそのぶるんぶるんと躍動した偉大なお尻で、思い切り抑えつけてもらいたいのさ」

とたんにCは、いかにもてれ臭さそうな顔付きをしたが、晴子から「C君、それほんとうかい？」ときかれると、素直に「うん」とうなづいた。

「なあんだい。わけないじゃないか」そういつて彼女は起ち上がると、Cを仰向けにやりわりと押し倒しその上にずっしりと跨った。

「これでいいのかい？」

「うん」とCは答えたが、AはCの代弁をするかのように、こういった。

「それだけじゃいけねえんだ。チャッピーは馬にでも乗ったつもりで、お尻を上下に動か

すんだ」

「そんなことしたらC君潰れちゃうよ。あたし六〇キロはあるはずよ」

「潰されてえんだよ。Cは」

晴子はそれでも手加減しながら、どすんどすんと腰を上下に動かした。しかしCの苦痛にゆがんだ顔を見ると

「いやだ。こんな真似！」とつぶやき、Cの身体からおりようとしたが、AもBも承知しない。

「チャッピー、お前のその小山のように盛り上がった太腿でCの首を挟んじゃうんだ」

「それもわけないよ」

晴子はなんでもないという風に、腰を前の方にずり寄せると、Cの首の上に跨ってしまった。股の間からのぞいて見えるCの顔がいかに哀れにおもえたが、

「これじゃまるで女プロレスじゃないか」と言い、「でも、これで五百円の授業料がもらえるなんて、楽なアルバイトだ」と大声あげて笑った。

「しかしチャッピー、そのあとにもう一つあるんだ」とA。

「どうするの？」

「奴の顔の上に跨るんだ」

「跨ってどうするのよ」

「その大きなお尻を下から押ませるって寸法さ」

「よし。じゃ押ませてやる」

彼女は立ち上ると、Cの顔を跨ぎ、その真上でしやがみ込んだ。

「この恰好、まるでトイレのときと同一だあ」

「そうなんだ。そこでチャッピーがいったん立ち上り、おもむろにストラックスのファスナーを外すという段取になるのさ」とB。

「ストラックスの下はパンティだけよ」

「もちろん、そうだろうよ。できればそのパンティもとっちゃって……」

そこまでBが言いかけたとき「ばか野郎」と晴子は怒鳴った。「よくもこいつ、あたしをナメたな」

次の瞬間にもう彼女はBの利腕を握り上げてその場に組敷き、膝頭をピタリと相手の背骨にあてて、身動きを許さなかった。

「痛え。腕が折れる！」

「こいつ。よくもあたしを侮辱したな。女プロレスの真似をさせたり、ヌードの真似させようとしたり……」

そのとき傍からAが言った。

「そうはいうものの、すべての罪はチャッピーにあり——さ」

言い終るか終わらぬうちに、彼女の左手はAの胸倉をつかんでいた。

「おまえも同罪だ」といいざま、手元にたぐり寄せて仰向けに倒した。もともと彼女は左利きではあったが、それは物凄い腕力であった。こうしてBはうつ伏せ、Aは仰向けと形はちがうが、彼女の膝下に二つの雁首が並んだわけだ。

「おい、乱暴はよせよ」と、Aははね返そうとじたばたしたが、晴子は左足でAの身体を蹴込むようにして、馬乗りの姿勢をとった。「こら！きょうのことは、みんなお前たちの仕組んだ芝居だな」二人馬に跨りながら、そう言った。

「ちがう！成行でそうなったんだ」とA。「ウソをつけ！白状しないと二人とも眠らしちゃうぞ」

そういつて左手でAの咽喉元をぐいと責め右手でBの腕を逆に握じた。二人は同時に悲鳴を挙げた。

「言うから腕をゆるめてくれ」とB。

「よし。ゆるめてやるから白状するんだぞ」
「Aがいったように、こうなったのもチャッ

ピーに罪があるんだ。チャッピーに色気があったら、こんなことにならずにすんだ」

「色気とどんな関係があるって言うの？」

色気といわれると弱い。大学四年になる今日まで恋心みたいなものを味わったことも、なかったわけではないが、いつも終いには臆却になって、あっさりと放棄してしまった。

つまり色気は彼女の盲点というわけで、じぶんでもそれを知っているからこそ、いまBにあらためて指摘されると急に気弱になり、言葉使いまで女らしくなってしまった。

「普通のお嬢さんならよう、男の首を股倉で締め上げたりなんかしないよう」

「女プロレスじゃあるまいし、あたしだってしないわよ。でもA君がそうしろと言ったから、やったまでよ」

「しろと言ったって普通のお嬢さんなら恥しがるさ。それにさあ。Cの顔の上に跨ったときや、正直いつて顔負けしたよ」

「何さ。じぶんたちがそうしろと言ったくせに……それにストラックスはいたままだから、ちっともいやらしくないじゃないの」

「ところがさ。チャッピーがあんまりへっちゃらな顔をしていたんで、こっちも図に乗ってズボンのチャックをはずせとか、パンティ

がどうのとか、言っちゃったわけだ」

「いくらあたしに色気がないからって、ヌードの真似はできないわよ」

「それやそうだろう。そいつはこっちが悪かった。しかしはじめから仕組んだ芝居じゃないってことだけは了解してくれよな」

「うん、了解する。あたしも手荒なこととして悪かったわ。ごめんね」

彼女は、そうやって二人の身体からおりたが、この成行をニヤニヤしながら見ていたCに、わけもなく、無性に腹が立ってきた。「おまえがいけないんだよ。寝技なら授業料を払うなんて言うから」

しかしCも負けていなかった。

「柔道を教えるやつはこの世の中に掃くほどいらあ。それをとくにチャッピーとお名指した意味は、言わなくなつて分るだろう」

「分んないねえ」

「案外、頭が悪いんだな」

Cは冗談のつもりだったのだが、この言葉が彼女にはぐつときた。

「なんだって？ もう一度言ってみろ」

こういうと、彼女はすくく起ち上り、あぐらをかいて坐わっていたCの前で仁王立ちになった。

「おい。怒らなくなつたっていいだろ？ これぐらいのことだ」

「とくにチャッピーとお名指した意味は、とはどういうことだ」

「それが分んなければ、しょうがねえ」

「何を言うか、こいつ！」

晴子の鉄拳が二つ、三つ、Cの頭上にとんだ。

「痛え。乱暴はやめてくれ」

Cは下から彼女を見上げながら、頭をかかえた。彼女はそれには答えず、矢庭に足を上げると、真正面からCの肩に乗り、次の瞬間ぐいとお尻を突き出した。Cは彼女に両肩に足をかけられ、おまけに強くその股間で顔面を押されたために、上体の平衡を失い、仰向けざまに倒されてしまった。

ぐつと抑え込んだ晴子の顔は、いつもとちがつていた。怒りで唇がふるえているようだった。

これにはAもBもあわててしまった。放っておけばCは絞めおとされるかも知れない。そこで二人とも起ち上り、左右から彼女の手をとり

「勘弁してやってくれ。Cに悪気があったわけじゃないんだ」

彼女はいっかな、きこうとはしなかったが考えてみれば、これも冗談からコマが出たという形で、そんなにムキになるほどのことでもなかった。

そうと分れば、さっぱりしたもの。Cを股の間から解放してやりながら

「C君。これからは寝技専門で教えてやるから、授業料」はかならず寄越すんだよ、ほっほっは」

Cもまたその言葉にきさくに応答した。「小遣錢に困つたら、いつでもおれんとこへ出教授にやって来いよ。『授業料』はいつでも払うからな」

六

こんな風に、晴子の学生時代の乱行といつても、だいたい茶目っ気たっぷりなものだったが、社会人となつたいま、開き直ってMから追求されると赤面ものだった。

「柔道のような日本古来の武道の本義は礼儀作法にある。しかるに君のように女だてらに男を組敷いて、征服欲を満たすなんて外道だよ。きけば君は学生時代にボーイ・フレンドを二、三人束にして抑えつけ、その上に馬乗りになつて女王気取りでいたというじゃない

か」

Mの追求はますます急だ。

「人聞きの悪いこと言わないでよ」とはいったものの、そういった脱線行為のあったことは右のように事実である。だからMに

「じゃ、君は僕のいうことはデマだということか！」

とたたみかけられると、返答のしようがない。

「それ見ろ。返事ができないだろ」

晴子にかぎらず、だれにしたって、学生時代の脱線行為を、前後のいきさつなど無視して、その行為だけを抜き出してならべられたら、たまったものではない。事情を説明すれば分ってもらえることでも、説明するのが重荷に感じる場合がある。晴子の場合とはくにそうであった。しかもいまMの訊問にいちいち答えていては、ますますじぶんが不利になり、不要な誤解を同僚や先輩にいだかせる惧れもあった。そこで彼女は、短刀直入にこういった。

「Mさんはまるで刑事みたいで、あたしの過去をよく調べ上げたものねえ。感心するわ。あるバーのマダムと仲がよかったので、愚連隊に言いがかりをつけられたとき、何度か救

って上げたのは事実よ。しかし酒場でじぶんから喧嘩を買って出たなんて大ウソ。ボーイ・フレンドに柔道教えて教授料をとったというけど、あたしは女よ。しかも、多寡が初段よ。どんな物好きな男だって初段程度のものに教授料を払うわけがないじゃないの。女王さま気取りでいたというけど、あたしはアダ名のとおりお茶っぴいよ。それに世間にだって女王気取りで学生時代をすごしたお嬢さんは掃いてすてるほどいるわ」

「……」

「そうでしょう。それを何か重大事件みたいに錯覚して、満座の中で口にするなんて、あなたの頭どうかしてるんじゃない？」

「何！ 頭がどうしたっていうんだ！」

「あなたはあたしの先輩かも知れないけど、先輩なら先輩らしくしてほしいの。あたしが貞操と引き換えにY先生に小説を書かせたとか、いやらしいデマとばすのは止して頂戴。なにさ。こんどの記事だって、あんたが見当ちがいしていたのを、あたしが軌道に乗せただけじゃないの。だいたい仕事のことを根に持って変な言いがかりをつけるなんて、男の風上にもおけない卑怯者よ」

立板に水を流すとはこのことであろう。彼

女は一気にこうまくしたてた。

「卑怯者とはなんだ」Mはカンカンに怒ってしまった。

「卑怯者といわれて気に入らないの？」

「何を！ この野郎！」

Mは膳の上の盃を手にとると、晴子の面上めがけて発止とばかり投げつけた。が、手許が狂って盃はいたずらに空間を切り、彼女のうしろの唐紙にぶつかって畳の上にポトンと落ちた。するとMは唸るようにわめいた。

「浦里！ ここへ来い。ブン殴ってやる！」

「いやなことだった。ブン殴りたければ、ここへ来て殴ればいいじゃないの」

晴子の平然とした様子が一層Mの憤怒をかきたてた。

「ようし！」といって、彼は立ち上がった。

そのときである。

「二人とも喧嘩なんて無粋なことは止めて、柔道でケリつけたらどうなの」

声の主は三隅加代子であった。彼女のこの一言で白けきっていた座が急に陽気にざわめき出した。

「名案！」というもの。

「異議なし！」と叫ぶもの。

「いかすじゃねえか。ジョルジュ・サンド」

と手を打ってよろこぶもの。座敷は急に賑かになった。

満座の声援に気をよくして加代子はすっと起ち上った。一六三センチの長身である。T大仏文科の出身。フランス語が堪能で、男装がよく似合ったので、いつの間にか、みんなからジョルジュ・サンドといわれるようになった。既婚女性だが、美しく、男好きのする顔なので、人気があった。シャンソンが上手で、宴会のときには歌って一座を楽しませるのが常であった。

彼女は満座を見まわし、「衆議一決したようだけど」と言ってからOのほうを向き「編集長、よろしいでしょ？」ときいた。

O君はさきにはくからの電話でいっさいをのみこんでいたので、「さては、お出なすつた」と心の中では思ったが、「しかし君、どこでやるんだ。場所がないじゃないか」と加代子に言った。

「隣の大広間が空いてますわ」と、いいながら、まるで舞台の幕をあけるようにして唐紙を左右に開いた。

「ほほう。これは都合がいい。しかし試合となれば、だれか、審判員をたてなきゃいかん」

すると即座にだれかが答えた。

「編集長！ 審判は三隅君がやりますよ」

「えッ？ 三隅君が？」

その言葉の中には（三隅にそんなことができるのか）という反意がこもっていたが、だれ言うともなしに

「編集長は三隅さんの柔道知らないのですか？ 男装の麗人また柔道もよくするですよ」

「そいつは知らなかった……三隅君も浦里君と同様初段の組かい」

Oに問いかけられて加代子はニッと笑い、「いいえ。まだほんのABCですの」

「それにしても驚いた。女子柔道ブームはえらいもんだね」

「東京の講道館だけで千七、八百人ぐらいるんじゃないか知ら。もっとも、黒帯は二百五、六十人だけど……町道場も入れたら、大へんな人数ですわよ」

「それにしても大したもんだ。一つ君の名審判ぶりを拝見するとうか」

七

加代子が柔道をはじめたのは二十六の年だから、まだ二年も経っていなかった。習いは

じめの動機はもちろん晴子の感化である。

「あたし、あんたがうらやましいのよ」

「どうしてさ」

「強いから……」

「なあんだ、そんなことか」

「うちの三隅、あれでなかなかの暴君なの。それに気が短かいせいかな、すぐ手をあげるのよ」

「あら。いけないわ。加代ちゃんのような美しい美人を奥さんにしていながら、ブン殴るなんて」

「凄い美人は余計よ……でもあたし癪にさわる時があるの。そんなときぎゅうぎゅうの目に遭わしてやったら胸がすうっとするとおもうんだけど、悲しいかな、取っ組み合いじゃ敵わない」

「じゃ、あたしがこんど乗り込んでいって、あんたの代りに三隅さんをぎゅっといわせてやる」

「あら、止してよ。そんなこと……あれでもあたしにとってはこの世の中にかげがえのない大事なマリ（夫）よ。もしチャッピーがノシたりしたら、あたしが承知しないわよ。」
彼女はいたずらっぽくそういって、軽く晴子をにらんだ。

「おやおや。がっかりさせるじゃないの」
 「やるならこのあたしがやるわ。えいッと投げつけ、起き上ろうとするやつを上からムン

ズとばかり抑えつけ、無礼者！ 不埒な真似
 いたすと容赦はせんぞ！ とね」
 「まるで女剣劇じゃないの」



「ほっほっほ。だったら、どんなに痛快かしら」

「そうはかんたんにはいかないわよ」

「柔道習っても？」

「そうよ。でも、しばらくやれば、ぶん殴ろうとする相手をかわずぐらいのことは訳なくできるわよ」

「それだけだっていいわよ。彼だって追っかけてきてまで、ひっぱたくことはないんだから、最初の一撃をはずしさえすればいいの」
 「その手を道に振じ上げて背負投げを一本きめつけられ、それこそすつとするけれど……」
 「そうだわねえ。ようし、決めた。あたしも習うわよ」

講道館女子部の申込書には「入門の目的」という欄がある。彼女はそこへ「健康保持と精神修養のため」と書き込んで、ニッと笑った。

ただ二十六という年は柔道をはじめるには遅すぎた。しかし昭和三十四年にキリマンジャロに登頂し、本年はニュージールランド親善隊の一員として同国の最高峰クックを征服した「婦人画報」の記者後藤薫子さんが柔道をはじめたのは、キリマンジャロから帰った二十五歳のときだが、きようまでわずか二年足

らずのうちに乱取固技から投の形、柔の形まで修めたし、やはりキリマンジャロ遠征隊員として、またこんどはニュージランド親善隊員として薫子さんと行をともした川井耿子さんも、年齢は二十三歳だが、すでに一家の主婦でありながら、やはり柔道をはじめている。この両女性が短時日のあいだに周囲のものが舌をまくほど強くなったのは、二人とも早大山岳部時代から合気道（両女性とも初段の腕前）をやっていたためでもあるが、男とちがって女のばあい、年齢はそう苦にならないからだ。

加代子も丁大時代は馬術部に籍を置き、さかんに馬を乗りまわしていたというから、身体筋肉も柔かく、したがって年齢からくるハンディキャップは早急に克服できた。

夫君の三隅は加代子のいうほど暴君ではなかったが、気が短かい上に手が早く、平手や拳がよく彼女の顔面や頭上にとんだ。しかし加代子が柔道を知りはじめると、まったく勝手がちがってきた。手をあげても空振り三振に終ることがだんだん多くなり、そのたびに苦笑させられた。あるときは、振り上げた右手を軽く捻られ、「この悪い癖を早く直すのよ」とたしなめられたこともある。

「君も強くなったもんだね。うっかり夫婦喧嘩もできんな」

この夜、三隅は上機嫌であった。

「一つ、おれにも手を教えろよ」

「教えてもいいけど、あんたすぐ怒るからイヤ」

「いや、怒らない。奥さまに柔順であることを誓います」

「そんなら……」というので、彼女ははじめて彼に手の内を公開した。彼女は彼が振り上げた右手を左手で抑えると、その手の下をかくぐり、身体を百八十度左に開き、後ろにまわりざま、左手をぐいと引いた。こうなると三隅は両足で立ってはいえるものの、もう少し強く後ろに引かれれば仰向けざまに倒れるよりはかはなかった。

「どう？、」Mの自由は完全に制せられていた。

「うん。これや負けたよ」

「このまま後ろに倒してもいいし、足を払ってもいいのよ。次ぎをつずけていい？」

「うん。だが、お手柔かに頼むよ」

「いいわ」

足をかけるまでもなく、彼女が右手で相手の肩口を抑えて後ろに引くと、三隅の大きな

身体はどたりと畳の上に倒れた。と、彼女はひらりと彼の腹の上に馬乗りになった。

「これから縦四方固めで攻めてみるわ」といった。

「おい、おい。亭主を馬乗りに組み敷くやつがあるか」

「それごらん。すぐ怒るくせに……。じゃあやめた」

彼女は腰を浮かして立ち上ろうとした。

「いや。怒ったわけじゃないよ」

「でも文句をつけるんなら止すわ」

「文句はつけません」

「あたしに柔順であることを誓う？」

「誓う。はっきりと誓います」

それにたいし彼女は男のように「ようし」と言ってからずしんと腰をおろし、「誓いを破ったら承知しないわよ」と言い放った。馬

乗りに組敷いたまま相手に誓いをたてさせたことが、彼女の征服感をかきたてたようだ。

（よし。今夜は思いきり虐めてやろう。どんな顔をするか知ら？）

加代子は、上体を倒して折り重なると同時に、相手の左脇下から右手を差し入れて首を巻き、固技（かためわざ）に入った。三隅は腰を浮かして跳ね返そうとしたが、それがか

えって悪く、その浮いた尻の下に加代子の両足先きが差し込まれると、腰の自由はまったくなくなってしまう。彼も身体は大きい方であったが、一六三センチの上背と五五キロもある体重でこうまともに抑え込まれると、力だけでは跳ね返せない。

「うむ。やられたよ」

「ほんとうは絞め落すんだけど、可哀相だから加減したのよ」

加代子は相手の首にまきつけていた両腕を解いて上体を起すと、馬乗りのままほつれ髪を手でかき上げた。

「こんどは十字絞めをやって見る」

「まだやるつもりか」

「また文句をいう！」

「ごめん。ごめん。どうも今夜はいかん。負けとくよ」

「わざと負けることはないわよ。くやしかったら跳ね返してごらんさい」

「いいのか」

「いいわよ」

「ほんとうにいいのか」

「くだいわね」

三隅が猿轡をのばして押しところがそうとしたのと、加代子の両手が彼の両襟をつかんだ

のと同時であった。というよりも彼女の方が一瞬早かったのであらう。それが証拠に、次の瞬間、彼女は襟をつかんだ両手を手元へ引きつけながら彼の首を絞めていたからだ。

三隅が暴れれば暴れるほど、彼女の身体は蔽いかぶさるようになり出していった。そしていまは胸板に跨り、三隅の首をじぶんの股間に持ち上げながら絞めつけていた。

それでも三隅は参ったとはいわなかった。

ここで降参しては亭主の座がたちまち崩れ落ちると思つたのだらう。

苦しまぎれに、しかし必死の力で身体を横にひねって、馬乗りになった加代子を横倒しにしたが、これがまたかえって悪い結果になつてしまった。彼の身体をはさんだ彼女の両足は吸盤のように吸いついて離れないばかりか、彼の首を手許へ引き寄せてぐっと絞めたので、加代子の股倉に顔を突っ込むような形で降参することになったからだ。しかし下から見上げた妻の顔が今夜ほど美しくみえたことはなかった。

「きれいだぞ。今夜の君は……」

「あら。お世辞いって……。その手には乗らないわよ」

絞めていた手は緩めたが、相手の両襟はま

だつかんでいた。彼が暴れれば、再びすぐ固技に入るつもりだった。

「お世辞なんか言うものか。ほんとうだよ。

だって、こうやって下から君を見上げるのは今夜がはじめてじゃないか」

「おほほ。それやそうね。じゃ今夜はあたしの顔を下からうんと拝ませたげる」

彼女は上体を立てなおすと、無難作に三隅を再び下に組敷いた。

「おい君。この手を離してくれよ」

「おとなしくするんなら離して上げる」

「今夜は完敗だ。おとなしくするよ」

「暴れると痛い目みるわよ」

彼女はいたずらっぽくそう言つて、相手の両襟にかけていた手を離すと、両腕を胸のあたりで組みながら、上体をうしろに反らしてふんずりかえった。完全な征圧態勢である。

「どう？ 下から見上げると、ますます美人にみえる？」

「うん。ほんとうにきれいだよ」

「こんな美人になら一度虐められてみたいって気にならない？」

今夜の三隅は妻からカサにかかつてこう言われても、不思議に腹が立たなかった。それどころか、これほど美人を妻にし、じぶんが

独占しているばかりか、じぶんもまたこうやって独占されていることに無上の愉悦と満足とを味わった。

加代子もまたさきほどから馬乗りの姿勢で相手を征しているうちに、得態の知れない興奮にかられているじぶんを感じていた。

そばの文机の上にハンドバッグのあるのを見付けると、手をのばしてそれを取り、中からたばこを取り出すと、口にくわえてライターで火をつけた。最初の一服を思い切り吸い込み

「ああ。おいしい」と言った。「チャッピーじゃないけど、まさに馬上の服ね。ほんとうにこうして喫むたばこっておいしいわ」

彼女は身体をかかめて吸い込んだ煙を、口と鼻の両方から下になっている三隅の顔に吐きかけた。

「おい。おれにも喫ませろよ」

「だめ。馬がたばこを喫みたいなんて生意気よ。それよりも口をあけるのよ。灰皿代りにして上げる」

「おいおい。それはひどいよ」

「また反抗するか！」

彼女はたばこを横っちょに啣えると、両手を三隅の襟にかけた。余裕しやくしやく啣え

たばこで締め上げようというわけだ。

「ごめん。ごめん」

普通なら、負けるはずはないと思いつつも、今夜は妻の言いなりになるほうが、三隅にはこころよかったようである。

八

柔道着に身をかためた晴子とMとは、審判員の加代子に導かれて大広間の中央で対峙した。

「試合は一本勝負とします」加代子は大声に堂々とこう宣言した。「はじめ！」

審判の声に応じて、双方右自然体にかまえた。右自然体というのは、右足をすこし前に踏み出してかまえる姿勢だ。晴子は左利きなので左自然をとることが多かったが、今夜のように右自然でも、十分に斗える。

とみると、Mは右手で晴子の左横襟をにぎり、左手で右外中袖をつかんだが、彼女も同様に組んで畳の上をスルスルと動いていく。

Mは力にまかせ横襟をにぎった手で彼女を前あるいは左右に崩そうとするが、晴子は彼が引けばそれについて進み、押せばそれについて退いた。いつもの晴子なら組むとみるや間髪をいれず、相手を呼びこみざま猛烈な出

足払いを食わすか、支え釣り込み足で一本とろうとするのだが、今夜は慎重を期しているのか、ただするすると相手についていくばかりだ。

あれほど眠かだった宴席からも、いまはしわぶき一つきこえない。満場固唾をのむとはこのことだろう。

「とッ！」低い声が晴子の口からもれた。進み寄ってきたMの片足を刈ると同時に仰向けに倒したのである。小内刈だ。しかしMともむかしとったキネズカだ。倒れた瞬間、身体を横にしてすり逃げようとした。逃げられたらおしまいだ。そこで彼女はMの顔の上を跨ぐと、両手でその右手をつかみ、すばやく腕がらみに入ろうとした。腕がらみというのは相手の片手首を逆にとってじぶんの股間にはさみ、そして一方の足を相手の顔か、咽喉の上に、片方を胸の上において、じぶんの身体を後方に倒して攻める技だ。

この態勢で手首か肘の関節を逆にとられてしまえば、Mの負けである。が、Mは右腕はとられながらも、左手で晴子の足を押し上げると身体をひねってうまく逃れた。「待って！」審判員の加代子が声をかけたのは、両名の着付けがさきほどからの斗いで乱れてしま

っていたからだ。
「かかれ、」両名がはだけた胸をあわせ、帯を締めなおし終ると、加代子はそう声をかけた。

戦斗はふたたび開始された。それまで時間にしてものの五分と経っていなかったが、Mの呼吸は早くも乱れていた。学生時代は初段だったかも知れないが、社会人となつてからスポーツらしいものは何もやらす、酒を不規則な生活をつずけてきたのだから、息のつかないのは当然だ。これに反し、現役選手と同様に平素けいこに励んでいる晴子はケロリとしたものだった。

さきほどからの経過をみてもわかる通り、試合はどうみても晴子が優勢だ。しかも持久戦にもちこめば晴子はますます有利になる。そこでMは焦った。組むや矢継早に膝車（ひざぐるま）で晴子をおびやかした。膝車というのは相手の姿勢をくずしたとたんに、じぶ

んの足を相手の膝にあてて後方へ車のように投げとばす技だ。初心者がこれをやると、かけた足は抱きこまれ、残った足は刈られてひっくりかえされてしまうが、有段者は仕掛け技として、よくこの手に出る。というのは、この技から内股、跳ね腰、払い腰などに変化できるし、また横捨身技をかけることもできるからだ。

だから対者は膝車よりもその後にくる変化技を警戒する必要がある。事実Mも、膝車で誘っておいて、早いこと彼得意の払い腰を一本きめるつもりでいたのである。しかし彼の不覚は、この技にあまりにもこだわりすぎたことだった。

何度目かの膝車で晴子の姿勢は崩れた。彼はしめたとはばかり突差に腰を左に捻り、「やッ」の掛声もろとも右腿で相手の右股を払い上げようとした。が、彼女はそれを待っていないかのように、Mが、まさに身体をまわりこ

ませようとするその瞬間をとらえて、「えいっ」美事な体落しをかけた。彼の身体は大きく弧を描いて、畳の上に落ちた。「それまで！」加代子の声が凜然とひびきわたった。

◇ ◇
O君はいまでも酒を飲むと、このときの晴子の返し技の美事さをほめるのである。「家庭の主婦にしておくのが惜しい」というのがO君の主張だが、彼女はいまA社に勤務しているK君の貞淑な妻だ。ベビーが生れるまでは柔道をつづけたし、相変らずの茶目ぶりを発揮して夫君をこまらせたこともあるが、昨年一女の母となつてからは人が変わったようにおとなしくなった。本誌の読者のなかには、学生時代に彼女に「教授料」を払って、「甘い柔道」の経験をもった方もいられるとおもう。ここに彼女の健在を伝えて筆をおく。

（この項つづく）

腸露出「無念腹」女体切腹写真

A5判（本誌の大きさ）感光紙焼付 十枚一組 八〇〇円

モデル……大塚啓子 略号（せ10）

やわらかなへソ下の肌に今や深々と刃を突き立てれば、溢れる血汐は、唐くれないに、とびちり、腸が切口から、むくりむくりと盛り上ってくる。無念の形相も物凄く

血に染った手に更に力をこめて引きまわせば、腸は刃のきりきりと皮膚をさき皮下脂肪を割け、肉を切るにつれて、みるみる創口いっぱいひろがってくる。

左手で腸を押えながら右脇腹まで切りさいてゆくと、刃を抜いて、今度は下腹からみぞおちまで一気に凄惨な十文字腹。今までは試みられなかった腸露出の有様を決定版ともいうべき迫力のある連続写真集である。凄絶、女体切腹フォトの決定版として自信を以ておすすめできる切腹フォト集です。



〈風俗読物〉

剃かみ刀そり

と

美おんな女な

川野京輔

(一)

その女の人は未だ若い未亡人でした。端麗な顔と、豊満な体附きをしていました。いつも、すんなりした素脚に、赤いサンダルをはいていました。

私には、その木のサンダルの音だけで、あ

の人だと分かるのです。

「空いている?。」

一寸、尻上りの艶かしいアクセントで聞きます。

「どうぞ。」

私は、西洋剃刀を、革のバンドで研ぎながら精一杯の愛想で答えるのです。

あの人は、身軽に椅子に腰を掛けます。

私は刷子で石鹸をぶくぶく泡立てます。

「今頃が一番空いているわね。」

あの人は満足そうに空っぽの左右の椅子を眺めます。

「ええ、これで五時を過ぎると、会社帰りの人が刈りに来ますから。今が床屋の一番暇な

時ですよ。」

柱時計は、間もなく三時になろうとしていました。

「親方は?。」

「今日は一寸外出で、私が一人です。」

私はあの人の後に廻って、襟首に石鹼を塗ります。

透き通る様な白い肌でした。

青白い脂肪が浮いて見える様でした。

私は一気に剃り上げてしまいます。

椅子を後に倒します。

あの人は長い美しい、まつげを合わせて、軽く瞼を閉じます。

ツーンと反った鼻と、一寸めくれ気味の唇が、日本人放れした感じでした。

真直ぐ伸ばした脚を重ねていました。両手をお腹の辺りに乗せています。

真白に泡立った石鹼の香りが私の鼻をくすぐります。

私には、此の臭いが、あの人の体臭の様に思えるのです。

剃刀を持つ手が微かにふるえます。剃刀の刃が生毛の光る頬にふれた時、あの人はピクリと動きます。

喉の辺りが、小刻みに痙攣しています。私

は念を入れて、あの人の顔を剃ります。

美しい首を自由自在に動かして、ある時は唇をつまみ上げて、口の周りの生毛を、そして、時によっては、可愛い耳たぶを持ってその柔らかい毛を剃ったりします。

滑らかな、あの人の肌ざわりが、私の手を通じて全身に妖しい感情を起させます。

あの人は、静かに寝息を立てていました。

知らぬまに眠ってしまったのです。

軽く開かれた唇の間に、白い歯がチョッピリ覗いていました。

私の目一杯に、それが飛び込んで来たのです。

私は吸い寄せられるように、顔を近づけました。

「殺して。」

突然、あの人は、低くつぶやきました。

私はビックリして顔を上げました。

パツチリとあの人は目を覚ましました。

不審そうに私を見つめています。

私は、真赤になって、意味もなく剃刀を革

のバンドで、こすりました。

「何かなさったの?。」

咎めるような口調でした。

「いいえ。飛んでもない。貴女が変な事を言

ったのでビックリしただけです。」

「私は何い言いました。」

「ええ、殺して、とか……。」

今度は、あの人が赤くなりました。

「マァ。」

と言った切り、暫くは両手を胸の上で、組み合せていました。

「きっと恐ろしい夢を見たのね。」

あの人は、小さい声で言いました。

秘密めいた不思議な響きがありました。

(二)

私はあの美しい人の秘密を知りたいと思いました。

近所には美容院もあり、顔も剃ってくれるのに、あの人は何故、男ばかりの床屋へやってくるのでしょうか。

しかも、その回数が多過ぎるのです。

勿論、商売から見れば、こんなありがたい客はない訳ですが、私は前から変だと思っていました。

それに冷たい剃刀が頬に触れた時の、あの唯ならぬ緊張ぶりはどうでしょう。

私は、あの人が、あんなに奇麗で、末だ若いのに再婚しない理由の一端が、その辺にあ

りそうに思えました。

剃刀と美女。

この不思議な組合せが、妙に私の心を刺戟しました。

ある日、

あの人は顔剃りに来た時、一緒に古びた剃刀を持って来ました。

「これ、今度来る迄に研いでおいて頂戴。」

随分使っているものと見えて、切れ味は悪くなっていました。手入れは良く行きとどいていました。

私は、その日の中に研ぎ上げると、休業の日を待って、直接、あの人の家へ届ける事にしました。

変にわくわくする気持で、私は、月曜日の朝、あの人の家へ行きました。

小じんまりとした平家で、あの人は一人で住んでいました。

「田舎の実家が裕富なので、何もせずにぶらぶらしているのさ。」

と、うちのお神さんが世間話で言っているのを聞いた事がありました。

あの人は、寝起きだったらしく、華やかな寝巻のまま顔を出しました。

「まあ、床屋さん。わざわざ持ってきてなくて

も良かったのよ。」

そう言いながら、あの人は私を、じろじろと無遠慮に見ていました。

「今日は馬鹿にめかし込んでしまつて。私、分からなかったわ。貴方、年は幾つ？」

「十九です。」

「そーお、未だ若いのね。」

あの人は、美しい素足の指を、くねくねと動かしていました。

ふとあの人の目の色が変わったようでした。

「これ本当に切れるようになった？」

いたずらっぽい調子でした。

「絶対大丈夫です。僕が研いだのですから。」

「そーお。じゃ今から剃ってもらおうかな。」

どう、せつかくの休みだから嫌や？」

半ば期待していたくせに、私は、わざとつまらなさそうな顔をしました。

「ね。やってよ。後で、御馳走するわよ」

私は、御馳走に釣られたような恰好で、無邪気に大きく頷きました。

「じゃ。上って頂戴。」

そして、あの人は大きな鏡の前に、ぺたりと坐りました。

私は、洗面器の湯で手をしめすと、石鹸をなすり、襟首に塗りつけました。

「どうしたの、手がふるえているわね、大丈夫？ 切らない様にね。」

あの人は鏡の中から、私をじっと見つめていたのです。

鏡の中で目と目が合つて、私は思わず横を向いてしまいました。

襖の向うのなまめかしく敷き放された布団の枕許に、見覚えのある一冊の雑誌が置いてありました。

私は、はっきりと、あの人の被虐の性癖を見抜いてしまいました。

剃刀にまつわる謎が解けた様な気がしました。

私は、射す様な目で鏡の中を見ました。あの人が、ドキッとした表情で、頬を硬張らせました。

(三)

「驚いたでしょう？。あんな雑誌、読んでいるなんて。」

やや暫くして、あの人は、少しうつむき加減で言いました。

「だけど、貴方が考えているほど、変な雑誌じゃないわ。れっきとした風俗文献誌よ。」

聞きもしないのに、あの人は、言いわけじ

みた言葉を続けるのでした。

「色々、知らない心の秘密と言ったものが判って面白いのよ。」

「さあ、顔を剃りましょう。」

私は、あの人に催促しました。何を思ったのか、あの人はニッコリと笑いました。

「そーお、じゃお願いするわ。」

そう言いながら、いきなり、畳の上に仰向けに寝てしまいました。

そして、私の顔を見上げていたずら気に微笑むのでした。

女の人が無抵抗に仰向けに寝ころんでいる姿は、ひどく煽情的なものです。

私はドキッとして暫くは手が出ませんでした。

あの人は、私の心の奥底まで見抜いているかの様に相変らず頬を崩したまま、軽く目を閉じてしまいました。私は刷子を取って石鹸の泡を顔中に塗りました。私の膝の間に、あの人の顔

をはさみました。

「もっと強く締めて。」

あの人がうっとりと言いました。

私は膝に力を入れて顔の動きをとめて乱暴に剃り始めました。

真白な泡の中から、美しい顔が徐々に現われて来ます。

「ね、体中剃って。」

潤んだ様な、あの人の目でした。

手を伸ばして、寝巻の帯を自分から解いてしまいました。

「どっしたの、早く。」

暗示にかかった様に私は、夢中で、あの人の滑らかな肌一面にシャボン塗りつけていました。

喉から剃り始めます。

むっちりとした盛り上った乳房が、下に激しくゆれていました。

足の指の先迄、丹念に剃って仕舞うまで、たっぷり一時間はかかりました。

ぐったりと身を投げ出して、あの人は疲れきったという風情でした。

私も、生まれて始めての異常な経験で、まるで酒を飲んだ後の様な、気だるい、そのくせ妙に熱っぽい疲れを感じていました。

手にした剃刀の刃には、薄っすらと、人肌の脂が浮いていました。

「研ぎが足りない様ですが、今度の休みに研ぎ直して持ってきます。」

私は、あの人の、しどけない姿に



目を走らせながら言いました。

「そうしてもらおうわ。」

最前とは打って変った親しみのこもった口調でした。

〔四〕

普通の人が考えれば、およそ馬鹿氣た私とあの人の妖美な秘密は、それから始まったのでした。

あの人の死んだ御主人と言うのは、少壮の科学者だったそうですが、自分の研究以外の事には、およそ無頓着で、髭を剃るのも億劫だったという事でした。

そこで、あの人は、毎朝、御主人の髭を剃ってやったのだそうです。

剛い男の髪を剃る時の感じが、ひどく官能的で楽しくなったと言います。

剃った後の、すべすべした触覚が好きだったと告白しました。

つまり、此れは、女性本来の男性羨望の結果からだと思えます。

その男性の象徴である髭を剃る事で、男性免除、乃ち去勢させたという欲びを感じたのだらうと思います。

フロイドなら、さしずめ、この様に説明し

た事と思われませんが、あの人は、唯、御主人の体ばかりでなく、自分の体の男性的な体毛を、去勢させようとしたのです。

頭の毛は流行のボーイッシュスタイルにしました。暇を見ては、体中の毛を剃り落しました。

出来れば、それを他人からしてもらいたいと念願したのですが、不幸にも御主人が病気でなくなったので、その希望は駄目になりました。

そこで、あの人は、僅かに床屋へ行く事によって自らのマゾヒスチックな性癖を満足させていたのです。

あの人が、他人から無理に、剃られたいというのは、あの人が盲腸で入院して以来だったのです。

その時の妖しい亢奮が忘れられなかったというのです。

「私見たいなのは同じ変っているといっても一寸類がないわね。この雑誌には、ありとあらゆる種類の告白が載っているけど、剃刀なんてのは見ないわ。」

あの人はそう言って、一寸得意気な顔をするのでした。

こうして私達は、一本の冷たい剃刀をめぐ

って奇妙なプレイを繰り返すのでした。「切腹したいっていう女の人が近頃多い様だけど、結局は私のと同じなのかしら。」

あの人は、新刊の雑誌をめくりながら私に言うのでした。

あの人と二人切りの時は、私も一人前の大人でした。

むしろ、そう言ったアブの世界については私の方が先輩である時すらありました。

〔五〕

私のアブ遍歴は、どちらかと言えば、本から受けた影響で、何事についても全般的な、それ故、底の浅い趣向が優っていて、その一つについて徹底した熱情を注ぐ事がなかったのです。

それに何と言っても幼く、大人の複雑な性の裏面をよく見極める事が出来なかったのでありましょう。

そのくせ一かどの異端者を気取って、あの雑誌にも色々な雑文を投稿していました。

勿論、一度も掲載された事はありません。恥づかしいので、この事については、あの一言も喋っておりません。

ですから、あの人と私との剃刀プレイを題

材にして、あの雑誌——皆様よく御存知の真面目な風俗文献誌——に投稿したのも黙っていました。

いずれ没になるに決まっていたからです。処がです。

「剃刀にまつわる幻想」と題した私の文が、載ったのです。

「貴方のね。」

あの人は、感心した様に私を見ました。

床屋の職人風情に、文章を書く能力があるとは思えなかったのでしょうか。

「それに巧いわ。でも何か物足りないわね。」

余り微に入り細に涉つての描写があったので、編集者が適当にアレンジしてくれていたのです。

「此の雑誌に載ると、読者の反応がすぐ分か

るらしいわ。」

という事は、読者が如何に雑誌を自分達のものとしているかの証拠ですが、私は、私達の『剃刀ブレイ』の反響がどんなものか、半ば、不安がりながらも楽しみに待っているのです。

(完)

限定版 特別号

案内

第一弾、第二弾、第三弾、第四弾と引続いて刊行された本誌の限定版特別号は、その豪華なモデル陣の美女を縦横に駆使して、素晴らしい緊縛ポーズを展開しております。第二弾はいち早く売切れとなりましたが、第一弾、第三弾、第四弾も今や残り少なくなりました。縛られた美女ばかりの艶妖ポーズと四馬孝画の緊縛画集によって、どうか痺れるような責めの醍醐味をお楽しみ下さい。

第一弾

緊縛フोट・アラベスク

略号「あらべ」 定価五〇〇円

本誌の黄金時代のモデル嬢の素晴らしい緊縛姿ばかりを集めた句うばかりにあでやかにも美しいフोट集です。全巻二十六項目、七十七葉に亘り、文字通り表紙から裏表紙のハシに至るまで、すべて緊縛女体のむせかえるような、むんむんするムードで埋めました。まだお求めにならないマニヤの方は、是非コレクションの一端にお加えになって、その妖美のエキセントリックをお楽しみ下さい。

第三弾

緊縛写真グラフ集

略号「グラフ」 定価五〇〇円

絹川文代、大塚啓子、愛川悦子、桜井葉子、等の本誌で育てたベテラン・モデル嬢の活躍による最も優秀にして鮮明、且つ魅力的な緊縛艶姿ばかり百十五態を集録した「グラフ」です。誌面いっぱいに所狭しと盛り上げる大型グラビアの迫力は、きつと皆さまを、この妖しい異常美の縛りムードの中へと誘い込むことでしょう。女体緊縛マニヤの皆さまに自信を以ておすすめ出来るグラビア・フोट集です。

第四弾

緊縛フोटと緊縛画帳

略号「別特」 定価五〇〇円

三十六葉に及ぶ四馬孝描く粒選りの傑作責画集のケンランたる陳列に加えて、本誌の発掘した新人モデルである、四方清美、花本京子、柳初子、山路ミヨ子、館典子、熱海容子、前本妙子、浜千代子、大井小夜子、加茂良子等の新鮮な悦虐姿態と加賀利江子、藤田節子、萩千恵子、桜井葉子、絹川文代、大塚啓子、須川令子などの代表的ポーズによって味をつけました。どうぞ御一見下さるようおすすめします。

サジスチック・ストーリー

蓄 ば

薇 ら

蟲 ちゅう

仏 光 刀 四 郎

銀 の 雨

今宵くすり（麻薬）の取引があった。場所は、例の如くN河の河口のダンス・ホールである。ホールの名は『銀鈴』と言う。われわれは符牒でスズと称^よんでいる。私は其処へ行った。護衛のためである。無論桂木組の身内を護るためである。私はカーテンの蔭で瞬きもせず相手方の態度に眼を凝らしていた。相手は、韓国籍の貨物船でやって来たポルトガル人である。しかし、じつはポルトガル国籍を有したチャイナである。香港の暗黒面を牛耳る張（チャン）親分の直接息のかかった一派だ。殺人の前科を持った者は、ざらだと聞く。相手は相当に極道ずれた男たちだ。しかも狡猾である。どん

なマチガイが起るかも知れない。だから私のような護衛役がいる。私は南側のカーテンの蔭にひそんでいたが、真向いの北側の窓のカーテンの背ろにも誰かがひそんでいることに気がついていた。もしハジキ（拳銃）が物言う事態が生じたら、まず真っ先に奴の腕が利けないようにしなければ、と私は考えていた。奴は私と同じ役割を持つ相手方の男である。

だが、無事に取引は済んだ。ヘロイン三百グラムが桂木組の手に移り、代りに相手は五百萬のナマ（現金）を受取った。そうしてわれわれよりも先にホールを退場した。少なからず私はホッとする思いであった。長い溜息が洩れていた。拳銃を使わずに済んだことを何者かに感謝したい思いであった。

ダンス・ホールの前で、桂木組の幹部たちは組の自家用車に乗込む。古いフォードだ。私は別にタクシーを拾い、河口をまわって街へ行くように運ちゃんに言った。タクシーと組の車はたがいに逆に旋回し合った。このときから小雨が降りだして来ていた。

河口へ行け、と私が運ちゃんに言ったのは海上に投錨している韓国籍の小貨物船を見たい気紛れからではない。麻薬を運んで来たその船なら私のアパートの窓からも見える。

濁った波が逆巻くそのN河の河口で、そうもう二月くらい前になるだろうか、画家の白河が溺死していた。酒に酔って、堤防から足を踏み外ずしてあえなく溺れ死んだのだ。奴は泳ぎの心得がない男であった。そのことは彼の口から一度聞いたことがある。だから渦巻く濁流に真逆様に落込んで溺死したのは当然であるとも思える。少々泳ぎの心得がある者でも渦巻に足をとられて危険なのだ。

だが、私があえて白河の死因に一点疑念を抱くのは、奴が全く下戸であった事実からである。一滴も飲めない男であった。アルコールとは一生縁のない男でしてねえ、と奴は笑って見せ、馴染のスタンド・バーで奴がいつも飲んでいたのは珈琲で、これは余程好きだと見えきまってブラックで飲んでいた。その下戸の白河が、なぜ飲めない筈の酒に酔い、しかもこんな淋しい河口をほつき歩いていたのか？ この点がどうも私の胸にしっくりしないのだ。

「停めましょうか？」

一心に私が窓越しに河を眺めているので、中年の運転手が気を利かして速力を緩めた。

「一寸降りて見たいが、この雨だからな」

面倒くさい。雨に濡れてわざわざ白河の死場所を覗いてみることに

もあるまい、私は思い直した。要するに気紛れだったようだ。

「行ってくれ」

小雨の降る淋しい河口の道でタクシーは左へカーブを切る。ライトに雨が銀に光った。

ホテルの賭場

桂木組のオヤジと会ったのは翌日の午後であった。このN市の繁華街のどまんなか「桂木建設」とでかい看板を掲げた中層のビルがあるが、それがそっくり桂木建設の社屋ではない。ビルの内部は殆ど貸事務所になっていて、本体の桂木建設は一階の隅の室に形ばかり会社の体裁を整えている。

それでも、一応社長室は別にある。私は其処で桂木のオヤジと会った。オヤジは四十二三の背の低い肥った男である。

「昨日はごくろうだった」

と、彼は言い、

「で、何か用かね？」

むっとするかわり私は笑って見せた。オヤジのそばには美しい女性がソファに座っている。二十七八のじつに美しい女である。だから桂木は私が邪魔なのだ。それはそうだが、こい奴もずいぶん物の言い方を知らぬ奴だ、と私は思う。

「小遣が欲しい」

と、笑った顔で言っただけ。

「ほう」

またかい、と言う。スケ（女）でも出来たのかと言うので「そうです」と私は答えてやった。ソファで女が私を見上げた。気品のあ



る美貌である。着ている服の好みからも、清楚な堅気の女の匂いがある。白のワンピースだ。綺麗な脚をしている。

じろじろ私が女を見るので、オヤジは一段不機嫌な声で、

「幾ら欲しい」

「二萬ほど」

「持ってけ、そら」

私は昨夜命を張って護衛に行ったのだ。報酬を貰うのが当然だろ

う。乞食に施すみたいに、投げて寄越すとは、何だ。だが、私は顔から微笑を絶やさなかった。

「すまねえ」

と、札束をポケットにねじ込んで、もう一度女の顔へ眼を投げてから緩くり室を出た。

「おい」

廊下で出会った組の三下を私は呼びとめ「オヤジと一緒に居るスケは、何もんかよ？」

「見たのか、舟木さん。ハクイだろう」

「トウシロウと見たが、素性は？」

「知らねえ。とにかく、これだ」

と、片手をひらく。五号の意味である。

オヤジには四人情婦が居る。それにあの女がもう一枚加わるわけだろう。

私は街へ出た。公衆電話で「3」の女給

を呼びだした。「3」は北の盛り場にあるスタンド・バーで、N河で溺死した画家の白河が珈琲専門で馴染んでいた店である。やくざの足を洗えと白河は其処でよく私に言ったものだった。齡は私と同じ三十二才だったし、私より苦勞を積んで来ている人間だったのでその忠告は重みがあり、それだけに耳痛かったことを私はまだ忘れない。

電話で私が誘いだした「3」の女給は、京子と言って、言ってみ

れば「可愛いズベ公」といった感じがある。

その「可愛いズベ公」の京子と私は一緒に西部劇の映画を観、そこを出ると、近くの小レストランで洋食をとった。

「今夜はお店休んでいいわ」

フオークを皿に置くと京子は含み笑った。

「どお？」

と、大胆に気を引いてくる。

「燃えてるのよ、あたし」

言われれば私もその気になる。二三度夜を共にしたこの少女っぽい京子の、裸にさせると意外なくらい豊満な乳房とまろい愛らしいおヒップは充分魅力的である。

夜になるまでどうやって時間をつぶすかを私たちは相談した。京子を真実恋人と思うような感情が、私の胸に微かに湧いて来たから不思議である。

結局、私たちはもう一本今度は邦画のメロドラマを観て時間を消した。

「なにをふさいでいるの？」

ホテルへ行く道々に京子は訊いた。街には美しく灯が色づき、私たちは人波の中を肩を寄せ合って歩いていった。

「気がふさいでいるように見えるか？」

「なんとなくうつうつそうだわ」

「白河のことが妙にほら、あの河で溺れ死んだ奴さ」

「あの人のことが、どうしたのよ？」

「気になる」

「バカねえ、死んじゃったのに」

「まったくだ」

私は言った。

「奴のことなんか思い出すことはねえ」

「センチメンタルなやくざだわ」

「そう言うな。奴の死に方がどうも怪しくて、しっくりしないからだ」

しかし、矢張りどこかに感傷が働いているのだろう。そう思うと私は自分に厭気がさした。一本立ちのやくざじゃねえか。しっかりしなよ、と胸の中で声があった。

ホテルの玄関が前に迫っていた。

私は女と泊る際、ケチ臭い連込旅館や、安ホテルを使うことはない。かつて一度もしたことがない。かならず一流のホテル乃至旅館を同衾の場所にして来ている。これは私の遊びの主義だ。

このホテルは「光山閣」と言う。勿論一流に属し、階下に豪華なキャバレーもある。ホテルの中にキャバレーが附随しているのはじつは少々品が墮ちるがオン・リミットであった頃の名残りである。ところが、もっと品が墮ちることには此処では今夜賭場が立っていた。

フロントに居た支配人がのっけに言ったものだ。

「キャバレーの方へどうぞ」

「なに？」

私は一寸面くらった塩梅だったが、三東会の幹部の男がそばに来て会釈したので、すぐに察しがついた。「光山閣」で賭場を立てるとは三東会もえらく売り出したものだとは私は感心し、

「花会かい？」

「へえ、みなさんのおかげで」

「桂木のオヤジさんも来てるな」

「はい」

三東会の兄いは腰がひくい。賭博と来た日には私は目がない。女よりもこっちの方に余っ程情熱を覚える。京子はこのまま帰そうと肚に決めた。

「少し遊ばして貰うか」

「どうぞ」

今夜はめがつきそうな気がした。

タイル室の折檻

はなはだしく、京子は立腹し、女に恥を掻かせたのよ覚えておいで、そう言っハイヒールを蹴立てて玄関を出て行った。

支配人の奴が笑いを泳えているのが、私を照れ臭くさせた。「何がおかしい」そう言っやると途端に青くなっていた。別段私はすごんだつもりではなかったが。

賭場には三東会の幹部が案内した。キャバレーへ降りて行く大理石の階段に、三東会の若いもんたちがたむろしている。道をあけてそれぞれ会釈を送った。

「おたくの組じゃ、賭場を立てるのにあんな三下まで寄せてかかるんだな」

先に立つ兄いは答えない。

キャバレーの中へ這入る。ダンサー同志が踊っているのが目立った。まだ宵の口で客足が寄っていない。

バンドがやけに賑やかな曲をやっている。ジルバを踊るダンサー

のカップルは流石にうまい。バンド・ステージの背ろに大きなドアがある。ドアのノブを彼は手前に引いた。

賭場が現われる。

広さは十畳間程で、赤い絨氈を敷きつめた洋室である。絨氈の上に厚い座布団を敷いて凡そ十四五人、盆ごさをとり囲んで座っている。一同に私は丁重に一礼した。知らぬ顔触れが二三居る。桂木は真ん中近くにあらを掻いていた。中盆のすぐ隣りだ。私の挨拶に返礼もなかったのはこのオヤジだけだ。私の顔に眼もくれない。何を怒っているのだろう、妙な奴だ、と私は可笑しかった。つい笑いが洩れた。

桂木組の幹部たちの顔が欠けているのは、目下京阪神方面へ上って行っているからである。遠く東京・九州までも行っている者も居る筈だ。昨宵仕入れたくすり（麻薬）をさばくためである。倍のサヤを乗せてヘロインは方々の都会地のやくざの組織へ売り渡され、更に数倍の高値になってペー患の手に渡る。その白い粉こそ真に怖ろしい悪魔であろう。

古風な丁半の骸子博打はすでにはじまっていた、早速私は加わった。バツタやカブの方を私は本当は好むのだが、丁半と言うことならこれも仕方がない。

暫く半の定張りで行って見た。忽ちのうちにスッてしまった。めがつきそうな気がしていたのが、みごとに裏切られた工合である。元も子もない。桂木に無心してみても、オヤジは到底寄越しはしない。オリなければならぬ。畜生ノついてねえノ私は盆ごさの前からしりぞいた。

壁に凭れて、私が人の勝負を眺めていたのは、まだ桂木のふとこ

ろに未練があったからだ。若し彼が勝ち越して来たらその機嫌のいいところにつけいって、幾らか元手をたかろうと思った。ところが奴はとったりとられたりで埒があかない。仕様ことなし私はあきらめて座を立ちかかった。

あの女が這入って来たのは、その時である。

立ちかかった腰を私はまた落した。美人の容姿を眺めたいのは大概の男に共通した心理だろう。この点では私も亦御多聞に洩れなかった。

それほど素晴しく美しい女である。

昼間見たときと同じくゆったりとした白のワンピース姿である。

脚が長く、全体均斉がとれている。

その整った肢態が、桂木の手招きに応じて彼の肥った膝脇へはべるのを見るのは、私はなぜか妙に苦しかった。この突然生じた感情を何と説明すればよいのか私は言葉に困る。要するにこの美人に惚れて、桂木のオヤジが妬ましいのだろうか。私としたことが他人の持物に岡惚れするとは。

なつてねえ、と胸の中で舌打ちした。

それで、腰を上げる気になった。すると向うで女が早く立ち上った。何事か桂木から耳元で言われて、賭場を出て行く気配である。

女は一寸顔を赧めていた。「ホテルの室で待っている」そう言われてもしたのだろう。赤らめた顔は何とも色っぽかった。

女が出ていくと、つづいてすぐ私は足音を殺して風のように賭場を滑り出た。

「踊ろう」

ホールの隅で私は女の肩を捉えた。

「一曲踊ってくれ」

「——」

「昼間顔を合わせたな。だからまんざら知らない仲じゃねえ。——さあ」

女の胸を引きよせて私は力づくでリードしだした。うってつけにバンドはスロー・テンポのブルースを奏している。女は、意外に素直に脚を合わせて来た。私は力を抜いた。

「お名前、フナキ、と仰有って？」

踊りつつ女は訊いてきた。

私はその美しい顔をみつめた。

「そうだ」

リバー・ターンで腿と腿を強く合わせながら、私は女の耳元に答えていた。

「舟木哲雄と仰有るのね」

と、彼女は私の眼を黒い瞳で仰いだ。

「誰に聞いた？ 桂木からか？」

「いいえ」

微笑を示してこう言った。

「わけがあつて、存知上げていました」

それから、女は急に顔を私の背広の胸に重たく押しつけて来て、離れた。一寸の間女はそんな仕ぐさをしたのだ。

「あんたの名は？」

「ヨシコ——川崎淑子」

名前の字をいった。

ブルースは終ろうとしている。次も踊りつづけるつもりで、私は

「オヤジとはどんな縁でできたんだ？」

女は黙っている。

「言いたくないなら言わなくてもいいぜ」

私は笑ってみせた。だが、本当は知りたい。

「——舟木さん」

そう私の名を呼んで川崎淑子が何か言いかけそうにしたとき、私はその淑子の肩越しに向うに人影をみとめた。人影は大股にわれわれの方へ近づいて来た。

「オヤジに見られちゃった」

と、私は淑子に知らせた。みるみる淑子は狼狽して私のそばから飛びのいた。かえってまずい、と私は思った。

果して、オヤジは満面怒気を帯びて淑子の手をひっ捕え、

「こっちへ来いっ」

片手が黒髪をひきずった。

「アアッ——」

「無茶するな、オヤジさん。俺たちはただ踊っていただけだ。それも俺がむりにさそったんだ。かんべんしな。」

私はオヤジの歩みに連いて行きながら、何度も繰り返して言いわけした。

「うるせえっ、うるせろっ」

そうかい、そんなら勝手にしゃがれ。私は化粧室の前で立ちどまった。化粧室の中へ桂木は淑子をひきずり込んで行った。

バンドは、ジルバをやり、客とダンサーは素知らぬ顔で踊っている。桂木の人柄に怖れをなして誰も近寄らぬ。なまなかに仲裁でもして飛ばっちりをくらったら損である。そうした気持で皆いるのに

違いはない。

「痛いッ——ゆるしてっ！」

洗面所から悲鳴がひびいた。

矢張り、私は薄情になれなかった。

「失せろっ」

中に這入って来た私を見て、桂木は噛みつくような形相で呟鳴った。

まるで狂犬だこいつは。そんな案外冷静な気持で私は折檻の光景を眼に入れていた。

背中を裸にひき剥かれ、その雪のように白い柔肌を、川崎淑子は気の毒にも皮ベルトで撲ち叩かれていた。ベルトの条跡が三筋、くつきり赤く淑子の背中を彩っていた。

ピンクのタイル壁を爪で掻きむしるように白い裸の両腕を這わせ、うしろ向きに立ったまま、淑子は激痛に身悶える。

「ゆ、ゆるして——」

「かんべんしてやんな。元はこの私が悪いんだからさ。ちよっと踊ってみたんだけど、オヤジさんの気にさわったんなら私は謝まる」私はずいぶん折れた言葉遣いをした。じっさい、淑子が気の毒だったからだ。

だが、桂木は、

「よし、てめえもそでで見ている。尻軽女に俺がどんなヤキを入れてやるか。俺の世話になっいて、俺の面子をつぶすような真似をしやがる女は殺したって構わねえ」

皮ベルトを握り直した。

「よしな」

私の声はつい荒くなった。
「たかがダンスをしたくらいで、え、オヤジさん、あんまりじゃねえか。人が聴いたら笑いますぜ。見損った。こんなにヤキモチ焼きだとは思わなかった」
まったく気ちげえだ、と思った。



「ああッ——」
悲鳴がほとばしった。とめる間もなく、ベルトが唸りを生じて雪肌の背部へ烈しく喰い込んでいた。
「動くなノ」

二の鞭がビシ—リと喰いこむ。

「ムム——」

皮下出血が鮮かに紅い色をにじませる。

「仕方がねえ」

私はそう桂木に向っていい、

「悪かったな、かんべんしてくれ」

身を床に折ってうめいている半裸の川崎淑子にひと言残して、私は化粧室を出た。

光山閣の玄関を出たとき私の心ははっきりと悲しかった。何と言っても、桂木は私の金主だ。なぐれもしない。力づくで今の折檻をとめることもならなかった。

それが悲しかったのだ。

恋人

「ほらこんなに」

と、川崎淑子は裸になって背中の中痛ましい鞭傷を私に示した。まるい腰を覆っている青い下着もすこしずらして見せ、

「お臀もぶたれたのよ」

白い肌に紫色の鞭跡が這っている。「気の

毒に」と私は言った。「かんべんしな」

彼女の返事を聴かないうちに私はふと目が醒めていた。夢だったのである。

「――夢か」

私は起き上って煙草をつけた。こんな夢を見たのも、彼女のこと

が気になっているためだろう。外はたそがれてきている。こまかな霧雨が降っている。この四五

日よく雨が降る。アパートの部屋の窓に凭れて、ぼんやり雨を眺めながら煙草を喫

っている、

「舟木さん」

管理人の親父が廊下で呼ぶ。

「おう、なんだ？」

「居たのかい、電話、女だよ」
京子だな、と思った。この前はあんなに怒って帰っていったが、矢張り会いたくなつたのだろう。そう私はうめぼれた。

「もしもし、舟木さん？」

と、受話器から流れて来た声は、しかし京子の声ではなかった。

「淑子です。――分って？」

「ああ」

私は言った。われながら声が弾む。

「あんたの名前を忘れちゃいねえ」

ひくく淑子は笑った。

「お話したいことがあるの。会ってくださいさ？ ぜひ会ってください」

「会うとも、よろこんで」

「桂木にみつかったら大変なの」

外で会うのはあぶない。だから、今からあなたのアパートに行ってもいいか、と言う。何処から電話しているんだと訊いたら、家の近くの公衆電話からと答えた。家と言うのはつまり、妾宅を言うのだ。淑子は幾つかある桂木の妾宅のひとつに置かれているのだ。彼女が私のアパートに来るのは私は歓迎である。

「歓迎する」と言ってやった。

川崎淑子は五分もたたないうちに、タクシーでやって来て、その端麗な容姿を殺風景な私の部屋に現わした。

「さっきあんたの夢を見ていた」

「まあ」

彼女は笑った。

「気になっていたせいだろう。私のおかげで飛んだ目に遭つたな。かんべんしな」

「あなたを恨んではいませんわ」

彼女は座布団に腰を落した。今日は地味な海老茶地のスーツを着ている。

「眺めのいい処ね」

「なるほど、景色はいい」

煙草をすすめたが彼女は喫わない。

「話というのは？」

私は訊いた。

「――」

淑子は膝に眼を落している。

「踊りながらあのとき、わけがあつて私の名を知っていた、そうあらんたは言つたな」

「ええ」

うなづいた。

「そのわけと言うのは、なんだね？」

「絵描きの白河と言う男を御存知だったでしょ？」

顔を挙げて淑子は言った。

「知っていた。奴は死んだ」

「ええ、亡くなりましたわ。河に落ちて泳げないので溺れ死にました」

声がうるむのに、私は気づいた。

「泣いてるじゃねえか、どうしたんだ？」

「すみません、つい——」

眼頭を指でぬぐうと、

「白河は私の恋人だったのです」

私は眼を細めて凝視する。

顔を覆って彼女はむせび泣く。

「恋人だった、と言うんだな」

「ハイ」

「その白河から私の名を訊いていたのか？」

「ハイ」

「話したいことを言いな」

「……………」

「泣いてないで言え」

強い声を私はだしていた。すると、川崎淑子は畳へ身を投げて高

くむせび上げながらかすれた声音で、

「おしえてください……しらかわは、ころされたのでしょうか——ただれが……」

誰が殺したのか教えてくれ、と言った。

ズ ベ タ

淑子が泣きやむのを待って私は言った。

「知らないことを教えろと言っても」

そりゃ無理だ、と。私も彼の死因にはやや不審がある。しかし、殺されたという証拠はなにもないじゃねえか、と言った。

「桂木組が麻薬ルートを持っていることを、白河は知っていましたわ」

「だから、桂木組の手にひっかかって殺されたとあんたは言うのかね？」

どこに証拠がある、と私は言う。過失死として白河は警察に判断されているのだ。他殺の根拠はどこにもなかった。

「バカな人だ。殺されたと思ひ込んで、その秘密を探るために桂木に身を売ったのか。ところが証拠がつかめない。それで私にすがりついて来た。もし私が知っていて口を割ったら、立派な証人になる——そう思ったんだな。肌も許す気で来たろう」

「——」

また泣きだしそうな淑子の表情だった。

「かりにもし、オヤジの指金で白河が殺されていて、そのことを私が知っていても、私は絶対誰にも口は割らないぜ」

「殺された人が友達であってもですか？ あなたのことをいつも心

「配し、忠告していた人間であってもですか？」

「——」
白河の面影が胸に浮んで、私は答につまった。つまりせた淑子がしゃくって、

「とにかく、あんたはバカだ。桂木みてえな奴に駄を売ってよ白河が泣いとるぜ」

「仇をうつのです」

「よせ！」私は呟鳴った。

「恋人が死んだのなら、しおらしく泣いている。そんな女が俺は好きだ。貞操を捨てて、証拠もねえことに懸命になって仇をうとうなんて、あんまり阿呆なことじゃないか。まるで気持ちえ沙汰だ。俺はそんな女はきれえだぜ」

「——」

白い頬をつーと涙が滑って、そうして淑子は慈りと悲しみを帯びた恨めし気な瞳をじいっとそそぐ。

「あんたの素姓は？」

声を柔げて私は訊いた。

「ダンサーをしていました」

何処の店に居たかは言わない様子である。

「白河とは結婚する筈だった？　つまり、正式な結婚を？」

「もちろんです」

ダンサー稼業の女とは到底見えない清楚な気品がある。白河が晩婚の妻に迎えようとしたのもむりはない。私は思った。

「これからどうするんだ？」

そう言う私の胸は、同情的なもので満たされて来ていた。



淑子は打たれたように、新たに落涙しつつ、
「もうどうなってもかまわない」

「桂木に飼われるのか？」

「今さら、思い直して、あの男の許から逃げようとしたって逃げられないわ。それこそ死ぬような折檻にあって」

ミイラ取りがミイラになる、私はその譬えを頭にうかべた。

「一度だけ。キスさせないか。」

「――」

「すきだ」

私は唇を合わせた。

脱げ、と私がささやき、そうして抵抗することなく淑子がスーツを除き、薄いスリップ姿になったとき、私は不意にこの女が憎くなった。その不可解な女心が憎くなったのだ。

「ズベタめ」

と髪をひっ掴んで膝の上にうつ伏せにひきずり倒した。

「叩いてやる、いいか」

否々しつ淑子は、私の膝の上に腹這いになったまま逃げようとする。しない。

素手で、ビシッと一つ叩いた。

「アア」

蛇のように身をよじる。

「そろもう一つ！」

柔美な肌が赤く掌型をにじませる。ビシッビシッとつるべ撲ちに叩いてやると、淑子は隣りを憚って悲鳴を咽で押し殺し、そのかわり畳をすさまじく掻きむしった。

愛

慕

とっぷり昏れても、私はまだ淑子を帰さなかった。帰してくれ、と彼女は頼んだ。早く帰らないと桂木が邪推してひどい折檻を加えるから。

「ね、お願い、この手の縄をほどいて――」

麻のロープで私は淑子の両手を後手にさせて一つに括り上げている。

「これだけ苛めたら、もういいでしょう」

と、眼をうるませて哀願する。

畳の上にくるがった川崎淑子のその哀れな肢態を、私は薄ら笑って煙草をふかしながら眺めた。この素晴らしい美女が、不可解な女心の襲にもう一つ妖しいものを棲ませていることを私は知った。

私の薄笑いはそのためのものだ。

煙草が短くなって、私はそれを灰皿にねじりつぶすと、やっと白い美しい芋虫のそばへ寄って行った。

「さ、縄を解いてやろう」

「うれしい」

おまけだ、と私はまたもひっ張たいてやった。淑子の肌はそれでまた赤くなった。

「白河のことはあきらめたがいい」

アパートの玄関まで彼女を送り出して行って、私はそう言った。「わかりました」

神妙に淑子は答えた。

白河のことはあきらめたが、しかしもう桂木の許から逃げることは叶うまい。暗い夜道を去って行く淑子の後姿を見送りながら、これからどうするつもりだろうと私は思っていた。

白河の死因を探ることは無駄だからやめると、私はそんな風に淑子に言ったが、そのじつ私は日比野をつかまえて白河に関したことを訊きただしていた。

日比野という男は、三十四五の、桂木組の中で一番実力を持った兄貴分である。つまり最高幹部というわけだ。

彼と私はウマが合う。

そこで、私は日比野が東京から帰って来ると、彼のヤサ（住居）へ出かけて行ってまず小遣金をねだった。くすりのパイで奴はずいぶんヨロクをしているので、気前よく三萬くれた。

「すまねえ」

私は頭を下げた。

「毎度のことだ」

と、日比野は笑う。ビールを出して私に飲めとすすめた。彼は相当いける口だが、私は大して飲めない。

さて、ビールの酔いが少しまわりだした頃私は白河のことを切りだしたのだが、日比野はこう答えた。

「奴はたしかに俺たちの麻薬売のことを感づいていやがった。このまま放って置いたらいつ警察にタレコムか知れねえので、殺そうということになったんだ」

「じゃ——」

「いやいや、まあ先を聴きなよ。オヤジも殺してしまえと言うし、俺たち幹部もなんせめてめえの身がヤバくなることだしよ、オヤジの言葉にみんな賛成して、殺れ、と言うことだ。誰が殺し役になるかは、三下たちを集めて奴等にくじ引きさせてきめた」

「誰にあたったんだ？」

「それはどうでもいい。と言うのが、そのくじに当たった奴が、ことを起す前によ、お誂えなことに白河の奴が」

ハハハと日比野は笑って、

「知っての通り、あんなことになってしまいやがった」

「組の手で殺したんじゃないんだな」

「ない」

「そうか」

私は何となし胸がやすまった。

「白河はおまえの知合だったな。気になっていたのかい」

「まあそうだ」

「安心しな、殺したんじゃない」

日比野の言うことなら私は信じる。淑子は矢張り思いすごしをしていたのだ。日比野の言葉を私は早く淑子に伝えたかった。

だが、その淑子は、あの日以後さっぱり音沙汰がない。

桂木のオヤジの眼が怖くて、彼女が私のアパートに来ることはおろか、うっかり電話もかけられない状態にあるのだろう、と私は当然そんな風に想像してジリジリした。

ジリジリするのは、これは川崎淑子を募っている証拠か——

まさかこっちからオヤジの妾宅へ出向いて行って、淑子に会うことはできない。それこそまたオヤジの病的な嫉妬に火をつけるようなことがあったら、今度は前後の見境を忘れて奴をノスかも知れぬだろう。

我を忘れて私はきつと手を下すだろう。

薔 薇 虫

会いたかったわ。毎月貴男のことばかり考えていたのよ。

〔最新版分譲品案内〕

相 撲 禪

略号

大手札 五枚一組 五〇〇円

モデル 東浦ひかる

雲斎の相撲禪をはちきれそうなる若々しい裸身に締め込んで正面、背面、側面、或は両股を開いた踞の姿勢など、相撲禪を締めた娘の裸姿をあますところなく皆さまの眼前に晒した女体禪フォト。従来の六尺禪から一歩前進した狙いの趣向。

吊 り 打 ち

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

両手を鴨居に吊られた全裸の関谷富佐子夫人。これこそ夫人の待ち望んでいたムチ打ちのポーズである。眼前に無防備でさらされた豊満な臀部に激しく炸裂する革ムチ。吊り縄をねじするようにして悶え、泣き、哀願する夫人の被虐の表情。全くこれこそサドフォトの圧巻である。

禪 裸 女 血 闘 場 面 写 真

大手札 五枚一組 五〇〇円

略号 (らは)

モデル 絹川文代、大塚啓子
黒フンドシをきりと締めた二人の裸女が、必死になって渡り合い、遂に倒れた一人に対して脇差でもって咽喉元に止めをさす凛々しい姿を血紅を使用して写真化した夢想的な美しさと惨酷美溢れるフォト。勝誇った美女と血を流して倒れる可憐な乙女との血斗交響楽。

介 添 切 腹

略号

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 甘木春子 外

切腹マニアの読者の提供による野外切腹フォトの第二弾、柔肌を切る方も切られる方も痺れるような恍惚境の中でプリプリと切りさばかれてゆく切腹プレイの一シーン四カット。

股 間 縛 法 悦 境 裸 身

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 絹川 文代

素晴らしい美しさと均整のとれた肢体に厳しく黒縄が喰い込む全裸の股間縛。足の指先に至るまで溢れる色気を漂わせたとおきの秘蔵品。入手して絶対悔いのない完全無比な緊縛フォトをどうぞ。

私の部屋に姿を現わしたとき、淑子はいきなりそう言って私の膝にしなだれた。童女が甘えるような仕ぐさだった。

「会いたかった」

私も正直に答えた。

「あんたのことをずっと想っていた」

「信じていい？」

美しい眼で見上げる。

「信じてくれ」

本当に好きなんだ、と私は言った。私は淑子の黒髪を愛撫した。愛撫しつつ、日比野が言ったことを告げた。

彼女は何度も肯いたあと、かすかに嗚咽を洩らした。

「私はなんて馬鹿なことをしたのでしょうか」

「明日に希望を持とう」

柄にもない気障なせりふを私は吐いた。

「やくざの足が洗いたくなかった」

「ほんとうにそんな気になったの」

美しい眼にまだ涙が光っている。

「東京に行ってきたばかり堅気になって働いてみるが、一緒に来てくれるか」

ひとと、淑子はしがみついて来た。

「連れて行って！」

「連れて行く」

だが、問題は桂木だ。度胸をきめてかからねばならないことだった。淑子と手を取り合ってズラかることはしたくない。また、しょう

と、思つても不可能である。親分の顔をつぶし、バシタ（情婦）をさ
らって逃げた男を身内の者が捨ててはおかないからだ。追われる身
にはなりたくない。

頭を抱えてつい考え込んだ私を、悩みを同じうして、淑子はいた
わるようにそっと寄りそつてきた。

「今は何も考えないで」

そう熱い息で言い、

「この前のように叩いたり縛ったりしてはいやよ」

少しくマゾだと私は感じていたが、はっきりいやだという。

片手を伸ばして私はカーテンを引いた。外はまだ明るかった。白
い豊かな胸部から私は露わにさせていった。

「近い中にオヤジと話をつける。なるべく近い中にだ」

帰るべく、身じまいをする淑子に、私はそう言った。「心配する
な」俺はどんなことがあつても堅気になつて暮すと言つた。

玄間まで淑子を送つて行つた。

「あつ」

と、彼女が叫んで指差した向うに、私もすぐに桂木の短軀の姿を
みとめていた。

私と桂木はアパートの前庭でたがいに近寄つた。私はのっけに言
つた。

「オヤジさん、淑子をくれ」

淑子が走り寄つて来て、泣き声で、

「あたしたちを許して」

「出方によつては覚悟がある」

私は言つた。

「あんたをはじめ桂木一家を相手に暴れてやるぜ」

「大きく出たな」

はじめてオヤジは口をひらいた。

「俺がなぜ比処へ来たか分るか？ 淑子」

いいえ、と淑子は言う。

「おまえを乗せて来たタクシーの運転手が俺に知らせて来たんだ。

運ちゃんまでも、この桂木の息がかかつとる。誰にも分らぬと思

つて、この阿魔」

ビシンと淑子の頬が鳴つた。

かつと私は逆上した。瞬間、いつ抜いたか自分でも覚えぬ早さで
私の手には拳銃がにぎられていた。彼は幾分青ざめて言つた。

「負けたよ。この女はくれてやる。元々タダで拾つたような女だ」

だが、もう一度淑子を薔薇の棘の上で転ばせてやる。その折檻を
すれば俺の面子（メンツ）も立つ、どうだ舟木、と言う。淑子が言

つた。

「それで許してくれるのなら——」

私は薔薇の枝々の上を転がるわ、舟木さんに人殺しをさせたくな
い。拳銃をしまつて。と彼女は私の腕を揺さぶつた。

「あたしが一度だけ痛い思いをすれば済むことじゃないの。その
ピストルを撃つたら、なにもかもおしまいよ」

薔薇の棘に全身を責められる折檻を淑子はいつ受けたのだらう。

畳一杯に敷きつめられた薔薇の枝々の上を転輾して痛みに喘ぐ彼女

の白い肢体を、私は想像した。

薔薇虫のように転げまわされて虐められるのか——

拳銃を構えたまま私は立ちつくしていた。

了

最新代理部分讓品案内

女体緊縛フオトの部

一、//大の字//逆さ吊り

大判印画紙 三枚一組 四〇〇円
略号(つり) モデル 梨花悠紀子

二、立木//宙縛り//

大判印画紙 三枚一組 四〇〇円
略号(くた) モデル 梨花悠紀子

三、凄惨//乳房責//

大判印画紙 三枚一組 二五〇円
略号(とい) モデル 梨花悠紀子

四、//妊婦の緊縛//

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(にむ) モデル 某女

五、//全裸の仕置//

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(すお) モデル 東浦ひかる

女体切腹フオトの部

一、血紅女体自害

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(ひち) モデル 大塚啓子

二、女体切腹マシタラ

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(あま) モデル 甘木春子外

三、悲愴女体自決

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(ひい) モデル 大塚啓子

四、哀艶女体割腹

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(かつ) モデル 梨花悠紀子

五、凄惨血紅女体立腹

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(ひさ) モデル 大塚啓子

六、苦悶切腹表情

大判印画紙 五枚一組 五〇〇円
略号(せく) モデル 梨花悠紀子

フェチ・フオトの部

一、バンド着用フオト

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(めい) モデル 梨花悠紀子

二、バンド着用の縛り(後手)

大判印画紙 四枚一組 三〇〇円
略号(めろ) モデル 梨花悠紀子

三、バンド着用の縛り(前手)

大判印画紙 四枚一組 三〇〇円
略号(めは) モデル 梨花悠紀子

四、女性の六尺褌

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(ろく) モデル 大塚啓子

五、ゴム・マニヤ

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(こむ) モデル 梨花悠紀子

六、メンス・バンド

大判印画紙 四枚一組 四〇〇円
略号(めす) モデル 梨花悠紀子

七、ゴムカバ―着縛り

大判 三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(かは)

八、脱がされたバンド

大判 二枚一組 二五〇円
梨花悠紀子 略号(めに)

九、アテゴムの猿ぐつわ

大判 二枚一組 二五〇円
梨花悠紀子 略号(めほ)

特殊趣向フオトの部

一、絞首処刑

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(こう) モデル 絹川文代

二、変態強盗侵入

大判印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円
略号(こと) モデル 絹川文代

三、和洋争闘場面

大判印画紙 六枚一組 五〇〇円
略号(らり) モデル 田中芳代 外

四、裸女争闘場面

大判印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円
略号(らし) モデル 田中芳代 外

——女体切腹秘話——

遙かなる山河

(後篇)

飯

森

潔

雪子の日記

八月九日

お兄さま

今日は特攻の訓練がありました。燃料が不足なので、今日一日だけだそうです。初めてにしてはよくできたと隊長にほめていただけました。もう何時命令が出て出動できるわけです。

一日も早くお兄さまのお側へ行きたいと願っています。

お兄さまを呑み込んだ、あの青い淡い海の色が忘れられません。

来るな、とおっしゃっても、雪子は参ります。

お兄さま、おやすみなさい。

八月十日

お兄さま

今日は命令が出ませんでした。空襲もなく静かな日でした。私たちは何もする事がなく、手持ちぶさたな落着かない一日を過ごしました。

明日は命令が出るでしょうか。こんなに待ちこがれているのですから、出ない筈はないと思うのですが、何だか明日も、このままになっってしまうようで不安です。

八月十一日

お兄さま

白百合が、結成されてから、もう四日目です。今日もまた命令が出ませんでした。

雪子はとても不安なのです。このまま何時まで待たされるのだらうと思うと、居ても立ってもいられない気持です。

それに近頃めっきり空襲が無いのです。基地はとても静かで、まるで戦争から忘れ去られてしまったかのようです。

八月十二日

お兄さま

今日で五日目です。

雪子は何時になったら、お側へ行けるのかしら。

今日も空襲はありませんでした。

八月十三日

お兄さま

不吉なうわさが流れています。

日本が敗けるのではないかというのです。

根も葉もない事だとよいのですが、何でも外国放送がそれを伝えているというのです。

雪子はいやです！

このまま戦争が敗けて終るなんていやです！あんなに多くの方々が、お国のために捧げてこられた尊い生命はどうなるのでしょうか。

降伏するなんて！雪子は死んだ方がましです。

そんな日が来ない中に、雪子は早くお側へ行きたい！

どうぞ明日は必ず命令が出ますように……

八月十四日

お兄さま

今日、司令が、流言を慎むように訓示なさったので、うわさは止みましたが、それだけにかえって無気味な静けさが基地を包んでいます。

私たちが出動できる可能性は、もう無くな

ってしまったように思われてなりません。

もしも、このまま敗戦になったら、三人して潔く自決しようと決めました。勿論三人とも、女ながらも軍人らしく腹を切る覚悟です。

八月十五日

お兄さま！

うわさは事実になりました。今日正午に陛下の御放送がありました。日本は戦いに敗れたのです。

今までに、お国に命を捧げて散っていかれた数知れない人々の事を思うと、雪子はいくら泣いても泣き足りませんでした。

司令は、静かに次の命令を待つようと、切々と訓示されましたが、若い士官の中には徹底抗戦を叫ぶ人もおられるようです。でもこの上は陛下の御心に従うほかは無いと、涙を吞まれた人々の方が多く、基地は今、死んだ様に異様にひっそりしています。

御放送があつてから間もなく何人かの方が自決なさいました。お兄さまの親友だった林中尉は、軍刀をお使いになつて見事に切腹なさいました。その時、私たちは近くに居たので見せて頂いたのですが、腹十文字に掻き切つての御立派な御最期でした。

雪子も明日はお側へ行けます。

明日の朝、八幡神社の境内で切腹する事に決めました。勿論三人一緒です。八重子さんは短刀がないので雪子の懐剣を貸して、雪子は軍刀で腹を切ります。

戦さに敗けて死ぬのは残念ですが、仕方がありません。今は、一刻も早くお側へ行きたい気持ちでいっぱいです。

雪子は、帝国海軍の軍人として恥しくないように、きっと立派に切腹するつもりです。それに、何よりも、お兄さまへの追腹ですもの、お兄さまに賞めて頂けるように立派に切るつもりです。

どんなに苦しくても、きっと腹十文字に掻き切つて、女ながらも武人の腹の切り様を見たいたくつもりです。

お兄さま、明日はいよいよお側へ行けますのね。もう腹切りの準備は全部済みました。雪子が、仕損じないで立派に切腹できます様に見守ってくださいませ。

白百合の散る日

朝、雪子は早く目覚めた。

時計を見ると、まだ三時を少し廻っただけで、約束の五時にはまだ間があった。



雪子は、手洗いに立ち、洗面所に行ってそつと顔を洗い歯を磨く。何をするのにも、これが最後ののだという思いがつきまとう。顔を洗い歯を磨くというような日常的な行為が無性にいとしく思えるのだった。

しかし気持は自分でも不思議な程平静であった。——これなら立派にお腹が切れそうだわ。きっと立派に切腹できそうな自信のようなものがあつた。

雪子は、手鏡に向つて髪をくしけずる。鏡の中の顔が微笑んでいる。「立派に切るのよ。」と自分に言い聞かせると、不意に涙があふれそうになつた。

部屋に帰つた雪子は、着ている物をみな脱ぎ、パンティだけになると、その素肌の上にごわごわした飛行服を着た。下着を着ると切腹する際に邪魔になりそうだったからである。

雪子はベッドの上に正座すると静かに眼を閉じた、父母の顔、妹の顔、親しかった級友の顔が浮かんでくる。

「お父さま、お母さま、長い間お世話になりました。雪子は間もなくお腹を切ります。お父さまの教えに従つて、軍人として、恥しくない最後を遂げます。雪子はきっと立派に切腹するつもりです。」

お父さまも、お母さまも何時までも幸せにお生きになつてくださいます……。雪子が心の中で別れの挨拶をすませて、静かに眼を開くと、もう八重子も武子も目覚めていた。身の廻りはもう全部整理済みである三人に

とっては、身づくろいだけが今朝の仕事であった。

八重子は武子も下着は着込まずに素肌の上
にじかに飛行服を着けた。

用意が済むと雪子は母の形見の懐剣を黙っ
て八重子に手渡した。

八重子は静かに懐剣の鞘を払った。白々と
した朝の光に、紫色の焼刃が匂うように光っ
た。

「切れそうだわ……。」

八重子は魅入られたようにその刃に見入っ
ていたが、やがて済まなさそうに言った。

「ほんとにお借りしていいのかしら、お母さ
まの形見でしょう。」

「使って頂戴、心配しないでいいのよ。わた
しはこれで大丈夫よ。」

雪子が微笑んで見せると、

「じゃ、お借りするわ。」

と微笑み返した。

やがて三人は、身の廻りの最後の点検をし
て静かに兵舎を出た。

外は殆ど明るくなり切っていたが、兵営は
まだしいんと静まり返っていた。

飛行場の外れの林の中にある小さなお宮、
それが八幡神社である。これは基地ができて

から、武運を祈るために軍が建てたお宮で、
その境内には砂利を敷きつめた百坪余りの小
さな広場があった。

三人は広場の中ほどにお宮に向ってコの字
形に席を作った。それぞれ毛布を四つ折にし
てその上を白布で覆った。正面が雪子、右が
八重子、左が武子の席である。

席ができると、三人は神社に最後の礼拝を
した。

小造りながら、このお宮には遙かな遠い故
国の面影があった。三人はそれぞれの思いを
込めてしばし、そこに立ちつくした。

やがて礼拝がすむと、三人はそれぞれ自分
の席に正座した。飛行帽はかぶらずに黒髪
の上にキリリと白鉢巻を締めた乙女達の姿は、
凛々しくも清々しかった。

しばらくは、誰も身じろぎもしなかった。
静かな風に木の葉だけが、かすかにそよいで
いた。

いよいよ切腹するのだ、自分の腹を自分の
手で切りひらくのだという思いに三人の乙女
は、動悸の高まってくる胸を押えてぐっと唾
を飲み込んだ……。

八重子は目を落して、飛行服の上から、む
ちりと張りつめた自分の下腹部を押えた。

そして大きく息をすると、

「切るわ！」

思いを振り切るように言って顔を上げると
静かに懐剣の鞘を払い、長目に刃先を残して
白布を巻きつけた。

飛行服のバンドを外し、いっばいにチャッ
クを押し下げると、匂うような皓い肌が息づ
いていた。円く張りつめたやや上向きの乳房
の上にバラ色の乳首が、切腹への期待にふる
えてツンと立っている。

八重子は右手に懐剣をとりあげると、パン
ティを腰の辺りまでいっばいに押し下げ、左
手でいとしむように下腹をさすりはじめた。
深くくぼんだ臍の下に、むっちりした下腹
のふくらみが生々しく息づいている……。

今、八重子がこの目の前で腹を裂く……
雪子も武子も思わず生つばを飲み込んだ時、
「切るわ！ 見てね、八重子のせっぽく！」

そうきっぱり言うと、八重子は、大きく息
を吸い込んで、切先をピタリと左下腹に当て
た。二人が思わずハッと息をつめた時、
「ウッ！」

八重子はやや前かがみになって、力一杯、
懐剣を抱え込むように腹に突立てていた。
しかし、弾力を秘めた乙女の腹は、ぐっと

くぼんで深くは入らなかった。

八重子はそのぞき込むようにしてそれを見ると、そのまま力を抜かず、懐剣に両手をかけて、押し込むようにしながらグーッと引いた。三寸程の切先は余す所なく腹の中に喰い入り、血がたらたらと糸を引いて滴った。

痛みに耐えてしっかりと刃を握った両の手がふるえ、肩も胸も腹も喘いでいる。

「ううっ……」

八重子は思わずうめくと、あえぐように大きな息を吐いた。

「八重子さん！」

「しっかり！」

二人が思わず叫ぶと、

「大丈夫……見て！」

八重子は、両手に力を込めてギュッと刃を握り直すと、唇をキューッと引きしめて、体を反らせるようにしながら、深々と突刺した刃をグーッと真一文字に引き回し始めた。柔かい腹皮が刃に引張られてひずみながら抵抗を示したと見えたとすると、ブツツリと小気味よく切れて、そのままズブズブと裂けていった。臍下の最もふくらんだ辺りを、刃は八重子の意志通りに深々と切り裂いてゆく……刃が進むにつれて、白い切口の肉の間から

見るまに血があふれて下腹を染めてゆく。

八重子はうめき一つもらさずに、よどみなく右脇まで一杯に腹を割いた。切口は少しずつ開き始め、パンティにはもうじつとりと真赤な血がにじんでいた。

「うう……っ！」

八重子は、初めてあえぐようにうめくと刃を腹から抜き取った。すると切口がゆるんだように大きく開いて、血に濡れた小腸が生物のようにむくむくとはみ出して来た。

「八重子さん！」

雪子と武子は思わず八重子の両脇から抱えるように取りすがった。

八重子は自分の腹を、のぞき込むようにして見ながら、

「こ、これでいいの……せっぽく」と、あえぎながら言う。

「りっぱよ！ 立派な切腹よ！」

「よ、よかったわ……せっぽくできて……」

……う、うれしい」

八重子は血の気の引いた顔に微笑を浮かべると、懐剣を持ち直して左の乳下に当てた。

「行くわ……お、お先に」

二人がそっと手を離すと、八重子は倒れるように、懐剣の上にうつ伏せに体の重みをか

けた。

「ううっ！」

最後のうめきがもれて、八重子の体の下に新しい血が拡がっていった……

八重子の体がやがて動かなくなった時、雪子も武子も思わず大きな息を吐いた。覚悟していた事ではあったが、初めて見た切腹というもののあまりの凄絶さと妖しい美しさに、二人は暫くは声をのんでいた。……

「切るわ！ わたしも。」

武子も振り切るようにそう言って自分の席にもどると、手早く腹を寛げた。

「しっかりね！」

雪子が励ますと、武子は白く冴えた顔に微笑を浮かべて頷いて見せて眼をつむった。そして艶やかに張りつめた腕を揉むようにさすった。

「八重子さんに負けないように切るわ。見てね！」

武子は、左の下腹に、たたきつけるように短刀を突き立てた。そしてえびの様に体をならせながら一気に刃を引き回しはじめた。

「ううーっ……せ、せっぽく！」

うめきとも気合ともつかない凄絶な声と共に、臍下一寸の辺りをキリキリと切り開いて

いった。刃は非情な鋭利さで武子の腹を大きく割いた。真一文字の創口は大きくえみ割れドクドクと血潮のこぼれる切口から血に濡れた腸がはみ出してきた。

武子は腹から短刀を抜き取ると、自分の腹を抱えるようにして切口を確めた。

「せつぷく……いいのね、これで……」

苦痛に耐えて微かに笑って見せた武子の額には、つぶつぶの汗がじつとりと浮かんでいた。

「り、立派よ、とっても！」

雪子は大きく頷いて見せながら、そう言った。何故か今にも泣き出したいような気持であった。

武子は安心したようにニコツと笑い、血に染んだ切先を咽喉に当てて打伏した……。

八重子も武子も、見事な切腹であった。女の身でありながら、健気にもわれとわが腹を腸のあふれるまでに切り割いて果てた二人。

雪子の脳裡には、苦痛に耐えて腹を割いていった友の最期の姿が、あまりにも鮮やかに焼き付いていた。

力の限り刃を引き回すにつれて、清純な乙女の腹が深々と切り割かれ、大きくえみ割れてゆくその切ない光景、切口から吐き出され

るようにあふれて肌を彩った目もくらむような血潮の赤さ……。

雪子は追いついて立てられるように座り直すと目をつむった。

「いよいよわたしの番だわ……切るのよ、立派に！」

そう自分に言いつて聞かせて、静かに眼を開いた。

何時の間にかやわらかな朝の光が木立ちをもれて射し込んでいた。

雪子は軍刀の鞘を払うと、切先を三寸程残して晒をしっかりと巻きつけた。軍力はずっしりと重かった。

飛行服のバンドを外して腹を寛げた。

円く形のよい二つの乳房、心もち盛り上った皓い腹。見なれている自分の体ではあったが、今は殊更に愛しかった。

雪子は下腹をかかえるようにして、あの時の傷あとを確めた。皓い腹の上に一文字の線がまだ生々しく赤く残っていた。

「今日こそは、本当にこの腹を切るんだわ、本当に切腹するんだわ……」

雪子は右手に軍刀をとり腹におし当てようとして、ふと、手を止めた。

腹十文字に掻切るには、腹を寛げたただけの

姿では不自由に思われたのである。

雪子はしばしためらったが、思い切りよく両肌を脱ぎ、飛行服を腰の辺りまでいっぱい押し下げた。

緊張に汗ばんだ肌に、朝の大气がひやりとした。

つややかな黒髪の上にキリツと締められた白い鉢巻。腰元まで露わにされた白く匂うような雪子の裸身……。

雪子は右手に軍刀を握ると、左手で下腹を揉むように撫でさすりはじめた。

「心を落ちつけて切るのよ……立派に、十文字に……」

そう自分に言いつて聞かせながらも、雪子はドッキ、ドッキと高鳴る心臓の鼓動をはつきりと感じていた。

——これではいけない。もっと落ちつかなければ。

雪子は目を閉じて呼吸を整えた。

その時遠くで起床ラッパの鳴るのを、雪子は聞いた。

——後れてはいけない！

雪子は、キツと眉を上げると、左手で左の脇腹をぐっと引張るように引きつけた。そして、静脈がうす青くすけて見える程張りつめ

たその左の下腹にピタリと切先を当てた。

「中条雪子、お国に殉じて、只今割腹いたします！」

雪子はきっぱりとそう言うのと、大きく息を吸って目をつむった。そして、

「ムッ！」

力一杯軍刀を突き立てた！

ジーンと、鋭利な衝激が身内を貫いて走った。

眼を開けて見ると、切先は二寸余り腹中に没し、突き刺さった刃のまわりに血がじわじわとにじんで来た。

雪子は、燃えるような眼でそれを確かめると

「お兄さま！ 見て、雪子のせつぶく！」

重い軍刀に両手をかけて、両ひざを大きく開き、腹をせり出すようにしながら、渾身の力を込めてギリギリと引き廻しはじめた。

灼けるような激しい痛みが全身に拡がって行ったが、雪子は切り裂かれてゆく自分の腹から眼を離さない。

白くむっちり張りつめた下腹に、鮮やかな切口がじりじりと伸びてゆくにつれて、見る見る血が吹き出し、タラタラと下腹を伝って流れ落ちる。

「お兄さま、み、見て、雪子のお腹が裂けて

ゆく……切腹よ、せつぶく！」

刃を臍下まで引き廻すと、雪子は切なそうにあえぎ、肩で大きく息をした。息をすると開きはじめていた創口から新しい血がゴボゴボとあふれた。

「うううっ……痛いわ、痛い……切腹って、こんなに苦しいの！」

雪子の血の気の引いた唇は苦痛をこらえて固くぎゅっと結ばれ、半ば切り開かれた自分の腹を見つめる眼がキラキラと燃えていた。「切るのよ、もっと切るのよ！」

雪子は、もう一度あえぐように大きく息をすると、

「ウームッ！」

腹をせり出して身をよじりながら、一気に引き廻していった。

ゾリゾリゾリッという鋭利な鋼の感触！

雪子の張りつめた白い下腹は真一文字にブリブリと切り開かれていった……

見よ、雪子の腹は八寸程も長くえみ割れ、切口には乙女の厚い脂肪層が血をはじいて光り、その奥に血にまみれた腸がうごめいて見えた。……

雪子は腸を引きしぼられるような苦痛の中で不思議な陶醉を覚えていた。

「切ったわ、とうとう切ったわ！お兄さま、見て、雪子のせつぶく！」

雪子は腹から軍刀を引き抜くと、両手で、切り割かれた自分の腹を愛しげにかかえて、燃える眼で見つめる。

「これがわたしのお腹……。こんなに血が出て、こんなに深く立派に切れている！……。でも、まだ足りないわ……。十文字に……。切るわ、いくら苦しくても。女ながらも武人の切腹。それに、それに、お兄さまへの追腹だもの！」

腹切った苦痛と出血に目くらみそうになる自分にむち打って、雪子は気丈夫にも再び血に濡れた軍刀をとりあげた。

柄を毛布の上に当て、切先をみぞおちに当たると、グッと前にかぶさるように体重をかけた。

ブスッと刃は三寸程も喰い込む。

雪子は、体を立て、腰を浮かせて、のぞけるように伸び上がりながら、力の限り切り下げた。

「ウームッ」

ブリブリと音を立てて、刃は、臍を真中から切り割いて一文字の傷口にとどいた。一文字の傷口の下へりは、刃におされて、グワッ



と二寸近くも、大きく口を開いた。はみ出しはじめていた腸がそこから生物のようむくむくとあふれ出た。「ウウーッ！」

凄絶なうめきが雪子の唇からもれると刃はざっくりと一文字の傷口の下辺を切り割いていっぱい下へ伸びた。……虹のように血がしぶいた。雪子の腹は十文字の傷口がめくれて真紅の大きな花が開いたように見えた……。

「き、切れたわ……十文字に！」

……せ、せつぶく……十文字のせつぶく……」

青白く冴えた雪子の額には玉の様な汗が浮び、血の気のない唇がわなわたとふるえた。

雪子は、下腹に刺した刃をうめきながら引き抜くと、そのままがつくりと前にのめるようにつぶした。

今はただ、激痛に耐えて死を待つばかり。

「くくっ！……ウウームッ……」

うめきながら、あふれ出た腸を股の間にはさみ、ひざを激しくすり合わせてもだえる。

穢れない乙女の赤い血潮に染んだ白布の上で、黒髪が切なげにゆれ、艶めかしく寛げられた乙女の裸身がくねり続けた……

だが、急速な出血が次第に雪子の意識を奪い、苦痛をうすれさせていった。

次第にうすれゆく意識の中で、雪子の脳裡には遠い遙かな平和に満ちた故郷の山河が鮮やかに浮かんでいた。

「——わたしは今死ぬ……短かった二十余年の歳月……でも、これでいいの。これでいいの……お兄さま！ お兄さま……」
青白く冴えかえった雪子の顔に安らぎが浮かび……やがて雪子は動かなくなった。

女ながらも見事に腹掻き切った彼女達の壮烈な最期は兵達の涙をさそった。中でも雪子のその凄絶な十文字腹と微笑をすら浮かべたその安らかな死顔との対照は、何かしら神秘的な感動を呼び起さずにはいなかった。

三人が残した数通の遺書と、嚴重に封をされ典子への宛名が記された雪子の日記とは、やがて祖国へ送り届けられた。

新しい日

一郎は米軍の海軍基地で意識を回復した。

あの日一郎は、三機を撃墜した後、背後から敵に襲われ、遂にそれをも墜したものの、その時自分も右腿に傷をつけたのである。そのすぐ後で雪子の危機を発見し、その敵に体当たりして雪子の機を救ったが、自分の機も片翼を失い難撻み状態になりながら海上に突込んだ衝激で海の中に投げ出された事までは覚えていたのだが、その後の事は全く記憶に無かった。

意識を回復し、自分が捕虜になった事を知った一郎は、ただ死ぬ事だけを考えた。

だが、腹を切るべき刃物もなかったし、首をくくる紐さえも無かった。

彼はこの病院で大切に扱われた。

彼の看護に当たっていたのは、金髪で青い澄んだ眼をした二十才程の看護婦であった。

彼女はよく心を配って親切に看護してくれたが、彼はかたくなに口をつぐんで一言も話そうとはしなかった。彼女もその気持を察しているのか、決して自分からは話しかける事はなかった。

八月十五日の昼過ぎの事であった。

彼女は一郎の顔をじっと見つめて、囁くように、しかし喜びをかくし切れない声で言った。

「戦争が終わりましたの。」

急に眼の前が真暗になって、一郎は思わず顔を覆った。

予期しなかった事ではなかったが、それは耐え難い衝激であった。

「そうか……やはり……負けたのか……」

彼は、自分の中の古いものが音を立ててガタガタと崩れてゆくを感じた。それは耐え難い苦痛であった。彼は毛布を引きかぶると声を殺して泣いた……。

しかし、泣けるだけ泣いてしまうと、今迄に感じた事のない平静さが彼の心に拡がってきたのである。

それが何であるかを、一郎はまだ明瞭に自

覚する事はできなかったけれども、何かしら自分は未知な世界の前に立ちはじめた感じがしはじめていた。

彼女は、自分の言葉がこの異国人に理解されたのを知ると、それ以後しばしば話しかけるようになった。

一郎が何よりも知りたかったのは、敗戦後の日本がどうなるのかという事と、雪子たちが生きていくのか、どうかという事であった。

あの日以後M島からの特攻は無かったようだから、もし自決さえしなければ雪子は生きている筈であった。心配なのは、雪子たちが——もしもの事があつたら潔よく切腹したい——と言っていた事である。あれ程思いつめていたのだから……。と思うと、生きていてほしいと願えば願う程、自決してしまったのではないか、という不安が強くなるばかりであった。

一郎は片言の英語で根掘り葉掘り聞き出そうとした。

彼女もこの日本人と話し合う事に興味をもっているらしく、快よく質問に答えてくれるだけでなく、日本人の生活や習慣、時には思想の問題にまで触れて自分からも質問するようになった。

一郎は、彼女との会話から、日本の変貌してゆく様子をおぼろげながら知る事はできたが、雪子たちの消息はどうしても聞き出す事ができなかった。

そんなある日、話題がサムライの事に触れた時、彼女が質問した。

「日本の人、本当にハラキリするのですか。」
「サムライの時代から見ると少なくなっているが、今でもハラキリはあります。」

「自分で自分のお腹を切るって苦しくないのでしょうか」

「それは苦しいでしょうが、自分の真心を見せるという意味があるのです。それに勇気を示す事にもなるのです。」

「日本の女の人も、ハラキリをするのでしょうか？」

「女の人でもハラキリした人は、たくさんあります。」

彼女は驚きと好奇に円らな瞳を輝かせた。
「まあ！女性のハラキリ！……そのお話を聞かせてください。」

一郎は雪子たちの事を思っ胸をしめつけられるような気持ちになった。しかし、彼はそれに耐えて、彼女たちが、死ぬ時は切腹と決意していた事、自分の部屋で切腹の手習いを

した事などを話して聞かせ、心配だから新聞など調べて見てほしいと頼んだ。

顔を上気させ瞳を輝やかせて聞いていた彼女は、大きく頷くと、調べてくれる事を約束した。

しかしそれも徒勞であった。

「雪子！生きていてくれ！……新しい日が来たのだ。平和な日が来たのだ。君が生きてくれてさえいたら、二人の新しい生活が始まるのだ！……」

一郎は、虚空に向って、一日のうちに何度も何度もそう呼びかけた。

戦争が終ってからほぼ一年経った頃、彼はひっそりと、自分が既に死んだ事になっている祖国へ帰って来た。

焼土と化した東京の街と、浮浪者と化した被災孤児の姿に胸をしめつけられながら、彼は先ず雪子の家を尋ねた。

幸い郊外にあるS町は僅かに焼けずに残っていた。

雪子の父の名を失念していた彼は、雪子の名を頼りにその家をさがしたが、なかなか雪子の家を知っている人には会えなかった。

歩き疲れた彼は、一軒の駄草子屋の店先で

足を止めた。そこで彼は、初めて、雪子が既にこの世の人でなくなっている事を知らされたのだった。

「中条さんと言えば、すぐ向いのお家ですがね。雪子さんは、戦争に負けた日に、なんでも南方のM島とかで死なれたそうですよ。戦争に負けて申訳ないって、男の方のように切腹なさったという話です。……それも、お腹を十文字に切って、ほんとうに立派な最期だったとか……そうそう、その時切腹なさったのは、雪子さんだけではなくて、そう二人の娘さん達と、三人揃って、一緒に切腹なさったとか言う話ですよ。……雪子さんて、とても可愛い人で、小さい時からこの店によく来て、小母さん、小母さんって……わたしによくなついてね。」

と、人の好きそうな小肥りの小母さんは、話しながら涙声になってしまふのだった。

——そうか、死んだのか……死んだのか……彼は、急に眼の前が真暗になって、そこにしゃがみ込んでしまった。

——俺は何という馬鹿だ。なぜ、死んではいけないって、あの時に教えておかなかったのか！……切腹の手習いなどさせて……それでは、まるで、死ぬ事を奨めたようなもので

はないか……。

彼は、自責の思いに打ちのめされた。腹を切ったという雪子の痛みが、彼の腸を煮えたぎらせた。人前をかまわずに涙が後から後からふき出してくるのだった。

雪子の家は、三十坪程の一部二階建の木造であり大きくはなかったが、門があり、板塀がめぐらされていた。

彼は、門の前でしばらくためらったが、思いを決めて中に入り、狭いが手入れのよく届いた庭先を通って玄関に立った。

彼が声をかけることができないで立っていると、人の気配に気づいたのか、四十を過ぎたと思われる品の良い婦人がでてきた。

一見して、それが雪子の母である事が解ったのは、雪子の面影がこの婦人の中にあつたからである。

「雪子さんの、お母さんでいらっしゃいますか。」

「はい。でも雪子は……」

「御焼香させていただきたいのですが」

「はい……まあ、どうぞお上りになって。」

彼は自分の名も名乗らずに、招じ入れられるままに上り込んだ。できるなら、自分の名を言いたくはなかった。しかし、名乗らずに

すませるわけにはいかない事は解り切っていた。彼の顔からは血の気が引いていた。

「申しおくれましたが、僕は中野一郎と申します……」

彼は、雪子との関係については触れずに名前だけを名乗った。

だが、それを聴いた雪子の母は、ちょっと遠いものを追う眼の色になったが、すぐにはつとした表情に変わり、彼の顔をまじまじと見つめた。

「中野様と申されますと……あの、M島の……」

「そうです。……M島で、分隊士でした。」

「まあ……」

婦人の驚きの中には、物問いたげな様子がありありと伺われた。

彼は、今こうして生きている訳を話さねばならなかった。だが、彼がまだ口を開かないうちに、一人の若い女が出て来て、ていねいに挨拶をした。その顔には、ハツとする程雪子の面影があつた。

「典子と申します。雪子の妹です。」

と、母が紹介した。

「中野一郎と申します。」

「中野……一郎さま。……あの、……お姉さ

まの……」

信じられないといったような、驚きをかくしきれない表情になった。

彼は、苦しくて言葉が出なかった。少しの間、誰も口を開かなかった。……今は、誰よりも先ず彼が話さねばならなかったのだ。

彼は、自分が罪人でもあるかのように、罪の告白をでもするかのようにかすれた声で話し出した。自分がいまどうして生きているかという事を――。

母と娘は、これを語る男の顔に刻まれた苦悩をありありと読み取った。

「わかりましたわ。それでお姉さまは……きつと貴方がお亡くなりになったと思われたのね。」

母も黙って頷いた。

「それでは、どうぞ……お姉さまも、きつと喜びますわ。」

彼は、典子に仏間へ導かれた。

そこには小さな黒塗りの仏壇があつて、その中に二つのまだ新しい位牌が並べられていた。一つは雪子の父のものであり、他の一つが雪子のものであることは直ぐに解った。雪子の位牌の前には、飛行服を着た雪子の小さな写真があつた。

彼が線香を立てると、典子もすぐ続いて線香を立て、彼の横に、少し離れて座った。

「お姉さま。中野のお兄さまが来てくださいました。」

と、典子は小さな声で囁くように言った。

この典子の言葉を聞いた時、彼は、雪子が彼を常に何と呼んでいたかを知った。

彼は、思わず、両手で顔を覆った。こらえようとすればする程、涙は両掌を濡らしてあふれた。

——雪子！……なぜ死んだ、なぜ、ひとりで死んだんだ！

彼は、捕虜になってからのこの一年間、雪子ゆえにこそ耐え、生き続けて来た事の総てが、今は無になったのだという事に耐えられなかった。そこに典子がいる事も忘れ、声をこらして泣いた。

どの位の時間が過ぎたのか、気がついて見ると、典子の姿は見られなかった。彼には、席を外してくれた典子の気持が温かいものにも思われた。

その時静かな足音がして、障子が少し開くと、伏目がちに典子が両手をついていた。

「お茶が出ております。」

彼は、涙を拭うと、典子の後から客間へ通

った。

典子はそこで、三冊の大学ノートを出して見せた。雪子の日記であった。

それは懐かしい字であった。生きていた雪子が、一字、一字その手で書いた字であった。

彼は『その三』と表書きされた一冊をとると、むさぼるように読んだ。

そして彼は知った。雪子が彼を真実愛していた事を。更に、雪子が切腹を決意したのは、彼が死んだと思ったからであったという事を。

「お兄さまへの追腹」と、明らかに書かれているのを見た時に、彼の心は決まった。

——死のう。雪子と同じく切腹して、待ちこがれている雪子の許へ行くのだ。

そう心が決まると、彼の心は明るくさえた。さえた。

日記については、彼はひと言も言わなかったし、典子もそれを聞こうとはしなかった。しかし典子は、この「お兄さま」の顔色の動きを読もうとしていた。

「お墓へも、お願いできないでしょうか。」

彼は、雪子の墓前で腹を切りたかった。割腹は今夜から明日の未明にかけて決行する事に決めた。自分が死んだ事になっているのは

不幸中の幸いだった。自分が死んだからといって改めて悲しむ者はいまい。

典子の案内で墓地へ行った。途中二人は殆ど話をしなかった。

墓地には、先祖代々の墓と並んで、土盛りの上に白木の墓標が立っており、その前には雪子の家の庭で見かけた新しい花が生けてあった。

「雪子、待っていてくれ。僕もすぐ行く。」

彼は、心の中でそう言っ手を手を合わせた。

ふたりが雪子の家に帰りついた時は、もう暗くなりかけていた。彼が辞して帰ろうとする

と、

「今日は遅いから、お泊りになって！」

典子が、なぜか、すがるような眼でそう言った。

彼には、その典子の顔がまぶしかった。余りにも雪子に似ていて、眼の前に雪子を見て

いるような錯覚さえ起きそうであった。しかし、彼の心が動かないのを見て、母が名残り惜しように、

「今度また東京へおでかけの折は、ぜひお寄りになって……お待ちしておりますわ。何もおもてなしできませんけれど。」

そう言ってくれたので、彼はそれをきっか



けに、何か、微かに後髪を引かれるような思
いを抱きながら、この家を辞した。
門の所まで送ってくれた典子が、別れ際に
「お体を、お大事に……。」
と、不安そうに言った。

彼は、金物屋でなるべく切れそうな細身の

刺身庖丁を買った。

できれば、軍刀か短刀で腹を切りたかった
が、今の彼には、それはぜいたくであった。
満月に近い月が出ていて外は明るかったか
ら、道をまちがえる心配はなかった。彼は、
一度雪子の家の前まで行き、そこから覚えた
道筋を墓地へ急いだ。

一刻も早く雪子の許へ行きたか
った。一年間も待たせておいた事
が、取り返えしのつかない事のよ
うにさえ思われた。

墓地はしいんと静まり返って
いた。雪子の白い墓標が青白い月
の光の中に浮かび上がっていた。
彼はその前に座った。

「雪子。切腹、辛かったろうな……
長い間君ひとり待たせてすまな
かった。待っていてくれ、今すぐ
に、僕も腹を切る……」

彼は、語りかけるように言う
と腹を寛げた。

自分が腹を切って果てる、とい
う事に何のためらいも無かった。

——十文字に、思いのままに掻
切るのだ。そう思いながら、左手

で静かに下腹をさすった。

その時である。

「まって！」

女の声がした、と思った次の瞬間に、女は
彼の膝の上に身を投げだしていた。

典子だった。

「いや！ お兄さまが死ぬなんて、切腹する

なんていやです！」

典子は彼の胸に顔をおしつけて激しく言った。

「切腹なんて、お姉さまだけでたくさん！」

お、お兄さままで切腹なさったら、お姉さまが泣くわ！……」

彼は、自分の肩が温いもので濡れるのがわかった。典子が泣いている――。

彼は返えず言葉がなかった。

「お姉さまは切腹なさったけど、お兄さまに

も死んでくださいなんておっしゃらないわ……

……お姉さまは、お兄さまに生きていてほしいんです。幸せに生きていてほしいの……」

切腹しようという彼の意志は完全に打ちくだかれていた。典子の言う通りに違いなかった。彼は、死のうとした自分がはしくなってきた。そして、何よりも、今、自分に取

りすがって訴える典子が、雪子のように思えてならなかった。

一郎が死ぬのを止めたと思った典子は、わ

れに返ったように立ち上ると、急に頬を染めた。

「わたしのお家で、今夜はゆっくりおやすみになって……」

その日が彼にとって新しい転期になった。

彼は次の日に故郷へ帰ったが、典子の顔が雪子の顔と重なって、日、一日と忘れ難くなっていった。

故郷は、捕虜であった一郎には居心地のよ

〔最新版〕 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙(9×13種)焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B1	全裸エビ責仰向け(関谷)
B2	逆エビ責め全裸像(水本)
B3	乳首ペンチ挟み(竹野)
B4	後手十字縛肩口上(梨花)

B5	足の裏擦り責め(竹野)
B6	おへソいじめ大写真(関谷)
B7	剃いだバタフライ(関谷)
B8	貴方に捧げた裸身(大塚)
B9	乳房責め絶叫苦悶(大塚)
B10	無防備双手吊り(絹川)
B11	豊満臀部エビ縛り(水本)
B12	一条縄わぬ股間縛り(水本)
B13	全裸亀甲股間縛り(関谷)
B14	足踏付け二つ折り(大塚)
B15	尻突出しムチ打ち(関谷)
B16	手錠にもだえる(竹野)

B17	尻突出てエビ責め(水本)
B18	椅子開股鼻責触手(梨花)
B19	息もつがせぬ猿轡(竹野)
B20	投げ出した全裸(関谷)
B21	美しき尻部の露出(絹川)
B22	首絞めの悦虐境(竹野)
B23	後手柱縛り脚線美(竹野)
B24	強制鼻挟水吞ませ(梨花)
B25	苦悶にねじる裸身(関谷)
B26	責めに気を失って(関谷)
B27	さアどうでもして(関谷)
B28	豊麗乳房膨隆縛り(竹野)
B29	投げだされた女体(竹野)
B30	裸身をくびる麻縄(梨花)
B31	強烈縛りに悦ぶ(梨花)
B32	全裸逆エビ片脚拳(東浦)
B33	踏みつけマゾ境地(東浦)

B34	すべてをさらけて(関谷)
B35	ムチ打ち失神寸前(関谷)
B36	クリップ鼻挟み(絹川)
B37	台上のマゾポーズ(大塚)
B38	吊られゆく美体(絹川)
B39	拷問に無惨な美貌(梨花)
B40	マゾ女性の表情美(東浦)
B41	喰い込む股間縄(絹川)
B42	炎責めに悶える(梨花)
B43	犠牲台の人身御供(大塚)
B44	美肌無茶苦茶縛り(絹川)
B45	裸身に立つ蠟燭(大塚)
B46	手枷足枷大写真(四方)
B47	鎖に悶える足首美(柳初)
B48	蛇責めに柔肌栗然(梨花)
B49	鼻の玩弄恍惚境(大塚)
B50	女囚菱縄さらし(絹川)

予想通り、彼は既に死んだ者として扱われ位牌も、墓もできていた。

弟は既に嫁をもらって、家計の柱になっていた。彼のいるべき場所は無かった。

そんな中で、彼が半年程過した或る日、典子から懐かしい手紙が届いた。

「いつおいでになるかと、毎日心待ちにしています。母もわたしもお兄さまのお話をしない日はありません。母が、なにか大事なお話をしたいそうですので、都合をつけておいでいただけないでしょうか。勿論、典子にもお話ししたい事はたくさんありますの……」

そんな意味の事が、三枚の便箋に流れるような字で書いてあった。

彼は心を決めた。

——典子と結婚するのだ。そして典子を幸せにしてやるのだ。

ささやかな内輪の婚礼をすませたのは五月の末近くであった。新婚旅行には、静かな山の中のK温泉を選んだ。

初夜の床に入る前に、典子が、恥かしそうに頬を染めて、長襦袢の前をそっと寛げ、お腰をゆるめ静かに下げて見せてくれた時、彼は、そのむっちりした白い下腹に、鮮やかに

残っている一文字の傷あとを見た。

「どうしたの？」

驚いて聞く彼に、典子は、まぶしそうに彼を見ながら言った。

「お兄さまが結婚をお約束してくださった日に切ったの。」

「……」

「お兄さまが、お姉さまのお墓の前で切腹しようとなさったでしょう。だから、典子、お兄さまの代りに……お腹を切ったの。」

「僕の代りに……」

彼は思わず、典子の手をとった。

「ほんとは、典子、お姉さまと同じくならなかったの……、お姉さまのお腹にも傷あとがあったんでしょ。だから、典子も……」

彼は思わず、しっかりと典子を抱きしめていた。

「痛くはなかったの？　こんなに切って。」

「ううん、少し痛かったけど、でも、なんだか……はずかしいわ。それ言うの……」

彼の腕の中で、典子は甘えたように言い、愛しみを込めた彼の眼を見ると、安心したように眼に涙を浮かべた。

一郎は、その典子を強く抱きしめながら、——この典子を、幸せにしてやらなければ

必ず幸せにしてやらなければ……。

と、何度も、心の中で繰返えした。

——あれから、もう、十三年になる……。

一郎は、典子の手をとって歩きながら、過ぎてきた歳月の長さを振返って見る。

残照が遙かな山々の頂きを紫色に浮き出させ、辺りにはいつの間にか夕もやが漂いはじめていた。

典子がそっと頬を寄せて囁く。

「わたし、今夜は、プレイではなくて、本当に切って見ようと思うの。」

一郎は黙って、典子の上気した顔を見つめる。

「深くは切らないわ、ね、一度だけ、あなたの前で本当にお腹を切って見たいの。」

甘える典子に、一郎はその手をギュッと強く握りしめてやった。

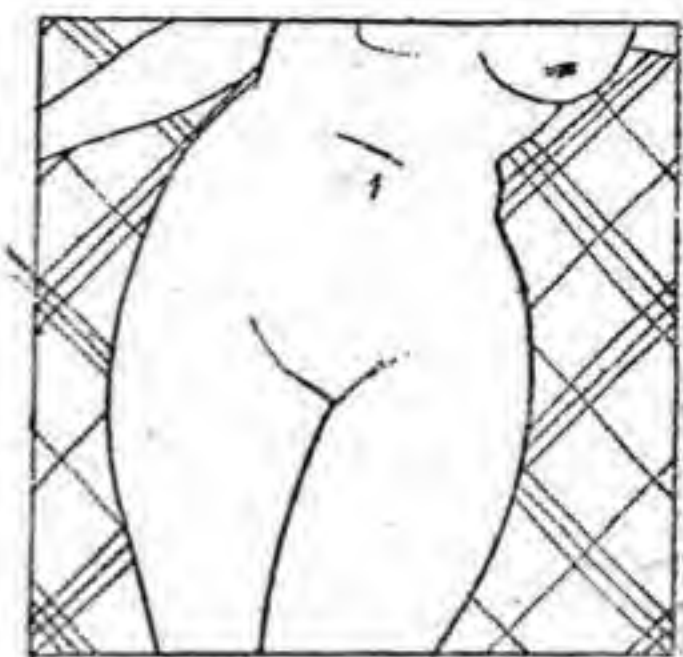
「本当に深く切ってはいけないよ。」

嬉しげに頷く典子の顔を見ながら、一郎は今夜は自分も一緒にプレイしようと思った。

次第に濃くなってくる夕暗の中に、二人の家の門が見えてきた。

(完)

△註△遙かなる山河(前篇)は3月号に掲載してあります。



妊婦写真雑感

分譲品「にふ」について

花田 一郎

児玉昌子さんの妊婦股間縛り（九カ月）を嬉しく拝見しました。妊婦となり臨月となつてまで、縛り撮影をされる御主人の執拗なまでの愛情を全身に受けられる児玉さんの幸福をしみじみと感じさせられました。

写真を拝見していると、妊婦の腹をたち割つてみたいという情欲に駆られた昔日の幾多の暴君の息吹きが現代にまで、生き生きとよみがえってきます。

今、城の本の四国のある有名な城を紹介した一節を見てみましょう。

『嗣子がないため蒲生家は断絶となった。忠和は男の子息を持たず、男児出生を願う焦慮は、ついに男児を孕む女への憎しみと変り、城下の妊婦を見つけては、庭の大石に引きずり、腹を割って胎児を喰べるといふ暴挙が伝

えられる。妊婦をのせた大石は「姐石」と呼ばれ、いまでも山腹二の丸址に残っている。』とあります。

今、児玉さんは無数の暴君の、無数の幻の「姐石」に縛りつけられ、日毎夜毎の執刀の下に呻吟しておられる。

私自身、四国へ行ってその石を撮影することとは出来ませんが、編集部から誌上で読者に依頼されれば、簡単にネガを入手できるでしょう。この分譲品「にふ」に是非とも姐石の写真を加えて凄絶な四枚一組にしたいものです。

さて町の何々小町が妊娠しても、その小町は近所の若者たちの空想の世界で「姐石」に又は大マナイタに縛られて、何十回となく腹をたら割られていることでしょう。

でも、児玉さん程、多くの空想の「姐石」に縛られて、腹をたち割られた女性は史上空前でしょう。過去の暴君にかわって、それをなしとげた、現代の暴君「カメラ」の前に、その全裸身をさらされた児玉さんの幸福をしみじみと思いかえしてみました。

多くの人々の、関心を集める分娩のレコードということになると、やんごとない人の、それということになったりしますが、児玉さんの分娩は、多くの人の痛烈な関心を集めているという点では、やはり、史上空前でしょう。

私が今ペンをとっているころ、その分娩が行われているかもしれません。その若痛の呻吟は、遠い海のおち潮の遠鳴りのように快く耳朶に響いてきます。その叫びが若し録音され、レコードとして市販されたら、私は即座に買い求めるでしょう。

関谷夫人の鞭打ちの叫びと共に、私の最も聞きたい声の一つです。

一方では人格を持った児玉夫人ですが、他方奇ク誌上では、もう病院に買われて檻に投げ込まれた実験動物の一匹として、今後その美しい肢体を余すところなく、晒台に晒して私達の目を楽しませて下さい。

△浣腸と私△

山 莊 の 思 い 出

渡 部 か ね

私が家政婦をしておりました頃のお話でございます。

所属致します家政婦会に電話がございまして、病人の扱いになれている人をとの要求で私がまいることになりました。

丁度、夏になる頃で、軽井沢の別荘に行ってくれとの事。若奥様一人でさびしいから、と申しますのも、御主人は東京でお勤めの関係で、土曜、日曜しか別荘にはゆけない。女中さんは、東京の本宅で御主人の身の廻りのお世話をせねばならないというわけです。何も奥様が一人で別荘住いをされなくてもよさそうなものですが、それはそれ、上流社会の

掟とも申しましょうか、別荘に行かなくては人ではないといったような風潮の頃でした。

亡くなられた御主人の御両親の残された別荘、それは今でもそう呼ばれているのでしようか、森の道と当時呼ばれた奥の方にあって丁度当時の近衛公の別荘の奥、新軽井沢から沓掛、今の中軽井沢へぬける道から三百米程奥まった所でした。

千坪の地所に、五十坪程の二階建の住居、落葉松に囲まれた家は、門からもはつきりとは見えない程でした。軽井沢特有の、浅間山の噴火による軽石をしきつめた庭の奥、やはり落葉松の林には、その頃よく、山鳥に似た

鳥があそびにくるといった、今ではおよそ想像もつかないような毎日でした。

さて、お供をして軽井沢の生活がはじまりました。病人の世話になれている人との指名でしたが、奥様は至極お元気、医者にかかる御様子もなく、別に薬屋へのお使いもなく、病身と見られる所は全然ありません。

或る日、私は思い切ってお尋ねしてみました。

「奥様、どこかおかげんのお悪い所がございますの？」

「あら、どうして、そんなに見える？」

「いいえ、そうじゃございませんけど……」

「あつ、あなたをお願いする時に、条件つけたからね。ホホホ何でもないので。一寸。」

「なんでございますか。私、御病身の方とうかがっておりますので、その積りでまいったのですが、当てがはずれたよう得手もち不沙汰で困りますわ。」

「いいじゃないの、暇で。」

「そりゃ結構でございますが。」

あの、奥様、差し出がましい事ですが、何かお隠しになってらっしゃる事でも？」

「いや、恥づかしいから。」

「おや、お隠しになるんですのまあ、水くさい、女同志じゃございせんか。これでも私、看護婦の資格がございしますよ。お役に立ちますことでしたら、何でもおっしゃって下さいませよ。」

まだ二十三才といわれる若奥様の頬がこの時、ポーッと赤らむのを私は見のがしませんでした。これは何かあるなとは思



つつも、それが何であるかは想像もつきかねるのでした。ややあって、小さな声で、

「あのね、私、便秘するのよ。」

「はあ、お通じが——。」

気ぬけがして、私は、問い返しました。なあーんだつまらないといった訳です。

「だって、恥づかしいわ。」

「婦人には便秘はつきものですわ。御心配には及びせんわ。何でしたら浣腸して差し上げましょうか。」

「まあ、いやだわ、恥づかしい。でも、

いいわ、あなた、してくれる？」

「ええ、なれてますもの。」

私はすぐ薬局に走り、二個のイチジク浣腸を求めてきました。

奥様はボンヤリと二階の十畳の間に横すわりに、落葉松の庭をながめておいででした。昼間の事とて、蒲団を敷くのも大げさだと思い、私は座蒲団を三枚並べて

「さあ、横におなり下さい、女同志ですもの気がねにや及びせんわ、こう見えても私、今までの分浣腸は扱ってきま

したもの。いえね、こんなもの恥づかしいのなんのっていったらはいまりませんわ、お医者様の命令だと思えば、ウーもカーもありやしませんわ。さっと脱がして、スツと入れて、さあ、おしまい、一寸我慢させて、ハイおトイレってわけですもの、ホホホ、何でもありませんわ。」

とかなんとか気を引き立たせながら、手早く二個のイチジク浣腸の先端の両側に穴をあけ、もじもじさせる隙を与えず、スカートに手をかけるのでした。幸い夏の事とて、手間はかかりません。忽ち、一個目の注入はすみしました。さて二個め、

「あら、又するの。」

「そうでございますよ、二十グラムできくわけがありませんもの、さあ、おしまい。五分位我慢して下さいね。」

手もとに脱脂綿ありませんので、私はとりあえず、ポケットのチリ紙で肛門を圧迫してさし上げました。やはり恥づかしいのでしよう。ピンクにそまったお尻の、それは白く美しい事、今思い出してもという訳でございます。やがてグリセリンがきいてきたころです。

「もう、いい？」

「まだだめですわ、もう少し我慢しなけりやお薬がよくしみ渡りませんもの。」

「ああ、お腹がいたくなってきたわ、ねえ、もういいでしょう？」

「もう少し、もう少し我慢なさって。」

こういう時は、今まで何度も経験してきたことなのですが、何ともいえない嗜虐感を味わえるものです。

「あつ、もう駄目。」

そういいながらも、目をうつとりと細めて排便をたえている被虐感によいしれているような奥様をみて、私はハッとしたのでした。これは、一種のマニアだと思ったのです。

以来私は、食事の用意の際、つとめて、野菜を豊富に、繊維素の多い、言いかえるならばお通じのつき易いものをおすすめしたのですが、奥様は、あえて、便意を我慢なさるのでしようか、一向お通じの様子がないのです。

「奥様、その後お通じはいかがで？」

「ええ、相変らずなのよ。どうしましよう。」

「あんまりお浣腸は、なれてしまっていけませんから、今日は、一応お腹もんでみましよう。」

奥様のお顔にありありと、困惑と残念そうな気はいいを感じて、私は、既に用意してある

イチジク浣腸にそっとさわって、微苦笑を禁じえませんでした。

「さ、どうぞ横におなりになって。」

まだ子供をうんだ事のないお腹は、ピチピチと張り切って、その弾力のあるお腹の真中に、グツと凹んどおへそが、素晴らしく印象的でした。

下腹部、たしかに直腸が張っています。時計の針と反対の方向にグルグルともみほぐします。時々、グーとお腹がなるのは、腸の蠕動の為でしょう。その中、一きわ強く押した瞬間、プスッと一つ、これには私があわててしまいました。

「あら、いいものが出ましたわ、もう大丈夫そろそろお通じがつかますわ。」

とやったものですから、一瞬真赤になった奥様も

「そうかしら。」

で事はすみましたが、驚き困惑したのは私の方でした。

「駄目だわ、やっぱり、又してもらおうかしら。」

「何をです。」

わざと白っぽくされると、

「ホラ、あれよ。」

「ああ、浣腸ですか、困りましたわね、習慣になりますよ。」

「だって、駄目なんですもの。」

こうして、今日も浣腸が行われたのです。かくて、二日三日おいては、プレイとも思われる浣腸が行われるのでした。その中、私もいつもありきたりの浣腸ではあきてしまつて、単調な別荘の毎日ですもの、少し刺戟を求めてやれつてというような気持が起つてきました。

「奥様、こうしよっちゅう浣腸しては、いけませんわ、と申しますのも、奥様、よく我慢なさらないから、完全にお腹のお掃除ができていませんのよ、今日は、お腹のすみずみまで、よくお薬がゆきわたるように、私がお許し申し上げるまで我慢して下さいましね。途中で、おトイレに立てないように足を縛ってしまいますから、およろしいですね。」

「まあ、こわいのね。」

といいながらも、私が予想した通り、まんざらでもない様子、これはいけると直感したのでした。

「いいですか、縛りますわよ。おっと、足だけお縛りしても、手が自由ですと、ほどいてしまわれますから、ついでにお手も縛ってお

きましよう、我がまま言われないようにね。ホホホホ。」

まるで赤ちゃんをあやすようにして、両手両足を縛ってしまえばもうこっちのものの、奥様自体が何か刺戟を求めておられるのですから話は簡単です。忽ち、今日は四個のイチジク浣腸が注入されます。といっても、四回も挿入すれば気がつきますから、肛門にワセリンを何時もより沢山ぬつておいて、二個宛一緒に挿入すれば、殆どわかりません。こうして一気に八十グラムを注腸したのですから、忽ち便意が起るのも当りまえです。

「ねえ、今日はとっても早くからきくわ、ああ、どうしましょう。」

「駄目ですよ、今浣腸したばかりじゃございけません。はじめにお約束した通り今日はよく我慢しましょうね。さ、頑張りましょう。」

「ああ、どうして、今日は、こんなに、ああ、もう駄目だわ、ほどいて、ほどいてよ。」

「冗談ばかり、ごまかしても駄目ですわ奥様、よく我慢するために縛つてあるんですもの、私がいると、駄々こねられるから、一寸下に行つてきますわ、どうぞごゆっくり」

「あ、いや、いや、駄目よ、行っちゃ、もう駄目よ、ほんとに、ほどいてー。」

私はわざと知らんふりをして、階下へ、というのは、かねて、買っておいた差込便器をとりについたのです。見えないように、後にかくしながら、戻つてみれば、さすがに、二倍量だけに、もう我慢の限界が近づいているのでしようか、奥様のあのかわいい額にうすらと汗が滲み、縛られたままの両手は固くにぎりしめ、縛られた足を屈伸させながら必死に耐えている様子、

「ひどい、ひどいわ、ほどいてよ、お願い、もう、もう駄目だわ、早く、早く、ああ、洩れそうよ。」

成る程、肛門はとみれば、開きかげんになり、あわてて、締めるのもつかのま、自然に開いてくるのを、又あわてて、自制して締めておられる様子、それがピクピクと痙攣するよう。

「ほどいてよ、いじわる、あ、あ、あ。」

一きわ高く、叫ばれた瞬間、肛門から、浣腸液が滲み出すのと、私がサッと差込便器を当てがうのが同時でした。

「ハイ、便器、どうぞ御安心下さい、よごれはしませんから。よく我慢なさいましたわねさあ、心おきなく、出して下さいまし、今度私は私、おすみになるまで下に下っております

から。」

排便時は、避けるのがエチケットでございます。十分ほとして、足音をしのばせていてみれば、余程、つらく苦しかったのでしょう。額は汗びっしょり、眼にはうっすらと涙さえ光っているではありませんか。そして、浣腸の苦痛にたえた喜びと疲れてしょうか、

排便したままで、スヤスヤと寝息を立てておられるのです。その満足そうな顔。

或いは、顔をみられ、言葉をかわすのが恥づかしくって、敢えて狸寝入りをして居られたのかも知れません。私はそっと、後始末をつけて、又足音をしのばせて、下におりたことでした。

もう夏も終りでした。軽井沢から引き上げる時には私も過分なチップを奥様から戴いたのですが、今にして思えば、浣腸プレイのお相手に、それも自分からはあからさまに言わないで、私にそうするように仕向けたわけです。長い一生には、とんでもない経験をするものでございますね。

△読者体験記△

「夫婦のSM写真について」

新宮 明 夫

私達夫婦は最初私がS、妻がMで始められたのですが、結婚後七年もの歳月が経過しますと、現在では交互にSMの立場を演じあえるようになりました。私達はプレイの中でもどちらかと云いますと処刑プレイを好み、拷問、浣腸等のプレイは処刑の附属として行っています。

この冬の間、過去の数十冊に及ぶ奇クを整理し写真の部分のみを取りはずし、それを三冊に分類して表紙をつけ、アルバムにしました。そして縛り方、肢体等をいろいろ研究してみたのです。私達の予定では、四月になれ

ば、まず処刑写真を撮影してみようと思っておりますので、その構図を簡単にお知らせしてみたいと思います。なにぶん四月と云っても夜間はまだ冷えますので、室内で撮影することになり効果は半減しますが、この点はバックに黒幕を張りめぐらせ被写体を浮き上げようと思っています。

① 絞首刑

①荒むしろが敷かれ女囚がその上に正座させられて死刑の判決を云渡されている。(女囚はパンティ、ブラジャーをつけ、前手錠をかけられ俯向いている。)

②女囚は荒むしろの上に立たされ前手錠のままパンティ、ブラジャーを脱がされ、その代り細紐に三寸四方の小布を縫いつけたものを腰につけられ、かろうじて腰部を覆っている。(死刑判決と共にすべての権利を剥奪されるものとして脱がされた、パンティ、ブラジャーが足下に落ちていた。)

③女囚は杭を背にして両手を背後に縛られ、首縄をかけられ、胸は乳房をはさんで上下を二本の横縄がしめ上げており、両足は左右に一ぱいに拡げられ各々重い鉄丸が取り付けられている。(処刑前の梟場シーン、女囚は恥かしさの為深くうなだれている)

④女囚が刑場の荒むしろの上に後手に縛られて引き据えられ、その傍に黒い仮面をつけて揮一本の死刑執行人が輪になった絞縄を持って立っている。(執行人は「これでお前の細首を締めるのだ」と太く汚れた絞縄を女囚の目の前に差し出している。)

⑤女囚に白い目かくしがされ、背後に廻った執行人が座ったままの女囚の首に絞縄をかけている。(執行人は左手で恐怖におののく女囚の頭髪を持って、ぐいと顔を上げさせ、右手に持った絞縄をしめ上げてゆく)

⑥絞首台の上に立たされた女囚(上から下った麻縄は、ぐっと女囚の細首を締めつけており目かくしをされている女囚の顔は青ざめ死の恐怖にゆがんでいる。)

⑦絶命してぶら下っている女囚(足下の台が一瞬に取払われ、絞縄は首に喰いこみ、断末魔のけいれんを残して女囚の魂は昇天した。両足をやや開いて、ぶら下がった死体は、その儘一定の時間梟される。断末魔のけいれんではずれた目かくしが、ぐったりした肩にぶら下がっているのも痛々しい)

⑧荒むしろの上に横たえられた死体(絞架から下された死体、首にはまだ絞縄がからみついたままである。)

大体このように八枚程度となりましたが、各シーンのカメラの位置を変化させることによって相当数撮影できると思います。

(二) 斬首刑

①荒むしろの上に正座させられた女囚(親殺しの女囚である為判決云渡しの場から全裸にされ高手小手に縛られうなだれている。)

②引廻しをうける女囚(斬首の上梟首という

判決には市中引廻し、梟し者、附加刑が加えられ縄尻をとられ市中を引廻わされる。)

③梟される女囚(両手をひろげて吊るされ、左右の足も一杯にひらかれ、大の字梟しをうけている。)

④浣腸をうける女囚。(斬首後粗相をして刑場を汚さない為、処刑直前に浣腸をうける。両手は左右に開いたまま六尺棒に固定され、荒むしろの上に顔を押しつけられ尻が上がるように膝を立て、黒マスクで渾一本のたくましい死刑執行人が太い浣腸器を肛門に差し込もうとしている。)

⑤排泄中の女囚。(荒むしろの上に馬穴が置かれ両手を左右にひろげたままたの姿勢で馬穴を跨がされ排泄させられている。)

⑥首の座に引き据えられた女囚。(高手小手に縛り直された女囚は、首の座に引き据えられ執行人が半紙を折った目かくしを施している。)

⑦首台に首を差しのべる女囚。(女囚の前にX型に棒を組んだ首台が置かれ、目かくしをされた女囚の頭髪を持った執行人が女囚の首を首台のX型の切込みにはさんでいる。女囚は前かがみとなり尻が幾分持ち上がる。)

⑧執行人が日本刀で女囚の首の切断位置を確かめている。(首台に首をさしのべている

後手の女囚、その左後方に両足を開いてふんばっている執行人が、ぎらぎらする日本刀をかまえて女囚の首筋の辺をねらっている。)

⑨刀は女囚の首にめりこみ打落される瞬間。(女囚の上体は思わずはね上り、目かくしは飛び執行人の刀は女囚の首に半ばめり込み、首が切り離される一瞬。)

⑩梟首(切断された首は梟台の上に置かれ、目は固く閉じ、半ば開かれた口許には一筋の血がこびりついている。)

この場面も前の絞首刑同様種々の方向から撮影すれば、枚数はもっとふえると思います。が、大体、シーンとしてはこれ位のものと思います。

夫婦SM、処刑プレイの同好の方が居られましたら、私の構図に対して御批判御指導下さい。尚この外、火あぶり、はりつけ、のこぎり挽、串刺し等の処刑シーンを考えていますが、何ふんとも自宅にDP設備が無い為簡単に撮影出来ないのが悩みの種です。しかし四月になれば絞首、斬首の二組みは是非撮影し、何らかの方法で現像して差支えない程度に奇クに発表してみたいと思っています。また奇クにも読者による写真発表欄を設けては如何でしょうか。同好の御夫婦がおられましたら是非文通お願い致します。(以上)

「奇譚三十九夜」物語

—第二十五夜—

辻村 隆

関西でも珍らしい、記録破りの三月の大雪のあとは、ここ数日一足飛びに、四月の中旬を思わす陽光に、樹々は忽ち綻ろび初めたようです。

退屈男達は永かった冬のオーバを脱ぎ捨てて、軽い装いで、定刻になると、このクラブの一室に、誰からともなく顔を揃えていたのです。

スバル氏が機を飛ばして、次回には、それぞれの日頃の腕前を存分に振った、三十九夜にふさわしいフォトを持ち寄ろうと提案した結果、めんめんは天狗を発揮して、我こそと、持ち前の、心臓の強さを曝け出して、てんでにガヤガヤと、フォトを机に並べて開陳を始めたのです。

唯、ナイロン氏のみが、沖縄視察で余暇もなく、人々の自慢話を

隅っこで小さくなって聞き入っているのは哀れでした。

が、大半は公開を憚かるムキのフォトがその殆んどを占め、一同の諾否によって、パイプ氏の三葉と、ライカ氏の三葉が、今宵の話と共に発表されることになったのです。

少々得々と、パイプ氏は御自慢のフォトを机に並べ、一同の回覧が終った処で、扱てと改まりました。

第五十八話 論より証拠の物語

「論より証拠——カットされました写真に、会心の作が多かったのですが、公開ともなれば、この三葉のフォトを以て、御推察して戴くより致し方ありません。

皆さんも御存知の通り、私は、亡くなられた、伊藤晴雨さん張り

の乱れ髪の、どちらかと云うと痩せ型の女に興味を抱いているのです。併し、日本髪はすっかり影を潜め、色街の芸妓すら、かつら全盛の時代に、今更、日本髪の乱れにサジストの夢を托すことは、可成り困難になって来ました。

このフオトの人——差し支えあってもいけませんから、仮に夏子と呼びましょう——

この夏子は私の別邸から二、三丁許り離れた、街の出はずれで、ひっそりと女中と老婆との三人暮しでした。有名な流儀の名取りとなつて、教えを乞う娘達や子供に、踊りを教えておりましたが、噂では、夙川辺りの某富豪の、三号とか四号とかと、近所では囁やかれていたようです。

別邸の家内（註、パイプ氏の熱愛措く能わざる二号さんのことです）が、踊りを習いたいと申して、週に一回、金曜日の午後三時間許り、夏子は、私方へ出稽古に来るようになって、或る日、偶然に私は彼女を知ったのです。

日頃、何かと多忙な私にとって、家内が踊りを習っていた時間に出くわしたのは、夏子が出稽古を始めて、四ヶ月以上も経ってからのことでした。

金曜日は、大体私達のメンバーとゴルフをやるのが慣わしでしたが、幸か不幸か、その日は朝から雨で、フト、別邸に疲れを休める気になつて、出掛けたのです。

「別邸へ行けば尚更疲れるじゃないかって？ まぜっかえしちゃいけません——」

私はチェアに凭れて、見るともなく、二人の踊りの立居振舞を眺めていたのですが、踊りの師匠の夏子の、パーマを当てぬ、豊かな

髪を、無雑作に、後ろで丸く束ねていることにフト興味をひかれ、それと共に、しなやかな家内と同年輩ぐらいの痩せぎすの体に関連もなく、伊藤晴雨のモデルを想起したのでした。

同時に私は、前回の集いで、スバル氏が提案した一件を突嗟に思い浮べました。

踊りの間の一休みした機会を捉えて、私は、家内に、師匠を何とか口説き落す様説得しました。家内は最初眉をしかめ、なじるような口振りで、

「私、随分——貴方の仰有る儘になつて、縛られたり責められたりした筈ですのに、私だけでは足りなくて、夏子さんに迄、手をお出しになるの——」

と、やや恨めしげに、その声には押え切れぬ嫉妬すら感じとられたのです。

私は慌てて、

「そうじゃない。唯、一回きりでいいんだ。三十九夜のメンバーには、余りにもお前の顔は知られ過ぎてゐる。私がいかにサジストでも、一同の眼前に、お前の縛られた姿は曝されないじゃないか。スバル氏の提案で、どうしても、何か一つ持参せねば、恰好がつかないんだよ——頼む……」

って訳で、漸やく家内を納得させ、家内は、この厄介な私の意馬心猿を、何とかうまく伝えてくれたようです。

そこは女同志——どううまく話をつけたのか、夏子は案外あっさり承諾してくれました。

誰にも見せないこと——、顔をあまり判っきりうつさないこと——、痩せているから全裸にはならないこと——、とこうした条件づき

で氣の交らぬうちに、私は早速家の者にフィルムを買いに走らせ、支度ができると、家内の外、家中の者三人と皆それぞれに休みを与えて外出させ、広い邸は夏子と私と家内の三人だけになりました。

「夏子さんを縛るのを見たくはないけど、二人切りじゃ駄目よ。私も一緒に居る処でとるのよ。でないと、男はどんなところで、フト妙な気分にならないものでもないから……」

私は苦笑し乍ら、家内の不安を一掃するように易々とうなづいてやりました。事実、私は、この才氣溢れる三十二才の脂の乗り切った、私に奴隸のように仕える家内に惚れ込んでいたのです。



とんだ処でのろ氣話になりました。とは云うものの、家内監視の下、縛りのプレイも又、妙に氣の入らない、照れ臭い、チグハグなものです。

その奇妙な空気を打破るつもりで、私は家内に、常日頃プレイに使用する囚衣を持ってこさせました。鼠色のこの囚衣には、家内の涙と汗と、そして過去六年の責めの数々が秘められているのです。

座敷から書斎に通ずる中の間の勝手部屋は、おあつらえの角柱があります。普段は邪魔になって、改築の際取り払うつもりでしたがこの様な時のあることを考えて、百害あって一利ない——いえ、このとっておきの一利があるのを秘かに願っていたのですが、何分にも使用人もおり、減多に使用できる機会もないと、半ばあきらめていた責めの場です。

私は夏子が、着物を脱いで、この囚衣をつけてくれる間、それとなく眼をそらしてその準備を待っていました。

踊り衣裳をきかえる様な氣持で彼女はそれこそ素直に、サラサラと衣褶れの音をそよめかせて、手早く着換え終ったのです。

彼女にして見れば、一種の演技程度にしか考えていなかったのでしょう。歌舞伎狂言の中將姫や、浦里や、その他諸々に、縛りや責めのシーンは、ふんだんに出てくるからです。

簡単に恰好だけの縛りで、後ろに廻した手で、縄尻を握っていたらいい位の程度にしか思っていなかったようです。

家内も、夏子の余りにもさりげなく、さしたる羞恥も、恐怖も覚えず、着換えて、今や遅しと出を待つ素振りに、いささか呆氣にとられた様です。しかし、家内も亦、夏子の浅い、形式的な縛りの想念を見抜くと、やや、困った顔で、私を流しめに見て、意

味ありげな笑みを浮べたのです。家内の体が、囚衣をきた夜は、そんな生易しいものでないことを、何よりも一番よく知っていたからです。

夏子に恐怖感を与えまいとして、言葉にオブラートをきせ、ソフトなムードで誘い込んだに違いありません。

いきなり、激しい緊縛に移行すると、彼女はきつと驚愕し、卒倒するに違いない。恐らく夏子自身、こうした体験は、初めだったに違いないでしょうから……。

やむなく私はフィルムを捨てる気で、軽く縄を胸にかけ、その立居、横座りを、十数枚パチパチと撮り、こうした雰囲気にも馴染ませ様とはかったのです。眼の肥えた皆さんの前へ提出するには、余りにも初歩の幼稚なポーズですから、敢えて今夜は持参致しませんでした。着衣の儘で、二三条の縄が胸にかかったもの——、そう、まあ東映が大映の、ごくありきたりのスターの縛り図絵を想像して戴ければいいのです。

雰囲気がいっしょに夏子の気持を柔かくほぐし始めた様でした。恐らく彼女にとっても、こうした白々しい芝居っ気たっぷりの、単調なシーンに飽きを感じて来たのでしょうか。

「近頃、流行りの残酷ムードをうつして御覧になったら……」

夏子自身から、こういう言葉が吐き出された時、私は内心しめたと欣喜雀躍しましたが、顔には出さず、さりげなく、

「そうですね、じゃあ、少し責められた風にとりますから、その髪を下して乱して戴きましようか——」

「どうぞ御自由に——」

それで私は力を得て、ピンを数本ぬきとると、彼女の髪は雑作な

く、バラリとうなじに垂れ下りました。私はわざと乱暴に、まるで髪を揉むようにして、ばさばさに乱したのです。

角柱にたなごころをつけて、坐位で両手をしっかりと柱に縛りつけると、剥き出しになった、しなやかな両足を、うんと海老の様に曲げられるだけ屈曲させて、両足をも縛った手に揃えて、角柱に縛りと縛りつけたのでした。さながら、ヨガの行法の、そうです、最近来日した、インドの行者、スリ・シバリンガリ氏が最も得意とするポーズに縛り上げたのでした。夏子の下半身は全く二つに折れ、苦痛の呻きが、声を殺して洩れていました。私は尚も、夏子の腰をしっかりとぐるぐる差きに縛り上げました。

「どう苦しい？——、ヨガの修業のつもりで、少し辛抱して下さいよ……」

「……………」

すっかり髪を乱した彼女は、吐く息も苦しげに、かろうじてうなづきました。傍らの家内の頬が充血し、眼が黒曜石のようにきらきらときらめいて、じっと夏子の、この苦悶の姿を凝視しているのです。家内のこうした状態は、激しい情念に駆り立てられている時なのです。

私のカメラはこの被虐のポーズに、吸われる様に、凡ゆる角度からシャッターをならしていました。（このポーズ掲載）

「おい、その青竹を、夏子さんに……」

家内は、愛用の青い割竹で夏子の腹を力強く圧しました。（このポーズ掲載）

「く、くるしい……、もう、よ、よして……」

夏子の口から、ときれときれの呻きが洩れました。限度ぎりぎり

まで撮って、私はその縄を解いたのです。

私の妖しい心は、倒れ伏す夏子の瘦せぎすの体に眼を落して、次々と悪魔の想念をほうふつとさせて行きました。

私は眼顔で家内に、あるものを持参する様命じました。

△あれをやるの？……▽

家内の眼はそう私に合図を送りました。

私のとっておきの責め——

それは、女の体を素肌にして両手両足を縛ってゴツゴツしたドンゴロスの袋に入れ、梱

包のように、ぐるぐる縛って、唯、顔だけを袋の口から出させ、袋の口を首の囲りで締めて、吊り下げる方法なのです。今一つ変っているのは、この袋に数匹の蟻を一緒に閉じこめておくことです。

全身をドンゴロス袋に閉じ込められ、吊られた女体が、蟻のうごめきによって、激しいむづ痒さを感じ、吊られた儘、苦痛に肩をかめ、芋虫のように、宙空にのたうち、尺取虫のように、蠕動を始めるのです。私は、歎、極まると家内に時々これを用いました。白い肌にポツチりと、点々と赤く、蟻の喰いあとを残して、家内は脂汗を垂らして、うごめき踊り狂うのでした。

以心伝心——家内は私の意を悟って、納屋から、ドンゴロスの袋



をとり出して来ました。

「残酷ムード、最後の華を飾るのに、少し、変った方法を用いますよ。ハハ、家内にはよくこうして責めてやるのがネ……」

呀っと、家内は顔を伏せ、ズバリといった私の言葉に、ハッと夏子は顔を挙げました。

「あのう——奥様も……」

「ええまあね。甘い生活というか男も甲羅を経ると、少々の刺激には慢性になりましたね。その点、家内は随分協力的ですよ」

「じゃあ、今の様に、縛ったり、いろいろと責めたりなさいますの

——」
夏子のはじらい気味に、それでもきっぱりと、稍々激しい眼で私に詰問しました。

「プライバシーの問題ですから、深い事柄には、お答えしかねますが、貴女に行う行為は、すべて家内にやって見た、繰返しに過ぎませんよ。謂わば中身が違っただけでね。まあ、この程度なら、序の口いや幕内程度ですね。ローソク責め、逆吊り、海老責め……それにもっと具体的に説明しますと……」

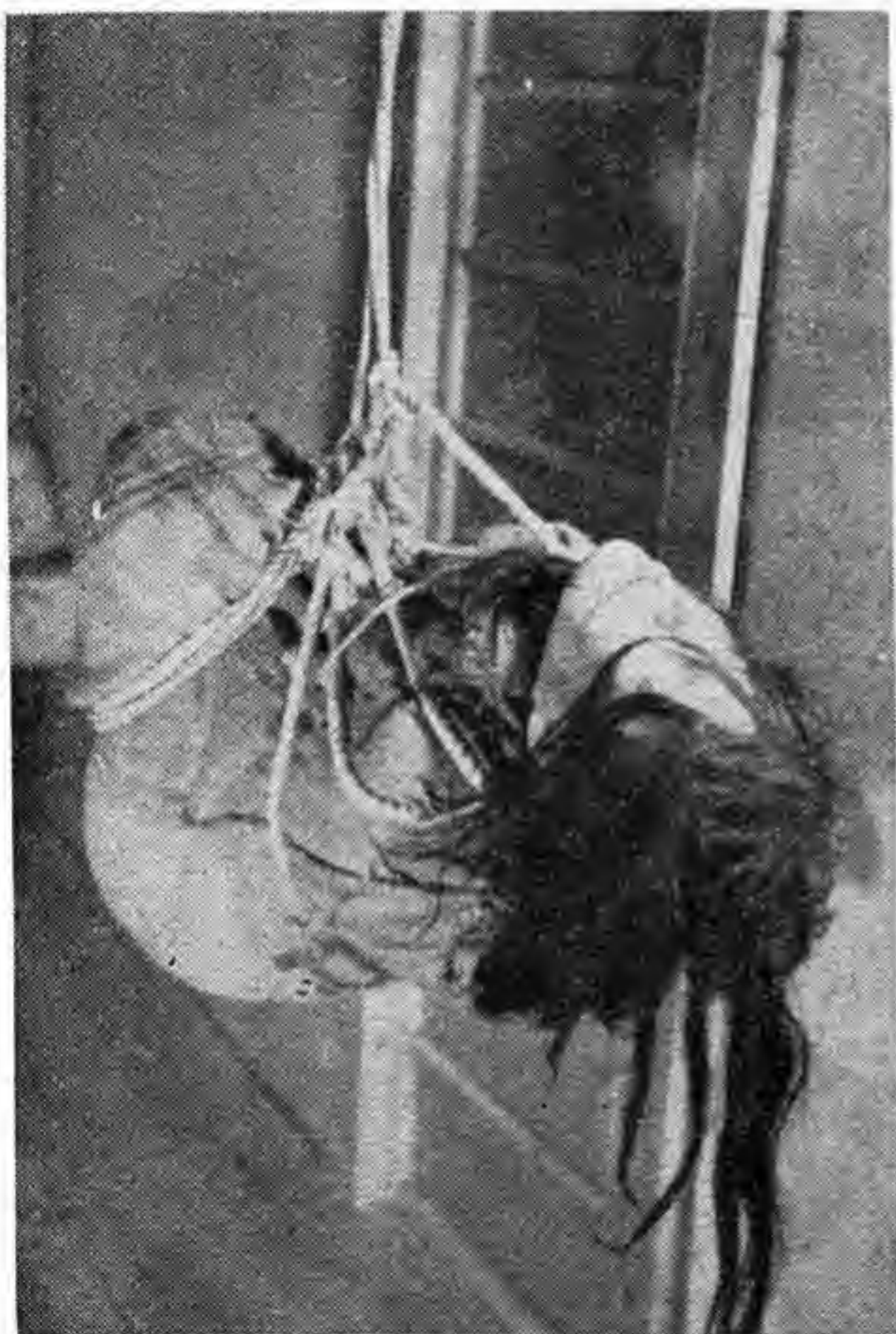
「貴方——、もうおよしになって……」

家内が遂々、たまり兼ねて、私の口を封じようとしてました。きつ

と女同志会った時、恥ずかしく思えたのでしょう。しかし、私は興にのって、もう少し、私の露悪趣味を發揮したかった様です。

「よろしいのよ奥様——私も白伏しますわ。夙川の、唯今世話になっている人は、本当に齒搔ゆいくらいおとなしい、到ってノーマルな人ですけど、私が十年前に、新町（花街）に出ていました頃、落籍されたその人は、世にも怖ろしいサジストでした。とてもこんな生易しいものではなく、それこそ私の体に生傷の絶え間はなく、日毎夜毎地獄の責苦でした。私が裸にならないと御約束したのも、実は、彼の為に傷つけられた、その痕が、私の体の奥深く、一生消えぬ、醜い、つわものどもの夢の跡を残しているからなのです。幸

か不幸か、私を落籍し、本妻さんとも別れ、一年有余してから、食道ガンの為、早逝しました。私は彼の魔手を逃れ蘇生した思いでしたが、今となると、あの激しい嗜虐の愛撫に明け暮れた頃が、フトなつかしくよみがえる時もあるのです。その残り火に、貴方達は、まるで掻き立てるように火をおつけになったのです。先程、囚衣を着た時、私の胸は震え、柱に両手足を縛々と縛られて、海老の様に体を屈曲させられた時、私の呻



きは、或いは歓喜に似た呻きであったかも知れません。だから……だから、私の忘れようとする過去を露出させた貴方達を、私は恨んでいいのか、喜んでいいのか……本当にいけない方——。さあ、よく見て下さい。本当か嘘か、この噛み傷を……この火傷を……」夏子は憑かれたように、囚衣を脱ぎ捨てると、肌着もむしりとりるように脱ぎ、静脈のういた、細身の、その癖、未産婦らしき、ぼつてりした乳房を曝け出し、その背を私達に向けたのでした。醜く引つれた、焼火箸や刻印の烙き跡が、腰の辺りに数ヶ所、痛々しい過去の嗜虐の歴史を残してあったのです。無言で、薄桃色の透けて見えそうな腰巻を横ずわりの儘、そっと

たくしあげると、妖しいひきつれが内腿に、太腿に、黒い花片のように散在していました。

私の胸は妖しくときめき咽喉がカラカラにかわき、激しい疼きが身内を走りまわりました。

フト仮りそのの、フォトモデルが、こうした妖しい夢を咲かせた女性であったとは、夢想もしませんでした。

本能のおもむく儘、私は傍らの家内の存在も忘れ果

て、フラフラと彼女に近づくと、彼女の両手をむんずと握り、細いよくしまる縄で、前手縛りに雁字がらめに縛り上げて、余った縄をしっかりと胸にきつく巻き上げて、しめつけました。別の縄で、しなやかな、柔かい踵の両足を揃えて縛り、膝を折り曲げさせると、両手を縛った真中に縄を通して、引き絞ったのです。さながら、膝を抱く人の恰好で、彼女は不安定な、横倒れになりそうな体を、ぐるぐるさせ乍ら、辛うじて平衡を保っていたのです。

家内と二人掛りで、ドンゴロスの袋の口を一杯にあげ、足許からそろそろ袋をかぶせ、彼女の腰を挙げて、袋の底へ足から腰を定着させました。

首まですっぽり袋を被せ終ると、ドンゴスロの袋の口紐を首で絞りました。乱れた黒髪の端を、唇で噛み、夏子は私達二人の為すが儘に身を任せておりました。併し、この袋の中に忍ばせた数匹の蟻の存在には未だ気付かない様です。それ程に、夏子の心は、その刹那の、充実しつつあるプレイの行為に氣を奪われていたのです。

一息つく間もなく、私達は、この美しい荷物の荷造りにかかりました。梱包が外れぬ程しっかりとあちこちを、環や結び目で固定させ、縄の先を滑車に通して、二人掛りで徐々に吊り下げたのです。

凄惨な梱包は、一寸床から離れ、空間に揺れ乍ら上って行きます。

私は激しい動悸を押え、努めて平静になって、様々の角度からこの、美しい梱包を撮ったのです。(このポーズの一枚掲載)

家内は酔い痴れた様に、この荷物を眺めていましたが、無意識にそれに手をかけると、振子の様にゆさぶり始めました。

右に左に、大きく、髪をおどろに振り乱して、夏子は呻き声を挙

げ乍ら、揺れつづけました。蟻共の活躍が始まった事は云う迄もありません。

「もう、降してあげようじゃないか——」

私は家内に、そう声をかけた時、袋の首は間髪を入れず叫びました。

「この儘にしておいて——、もっと……もっと……、ああ掻ゆい……ムズムズする、ああ……」

× × ×

そのあと約三時間——あとは一瀉千里です。それは発表出来ない部類の数々です。ここでその様をひとつひとつ言及すると、ライカ氏の話が出来なくなりそうです。

夏子が被虐型の女性であっただけに、私と彼女の意気投合を恐れ、家内は踊りを止めました。女は所詮男を独占したいもの——。フト何かの拍子に彼女とのあの日のことを口にしたりとすると、家内は忽ち豹変して、私にプレイを要求するのです。それは私が夏子に関心を持つことを恐れての行為であり、裏返せば嫉妬の変型であつたかも知れません。

本宅の病妻に悪いとしりつつも、いつか私の足はこちらへ向くのです。夏子との一件は、その後絶えてありませんが、いつか機会があれば、今ひとたび、再燃したい白昼夢でもあるのです」

× × ×

パイプ氏の話は終り、引続いてライカ氏が居住居を直しました。ひとしきり、パイプ氏のフットに数本の手が伸び、ガヤガヤと興味と、感情をこめ、改ためて人々の手から手へと廻り終った頃を見計らって、さてと口を切ったのです。



第五十九話 節分は愉しからずや

「パイプ氏の話の続きになりそうですが、当今日本髪は、確かにこの地上から影を潜めた様です。併し、一年中で唯一日、その例外の日があるのです。外ならぬ節分前後です。洋式化した日本髪らしからぬものも多いのですが、中には、豊かな黒髪で結い上げた、昔なつかしい日本髪も、まま見受ける事が出ます。

バー「つくし」の雇われマダム片桐桜子さんも、その数少ない日本髪愛好者の一人だったのです。今更茲で白状するのも面映ゆいですが、実の処、酔いにまかせてマダムを口説き、数度しけ込んだ事があります。

一度結婚に失敗して、生れた子供も、離婚した夫の先方に引取られ、悶々のうちに不遇をかこったことのある彼女でしたが、何に心機一転開眼したのか、雇われマダムになってからは、適当に遊び、適当に儲け、アパートでの一人暮らしを結構たのしんでいる様子でした。

三十才に間のある筈の彼女が、近頃頗る凝脂を貯わえ、美容運動をせねばならぬ程に豊満さを増して、常連の間では、金がたまると、体付まで堂々として、押しも押されぬ貴録を備えたなどと蔭口をしている様でした。

「運動不足なのか、近頃ぜい肉がついて、ぶよぶよし出したのよ。何かやせるお薬でいいの？」

マダムは常連を掴まえると、必ずと云っている程、痩せる方法をきくのです。ホステスの話では、バゼットやそのたぐいの痩せ薬を随分のんでいるとの噂なんです。

やがて十七貫になんなんとするマダムと、一夜しけ込んだ、遠出の白浜で、私はフト、冗談めいた口調で、こう云ってやりました。

「ぜい肉をとるのに汗をどんどん出す方法があるそうだよ——。もう一つ、縛られて、その体に鞭を当ててもらうと、体がぐんと引き締まるそうだよ——」

「随分ヘンな話ね——」

「やってやろうか——」

「いやよ——そんなこと……」

とは云ったものの、マダムはその夜、つくづく自身の裸を長い時間見廻しておりましたが、ポツリと、

「本当にやせて、引締る？」

唐突にそう声をかけてきたのです。咄嗟に何の意味が分らなくて「えっ？何て云った？……」

と聞き返すと、

「ホラ、先程云ったでしょうお風呂の中で。縛って叩いたら、やせるって……」

「痩せるとは云やしない。体が引き締まると云ったんだ」

「どちらでもいいの、一度ものは試めし、引きしめて頂戴よ——」

冗談から駒で、私はマダムの相当ぜい肉の盛り上った裸身を縛る羽目になったのです。

準備がなかったので、寝巻の紐や、カーテンの紐や、マダムの腰紐で、ぐいぐい締めて縛ってやったら、紐がすっかり肌に喰い込んでしまつて、ぶくりぶくりと縄目のくい込みの凹みだけが露わで、紐自体はすっかり、めり込んで姿を没してしまふ有様でした。

軽く、尻や肩や乳や胸を、ズボンのバンドを引き抜いてぶってやると、一打ちする毎に、大仰にマダムは、痛いっ痛いっ！と喚めき立てました。被虐の系図に入らない女は、少しの鞭打ちにも痛みを感じるようです。

私のプレイへの誘導を、しかしマダムは真面目にとつたらしく、たらたら額に汗し乍ら、このめり込んだ縄目を、我慢しておりました。

た。紐から解放された時、マダムは、

「あらっ、汗が出て、何だか体が軽くなった気がしたわ。しかしこれは非道い方法ね。そうそう、誰にもやらすってわけにはゆかないわ」

と大きく口を開いて笑いました。

若し、これがマダムのカマトトならまったく堂々たる演技です。だから、私はある秘かなたくらみを抱いて、努めて、その時は深追いせず、又体を引き締め、汗をかかす方法についても、その後、その件に余り触れませんでした。

節分の夜——、マダムは年に似ず、悟例の如く、長い自慢の黒髪を、娘々した唐人髷に結いました。堂々たる体軀に、チョコンと結われた唐人髷は、凡そチグハグなユーモアをバーにかもし出しました。

「よく似合うよ——、いいね日本髪は……」

半ば揶揄気味で、そう褒めると、案外純真なマダムは、心から嬉しそうに、

「あんたに褒められたら、結った甲斐があったわ」

と、フカフカとした体を擦りよせてきたのでした。チャンスは今——。

「少しは痩せたの——」

「相変らずよ——、益々以て……。おなかなんだぶついてきちゃった。まるで妊娠したみたい——」

「その後、体を引き締める方法を誰かにやってもらったかい——」
「何云ってんのよ。私からそんな事云えますか——。貴方の外にそんなヘンな事云う人いないわ」

「とすると、私一人ということになるね」

「勿論よ。もうあれっきりでお見限りかと腹立てていたのよ。あれから一度も云ってはくれないんだもの、薄情ね、あんたと云う人は——」

「じゃあ、今夜どう——」

「今夜は忙がしいわ。かき入れ時だから……」

「午前二時でも三時でも終る迄待つよ。それにその日本髪がぐっと気に入っちゃったからね——」

「じゃあ、何処で……」

「カンバンまで粘って表の例の場所で……」

今夜の為に、私は人気なき家を借りておいた。カメラもストロボもその家に持込んである。

その家は、私の嗜好に共鳴する友人の家で、都心から近く、それに、現在、友人夫妻は、東京にいる長男夫婦の初孫の出産で、揃って出掛けていて留守になっている上、娘は女子大の寮に入っているし、あとは留守番の気のおけない中年婆さん一人でした。今宵をねらって、私はあらかじめ、今夜借用する様頼んでおいたのです。



夜中にホトホト格子を叩き、何度も呼鈴を押して、やっと睡そうな婆さんが、やれやれと云った面持で、表を開けてくれました。

深夜の無礼を詫びて、そこそこに引退って貰うと、私達は勝手知ったこの家の、離れの方に庭石伝いに、そろそろと足許に気をつけ乍ら辿りつきました。

「随分静かな処なのね——」

「家には婆さん一人さ——。君の為に敢えて無理を云って、友人から借りたんだよ。さあ、上ってくれ給え」

雨戸を繰って、スイッチをひねり、

私達は離れ屋に上り込みました。目的はこの離れ屋よりも、離れの右側に建て増してある、古道具や薪を入れた納屋の前でした。離れと納屋の前庭は漆喰で固めてありました。

腕時計の針は午前三時に十分を指しています。深更の、肌をさす冷めたい夜気が、測にて身にしみ渡ります。

大急ぎで石油ストーブの芯を一杯にして火をつけ、先ず私達はストーブを囲んで暖まりました。

何となく、奇妙な二人っきりの世界です。半醒半酔のマダムと私は、どちらからともなく寄り添いました。

「今夜は寝かさないよ——」

「もう二時間もすれば、そろそろ夜が白んでくるわ」

ぐったりと膝を崩して、彼女は疲れの出た附けまつ毛の、うるんだ眼で私を見上げたのです。

「いいさ。夜の明けるまで……。そして、その一年中でたった一日きりの唐人髷に敬意を表して、君を縛ってやるよ——」

「ああ、いい様にして……」

物憂げに、凭れかかる彼女の体を起して、やや温まってきた室内に、これなら大丈夫だろうと、私は女の帯を解き、着崩れた着物を脱がせにかかりました。

長襦袢一枚にすると、押入れをあけて、常備してある縄束をドサリと畳に投げ出し、私は、三脚に一眼レフを据え、X接点にストロボを調節したのでした。

「あんた、いつもこんな事してるの？」

マダムはフト咎める口調で私をにらみました。

「ああ、偶に気がむいたらね。だけど、これは全部友人のものの許りだよ。奴さん、すっかりサジストなのでね。サジスト……判る？」

「虐めて喜ぶあれでしょう。そんなお客さんだってあるわ。ホホ、

貴方もサジストなのね。私を虐めて喜こんでいるんだもの——、さあ、いい様に縛って頂戴——、うんときつくていいのよ。その代りこれで瘦せなかったら、その時は、私馬乗りになって、ギューギュー虐めてやるから……いいわね」

「よし、うんと瘦せさせてやろう。その脂肪の塊を吊り下げてやるから」

私はわざと荒々しく、マダムをその場に押し倒すと、縄を片手に握り、丸々と太った彼女の腕に絡ませていった。マダムは一応義務的に体を処女の如く揺すり、抵抗らしきものを見せたが、心はすっ

かり許容していたのでした。

△とは云うものの、この女を吊り下げることが出来るかな、何しろ目方では、優に自分より勝っている女なのだから……▽

用心深く、私は灯や彼女の姿の洩れない様に窓ぎわのカーテンを引くと、マダムを廊下に太縄で後手に縛り上げて、引出しました。

剥き出しにした乳房や腹に鳥肌を立て、彼女は易々として私の為すが儘になっていました。障子を開け放し、私は鴨居を見上げましたが、この十七貫のマダムを呆り下げて、若し真中から折れた場合、それも困ると、私は少々不安を感じたのですが、ええい儘よ、四枚の障子がかまり力になってくれていると、独り合点して、先ず太縄に更に縄を通して鴨居に爪先立ちで吊り下げておき、基盤と脚立を敷居ぎわにおいて、その上に昇らせ、改めて、ぐいぐいと強く太縄を引き絞る、彼女の二の腕が、鴨居にピタリつく迄に吊り上げたのです。

「外すよ、いいかね」

「……………」

微かにうなづくのを見すまして、脚立をぐいと外した途端、みしみしと鴨居がきしんで、ぎぎと縄ずれの音と共に彼女の二の腕と乳房の下に縄が、深々と肉に喰い込んで、ずり下ったのです。

「あー、痛い痛いわ。降して……」

爪先が辛うじて、脚立の下に基盤に届いています。しっかり縛った筈が、肉の重みで、脚立の高さ三十センチ近くもずり下ったのです。プクリと乳房が突出し、二の腕をしめる縄の強さが、徐々にマダムの両手の色を変えて行きます。私は非情になって、更に二十センチの高さの基盤も外してしまいました。爪先が、地上を求めて空

を泳ぎます。

「ウウウ、お、おろして、く、くるしい……は、はやくして……」

声を殺して喘ぐ彼女に焦点を

合せ、私のストロボは、二回三回、パッパッとしろがねの白光を吐きました。(このポーズ掲載、但し下半身カット)

喘ぐ息の、もつれる足の、ゆるぐ肉の、そのマダムに、私はカメラを離れ、続けさまに十数回、友人のしなやかな鞭の御馳走を見舞ってやりました。

「ウー、息がつまる……死ぬわ……お、ろ、し、て……」

マダムの顔は蒼白に変じて来ました。爪先は既に床まで数センチ——。肉体が垂れ下れば下る程、縄は肉を締めつけて行くです。

潮時——、私は脚立を与え、よろめくマダムの体を起してやり、無言で、鴨居の縄をゆるめました。生返った様に、マダムの紅唇から安堵の吐息が洩れたのです。



鴨居から解き放たれ、両手を縛られた儘で、マダムはぐったりと畳に横たわっていました。

「どうした、チョットきつかったかい——」

私はじっとマダムの額に浮んだ、脂汗を、優しく拭いてやり乍ら、いたわる様に声をかけました。

「知らないっ……。生れて始めてだわ、こんなつらい事——」

「つらい？ これは序の口だぜ。これからが本当の縛りなんだよ」

「そんなことより、早く手の縄をといてよ。もう痺れ切って感覚がないわ。ねえったら」

「協力するといったら、解いてやる」

「協力？ 変な言葉——、それに写真なんてとっていいって云った覚えはないわよ」

「だからさ、君は瘦せたがっている。私は君のその唐人髷に結った、被縛の姿に、こよなき美を見出して、永久に残したいと思っている。これは相殺勘定の筈だよ」

「何が相殺なの。自分の都合のいい解釈許りにしているわ。大体、威張って撮るなんて可笑しいわ。撮りたかったら、チャント、私の前に手をついて、桜子様、何卒、私奴に写真をとらせて下さいって、懇願したら、撮らさぬこともないね。厚顔ましいじゃないの——」

「分った。云われた通り懇願しますよ」

ここでマダムを怒らせては、折角の計画が途中で毀れるし、それにこれからバー『つくし』へも行けなくなる——。突嗟に思案すると、私は高飛車から、一挙反転して、平身低頭、マダムの御機嫌をとり結ぶことに汲々としました。彼女はプライドを持ち直し、根がお人好しの女だけに、

「いいわよ、そんなにペコペコしなくても、貴方のモデルになりますわよ。だけど余り人には見せないでね——。ああ、それから、私にだけは、絶対見せて頂戴ね。まずくうつつっていると、全部引き裂いてやるから……」

そんな強がり云々でも、彼女はすっかり御機嫌を直していました。こんなやりとりの合間にも、私は愚図愚図し乍ら、容易に繩をとこうともしませんでした。

すっかりO・Kときますと、私はさらさらと繩をとき、恭々しく彼女のポリュームのある二の腕や手首を揉んでやりました。

兎も角、この種の女族には、プライドを持たすに限る様です。

紫煙をくゆらし、次のあの手、この手を考えているうち、鳩時計が五時をポッポッポッと告げました。

心なしか、東の空が薄らんで来た様です。

「撮るなら早くとって、そろそろ寝ましようよ。くたくただわ。ああ、ねむくなっちゃった」

「ホイホイ。では、そろそろと、大急ぎで……」

私は綿ロープで改めて彼女を後手に縛り、更に腰まで縛って、思い切って、雨戸を明けました。

空は既に明け、爽やかな身を切る風が、ブルルと私の肌を吹きぬ

けて行きました。

「おお、寒い——」

「眼がさめただろう。キュッと身体が引締るよ。さあ、早い処やっちまおう」

納屋の柱に縛りつけ、猿轡をかまして、豊かな肌の半面を、大気に曝して、私はストロボを光らせました。ポリューム溢れる、ムンムンとする体が、私の寸余の処に観念して、佇立しているのです（このポーズ掲載）

ええい、思い切って、ことのついでにもう一丁——、身を切る寒風に肌を曝した彼女を追い立て、古ごさを冷めたい漆喰に敷くと、マダムをそこへ、足を投げ出して坐らせ、裸身の上に、私は粗々しい薪の束を、一束、二束、三束と、容赦なくのせていったのです。ささくれた粗朶は、柔かい肌をつついて、彼女の体が揺れる度に、ギシギシと、胸から膝の上で、粗い擦傷をつくりまします。粗朶に頸を埋め、彼女は冷えきった体を、じっと我慢しつづけておりました。

（このポーズ掲載）

確かに私は、その時、嗜虐にとりつかれていたと云えるでしょう。

尚も、飽く事なく、粗朶の上に静坐させ、薪の束に跨がらせ、ござに仰むけに寝かせて、体一面に、薪の束をつみ並べて行きました。

私の薪をもつ手は凍え、吐く息は白く、体の心底まで冷氣は浸透しました。それにも況してマダムの忍耐力の強さには、唯々、驚嘆の外ありません。私が疲れてよすまで、氷の様に冷えきった体を、夜明けの冷氣に曝していたのです。

茲に発表したのは、ほんの三葉だけです、何れ機会があれば、この時の、貴重な記録のフォトを公開したいと思っております。バー『つくし』は、今宵も人いきれと、酒の香に充滿していることでしょう。そして、雇われマダム、我が愛する片桐桜子は、あの大柄な、豊満な肉体を、益々持て余し乍ら、酔客の間を、愉しげに無邪気に往来しているに違いありません。

私と彼女の合言葉――

「体を引締めてあげようか」と云えば、頬を年甲斐もなく染めて、「余りきついのはいやよ」とでも云い乍ら、いそいそとついてくる

× × ×

に違いないのです。

何れ、このお話には続編がありそうな予感がするのですが、あとは乞う御期待と云った処でお終いにしましょう」

× × ×

退屈男達は、日頃の退屈を吹きとばして、誰からともなく立上りました。

「よお、スバル氏よ。一度でいいから、君の発掘したモデルをつれてこいよ。撮影会をやるうじゃないか――、よお……」

酔ったワイン氏の声が、スバル氏に絡むのを聞き乍ら、人々は思

い思いに堪へと散っていったのです。

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判(9×6.5) 印画紙焼付

各組一枚一組(全部送料共)

一組	五枚	三〇〇〇円
二組	十枚	五〇〇〇円
三組	二十枚	一〇〇〇〇円
四組	三十枚	一四〇〇〇円
五組	四十枚	一七五〇〇円
六組	五十枚	二〇〇〇〇円

Y1	全裸荷造棒しぼり	(大塚啓子)
Y2	乱れ黒髪裸見本	(大塚啓子)
Y3	観念した胡座	(大塚啓子)
Y4	見事な飾り物	(大塚啓子)
Y5	浴室股間縛り	(大塚啓子)
Y6	魔しの緊縛裸像	(愛川悦子)

Y7	逆十字後手縛	(愛川悦子)
Y8	裸身の捕われ人	(愛川悦子)
Y9	逆エビ後手足吊り	(愛川悦子)
Y10	全裸ねの縛り	(田中芳代)
Y11	なまめかしき緊縛	(花坂道子)
Y12	全裸フトンむし	(大塚啓子)
Y13	蒲団裏裸またぎ	(大塚啓子)
Y14	初々しき裸全身像	(岩井知子)
Y15	ヌード股間しぼり	(絹川文代)
Y16	全裸脚掌股間縛	(絹川文代)
Y17	セーラー後手縛り	(山辺紗登子)
Y18	庭園ヌード縛り	(絹川文代)
Y19	全裸全身自慢	(愛川悦子)
Y20	豊満双丘くらべ	(愛川悦子)
Y21	追いつめられた裸女	(愛川悦子)
Y22	退ましきヒップ	(愛川悦子)

Y23	大の字晒し	(絹川文代)
Y24	縛り正面正坐	(絹川文代)
Y25	胸のボリウム自慢	(愛川悦子)
Y26	麗人受難の巻	(益田房子)
Y27	もうこれで許して	(益田房子)
Y28	むしろれたズロース	(花坂道子)
Y29	全裸縛りの全身	(平野笑子)
Y30	鎮座する縛り女神	(平野笑子)
Y31	囚女後手柱縛り	(大塚啓子)
Y32	全裸強烈股間縛	(絹川文代)
Y33	ベッド縛りのポーズ	(絹川文代)
Y34	開股一番一直線	(絹川文代)
Y35	縛り腰巻色模様	(絹川文代)
Y36	亀甲股間縛正面	(絹川文代)
Y37	全裸椅子またぎ	(田原美佐子)
Y38	妖艶闊のしぼり	(絹川文代)
Y39	椅子またぎ裸後手	(田原美佐子)
Y40	強烈後手首縛り	(田原美佐子)
Y41	ハダカ縛り人形	(絹川文代)

Y42	濃艶ハダカ縛り	(絹川文代)
Y43	あられもなき開股	(大塚啓子)
Y44	全裸変形股間正面	(大塚啓子)
Y45	後手立木縛り	(村井知可子)
Y46	全裸後手壁ハリツケ	(愛川悦子)
Y47	全裸寝台羞恥責め	(花坂道子)
Y48	振袖令嬢後手責め	(花坂道子)
Y49	長襦袢後手しぼり	(花坂道子)
Y50	ワンピース縛り	(花坂道子)
Y51	手吊り裸身の乱舞	(絹川文代)
Y52	柱縛り観念の図	(絹川文代)
Y53	不行儀姿態の美	(絹川文代)
Y54	カメラに晒す全裸	(大塚啓子)
Y55	緊縛女体の開陳	(絹川文代)
Y56	膨隆突出した臀部	(絹川文代)
Y57	前手錠全裸像	(大塚啓子)
Y58	股間縛開股の絵	(絹川文代)
Y59	聖壇のさらし者	(絹川文代)
Y60	エビ責めの表情	(絹川文代)

女相撲雑感

岡 平 吉 夫

思春期に巡業に来た女相撲をみてから、すっかり病みつきとなり、秘かに巡業先を訪ねたり、写真を撮ったりして楽しんでいたが、昨年ふとしたことから「奇ク」をみて同好の志のあることに意を強くした。それと同時に

SとかMとかの記事をみて人それぞれ趣向の異なるものと驚嘆もし、その方面の知識も得た。女斗美という言葉もここで始めて知り、成程うまい表現であると感じさせられた。

女斗美と言えば女相撲の外に、女子プロレス、女子柔剣道等をさすと思うが、相撲に類似したものとして、これも一通り観戦していたが女相撲の醍醐味は味わえない。

女の場合、体の構造からみて柔軟な肌と脂

肪質であることが特色であり、体が重なり合うことのない他の競技より、体を引き付け合って争う方が魅力があると思うのはひとり、私だけではあるまい。

それにも増して、まわしがきりっと太股に喰い込み白い柔肌も押し合い、へし合ううちに桜色、やがて重なり合って倒れれば、泥まみれの秒がパツとついた風情は誠に美しいと思う。

この女相撲も戦前は高玉女相撲興行団とか石山女相撲興行団とか、いくつかの一行があつて年二、三回は巡業に来て楽しませてくれ、また九州、東北地方の農漁村には、その部落の重要な行事として素人女相撲が行われてい

た。或る所は豊臣秀吉、朝鮮遠征の折りその旅情を慰めるため開かれたと伝えられ、或る所は日露戦争戦勝奉納行事として発生したと言われる。また日での共同祈願として天の神を怒らせるため主婦の間で秘に行われたところもあり、江戸時代興行女相撲の巡業をみた村の娘達が、その化粧まわしの美しさに魅かれて、それを真似て誕生したとも伝えられる。

いずれの地方でも、現在は若い娘達がその行事を承継する者がなく、僅かに四、五十才の主婦達によって余命を繋いでいる状態である。

衰頽しつつある原因は集団就職により若い

女相撲賛画

妙花山人



勝負あった!!

層の人口減少と、相撲をとることが時代の波というか羞恥心を高めているらしい。

女相撲ファンにとって、感慨に堪えないところである。

私の弟が戦後の二十二、三年頃、統計局の職業調査のアルバイトをした折り、偶然にも北海道中に職業として女力士とあったカードを十五、六枚見付けたと言っていたが、果して、現在でも一行を組んで巡業しているか、どうか疑わしい。

また一般月刊誌でも女相撲についての記事は「奇ク」以外には見出し得ない。

その「奇ク」もS、M、浣腸とかが主流をなすもので女相撲ファンは遠慮がちに、その投稿を続けている。これはSMの愛読者にとっても甚だ迷惑なことであろうし、女相撲ファンにとっても自分達の広場を持ちたいと願っていることであろう。

「女斗美」と題する別冊の発刊を願うのも無理からぬことと思うが、その読者数からみて容易な仕事ではないことが素人の私にもよく判る。

しかし同人雑誌が数多く出版されている今日、同好者の誠意と努力があれば何んとか解決されるのではなからうか。

興行女相撲の後援会も結成され、その巡業の様、日程表も通信欄に掲載される。柔剣道、空手、フェッシング等すべての女斗美が克明に知らされる。連続物として番付編成と

顔写真、それに取組の様子を二、三枚の写真にのせ、先輩諸氏のたくみな筆致によって熱戦模様を発表すれば、毎月読者を幻想の土俵上に案内してくれるであろうし、大阪、東京の寺院又は休日の浴場を借切って、土俵(マツト土俵)による実戦を開催すればこれに勝る喜びはない。勿論これも「奇ク」に頼り過ぎ単に一定の会費を払えばよいという程度ではむずかしいが同好者各氏の経済的労働的援助があれば、単なる夢に終ることもなからう。

出版事業にずぶの素人の私が一方的に提案するのは、やはりマニア特有の独りよがりであろうか。

若鮎のようにピチピチした女体が縦横無尽に荒れ狂う見事な激突の数々が誌上で、実戦で展開されることを願うものである。

真偽の程は知らないがBG間において女斗美クラブがあるとき。若しそれが事実とすれば我々ファンの観戦も許していただきたいものだ。異性の観戦者のあることによって、却ってエキサイトし、より活発化されようし経済的負担を男性に持たせれば一挙兩策となり得よう。

話は別になるが、義務教育課程中、体育授業に相撲が取り入れられ、その普及徹底は誠

に喜ばしいことであるが、衛生的見地と恥部露出を防ぐため褌の下に相撲パンツ着用の規定がなされたことはご案内の通りである。

将来、仮に女子部が誕生した場合、水着等を着用する気運にあることは明らかであり、その為か女相撲ファンからは長い伝統と肉体美を抹殺されるのではないかと不信の念を抱いている。

私とて男子の場合は相撲パンツなどの着用には不自然な感じを持つ者であるが、女子においては過去、興業にしる素人にしるシャツにパンツ上の褌のいで立ち以外に見聞したことがない。但し、相撲を真似るショーとしては別であるが。

兎に角、それを観戦する立場からみれば裸に褌一本が望ましいことは明らかであるが、現実の社会において、また取組む女性の立場にたつて、これをみればその実現普及は不可能ではあるまいか。

私はシャツにパンツの女相撲においても、決して観戦に堪え得ないものとは思っていない。逞しく伸びきった脚や猛稽古で鍛えてある体は筋肉を躍動させ、真剣に取組むことがあれば迫力のある熱戦が展開され、決してシャツやパンツによって幻滅を感じさせるもの

ではない。

女子相撲が容易に普及出来ないのは裸の競技である点が最大の原因のように思われる。

従って水着(体操着)等の上に褌を締め込むことは止むを得ないのではなからうか。

むしろ普及し易い体勢を整えることが肝要であると思われる。柔道についてはためらうであろうと思われる寝技があるにも拘らず年々増加の傾向があるが、相撲に関してはその発足が噂にすら聞くことができない。

次に相撲は重量の勝るものが必然的に有利とされるが、これも美容にその生命をかける女性には大きな障害とならざるを得ない。

そこで体重別の採用により試合が行われれば、勝つために体重をふやす必要もなく、逆にウェイトの調整が大きな位置をしめ、美容上相反する要素を持つことがない。

女子体育大あたりが率先してクラブ活動にとり入れ、その普及徹底に努められんことを切望したい。アマ女子相撲連盟が結成されれば、或いはプロ女相撲が褌一本の激突を展開する運命になるのではあるまいか。

あれや、これや思い浮べながら私見を述べたが、読者、編集各氏のご批判を賜りたいものである。



ガン作・マニアのノート

(私のバーでの会話)

芳野眉美

A ゴミ容器

「今日は残念なことをした」とA。「君の地区もゴミ容器になったかね」

「そうですよ」と私。

東京では、ゴミはひっくりくるめて一定の容器に入れたものを定時に収集している。

「今迄気がつかなかったんだが、ぼくの処もそうなんだな」

「今頃何を感じしているんです」

「今日ね、家の近くの、ゴミの収集場所に偶然通りかかったんだが、集まっているゴミ容器の中の一つが気になったんだ」

「おパンティでも捨ててあったのですか」

「そう、まったく、その通り」

「いつもパンティの話」と梨香、「それしかないのかしら」

「これ以上の高級な話が何処にある」

「それで」と私。

「ゴミ容器には、簡単な住所と名前が書いてあるだろう」

「ええ、書いてありますね」

「気になったから名前を見た」

「ははあ」

「その家は若夫婦と赤ちゃん」

「くわしいですね」

「近所だからな」

「で、どうしました」

「ほしかったね」

「奥さんの顔を知っているのですからね」

「手がでなかった」

「本音ですね。ほしいが手が出ない」

「近所じゃなかったらな」

「誰が見てるかわかりやしませんからね」

「梨香のアパートもゴミ容器かい」とA。

「そうよ、二つあるわ」

「二つ」

「上と下」

「それじゃ誰のかわからない」

「さがすつもりなの、H」

B 足

「女の足だけが見える、というのも魅力があるものだ」とA。

「ここに来る途中にトルコがあるだろう。ガラス戸だからレジーの処に出て来るトルコさんの足だけが見える」

「よく気がつきますね」

「水着かショートパンツだろう。お尻の半分からむきだしの足が見える。いいものだ」

「上半身が見えないから、よけいに足に魅力を感じるでしょう」

「それもあるな。顔を見たら、ね」

「何よ、あたしの顔を見ることないじゃないの」と梨香。

「とんでもない。梨香みたいに美しくて、すんなりした足の持主は少いよ」

「お世辞言っても、だめ」

「黒いストッキングなんかも、好きだな」とA。

「似合う人は少いですよ」

「それでもね、街を歩いていて、ぞくっとすることがある」

「買ってくれたら、穿いてあげても、いいの

よ」と梨香。

「プレゼントするよ」

「でも、足にかじりついたりしちゃいやよ」

「そんなことあったの？」と私。

「あったの」

「何処で」

「だまって」とA。

「梨香はストッキングをあまり穿かないね」と私。

「素足のほうが好きなのよ」

「素足にハイヒールもいいものだ」とA。

梨香がAの膝の上に、ハイヒールのままで足をのせた。

「見たければ、どうぞ」

「ズボンが汚れるよ」と私。

「いや、いいよいいよ」

「ハイヒールもプレゼントしてよ、Aさん」

「ハイヒール、とってもいいかい」

「だめ」

「いけないかい」

「足が汚れているわ」

「そのほうがいい」

「だめよ」

「いいじゃないか」

「足を舐めるんだもの、Aさんったら」

C 名言

「おパンティのコレクションを奥さんにみつかって離婚された話がありますね」と私。週刊誌にこの種はつきない。

「それはそれは」

「この男、家裁でなかなかの名言を吐きましたよ」

「ほう」

「奥さんに向かってね、（お前も下着をつけているからばくには必要なんだ）」

「面白い」

「それじゃ私の肉体はどうなるの、てんで離婚だそうです」

「あるところにはあるんだね、そんなのが」

「私なら離婚なんかしないな」と梨香。

「どうする」とA。

「夫の弱点を握っていれば、いいなりになるじゃない」

「なるほど」

「夫にはパンティをあてがっておいて好きなことをする」

「好きなこと」

「好きな人をつくって遊ぶ。家庭にとじこもってオバアチャンになるのはたまらない」

「梨香にプロポーズするよ」

「何よ、綺麗な奥様が待っているくせに」

「早く結婚しすぎた」

「奥さま、Aさんの趣味、知っているんですか」と私。

「うすすね」

「いやだわ」と梨香。

「何がいやだ。夫婦の仲だ。敏感だよ、女の鼻は」

「奥さまを教育しているんじゃないの」

「何も知らないからね。少々Hなことでも夫を信用している」

「いやだわ」

「夫婦生活だから、それでいいんだ」

「奥さまのパンティや足に接吻するのね」

「馬鹿な、そんなこと聞く奴があるか」

D 染める

近くのゲイパークのゲイボーイが客を連れて来た。

「梨香に似てるじゃない」とA。

「あの赤い髪、かつらでしょう」と梨香。

「ええ、ぬぎましようか」とGB。

「いや、結構です」とA。

「この子は下も赤いんですよ」と連れ客。

「染めているわけ」と私。

「ええ」

「自分で？」

「いいえ」

「専門家がいるの」

「梨香、教えてもらっておけよ」とA。

「馬鹿」

「失礼、梨香はまだはえ……」

「梨香はまだ子供だからな」と私と。

「何よ、二人とも。ウイスキー頂戴」

「そう怒るな」

「染めるときは俺がしてやるよ」とA。

「好きな人にしてもらいます」

「すみません」

「見せてあげたら」と連れ客。

「いやだわ」と梨香。

「そうでもないでしょう」とA。

「でも」とGB。「今日はだめ」

「どうして」

「アンネの日なんです」

「え？」と三人。

「だって君」とA。「君は男だろう」

「いいえ」

ブラウスを開いてみせた。ブラジャーはしていない。あたりまえだ。が、ふっくらとふ

くらんだ、可愛い乳房があった。錯覚ではない。

「あ」

「さわってもいいですか」とA。

「いやだわ」と梨香。

「いいですよ」と連れ客。

「どうぞ」とGB。

「失礼」とA。「ほんとだ。やわらかい」

「どういうわけ」と梨香。

「つまり半々の、男の部分を手術した、というわけでしょう」と私。「ぶしつけでごめんなさい」

「そうなんです」とGB。

「よくわからないわ」と梨香。

「そのうちわかるさ」

「梨香よりよほど女らしいな」とA。

「そのほうが好きなくせに」

〔代理部だより〕○本誌旧号の中、復刊号の分（白表紙）は全部売切れになりました。

○悦特第一集、第二集、第三集、第四集、第五集（各一部特価一五〇円）S特第四集（特価一八〇円）別冊第一集（特価一五〇円）長篇悦虐小説「青い廃院」（特価一〇〇円）は在庫しております。

絹世と私

——被虐愛さんげ——

万 田 不 仁

海岸の方で鳴っていた雷の音が次第に近付いて来る仄暗い夕方、私は算術の宿題を解きあぐねて、何やら顚顚の痛む鬱陶しい気分でした。時々稲光がさつさと庭の花盛りの桜の木の幹を撫でて、もう直ぐさあっと驟雨がやって来そうな空模様、スタンドの橙色の光の輪の下で何度か計算をやり直した挙句、鉛筆を投げ出した私は、その日、本屋から届いたばかりの「少女の友」を開いて、不自然な程瞳の大きな口絵の少女の顔を見詰めているうちに、又何時もの夢想癖に囚われるのでした。

絹世が満叔母さんに連れられて内へ来たのは、それから間もなくで、雷ぎらいの満叔母さんは恐ろしい雷様の足の下をやっと掻い潜った、その安心感から暫くは唯はあはあ息を弾ませるばかりで、初対面の私に絹世を紹介する気もないようでした。

襟と袖口に、ネクタイの色と同じ緋の線の入ったセイラー服を着た絹世は、髪が多い、長目のスカートを捌いて、きちんと坐ると、丁寧に頭を下げました。断髪に近い短かい髪が艶やかな女学校二年生のこの少女は、私にたった今迄見ていた少女の友の口絵の少女に

似た大きな瞳が先ず印象的でした。

絹世は、母の友達の富奴さんという芸者の娘で、何か事情があつて、満叔母さんの許に一時預かることになったという話は、少し前に母から聞かされていましたが、時折やはり母の友達のユキさんという女が居候に来はするものの大体満叔母さんと二人きりの静かな生活を楽しんでいた私には、人が一人増えて賑やかになって良いなどと、この少女を歓迎する気持には迎もなれないのでした。

私は跛で、非活動的な生活を余儀なくされていた所為か、幼ない時からうつつの世界よ

りも空想や夢の世界に多く身を置いていたような子で、少年期の社会生活ともいえる学校での共同生活が時に堪え難い程辛いことでした。学校がなければどんなに良いかと屢々考えていた私は、土曜日の午後から日曜日いっぱい、厳しい学校の拘束を忘れて、少女雑誌やアラビヤナイトなどの頁を繰りながら思う

さま孤りの空想の国に遊ぶことを楽しみ、どの学課もさして興味の持てぬまま味気なく沢山の授業時間を過ごしていたのです。小学校も高学年になりますと、クラスの誰彼は大方物の考え方がリアルになっていくのが当り前で、私は肉体の不具と共にそんな精神の未熟性の故に誰といって親しい友達もなく、忘れられたような存在でした。母の意向で、一応は中等学校へ進学ということにしてみました。が、もとより投遣りな勉強ぶり、受持のクラスから一人でも多く良い学校へ進ませようと互に競争的に努力する教師の頭の中では、私など勿論員数外の生徒でした。大事な受験準備の時期なのに、私は度々学校をサボって、少女雑誌を読んだり、ぼんやり縁側に坐って、土が黄色い粘土のような庭をのっそり横断していく野良猫のお尻をパチンコで狙ったりしている始末でした。そんな私ですから、

絹世のような、これまであまり噂も聞かず、逢ったこともない年上の少女が不意に内へ這入り込んで来たことに、大袈裟に言えば暮らしの秩序を乱されそうな不安を感じて、絹世を預かるということが私には絶対的な母の意志である以上、断れないことであるだけに何ともいえぬ重苦しい出来事なのでした。

それまで私の数少ない友達、弱々しい子供の常で殆ど女の子でした。といっても、女の子でも中性的な子供の頃は腕力など、あまり男女の差はないようで、私は近所の染物屋の女の子とよく遊んだのですが、どうかして気に入った玩具の奪い合いが何かで喧嘩になったりしますと、その百合ちゃんという子は苦もなく私を膝下に捻じ伏せて、私が放すまいと両手で掴んでいる機関車などを、力ずくで取上げてしまうのでした。そんな時の口惜しさ、自分の非力の悲しさは、後々まで尾を曳いて、概して乱暴な男の子よりも優しい女の子の友達を喜びながら心の底で、もしかかじめられはしないかという怖れ、心配に絶えず戦っている私でした。

父親を知らぬ私は、大人も学校の先生や友達、父親など、訳もなく親しめない男達より女の人の方が遙かに好きでした。

しかし、ひと口に女といっても私の頭の中の整理帳では、満叔母さんのような私を猫可愛がりに甘まかしてくる柔和な女と、母やユキさんのような、何処かに鋭い爪を隠しているような気心の知れない女、それに百合ちゃんを初め数人の小さい女友達に分かれるのですが、もう一種類、最初からはっきり私に嫌悪の情をあらわに、意地悪な仕打をした女がありました。それは、一人は学校の先生で、その人は満叔母さんが大切にしている雛人形の官女の一人に似た顔の品の良い、美しい女でした。私が三年生のある朝のことでした。朝礼が終って各クラスが駆足でそれぞれ教室に向かっていました。私も跛をひきひきよたよた走っていますと、

「さア、さア早く、まごまごしないで」

瘠高い声がして、私はいきなり背中をどんと強く突飛ばされました。突飛ばしたのはかの女の先生でした。足の遅い私は後の生徒に急かされて、何時か列の外を走っていたかも知れません。もう少しでのめって、地面へ鼻を埋めるところでした。この思遣りのない仕打は何の気なしにしたこととは到底思えませんでした。私の胸には案外深い爪痕が残りました。優しい女の先生だと思っていたのに、

いきなり突飛ばされたショックは私のひ弱い神経をいたく刺戟して、弱い者や醜い者を踏みにじろうとする気持が一見優しそうな女の人の胸の奥にも確かに潜んでいるという現実が大へん恐ろしく思われるのでした。が、この女教師を恐れる心の底に不思議なことに何かもつと手酷い目にあつてみたい、満足に駆足も出来ない自分なんか突飛ばされても踏みつけられてもいい、そんな自己否定の酔いどれたような乱れ心も亦明らかに蟠っていたのはどうしたことでしょう。

もう一人は銭湯の女中でした。私は可成り大きくなるまで満叔母さんと一緒に銭湯の女湯に入りました。その風呂屋の着物を着せてくれる女中に私を邪隆に扱う人がいました。無論それは側に目立つ程度ではなく、袖に手を通す時や股引をはかせる折などに私にだけはよく解る素早く手荒い、ぎつぎつした扱いをするのでした。私はその顔立が男のようにきりっとしている。お相撲の当時関脇だった綾川に似た感じのその女の私に対する悪意が恐ろしく、他の女中が着物を着せに来てくれますと、ほっとするのです。が、その癖何か妙に物足らぬ気がしてなりません。兵児帯を締めて貰う時、そのこわい女中に息の根の

止まる程力任せにぎゅっと胴中を締めあげられたら——そんな誰にもいえない恥ずかしい望みも抱いたものです。

美しい女にいじめられたい——それは、私のうちに夙くから目覚めた暗い欲望の芽でした。私は満叔母さんが寐しなに読む低俗な講談雑誌を覗いて、そこに江戸時代の文字通り柳腰といったような美人が匕首で男の脇腹をえぐっているところを描いた挿絵などがありますと、もう下腹のあたりがかつと熱くなる程の興奮に駆られるのでした。大の男を匕首を揮って刺殺するような強い女の像は、私の幻想の中で段々鮮明になっていきました。私とその頃殊に好んだものは、少女雑誌に登場する武芸の嗜み深い美少女の活躍でした。そういう物語には私のような少年の夢を満足させる綺麗な挿絵がついていましたが、講談雑誌の方で見る所謂毒婦物の絵には女の表情や肢体に少年をはっとさせるどぎつさがあった。その種の挿絵は次第に私に大人の恐ろしい、脂濃い世界の存在を予感させるのでした。私はまた、そんな毒婦型の女が他の頁の挿絵では湯殿にしゃがんでいて、その背中一面に大きく蟹の文身などしているのを見ますと、ずっと以前銭湯でよく逢った若い女の体思い

浮かべるのでした。その女は、色の白い大柄な体格で、きめの細かい艶やかな背中に牡丹のほりものが鮮かでした。女が湯槽から上がって、流し場に立膝して体を洗い出しますと私の眼は自然とその背中に向くのです。たった一度でいい、私はそのくれないの牡丹に触ってみたいと思いましたが、もとよりそんな大胆なわざが出来よう筈ありません。私はその伝法肌の女をつくづく眺めては昔の高橋お伝だの姐妃のお百といったような世間で悪性の女といわれている人の面影を色々と思い描いていました。そして、やがてその女が匕首を逆手に持って、鬘物に出て来る博打打風の男の脾腹をぐさつとえぐったり、喉笛を掻き切ったりする情景をまざまざと思い浮べるのでした。

「洋ちゃん、何ぼんやりしてるの、頭を洗いなさい」

血腥い空想に吾れを忘れていた私は、満叔母さんの声に、びくっと正気づいたようになり、思わず顔を赤くしたことも間々ありました。

私は、自分の生活の中に新らしく這入ったて来た絹世を当座臆病な犬のような眼で観察して、容易に馴染もうともしませんでした。電

車で通学する絹世が先に内を出た後で、満叔母さんはいいました。

「絹世さんはネ、一寸お気の毒な事情があつて、内へ来たのよ。そのうちお母さんが迎えに来るけど、それまで気持良く置いてあげなければ、ネ」

私はどんな訳で絹世が内にいることになったのか解らぬままに、それでも幾らか同情的な憐みに似た感情が胸の隅から湧いて来るのを覚えました。

初め三、四日程、絹世は可哀想なくらいお淑やかにしていましたが、徐々に元気を取戻して、間もなく

絹世の部屋にした玄関脇の三畳

の間を掃除しながら林檎の樹の下で、また明日

逢いましょうなどと澄んだ声で歌うようになり

ました。朝も私よりずっと早く

起きて満叔母さんの手伝いをしますし、夕餉の

後片付けやお使いもよくしてく

れるので、この頃はもう母の

ところへ手助けに

いかずに内で芸者の着物を縫っていた満叔母さんは喜びました。しかし、私は何分にも偏屈者で、特に相手が女ですと親しむまで余程時間が必要なのでした。それに内に他人がいる場合、先ず困るのは朝の便所でした。私は毎朝判で押したように上厠の刻が決まっていたので、そんな刻に絹世が先に入っていたりすると全く当惑したものです。実に簡単に便秘してしまう私は引越しをした後や法事で田舎の家に泊る時など忽ちひどい便秘に悩まされずには済まない厄介な生理を持余していました。ほぼ同じ時刻にいかないと、それが原因で便秘に苦しまねばならぬ羽目に陥ることを私は絹世にあからさまにいう訳にもいかず、うじうじひとり気に病んでいましたが、更に恥ずかしさを堪えていえば、私は絹世の為に私の内側にひそんでいる忌わしい嗜好がまた頭を抬げるのが自分ながら疎ましかったのです。その奇妙な嗜好はユキさんによって目覚めさせられたのでした。内は一穴便所でしたが、曾て香水に贅沢なユキさんが上厠の後、続いて私が入りますと、外国ものの香水の匂いに糞便の臭いが一緒くたになった一種複雑な臭気が俄然私を捕らえてしまったのです。白粉気のない満叔母さんの時にはそんなこと



はなく、ユキさんでもお酒を沢山飲んだ時には、便所中酒臭くて迎もあの不思議な陶酔感を私に齎らしませんでした……。

便所の窓に藤の花明りするある朝、絹世の後で上廁した私は、果してユキさんの場合は別の若い女の子の体臭と、糞便の臭いの雑り合った独特の臭気に、私は忘れるともなく忘れていた、あの後暗い嗜好が俄に蘇るのをはっきり感じたのでした。私は絹世の存在が重苦しく私を圧して来る苛立たしさに内心どぎまぎするのでした。

私は、母の許へは週に一度顔を出すか出さぬかで、そんな私に母は大へん不満で「あたしは経済関係だけで、洋一と撃がってるんだ」

などと、満叔母さんにいうこともありました。それが絹世が現れてからは、母は富奴さんから絹世を預かった責任上、何かと心配していますので、週二回必ず絹世と共に母の家を訪れるようになりました。私は緑色に塗った子供の自転車の荷台に絹世を乗せて、交番のある道を避けていきました。そのうち「私がこいであげる、洋ちゃん後へ乗んなさい」

と、絹世はいいました。体は小柄ですが、

肉付きの良い絹世は太い脚でぐんぐんペタルを踏んで、歩けば小一時間程の距離をひと走りでした。

母が経営する小さな待合は、海岸の堤防のきわにありました。その頃は未だその三業地は草創期で空地が多く、あちこちに砂地の原っぱがありました。絹世と私は帳場で母にサイダーやみつ豆水蜜桃など振舞われてから砂原へ出て夕方まで遊びました。ここに一人、私達に恰好な遊び相手がいたのです。それは喜久村という待合の息子で、敬蔵というもう年のはたちを越えていたようでしたが、落語の与太郎くらいの知能程度の大人しい男でした。私は正月によくこの敬蔵に鳶を揚げて貰ったりしたことがあるのですが、何時も着流しの、兵児帯をだらしなく締めたぶよぶよ肥りのこの男が急速に絹世と私の遊び仲間になったのは、絹世の好きな三角ベースをする為でした。三角ベースは、投手、捕手、打者と最低三人で、打者はその打った球が転々とする間に一塁、二塁を廻り、本塁を踏んでしまえば続けて何度でもアウトになるまで打てるのです。この遊戯で一番成績の良いのは絹世で、敬蔵の投げる球を巧く打つと、早い足を利して瞬く間に塁間を駆け抜けて、着々得点を重ねてしまうのでした。私は何分跛の足が災して、こうした遊戯は駄目でしたが、敬蔵も腕力こそ大層あるらしく、ぶんぶんバットを振り廻しても絹世の球が仲々打てず、偶に良い当りをした時も動作緩慢、鈍足が祟って、直ぐにアウトになって、う、う、う、うとへんな動物的な呻き声を発するのでした。絹世と私には、それが面白くて、いい気になって野次ってやったことです。

私はそれでも一度快心の当りをしました。打球は跳び上がった絹世の頭上を越して堤防の傍まで転がって、絹世が空色のスカートを脹ませて毬のように球を追ううちにひと息に本塁を踏みました。私は自分で拍手して喜びました。敬蔵も

「すげえなア、すげえなア」

と、私の一撃を子供のような笑顔で讃えてくれました。が、絹世は如何にも忌々しいといった表情で

「ちんばにホームラン打たれちゃった」

ぽつんといったのです。ちんばとか、びつこという言葉を耳にしますと、それがどんなに愉快な遊びごとのさ中であつても、はっとして頬の硬張るのを感じる程、自分の不具の足に根強い劣等感を抱いていた私は途端にい

やあな気がして、その儘内へ戻ってしまいたいくらいでした。

絹世の来ない前は、母の家に来ても堤防に凭れて唯沖の方を眺めている私でした。沖合には、商船学校の白い船が二隻、時偶位置は変えても、殆ど何時も同じ場所に停泊していて、その瀟洒な船体は私のような内攻的な少年にも遙かな遠い国への憧憬の念を呼び醒すのでした。また黄昏、漁船が一斉に帰って来る時、堤防近くを過ぎる帆を下した船の縁を長い水馴芋を押しては往復する漁夫の赤銅色の体を眺めることも私の楽しみのひとつでした。

「この海のずっと向こうへいくとイギリスだぞ」

敬蔵はよくそういいました。こうして、この砂原を走り廻ることなど夢にも思わずにまるで少年詩人のように波ばかり見ていた私を絹世は頗る活動的な遊びに誘うので、母は活発な女友達の出現を私の為に喜んでいるようにうでした。満叔母さんには勿論、母にもどうやら大分好感を持たれているらしい絹世に、私はしかし何か妬ましいような、憎らしいような蟠りを感じもしました。愚図な敬蔵が絹世の手下か何かのように嬉しそうに絹世の意

の儘に動いていることも些か面白くありませんでした。三人で遊んでいるうちに私はいつか心理的に孤立しがちでした。

暑中休暇に入る前の日曜日の午下がり、例のごとく、私達は三角ベースに興じていました。私はいつ時物に熱中する傾向が甚だしくいい出しっぺの絹世よりも間もなく私の方が熱心になって、滅多に手にしなかったグローブやミットにワセリンを搦込んだり、ひどく精を出し始めました。

「もう一回、もう一回戦しよう」

遊びごとにもむら気な絹世が飽きたような素振りでもしようものなら、走りにくい砂地を駆けるので、汗まみれになった私は唇を尖らせて促すのでした。

一通り遊んで、水を飲み内へいった私が戻って来ますと、絹世も敬蔵も砂原に腰を下し、足を投出してがっかりしたような顔をしているのです。

「どうしたの？ さアやろう」

私は二人の顔を等分に見ました。

「疲れちゃたのよ、もうよして映画見にいかない？」

「うん、いこう、丹下左膳やってる」

どうやら二人は、私が一寸内へ戻った間に

話を決めたようでした。

「外で遊んだ方が良く、昼間活動見なくてもいいじゃないか」

私は三角ベースにもう絹世が熱を失いかけていることが残念でなりません。

「何だか、体がだるいのよ、そんなにボールがしたきゃ一人で堤防にぶつけて遊びなさいナ」

絹世は冷たくいいました。無理もないことでしたが、絹世は時々、私など遊び相手には物足らないといった高慢な態度を見せるので私は口惜しくてならなかったのです。

「ちえッ、直ぐそうなんだから……じゃもう一回だけ、ネ、もう一回戦」

私はそういいながら絹世の足の先、二米程のところにある球を、取ろうと歩み寄りました。すると忽ち私の悪い足に紐が引掛かって私は脆くも前へつんのめってしまいました。

「は、ははははは」

「ふふふふふ」

敬蔵の弾けたような哄笑、絹世のいやらしい含み笑い。縄飛びの紐を砂の中に隠しておいて、まんまと私を引倒したのです。敬蔵はにこにこしながら紐の片方の端を持つていました。私を堪えようもなくかつとさせる愚か



しい笑顔。
「ああ、うまく引掛けちゃった。洋ちゃん、ごめん、ごめん、そんな顔して睨まないで。さア、三角ベースしましょう。洋ちゃん打ちなさい」

一寸した悪戯の成功に満足した絹世は、今度は人が変わったように猫撫声でいうのです。お人好の私は憤慨しつつも額の砂を払って、バットを握りしめるのでした。私は転がされた仇討に絹世を三振させてやろうと思いまし

た。敬蔵の傍へ寄って

「悪い球出せ、遠い球だよ」

と囁きました。大抵の球は振って来る絹世は、敬蔵が私の注文通りに投げる悪球に手を出して、続けざまに空振りをして、力余って、尻餅をついてしまいました。

「今のはチップよ」

「どうせ三振だよ、ほらここ、ここ」

私は態と焦らすように敬蔵とゆっくりサインを交わしました。

「早くしなさいよ、まだるっこしいわネ」

絹世に催促されて、敬蔵はおどけた、体をぐにやぐにやさせるモーションから私のサイン通り外角へ投げました。その時、私は早く絹世を三振させて、先程の溜飲をいくらか下げんものと、ふっと身を乗出して球を掴もうとしました。ところへ絹世のバットがさっと振られたのですからたまりません。

「ひやあッ」

敬蔵が頓狂な声を出したようでした。後頭部を両手で抱えて、私はその場にうずくまってしまいました。よく漫画で頭をおたれたり

何かにつけたりした人の眼の前に小さな星が二つ三つ描いてありますが、あんな眼から火花が飛び出たという感じで、涙がぼろぼろ零れて、本当にわっと泣きたいくらいのひどい痛みでした。

それから三日間、私は頭を冷やして寐ていました。バットの当たった箇所から少し血が出ました。

「切れたから大丈夫だろう」

満叔母さんはいいました。はじめ私は、庭の夾竹桃の花の紅さがずきずき眼に染みるように何時までも眩暈の止まらぬような悪い気分でした。それでも満叔母さんがお医者を呼ぼうとしますと、これでも六年生かと疑われる程の途方もない泣声を挙げて拒み続けて、到頭診察を受けませんでした。直ぐに癒る、あまり痛くないと、私は強くなりました。私は絹世が過ってバットで頭を打ったということとはいわないで、あくまで撒水車の通過した後の国道で、自転車がスリップした為、落ちたのだといったのです。あの後、直ぐ私は内の裏口から自転車を引出して、母にさよならもいわず満叔母さんの家へ帰ったのです。絹世もやがて息せき切って帰って来ました。バットで私の頭を叩いたことをいいそびれたら

しく、母から何もいって来ませんでした。私とそのことをひた隠しにしたのは、事実をいったら居候の絹世が定めし母や満叔母さんに叱責されるだろう、それでは元々過つたことだから可哀想だと考えたからで、絹世の弱い立場が何といっても同情の理由でした。しかし、本当の私の心の底を正直に言えば、実際は、末だ好悪相半ばしているくらいのこの年上の女学生に嫌われるのが恐かったのです。甘やかされて育った我儘者の癖に、私は女の友達の過失や乱暴には辛抱強かったのです。綺麗な女の人の歎心を買おうとする卑屈な根性も次第に私の内側にひろく根を張って来ていました。女から与えられた痛みに堪えるといえ、以前中耳炎を患った時、私が通った医院に背の高い、美しい看護婦と小柄な醜い看護婦がいました。二人のうち綿棒を耳に入れて耳の奥を清拭する技術は、醜い看護婦の方がずっと上手でした。にも拘らず私は美しい看護婦の不器用な荒っぽい治療に思わず涙を流しながらもその方を喜んでいたのでした。それは、あの美しい女にいじめられることを窃かに喜ぶ、私の心のくらがり、蠱めくあやしい情念の働きでもありました。それにしても絹世は強情な、そして冷たい性質で

あったのでしょう。バット毆打の件について一言も私に詫びようとしません。謝罪の機を失したともいえないのですが、唯黙って私の湿布を取換えて、その独特の大きな瞳で私を睨むように見詰めては時々そっと溜息をついていましたから内心は多少心配もしていたようでした。幸にしてあの瞬間、遠目の球を絹世が意地になって打とうとした為、及び腰になっていたのが打撃を弱めて、私の怪我は大したこともなく済みました。枕許の水中花を見ながら私は小声で

「大丈夫、もう癒ったよ」

と、何度か絹世にいつてあげようと思いましたが。結局私もしんは頑な者、何もいみせませんでした。私達は満叔母さんに怪しまれる程おし黙って一週間程過ごしたことでした。

前にも書きましたが、その当時、空地の多かった海辺の三業地の中に、夏は海水浴場が開かれました。葦簾張の店も多く出て、万国旗のひらひらする海水浴場は鄙びたものではありませんが、夏中可成りの賑わいでした。

絹世は水泳が上手で、夏休みに入ると毎日その海水浴場に出掛けていきました。泳ぎは全然駄目な私は海水浴には何の興味もなかったのですが、絹世がひとり楽しんで泳ぎ

廻ったり、誰か私の知らない男の子達と砂原を走ったりしている光景を思いますと、もう落着いて受験勉強などしておられませんか。私は押入の奥から浮袋を取出しました。

海水浴場では、もう土地の少年達と友達になった絹世がきやアきやアいいながら汀で馬跳びをしていました。一頻り泳いだ後と見えて、白い水着に包んだ日焼けした体が屈んだ少年の背中を跳び越す時、午まえの日差に美しく艶やかに光ります。絹世は私の来ているのに気付いていながら、その少年達とそれから汀を走り、海へ駆け込んで暫く泳いだり、仲々私の傍へ来ません。私はほんやり、はしやいでよく走る絹世のぶりぶり動く水着のお尻を見ているほかありませんでしたが、やがて何かにがいものが口の中に湧いて来るのでした。私は幼ない頃から偶に一人の友達が出来ますと、直ぐにその子に夢中になって、日暮その子に関心を向けるといった融通の利かぬ熱っぼさがありました。私をよくいじめた染物屋の百合ちゃんの場合でも活動的なその子が私とのままごとに飽きて、よその元気な子供と縄飛びなどしにいつてしまうのが何より悲しかったものです。そんな閉鎖的な、だ

却ってある偏執性さえ加わったようで、絹世が無造作に私の手の届きかねる自由なスポーツの世界へ走り去ってしまったのは、今更ながら遺瀨ない気持でした。

「洋ちゃん、泳ごう」

何時の間に戻ったのか、不意に後から絹世が肩を叩きました。それまでの夏、海水浴には精々一度くらいしかいなかった私は、水に入る時、一寸ぞっとしましたが、浮袋を頼りに段々飛込台の方へ進んでいきました。振り返ると、堤防の傍に御待合ちどりと書いた内の看板の赤い文字が小さく見えました。飛込台のずっと先、赤い三角旗が五米程の間隔で立並んでいるあたりから波の色がぐっと淡い、柔らかい青さでした。よく泳ぐ絹世は、私のまわりを水飛沫をあげながら泳いだり、潜ったりして、うるさいくらい纏わって

「ねエ、あの旗のとこまでいかない？」

と、頻りに誘いかけてました。私は実はびくびくもので、うっかり絹世につられて何時の間にか足の立たないところまで来てしまったことを後悔していました。が、急いで引返しては臆病者と嗤われそうで、痩せ我慢をしています

「洋ちゃん、浮袋押してあげる。あんたもう

こわいんでしょ、こわいに決まってる」
絹世は乱暴に浮袋に両手をかけて、バタ足で水飛沫を立てて押しはじめました。

「いいよ、いいよ、ひとり泳ぐから」

「ふふふ、泳いでるんじゃないわ、浮かんでるんじゃない」

絹世は浮袋から手を放すと、そのまま潜って姿を隠してしまいます。黄色い海水帽が波の上に現われるまで少し間がありました。そして白い歯を見せてにやりと笑って、ひと息ついて、また潜ったかと思うと、今度は私の下に忍び寄って、私の足を引張りにかかりました。

「うわッ、いやだ、よせよ」

私の狼狽した様子は尚更絹世の悪戯心をそそたらしく、盛んに足を引張り、浮袋をゆさぶるなど、浮きつ沈みつ自在に泳ぎながら面白がって悪巫山戯をし出したのです。私は精悍な鱈に附纏われた人のように怯えて「やめろ、絹世さん、ふざけるなよ」

悲鳴をあげました。お午まえの海水浴場は未だ泳いでいる人が尠なく、頭の上高く暑そうな太陽が笑っているばかり、私は本当に心細くなって、汀の方に一団となって騒いでいる少年少女達のところまで早く帰ろうと一生

懸命両手で水を掻きました。

「弱虫、弱虫、こら、待て」

図に乗った絹世は尚もしっこく追い迫って背後からどすんと体当り、そして浮袋を波の下に沈め、私の体から抜こうとするのです。

「あっ、何するんだ、やめて！」

私は体当りされた時に吃驚した口に、がぶり潮水を飲んでしまった上、肝心の浮袋を奪われそうな、絹世の程のないわるさに気も動転して、滅茶苦茶に犬掻をしました。

「ふふふ、弱虫ネ、ふふふ」

絹世はすいと体を放して、立泳ぎしながらこちらを向いて薄笑いを浮かべています。とどうでしょう。一杯空気を入れて、固く栓を締めた筈の浮袋が急にゆるんで、あぶくを出しながら見る見る萎んでいくではありませんか——あ、どうしよう。浮袋に穴が開いた！

溺れるかも知らん、その不安に胸が詰まり、波が重たく感じられました。去年のお盆に貸ボートを漕ぎ出した海苔問屋の小僧が疾風に逢って死んだ、その哀れな死様がその時私の頭にはっきり浮かびました。逆上した私は犬掻を続けながら鹹い水を強か飲んでいました。そんな必死の足掻きをしている私の体に絹世が抱きつくように泳ぎ寄ったのは、私

が絶望的に跳き出したのと同時ぐらいだったのかも知れません。でも私の耳には水が入りましたし、絹世に抱えられるより早く少し潜って、よどんだ黄色い地に赤や青や灰色の粒々が鑲められている海の底の世界を私は確かに覗いたのです。絹世が私を抱えて汀へ泳いだ間も私には随分長く感じられました。絹世の四肢が頓に伸びて、不気味な藻のように冷たく、きつく私の胴に絡んで、私を汀へでなく沖へ、息詰まる潮の深みへ引込もうとしているかのような妖しい惑いの虜になっていたのです。

その午後、私は母の部屋で、裏の芸者屋の仕込みが、姐さんの三味線に合わせて、ああれ鳥が啼くと唄っているのを聞きながら、うつらうつらとまどろみがちでした。絹世も流石に悪戯が過ぎたことを悔んでいるらしく私の蒲団の傍に寝転んで、母が暇つぶしに読む浪六の小説本をつまらなそうに読んでいました。

「絹ちゃん、泳いでおいでよ、この子は意気地なしなんだから、あんたのお相手は無理よ。いってらっしゃい」

私は単に泳いでいるうちに気分が悪くなっただけですから、絹世の悪戯を知ら

ない母は気の毒そうにこういうのでした。私はどうして浮袋の空気が抜けてしまったのかそのわけを考えていました。絹世がゆさぶっているうちに栓がゆるんだのか、それとも悪戯をしかける一方で素早く栓をゆるめたものか……私は絹世に何も訊ねませんでした。それよりも水の恐怖で跳んでいる私を抱えた絹世の肌がびったり吸いついたような、つい先程の感触が生々しく蘇って、あのまま絹世に抱きすくめられたまま何時の間にか溺れ死んでしまったとしたら……何のこともなく母の夏蒲団に横たわっている私の胸に空想が人道雲のように脹れて、果ては例の女にいじめられる喜び、陰湿なその楽しみを、次第に吾れを忘れて追い求め、午まえの出来事をのろのろと反芻するのでした。疲労と眠気の為にぼおとした頭の中に、仄明りの水の中に見えたあの赤や青や灰色の粒々がゆらゆら巡って、私の物憂い夢想を愈々取留めなく漠然と拡げていくのでした。——絹世は左手に私を抱えて永いこと分厚い水の層を彷徨う、白砂が遠い星のように光る浜辺に私は失神した青白い体を横たえている、黒髪をふり乱した絹世が、私の上に蔽いかぶさって懸命に人工呼吸をする——

部屋の玉子色の壁に桃色の切れに包んだ三味線が懸っていて、その傍に何か歌のようなものを焼付けた陶皿が懸けてありました。

「あれ何て書いてあるの？」

私は物憂い夢心地から醒めて、絹世に聞きました。

毒の香たきてしづかにねむらばや

小がめの花もくづるるゆふべ

と、絹世は読み、もう一度今度は少し声を高く朗詠調に読んでくれました。

夏も半ば過ぎて、絹世は体をこわしました。吐気がして、やたら唾が出るようになりました。それから三十七、八度の微熱が続き、食欲がなくなりました。絹世は小麦色の肌で、顔は赤ら顔でしたのにそれがへんに白っぽくなって来るのでした。

「肺病かしら？」

絹世が便所に立った時、満叔母さんはそっと心配そうに呟きました。医者診断の結果十二指腸虫症と解り、母の知合の医学士が勤めている病院に入院しました。私は満叔母さんが読んでいた婦人雑誌の別冊附録の「家庭医学」を開いて、十二指腸虫の項を読んでみました。そして、この虫が寄生すると強い異味症を示して、生米や酢、芥子を好み、壁土

や灰、白墨、更に糞便までも欲しがるようになるという条りを読んで、吃驚しました。特に終りの糞便を欲しがるという症状には、ぞくぞくと身震いした程の衝撃を受けて、自ずと顔が火照って来るのでした。私はふと恥ずかしいことを思い出しました。それは染物屋の百合ちゃんと遊んでいた頃のことです。芙蓉が綺麗に咲いている庭先に籠を敷いて、百合ちゃんのリードでお医者さんごっこをしていた時でした。何からそんなことをしたのか覚えませんが兎も角百合ちゃんは薄い水色のズロースの中へ指を入れて、それからその人差指を私の鼻先へ突付けたのです。

「これ、へんな臭いするでしょ、ネ」

百合ちゃんは真面目な顔でいいました。

「ウンコの臭いよ、これ、ほら洋ちゃんもこうやってなめてごらんさいよ」

百合ちゃんは、その指を無造作に口に入れて、おいしいものででもあるかのようにしゃぶり出すのでした。私は驚いて断りました。そして百合ちゃんを窘めました。しかし、その晩、寝床に入ってから私はそっとお尻の割目に手をやって、それから……。七歳の私は一時それがしつこい病のようになってしまい、誰もいないところで屢この行為を繰返したも

のでした。いやな臭い、いやな味、それなのにその臭い、その味に憑かれたような私だったのです。

——絹世さんは十二指腸虫症、糞便を欲しがると……。する……。する……。

白い病院の一室、白いベッドの中に、凋れた朱い花のような絹世が痩せ細った手を動かして、曾ての私のようにお尻の割目をさぐる……。そう思うと背筋がぞくぞくして、胸苦しい錯乱した気分になるのでした。

絹世がいけないので、内の中はもとのようにひっそりしました。満叔母さんは根を詰めて芸者の着物を仕立てています。私も気の進まぬ受験勉強に夜も十時頃まで頑張りましたが眼は算術の問題集を見ても頭の中には白い寝間着を着た絹世がいました。私の空想では絹世の病院の便所は立派な大理石で出来ていました。天井から乳色の光が降り注いでいます。ドアの把手が動いて、銀色のシャレを持った絹世がそっと入って来ました。私はそのシャレを何に使用するのか知っています。母親の富奴さんの趣味で、絹世は女学生には少々上等過ぎる下着を与えられていました。その冷やかに光る絹のズロースを下して絹世は西洋便所の便器に腰掛けます。乳色の

光が濃くなって、絹世をすっぽり包んでしまっています。……ドアが開いて、銀色のシャーレを大切そうに両手で捧げ持った絹世が長い薄暗い廊下を足早に急いでいきます。螺旋階段を上って、その白い後姿はとある部屋の中に隠れます。それは小さな密室のようなところで、獣の血のように濃い赤の絨毯の上にどっかと胡座をかけた絹世は、鈍く光るシャーレからカルメ焼を取って、ハリハリ音立てて食べはじめののです。私はそのカルメ焼が何で出来ているかよく知っています。

——ウンコの臭いよ、これ……

遠くから百合ちゃんの稚い声が聞えます。異味症、異味症、異味症!! 私の頭はガンガンしだし、耳の奥に油蟬がいるみたいになるのです。

「もう寝なさい、あんまり一時に勉強すると体を毀すわよ、無理に良い学校へ入らなくてもいいんだから……」

思わず洩らした私の熱い吐息に頭を上げた満叔母さんは、例によって甘いことをいいました。そして、

「いっぺん洋ちゃんも絹世さんをお見舞するんですよ、仲良くしてたんだからね」と、いうのでした。

秋のある土曜日の午後、私は赤い電車に乗って、絹世のいる病院へいきました。病院、医者、それはこの世で私の最も嫌いな、恐ろしい建物であり、人間でした。その為私に私が跛になった幼ない日の怪我、大きな手術の恐怖を全く記憶に止めていない私の、それでも意識の底に根強くこびりついていらいしい漠然とした恐怖感、激しい白色で象徴されていました。症院の白い建物、医者や看護婦の白い帽子、白衣……学校で年一回行なう身体検査の前夜、私は必ずメランコリックな救われぬ厭世感の泥沼に落込むのでした。中耳炎になった時も愈々堪えられなくなるまで湿布して我慢したものでした。

電車を降りてから、お天気続きで黄ばんだ長い坂を登り、少し息を切らせて、その大きい、赤煉瓦の寂びた病院の門を潜りました。至って方向感覚の鈍い私は、三階の絹世の病室までいく間、廊下を何度も曲るので、迷子になりそうな不安を感じました。「桂絹世」と名札の下がった病室のドアをそっと開けますと

「あらっ」

絹世がにっこり笑いました。思ったより明るい部屋でした。ピンクの縞のパジャマの上

に小菊模様の羽織を着た絹世は、ベッドに半身を起こして、雑誌を読んでいるところでした。青白い顔になっていて、それは、少女雑誌の口絵で見る感傷的な細い女の子のような、美しいというより何か気高いくらいでした。

「洋ちゃん、私のことなんか忘れちゃったかと思ってた、ドア開ける時、ノックするものよ」

綺麗な歯並を見せて絹世は微笑しました。寂しそうな笑いでした。病院というところに潜在的な恐怖感を抱いている為、つい病室へ顔を出さずにいた私は、スポーツ好きの絹世が何時の間にか別の弱々しい少女に変わってしまったような気がして、直ぐには言葉も出ませんでした。ベッドの傍の小さな籐の椅子に腰を下して、じっと絹世の顔を見ていると、ずっと年上の病身の姉さんに附添っているような気もして来て、私の重い口がほぐれるまで暫く間がありました。年寄のように私は天気の話などしました。

「お母さんから手紙来たわ、もうじき私を引取ってくれるって」

絹世はいいました。私にはそのお母さんという言葉が直ぐ絹世の母の富奴さんに結びつ

きませんでした。私の頭では、何か絹世はもう内の人になってしまっていたのです。満叔母さんとの二人暮らしが一番だとは思いますが既に私は絹世を受入れていて、絹世が去ることに、激しく体を突かれた驚きと深い寂しさを感じるのです。

「いつ？」

「もう間もなく、ですって」

絹世は漸く丈夫の時のような、きつい眼差で私を見ました。

「洋ちゃん、すまないけどお花の水取りかえてくれない？ 看護婦さん頼んでもやってくれないの」

白菊の活かった花瓶を持って私は廊下へ出ました。

「ありがとう、ネ、このジュース、もう口あけたけど飲まない？ あけたばかりなの」

水を換えた花瓶を床頭台におきますと、絹世はレモンジュースをすすめました。私は長い坂や三階まで階段を上がって来たので、ひどく喉が乾いていましたので、直ぐジュースの壺のゆるい栓を開けて、陶製のコップに注いでひと息に飲み干しました。その私の喉仏のあたりを絹世はじっと見詰めていました。が、だしぬけに

「ふ、ふ、ふふ、はははは」

白い顔を真赤にして、身を揉んで笑い出したのです。

「何さ、何がおかしのサ、僕とても喉かわいてるんだ」

「そう、たんとお飲みなさい、みんな飲んじやってよ、ふふふ」

「ああ、頂くよ、でも何がおかしいんだい？ へんな人」

私はすっかり上気した絹世の顔をまともに見ました。病室に入った時に見せた病気に悩まされている少女らしい可憐な微笑の影はもう何時もの悪戯つばい笑いの中に跡形なく隠れていました。

「へんよ、そう、へんよ私、へんな子よ、ふふ、洋ちゃんその中にネ、ふふふ、その中にはネ、は、はははは」

到頭絹世は掛蒲団に突伏して、ひくひく肩を動かし、背中を波打たせて笑い出して、もう何んにもいえないようでした。病室の壁に小さなマリヤ様の絵が懸っていました。絹世が何時までも態とのように、くすくすいやらしく笑っているの、私はそのマリヤ様の後光にふちどられた優しい横顔を眺めていました。

「ネ、洋ちゃん、私が病気になっても、あんた知らん顔してたでしよ、全然見舞にも来ないじゃない、見舞のハガキもくれないじゃない、だからひどいことしてあげたの」

「……………」

「そのジュースの中にはネ、ふふふ、あれが入ってるのよ、でも可哀相だからほんのちよっぴりにしてあげたけど」

「何が入ってるんだ、え、何よ？」

「お水よ……だけど、唯のお水じゃなくてよそのコップで入れたの、もう解ったでしよ」
私は啞然として絹世の本性をあらわしたような少女らしくない太々しい表情に氣を奪われていたばかりでした。

晩い秋の冷やかな雨の降る日、絹世は姉さんのように見える若々しい富奴さんに連れられて、私の内から引上げました。良い旦那を見つけた富奴さんは、下町で芸者屋を開くことになったのだそうです。

絹世が去って、内は静かに、というよりしんと寂しくなりました。春の半ばから夏、そして秋へ、絹世が私の内にいたのは短かい期間でしたが、思えばその間、私はこの活発な年上の少女に引廻されて重い病気に罹っていたようでした。

(おわり)

告白

夢見る乙女の想いと願い

葉村佳子

わたくしは、この三月に神戸の高等学校を卒業し、西宮市のK女子大学の英文科へ進むことになった十八才の乙女でございます。小学校時代から習ってまいりました日本舞踊のほうも、おかげさまで、去年のお正月に名取りになることができました。

母は、昨年、わたくしに、とても華やかなお振り袖の着物と、金糸・銀糸をあしらった黒しゅすの帯をあつらえてくれました。綸子ちりめんのその着物を、わたくしは、機会ある毎に眺めては、ひそかに女らしい飲びに浸っております。そのお振り袖と赤い長襦袢が今のわたくしには、たいそう気に入っている

のです。お部屋で、ただひとりになって、これらの衣装に手を通しますと、なんということもなく、ため息が出るのでございます。こんなに美しい着物を着てこんなに美しい帯をしめることのできる女に生まれてきたことのしあわせを思い、わたくしは、しばし、うっとりした気持ちになってしまいます。

そして、わたくしは、いつも、きまったように、あることを夢見るのです。

その夢と申しますのは、いちど、こんな着物姿で、縄で縛られてみたいということなのでございます。

美しい振り袖の着物をきちんと着て、帯を

胸高にしめ、背中であぐらとお太鼓に結んだ姿で、わたくしがお座敷のまんなかに端坐します。わたくしは、目を閉じ、両手を合わせて神さまにお祈りをしています。すると、きれいな男の方が現れ、合掌したわたくしの両手をとり、わたくしの両手首を水平に組み合わせてしまわれます。そして、わたくしの両手首を胸のまえで、白い縄でくくってしまわれます。わたくしは、促されるままに、立ちあがって柱のほうへ歩かされます。わたくしは、柱に向って正坐させられ、両手首を目の高さにあげたままの姿勢で、縄尻を柱につながれてしまいます。

しばらくして、わたくしはこう申します。

「あたくしは、あなたさまに捕えられて、さらわれてきた、悲しい捕われの身でございます。あたくしは、今はもうどうすることもできない捕われの身として、あなたさまのおっしゃるとおりにいたしますから、どうぞ、あたくしをお許しくださいませ。おかあさまが作ってくださった、この美しい振り袖を着た姿のままで、あたくしは、あなたさまのお打ちになる縛しめのお縄を改めてお受けいたしますから、どうぞこの縄をお解きになってくださいませ」

「改めてお縄をお受けいたします——そうおっしゃるのなら、許してあげましょう」

男の方は、柱の縄を解き、前手縛りのわたくしを鏡のまえへ引っ立てます。わたくしは鏡台のまえの座布団のうえに坐ります。ふと鏡を見ますと、わたくしの胸高帯の帯あげが少し乱れて垂れています。

男の方は、そこでやっと、わたくしの両手の縛しめを解いてくださいます。わたくしは思わず、括られていた手首を撫でます。わたくしは、両方の長い袂を膝のうえにきちんと重ね。帯あげを直しながら申します。

「あたくしには、あなたさまのお手にかかっ

て、振り袖姿のまま、きびしい縄をかけられる覚悟ができております。あたくしは、もう諦めております。どうぞ、あたくしの、この両の手を後ろにまわして、お括りになってくださいませ。両手を背中に高くまわされ、両手首をお太鼓のうえで括られてみとうございます。捕われの女らしく、この手を後ろにねじまわされ、後ろ手、高手小手に縛られますから、どうぞ、あたくしにきびしい縛しめの細引きをおかけくださいませ。高胸にも四重、五重の胸縄をおかけくださいませ。からだきゅっとしまつて、とてもいい気持でございましょうから——。縄目姿のあたくしを縄尻をお持ちになって、牢屋へ引っ立ててくださいませ。あたくしは、神妙にあなたさまのお縄をお受けいたします。がんじがらめにきっちり縛りあげられ、もういちど、柱にくくられてみたいのでございます」

「ぼくは、あなたの歩く姿も見たいのです。

長い袖の直線的な美しさが見たいのです。後ろ手にくくられた振り袖姿のお嬢さんを、横からの前からも眺めたいのです。振り袖の袂の振りが垂直に長く垂れて揺れ動くのは、最高の魅力ですからね」

「では、あたくしを、あなたさまのお気の済

むまで歩かせてくださいませ。あたくしは、あなたさまに、後ろから縄尻を取られて、どこへでも引っ立てられますから」

お膝のうえに置いていたわたくしの両手がぐっとつかまれ、後ろにまわされます。わたくしの胸はせつなく騒ぎ始めます。わたくしの胸にさつと二筋の白い縄がまわされて、あでやかな着物と長襦袢の下で、わたくしの両の乳房がしめつけられる瞬間の心のときめきは、もはや表現のしようもございません。ただ切なくて悩ましくって、悲しくって——。

恍惚とした愉悦の十数分かんは、このときから始まるのでございます。

読者のみなさま、十八才のわたくしが、花もはじろうばかりに美しく染められた友禅のお振り袖に胸高帯の姿で、縄でくくられ、後ろ手の下の長い袂を小刻みにふるわせつつ、きりきりと引っ立てられて歩む情景をご想像になってくださいませ。

わたくしは、お座敷に閉じこめられ、床の間の柱を背にして、立ったまま括しつけられます。そして、身悶えするわたくしを許していただくさらない、その男の方は、さらに、わたくしの唇のうえを、白い日本手拭いで縛ってしまわれます。

さるぐつわ——ああ、なんという魅力的な
責め具なのでございましょう。わたくしは、
こんどは、柱のまえで、きちんと坐らされ、
胸をしめつける四筋の縛しめの悲しいまでの
緊縛感を味わいながら、じつとうなだれてお
ります。直線的に垂れた両方の袂の振りは膝
の両側で折れて、長く長く畳のうえに這っ
ているのです。

わたくしは、三尺の袂の振りから覗いてい
る長襦袢の赤い袖を、いとおしいような気持
でみつめたままにございます。わたくしは、
痛いほどの胸の動悸をじっと抑えて、盛装の

まま男の方に捕われて縛られたわが身の運命
に、いつまでも、この心身を委ねているのみ
でございます——。

どなたさまか、わたくしをこのような法悦
の世界に浸らせてくださる方は、いらっしや
いませんか。

今夜もまた、自分のお部屋にひきこもり、
お振り袖と長襦袢と帯と帯あげをそっと出し
てきて、人知れず頬を赤らめながら、それら
に眺め入っているわたくしなのです。

わたくしは、自分のこのひそやかな夢を胸
の底に秘めつつ、寝床に横たわり、あれこれ

と、みずからの捕われ姿を想い描くのでござ
います。

わたくしは、夢のなかに現れるわたくし自
身の晴れ着を着た縄目姿の甘美な感覚に、あ
るときは酔いしれ、またあるときは、振り袖
の袂もちぎれんばかりに身悶えるのでござい
ます。

この幻想が現実のものとなり、わたくしの
夢がかなえられるのは、いつのことなのであ
りましょうか。わたくしは、その日のくるこ
とを一日千秋の思いで待っております。どこ
かにわたくしの理想とする男性が、必ずこの
わたくしを導いて下さるものと信じておりま
す。

長かった冬もどうやら終りを告げ、今日は
エプリル・フールの四月一日を迎えました。
身も心ものびのびと、そよ風が着物の裾を快
くなぶる頃となってきました。わたくしは胸
ふくらむ思いで、この文章を書きつづりまし
た。どうか、このわたくしのお呼びかけにお
応え下さる方の現れますことを、心からお待
ちしております。

(四月一日記)

☆賞金☆

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千元	若干篇
佳作	一篇に付	二千元	若干篇

☆規定☆

一、真実味溢れる告白、どうしても発表し
てみたいという自らの手記、或は自分で体
験された貴重な事実を盛り上げた体験記を
広く読者の皆さまの中から求めます。文章
の巧みさよりも、実際に体験されたもので

懸賞（告白と手記と体験）原稿募集

あるという真実の裏付のあるものが大切だ
と思います。従って必ず自作のものである
ことは勿論、未発表のものに限ります。
二、枚数には制限はありません。用紙も必
ずしも原稿用紙でなくとも結構です。締切
日も別にやかましくきめませんから、いつ
でも、どしどしお寄せ下さい。入選作は最
近号に掲載の上、賞金をお送りします。応
募原稿は読者原稿と区別するため第一頁に
「懸賞告白」とお書き下さい。

☆ ☆ ☆

創作

砂^さ土^どの塔^{とう}

—我が妻、奈津子の記—

たかむら
篁きゆう
久 治

私が自分でサドだと気がついたのは、兵隊として北支へ渡った時からです。でも考えて見れば子供の頃から随分とそんな遊びをやった憶えもありますし、反対に雪の降った夜等に、どうしてもそこに裸で寝て見たくてたまらず、家人の寝静まったのをそっと窺って床を脱け出し、雪囲いの丸太に脱いだ着物をかけると、ふっくらと柔く積った雪の中に身を沈め、全身に力を籠めて、じっと目を瞑って体に触れる雪の冷たさを楽しんだり、私には何だかサドとマゾとは紙の両面の様に本質的

には、同じものの様な気がしてならないのです。

兵隊——。

人間と人間とが全智全能を絞って殺戮しあう、あの異様な状態の中では、サジストで無くとも人間の心の奥底に巢喰う暗黒の部分から、わけの分らないどろどろした生温いものが噴き出して来たとしても、或程度は仕方がないことでしょう。

まして私の様な人間は一層、サド的慾望に襲われるのです、ですが、やっぱり男の捕虜

なんかに着しては殆ど興味が無く、姑娘許りそれも良家のなよなよとした風にも堪えぬ風情の乙女。討伐に行くとか大抵の部落では人間は一人も残って居りません。併し此方で余程慎重に攻撃の気配を秘匿したときとか、又は敵の密偵を捕えたり殺したりした後だと、人間の居る部落を襲撃する事もあったのです。そういった不意討を受けた部落の阿鼻叫喚、まさしく人間の手で造った地獄絵図でなくてなんでしょう。サタンでさえもあれ程徹底的には、惨虐をほしいままにはしなかったでし

よう。

中世紀の宗教画や、ダリの絵等よりも遙かに残酷で淫猥です、血に飢えた獣達は関の声を挙げて犠牲者を捕えて来ると、男共を虐殺したあと、女だけを集めて部屋に入れ残酷の限りをつくすのです、民家から酒の壺を探し鶏を締め豚を殺し、女達を抱くのには飽きると何列にも仰向けに並べて、部屋一杯に敷き詰め、手と手、足と足、髪と髪、と言う風に要処要処を縛って白い人肌の絨氈の上にでんとあぐらをかいて、酒盛を始めたこともありま

ゆがめられてゆくか、ということを知って頂きたかったに過ぎません。

悪夢のような戦争も、日本の敗戦によってピリオドを打ち、そして復員、虚脱、呆然自失、次には生きるが為の逞ましい生存欲、闇屋、誰でもが辿ったコースです、そこで私は奈津子という娘に会ったのです。奈津子は銀行の事務員でした。聡明な美しい少女、二十一才、大柄な娘の多い中で、どちらかと言えば瘦せ型の、アイヌの血が入ってるんじゃないかと首を傾げる程の色白、色白と言うよりも透明な青味を持った病的な白さでした。私が奈津子に会ったのは、彼女が面白半分に行って見たヤンキーのキャンプの中でさんざん玩具にされ、まだ暗いうちに跣足で逃げ帰って来た彼女の友達の部屋でした。私はそのとき襖を開けて飛び込んで来た彼女の蒼白い顔を一層蒼白にして立った姿を今でも目を瞑ると憶い出す事が出来る程、強く印象に残って居ます。

扨て私達が一番最初に、と言っても同時に最後でもありましたが、生活を始めたのは福島県のH町、そうです。あの有名な塔のある町です。汽車がH町に近づくにつれて、一番始めに見えて来ます。灯台なんて言う不恰好

なものじゃありません、もっとすらっとした象牙の曲りを真直に伸して立てたような高貴とでも言いたい程の気品を備えた何時見上げても心が疼く程の美しさ、神々しさ、人肌を思わせる白さ、それが二百五十何米かの高さで聳えて居るのです。その下は広い一面の月見草の原で、私達が住んでる間中ずっと、毎夜、あの金色の花を美しく吊下げて咲いてました。そこは昔、と言っても大正の始め頃でしたが、アメリカとの無線電信に使ったもので、始めは同じ塔が二つあって、その間にアンテナを張ってあったのだそうです。それが何時の頃にか一本倒してしまい、私達が行った時には、一本だけしかありませんでした。

私は今でも画家ですが、当時は、まだ苦闘時代で、その月見草の原に出ては、毎日シュールの奇怪な絵を描いて居たのです。あの頃一番好きな画家はダリでした。それからルドン、タンギー、キリコ、エルンストの化鳥、そんなイメージを頭一杯に詰めてキャンバスに黒紫の絵具を塗りつけるのです。その原には不思議に子供も遊びには来ません。小さな町、人口一万位だったでしょうか、塔の原は鉄道線路を越えて町の反対側にありました。夕方パレットの絵具を落して居ると、奈津子

がやって来ます。それから私達の楽しい遊びが始まるのです。

夏の遅い黄昏は、白い塔の肌を黄金色に染め上げて、燃えるように立って居ます。大きな金の柱の下の一匹の小犬、それが私と奈津子でした。塔の影は長く長く原を横切つてずっと無限に伸びて居ます。その影の中で奈津子は着物を脱ぎます。青磁の肌、噛みつきたい程の水々しさです。この肌に、そう思うと体が痺れる様な衝動が起つて来ます。レオノールフィニーの絵を御覧になった事がありますか、あの美しさです、あけびの中の種の処、いい色でしょう、あんな色なんです。

奈津子にマゾヒス的傾向がある事を発見したのは、結婚して一週間程した頃でした。まだ春も早い梅が散った頃、夜中に水の音がするのです。目を覚まして見ると奈津子が居ません。そっと起きて、水音を頼りに行つて見ると風呂場です。真逆見られはしないと思つたのでしょうか。入口の戸を開放して、浴槽に漬つてゐるのです。その日は風呂を立てない日でした。『水風呂』ノカーツと一時に頭に血が上つて来ました。物の陰に



隠れて胸をときめかせ乍ら覗きました。未だ冷水の中に身を硬ばらせて目を瞑つてじっとしています。そして時々両手で髪をかき上げると、息を止めて潜るのです。水の上に黒い髪だけがぽっかり浮びそれを抑えてる白い細い指が異様に美しい、ザーツと水音を立てて

頭を上げると、目を瞑つた儘プルプルと顔を振つて、大きな溜息を吐く、よく公園の池で見掛ける白い鷺鳥がやるのと同じです。大きな溜息を吐いた満足そうな顔、安らかに寝てる子供の顔に漂つて居る弥勒菩薩の微笑に似た満足感が溢れて居るのです。私は思い

切って飛出して抱き締めてやりたい程の嬉しさでした。併し一応伏せておいて、と又水に潜った隙に足音を忍ばせて布団に戻ると

（そうか、そうだったのか、奈津子はマゾか、素晴らしい、ウウッ）

拳を握って体を縮めたい程の喜びでした。それから独り、これからの色々な想像に心が打震えました。想像の霧はどんどん拡がって、後から後から止めどなく噴き出します。あれもして見たい、こうもして見たい、それは同時に私の画題でもあるのです。悦虐の表情、ダリ、砂漠、井戸の中、いや雨の中。

雲

早く雲が降ればいい。そうか、死の遊戯、いや死の一步手前の遊戯。それは何か面白い遊びを思いついた時の子供の喜びでした。明日、蛇をつかまえて来て、空の弁当箱に入れてお母さんを驚かしてやろう。お母さん気絶しちゃうかな？ 打ち処が悪いと死んじゃうな。

死の遊戯

そうです。素晴らしい期待の喜び、事業家が何か素敵に儲る事業を思いついた時、発明家が何かのヒントを見附けた時、でもそれも私のあの時の喜びの何百分の一にも足りない

と思います。

「奈津子」

「なあに？」

ふっと目を覚めた様に見せかけて、驚かさないう様に冷たい体を抱き込むと言いました。

「奈津子、見てたんだよ、ザブザブ」

「マア！」今迄私の顔を仰いで居た顔をいきなり潜り込まして

「いいんだよ、僕にとっちゃその方が嬉しいんだ。僕もね、自分で本当はサジストじゃないのかな、と考えてるんだ。ねえ、僕達だけの問題じゃないか、誰に迷惑をかけるんでもないもの、却って嬉しいよ」

「本当？」

亀の子の様に恐る恐る窺うのです。

「本当だぜ、それに僕の絵の為にだっていいんだ。どれだけ助かるか知れないよ、お前だって、僕の描いてる絵を見たら分るじゃないか、あれは僕達の世界のものなんだ、人間のね、心の奥の暗い物陰の光景に光を当てたんだよ、そうだろう？」

「うん」懐の中で背くのでした。

「人間はね、誰でも自分の心が皆分った積りで居るんだけど、本当はほんの、一寸しか知りゃしないんだ。そしてね、そう言うのには

蓋をして釘付けにしちゃうんだよ。するとこの心が満たされないもんだから、夢になって現れたり、どうかすると病気に逃場を求めたり、ひどい時には狂人に迄されちゃうんだよ、だから僕達がこうして一緒になれたと言う事は大いに感謝すべきだと思うよ、僕は本当に嬉しいよ」

「あたしも、でもあたし今迄どんなに気を遣ったか分りゃしない、恥しくってね——嬉しいわ！」

○

塔はコンクリートで丁度煙突の様に中空が空洞です。そこに四つの窓があって、天辺迄鉄の梯子で繋がって居るのです。錆びついてロボロ、握ると真赤な跡がついて、それが又血の様に生々しい美しさなのです。下に小さい入口があって、そこから頂上に向っていつでも空気が吹上げて居ます。真夏でも水底のように冷くて、その上暗くてじめじめして居ます。内側の壁にさわると、冷たい汗をかいて居てつーと滴り落ちる事もあるのです。上に向って吹き抜ける風は、ぼーっと洞ろな音を立てて、空に消えて行きます。塔が吠える唸る、咳く、いいえ、ホッと溜息を吐くのです。その中で音を立てると共鳴し、反響し、

ひたひたと壁に当って、エコーを引き乍ら這い上って行きます。下で話をするそれが鉄梯子を伝ってスルスルと昇って行くのが分るのです。それは私達には気味が悪いとか、恐ろしいとか言うものではありません。身の痺れる様な、孤独の嬉しさです。私達だけの世界、此の世と次元の違う地底の世界です。私達はそこにもう一つの私達だけの世界を創造したのです。

舞台装置は充分です。あとは名優の登場を待つだけです。私と奈津子は俳優であると共に私は演出家、そして二人共観客なのです。その上客席では一人の画家の目が美を求めてうっとりとして居るのです。これが美しいもので無くて一体何が美しいのでしょうか。美は私達の日常見て居る宇宙の秩序の中に許りあるのじゃありません。違う秩序、違う次元の中にもあります。コクトーが描いて見せた世界、ボードレールの詩の世界、ヨハネの黙示録、フローベールの聖アントワヌの誘惑の世界、みんな此の世の中よりも、ずっと美しいじゃありませんか、蜜蜂には紫外線が見えるそうですが、その世界。

『砂土の塔』の中の私と奈津子とだけの世界をお目にかけましょう。

違った世界の中に奈津子をおいて、私は画題を求めて、その日は絵具を塗りました。勿論油絵具ではありません。泥絵具、奈津子は勿論素肌です。その皮を剥いた水蜜桃の様な肌に赤や青の筋を引く、時には血の滴る様な風に細い筋に喉笛から赤いレーキを垂らして又は脇腹にどっぷりなすったり。時にはニジンスキーの牧神の午後の様に木の肌の模様を描いたり、両手を上げて立たせた体をスケートのスピンの様に廻らせて、細い筆で横巻きの模様を描くのです。足も股の附根から片足を上げさせて一本宛筋を引いて行く、仲々楽しい遊びです。それがぼうっと暗い中に口から血を滴らし乍ら鉄梯子にぶら下るんですから、素敵です。

塔の中にはお謎え向きの陰惨な大交響楽があるし、冷いじめじめした空気、ロンドン塔の底か、ウイリアム・テルのストーベンドルの土牢。そうして下がってる体を細い棒の先につけた注射針で遠くからチクチクつくのです。息を止めて一寸さわった位に刺すのですが、どうしても呼吸がせわしくなって、ピクピク手が震えます。針が奈津子の肌に触れると、キューツと唇を歪める。口から滴った様に描いた赤い絵具の血が、恰で本物の様に動くのです。乳房の先をつつこうとするのですが、どうしても外れてしまうのです。一寸の手の震えでも、先端の針は大きく揺れます。その時の体を締めつける緊迫感、それにじっと息をひそめて待ってる奈津子の表情、血を滴らせた唇を噛みしめて、神経は只乳房の先だけに集中して居ます。結えられた手の痛さも寒さもありません。何処に居るのかさえも忘れてしまうのです。時間も停止して、全存在は只針の先だけ、やっとならいをつけて、つっと伸してやったのが、どうしたはずみか外れて乳房の脇に少し深く刺ったりすると、危いからじっと堪えて居る悦楽の表情。それがもつといいのは臍です。両手を鉄梯子に括ってぶらんと充分に伸びた臍は、自由を失ってだらしく拡がって居ます。それを針で突くのです。ぴくっと震えて、こそばゆい、痛いのを通り越して感覚が一瞬消失するのじゃないでしょうか。今迄開いてた目をキューとしわが寄る程強く閉じて、その押し附けた臉の中に一体何が見えるのでしょうか？マゾヒストでなければ見る事の出来ない美しいもの、写真に撮れるのなら見せて上げたいと思います。

写真のリアリズムの前でだったら、吃度兜

を脱いで頭を下げますよ。その時は知らん顔をして居ても夜になってから、そっと起上って引張り出して来るに違いないのです。

大体世の中の偽善者は、私達を準狂人位に思つて軽蔑してるのですが、私はサジストやマゾヒストと考えてる人程素直な美しい心の持主はないと思うのです。聖書に「心に姦淫したるものは既に姦淫したるなり」とありますが、右の頬を打たれて左の頬を出すキリスト、自分から十字架にかけられたキリスト、彼キリストこそ最大の最も素直な美しいマゾヒストだと思うのです。世界中何故にも心に姦淫を描かない男も女も居ませんし、サジやマゾの夢を楽しまなかった人なんて居ないんです。只皆、不正直だから、偽善を装うのです。私は心の美しさで常識人と自称する偽善者共を思いつ切り軽蔑したいと思うのです。私達はキリストの直系だと考えていいのじゃないでしょうか、私達サジスト、マゾヒストの誇りです。キリストの孫達、キリストもきっと十字架の上で悦唐の喜びに涙を流して微笑したに違いありません。そして私達の無邪気な遊戯を口を綻ばせて御覧になって居らっしゃるに違いありません。

奈津子との耽美の遊戯は色塗りや、針突き

から次第に高等な遊びになりました。併し私達の遊戯はどこ迄も違った世界の美を求める事ですから、グロテスクな事は望みません。どこ迄も美しく、楽しく、心の隅々迄隈無く光を当てて眺め合うのです。心の何処かに巢をくって苦しんで居たものを引出して自然の空気を吸わしてやるのです。

そうそうこんなのもありました。体を蚕の蛹のように縛つて、それを四本或は六本のビール壺の上に乗せるのです。俯向けにして両肩に一つ宛、曲げて後ろに折った膝に一つ宛乳房の下かお臍の所に一つ宛、四本の時には太腿の真中辺、ビール壺は無論空壺で口の処が上です。それが柔い肌にはばかりうずまつて、深い穴になります。二三分もすると腹を上げて居る筋肉の釈れと、壺の口の痛みに呻くのです。体を揺れば壺が倒れます。

「アアッ、アアッ」

一秒が何十分にも感じられる声、縛られた両手の指がヒクヒク動く、足の指、動かせるものはそれだけです。その呻き声が塔のアンプリアイアーを通して、幾重にも重って木霊し乍ら昇って行きます。じっとり汗ばんだ背中、とに角動けば壺が倒れるのです。呻き乍ら静かに頭を上げたり下げたりします。壺は

益々肉に喰い込んで骨迄届くかと思える程、その呻いて居る奈津子の背中に煉瓦を一つ載せてやるのです。

「ウウッーン」

せいぜい五秒、ぐらぐらっ、体が動いてビール瓶と一緒に崩れたっ切り、肩を震わせて胸を波打たせて居ます。今倒れたビール瓶の上に反動をつけて仰向になるとじっと目を開けて塔のずっとてっぺんを見詰めて。それから今度は三本のビール瓶をゴロ代りにして、床の上を転がすのです。此の時は丸太棒の様に真直伸して縛り直すと、仰向けにして、体の下に三本の瓶を敷き、ごろごろ転がして廻るのです。塔の底はコンクリートの土間になって居て、直径二十米位だったでしょうか、真中にやはりコンクリートの高さ一米半位の立方体の台があるのです。その上に立たせてよく奴隷市場をやりました。だが残念な事には奴隷は一人お客も一人、仲買人も兼ねて居るのです。たくさん居た処だったら、どんなに楽しい事でしょう。奴隷は足枷の鎖をじゃらつかせて、恥しそうに顔を伏せ乍ら台の上に追い上げられます。仲買人兼顧客は細い長い猛獣遣いの革の鞭を持って居ます。ヒューッとしていて床を打つとピシッと小気味のい



い音を立てます。その音が幾つも幾つも重なってごわんぐわん響くのですから断然素敵です。奴隷は白い布を巻いてその端を抑えて恥しげに俯向いて、ピシッ、クワン、クワン、クワン、堪らないでしよう。

「顔を上げろ」威嚇的に大いに鞭を鳴らしします。

「真直立つんだ」ピシッ、未だ体には当りません。仲買人は下の床に居ます。

「ずっと前に出ろ」足枷を引曳る音が波になって塔全体に響き渡ります。

「コラッ、その手を離せ！」一寸塔をくねらせて抑えてた手を離すとぱらっと前が開く、

肩から掛けて居た白い紗天が滑り落ちると言う仕掛けです。これに金属で作った貞操帯を付けさせて置くともったいいんですが――。

「両手をしっかり上げろ！もっと高くだ、見えないぞ手を上げると二つの乳房が引上げられて乳首が上を向く、それに仄暗い光が当たります。

「よおし、指は曲るか、一本宛折って見ろ」ゆっくりゆっくり両指を折って又開く

「うーん、手首、よーし、次は肘だ、よーしその儘手を後ろに組め、その儘横を向け、後ろだ」(ピシッ)床を打ったのですが奈津子は思わずはっと振向く、

「何処を見るか」(ピシッ)

今度は本当に鞭が飛びます。でもそんなに強く打つわけではありません。それでも驚いてへたへたとそこに膝を突きます。

「起きろ！」

起きた処を又ピシッ、

「よおし前を向け、足は上るか？右足を前に上げろ、もっとだ、うん今度は横に上げろ」ぎちゃがちゃと鎖の音です。灰色のじめじめした中の鎖の音。

「膝は曲るか？ん、足首！よーし、又後ろを向け、足を開いて体を前に曲げろ、もっ

とだ」

私は女の体の中で一番可愛い処は膝の裏側だと思ふんです。可愛さ余って、何とか百倍、揃え掛けたそこへピシッ

「あーっ」と叫んで転びます。

悲鳴がエコーを呼んで天井に抜けます。倒れた処をピシリピシリ、悲鳴、笛の様な音。

それが床を打つ鞭の音に交って醸し出す素晴らしい音楽、奈津子は咄嗟に着物を抱えて台を跳び下りて逃げます。足枷の鎖の音、白い肌を追いかけて鞭を鳴らして、台の陰に隠れた処をいきなり台に飛上って上からピシリ、奈津子は塔の内側の壁すれすれに逃げ廻る。

仲買人は台の上からサーカスの馬を追う様に追い廻すのです。でも本当に打つのは何回もありません。要するにその気分です。足枷の鎖を引曳って、びったり壁に身をつけて、鞭は益々早くなります。時々鞭の先が背に当たると、悲鳴が飛びます。

「もう勘忍して、許して下さい！」

「駄目だよ、這いつくばる迄やるんだ」

塔の中は何処にも逃げ場はありません。ただぐるぐる廻る許り、奈津子は夢中で逃げます。仲買人はそれを追って鞭を鳴らす。白い奴隷は疲れに疲れて大きく息を吐いてへたへ

たと倒れかかる、それを又少し鞭を鳴らすのです。起き上って二三歩よろよろ。

「ほんと、もう駄目」

切れ切れの言葉が五里も走って来た犬の様な息の下から洩れます。

「よし、止めよう、どうだった、今日は」
「とっても」

そうして奈津子を柔しく抱いて温めてやるのです。ぐったり伸びた冷たい体をさすってやると鞭の跡が薄い蚯蚓脹れになって盛上ってきます。

「あたし、このまま死んでしまいたいそうだな」

私は用意してきたウイスキーを口に含んで口移しに吞ませてやります。「ごくん」と喉を膨らませて目を瞑ったまま、

「楽しいわ、半分夢の中に居るみたい」

「そうだよ、今はローマ時代だもの、この原のすぐ向うにはコロシウムがあるんだ、声が聞えるだろう？ 素晴らしいじゃないか」

これをアナクロニズムと笑う事が出来るでしょうか、

「あたし少し眠ってもいいでしょう、この夢を覚したくないの、あたしは奴隷ね、貴方買ってくれたのね、うんと可愛いがってね——あああ、素晴らしいわ、ね、体を畳んでしま

ってぎゅうっと抱いて、そうもって強く、骨が折れてもいい事よ、ライオン居ないかしら貴方競技に行くの止めて、こうして抱いててね、このままずっと死んでしまいたい、サドの塔よ、お前は私を別の世界に連れて行って来れる、でも私にとってはお前はマゾの塔なのよ、私は今此の方に買われた許りの女奴隷、うんと鞭で叩いて虐めて頂戴、此の体はみんな貴方のもの、足の爪も耳垢も。

塔よ、私はお前があるから生きてるのよ
若しお前がガラガラ崩れてしまったら

私はその下敷になって死んでしまう

若しその前に私が死んだら

白い綺麗な皮に挽いて

お前の頭の上から月見草の原に

パラパラ撒いて貰おう

そんな詩を歌い乍ら、私に抱かれて眠るのでした。軽い寝息をサドの塔は、何十倍にも拡大して、塔の中じゅう駆け廻るのです。私は、眠ったままの奈津子を抱いて外へ出ました。もう暗くなった空には一面の星と、十六夜月が出て居ました。月見草は金色の吊鏡を下げて、一面に咲き誇って居ます。月の光が奈津子の体全体を照して蒼白い体を一層蒼白くして、恰で螢光を発して居る様にも見える

のです。奈津子はローマの女奴隷の夢でも見てるのでしょうか。時々寝顔を綻ばせて、微笑むのです。美しい心、人間の置き忘れて来た美しい荷物を取りに、夢の翼に乗って、時間の空間を飛んでるのでしょうか。

マゾヒストのみが知る幸福、マゾヒストは常識人達より一つだけ余分に幸を持ってるのでは無いでしょうか、此の世界から自由自在に抜けられる魔法を習ったキリストの孫、それが私達の姿ではありませんか。

やがて目を覚めた奈津子と連れ立って帰ります。月が二人の影を長く長く道一杯伸して居ます。奈津子は後ろの塔を振向いてホッと吐息を吐きます。

「ねえ、貴方、あたし達のこの幸せ、何時迄続くかしら？」

「一生だろう」

「一生？、明日死ねば明日でも一生ね」

「うん、でもそれでもいいんじゃないか？」

「いいわ、何時死んでも」

「思い残す処なしと言う処か？」

「そう、でもどうせ死ぬんならマゾヒストらしい美しい死に方がしたいわね」

「マゾヒストの誇りを持ってか、ハハハ」

その笑声はちっとも響きません。塔の中の

笑が大交響楽なら今の笑はハモニカの笑い。

「外の世界って話らないね」

「……………」

「今ね、素敵な絵のテーマを考えているんだが、少し手が込んでるんだよ、ちゃんと極つたらモデルを頼むぞ」

「ええ、いいわ、私も楽しくて、貴方の勉強にもなるんですもの、だけど、どんな事するの？」

「計は密なるを以てよしとする、秘密秘密」
「意地悪ね、一寸だけでいい、ヒントでもいいわ」

「駄目駄目、アッと驚く様な事なんだから楽しみにしてろよ」

「話んないの、まあいいや、何時から？」

「分らないけどもう少し経ったら、今道具を作ってるんだ」

「危いの？」

「少しは危いかも知れないけど、君なら大丈夫だよ」

「そう？でも危い方が楽しいわね？」

「死の遊戯って処だね、死の遊戯、生の遊戯、神の遊戯、美の遊戯、美の遊戯って言うのが一番いいね」

「美の遊戯、ねえ、魂の遊戯って言うのどう

かしら」

「心の中の痛めつけられた魂を楽しく遊ばせるか？ それもいいね」

そんな話を話して帰るのでした。満ち足りた充足感、快い疲労、石油の手触の様なサラサラした軽さです。決して不健康なものではありません。淫売窟での痴態の方がずっと不健康なのでは無いでしょうか？

サジストよ、誇りを持って

マゾヒストよ、誇りを持って

天国は汝等の手の内にあり

偽善者よ、哀れなるものよ

汝等の魂は消ゆる事なき

ゲヘナの火の柱に投げ込まれ

神の子等を悔りし

罪を報われん、

キリストの孫達よ

天風の門は汝等の前に開けり

恐れる事なく入れ

天国は汝等のものなり

それは汝等の庭なり

白蛇の如く浴みし

蛇の如く絡め

門は開かれたり、耽美の門

手を取り合いて入れ

心の暗きを取り出し

明るき光を当てよ、

黄金の如く白金の如く美しく燦めかん

美しき殉真の誇り、

てらいなく、迷わずに

門より入れ

そこそ汝等のみ国なり

それから四、五日した日です。私達は又サドの塔へ出掛けました。月の美しい夜遅く、戸を開けて入ると先ず嚴重に内側から錠を下すと、用意の道具を台の上に載せます。ランプを灯しました。ゆらゆら揺れる赤い光が、周囲の壁に奇怪な模様を描いて当ります。風の強い日でした。ごーっごーっと絶え間なく吠え立てる塔の唸りが、壁を伝って底迄下りて来ます。ランプの周囲丈がぼんやり明るく上の方は地獄の闇、

「気味が悪いか？」

「ううん、現実の世の中に此んな処があると
思えない位」

そんな囁きさえも大きく反響してぐわうぐわう上って行くのです。私は先ず鉄梯子に登って五十米位の踊り場になつて手擦りにロープの滑車を縛りつける。それにロープをかけ両端を垂らして下りて来ます。今度は反対

側の梯子を登ってそこにも同じ様にロープをかける。それで真中のロープを二本一緒につなぎ合わせてそこに奈津子を吊るすのです。

一方奈津子の方は、膝の辺を結え、足首を結え、足首に金の鎖を銅鑼を下げるのです。上は何もしません。唯目隠しだけ、両手は二本のロープを握ります。始めは手首を縛ったのですが後からは、自由に握る様にしました。そして私はもう一方の端を両手に持って引くのです。つまり一本綱のブランコを股に挟んで上って行くと言う処です。段々ロープを引くと体は立上り、それにつれて銅鑼と鎖が触れ合う音が、風に吠える塔の唸りに混じって物凄い音を立てます。始めの中は両方を平均に引きまします。体は真直に上って、時々銅鑼が鳴ります。併し一方を強く引くといきなり体が傾いて、ぶらんぶらん揺れ乍ら物凄い音を立てて塔全体に響き渡ります。目隠しをして居るから、地上一米でも十米でも同じです。詰り田圃の鳴子の理屈です。銅鑼の音が反響共鳴して物凄い音を立てて塔の中一杯を駆け廻る。たとえ手を離しても体が逆さになってロープが太腿により附くだけです。大丈夫ですが、手が縛ってあると、少し強く綱を引くと呻ります。自由な時は腕一杯伸し切って

とうとう一本を離してしまい両手で一本だけの綱に縋り付く。今度は反対側のロープを強く引く、体が大きくブランコのように揺れて股のロープが強く喰い込む、奈津子は頭の中に海賊船の櫓か帆に吊り下げられた光景が、敵の城壁から下げられた処でも想像してゐるのしょう。物凄い風の音、激しく響く銅鑼や鎖の音、その中を一本の綱に命を托して浮んで居る、時々悲鳴に似た悦虐の声を上げる。それが笛の様に鋭く冴え渡るのです。赤いランプの炎が陰惨な光を当てる。いつか奈津子の白い肌に、びっしょりと汗がにじみ出しています。

「もう止して！」

「いや、此れからだ」

そう言う二本の綱を手繰ったまま、身に近づくと竹の先に松の葉をつけたので突きまします。両手に握った綱、それだけを頼りに身をくねらせて避けようとしまします。動けば動く程体が揺れて銅が響く、そんな工合です。三十分もそうして下りて来た奈津子はぐったりして動こうともしません。

「どうだった？」又口移しに酒を吞ましてやると

「まるで空中を飛んでいるみたい」

そんな台詞を呟く様になってました。

滑車と綱はよく使いました。五十米位の所迄吊上げて、止めると、足につけた細い綱を持ってぐるぐる廻すのです。目が廻ってはらわたから絞り出す様な悲鳴を上げます。強く振ると壁すれすれ迄近づきます。その時の悲鳴、併しそんな事もとも角として、何と言っても一番楽しいのは梯子登りです。その時には私もパンツ一枚になりました、二匹の白い猿が鉄梯子を登ります。灰色のコンクリートの壁の錆びついた鉄梯子を息を切らして登る二人の光景を想像してごらんなさい。あんな美しいものはそうありません。裸のまま土牢から逃げ出して行く女囚、私はよくそのポーズをクロッキーしたものです。あれが一人だけでなくもって何人かの女だったらもっともって、ずっと楽しいに違いありません。遊び疲れた後、二人はよく窓の一坪程の踊り場に腰掛けて休みました。ひやりとした夏の夜の冷気が、塔の肌を伝って上って来ます。中から吹き出す風が奈津子の髪を襟足から掻き上げて、黒い綿の様に一塊りにそよがせるのです。

「奈津子少し痩せたね」

そう言うのと、あの透き通る頬を私の肩に載

せて

「そうよ、いっその事、三日月の様に痩せようかしら？」

「だって余り痩せると可愛想で虐められなくなるもの」

「でも可愛いから虐めるんでしょう？」

「そうなんだね、愛しているから虐めるんだね。虐められるのが楽しいんだと考えて楽しくしてやろうと思って虐めるんだね」

だが私の本当の心は何が何だか分らないのです。マゾヒストだから虐める、マゾヒストの妻だから虐めてお互に楽しむ、それじゃマゾヒストでない妻を虐めたら楽しくないのか？ やっぱ楽しいじゃないか。それじゃマゾヒストの女の場合には誰に虐められても楽しいのか？ 何だかそうではなさそうな様に思える。だが口の方は、そんな事にはお構いなし

「詰り僕達の愛情の表現さね、シュールリアリズムの表現方法さ、結局対象を愛さなくては出来ないんだね。詰り愛情の無いサジズムは惨虐だけだ」

（併し、案外それさえも喜ぶんじゃないんだろうか？）そんな風にも思えるのでした。

「こう言う遊戯は中毒性なのね、私達もうど

うにもならないのかしら、止めたらどうなるのかしら？」

「分らない、大体止められないよ」

「だけど子供だけは欲しくないわ」

本当だ。子供なんか居たらこんな事出来るもんか、併し心の何処かにやっぱり何か満たされない穴が口を空けて居るのです。私達は何の人達より喜びが一つ多いだけに、その代り何か一つ欠けてるものがあるのかも知れません。

人々と私達、私達と狂人、この三つは決して、断続ではありません。三色のプリズムです。連続した色合の違った事、一家の団らんに混れない孤独、犯罪者が黒、気狂が赤としたら、私達は薄い赤黒い血の色かも知れません。だが私達はそれを蔑って置く事が出来ない人の子。

時々フツとこんな風に考える事もあるので。生き抜こうと励まして居る心に時々自殺の誘惑の影がサッと走る様に――。

「ねえ、貴方」

「うん？」

「貴方、世の中、怖くない？」

「怖くない事もない」

「変な人」



「君は？」

「あたし此の頃怖い、死ぬ事じゃないの、
こうして生きて行く事が怖い」

「ふーん？ 怖いって言うの？」

「あたし気が狂うんじゃないかしら、と思う

事があるのよ、ああして呻いてるでしょう。

すると後の方でもう意識が体から飛び出しちやうのよ。そんな時、ああもう此の儘意識が飛んで行った切り戻って来ないんじゃないかしら、なんて考えるよ、そしておかしい事に

却てその方が、いい様な気になるのよ」

無意識に生きて居る人間が気狂。そう言う論理も半分位は成立つかも知れない、

「併しそれならそれで苦しくないんだもの、
或は、却ていいかも知れないんじゃないのか
い」

「厭だわ、奈津子とうとう色狂いになったなんて言われて生きてるの、
それよりもお母様が可哀想だわ……
ねお願い、若しあたし気狂になった
ら貴方の手で殺してね、ね、ね」
身を震わせてしっかり私の手を握るのでした。

「うん、いいよ、併し君がそうになったら僕の方も気が狂うかも知れないな」

「それじゃ気狂同志の死の遊戯……
おお気味が悪い」

そうして、やがてあの日がやって来たのです。朝からどんより曇った重い空気が圧しかぶさった様な日でした。その日は少し寒かったせいもあったので、袋に入れる準備をしました。塔の中は、大部色んな道具が増えて、サーカスの楽屋か、博物館

の物置の様になってました。少しも風が無く塔の中は珍らしく死の様な静寂さでした。歩く度にかさかさ響いて、何時にも無い無気味サ。

戸が開いて奈津子がやって来ると、早速遊戯に取掛りました。薄い木綿のキッチリした袋にパンティ一枚になった奈津子を押し込みます。頭だけ出して口を閉めると、荷物の様に床に転がして先ず一服です。煙草の煙がゆらゆらするのも珍らしい日です。

「静かなのね、今日」

「こんな日に地震があるそうだね」

「いやよ、嚇しっこなしよ」

奈津子は袋に入れられて台の上に転がされた儘じっとしてました。袋はきちっと体の線を出して貼着いて居ます。それを見てたら急にその袋を濡らして見たくなりました。ギリシャ彫刻のモデルの様にキッチリ体に張りついた布、黙って飛出してバケツに水を汲んで来ると物も言わずにいきなり頭からぶっ掛けました。

「まあ、ひどい、黙ってするなんて卑怯だわ」

だがどうする事も出来ない、じっと跼むだけです。布は水に濡れて、体にぴったり附い

て、裸体よりも、もっとエロチックです。乳房の先がポツンと二つ薄赤く突出して居る。それを見てると何かして見たくなった。針、クリップ、詰らない。何か無いかな、蛇があるといいんだけど、結局、クリップで挟むだけで我慢しました。それでも時間が経つにつれて痛くなる。顔をしかめます。ふと小さなコンクリートのかけらを拾って来て、クリップの歯を乳首の間に挟んで見ました。

「止めて、痛い痛い」顔をしかめて口をへの字にします。身動きすれば布が動くから余計痛いのです。取ってやって一休み、

「どう？」

「痛いわ、痛いだけで、余りいい気持ちじゃない、でも押れたら案外いいかも知れないわ、それよりどうするの？」

「まあ、待て、悠くりやるから」

それからおもむろに竹を割って笥を拵えしました。

「目隠しするか？」

「いいわ」

返事が終わらない中にいきなり、ピシッとやったのです。予期してないだけに倍の効果があります。それから連続、袋の水気が弾き飛ばされて顔に当たります。

「ウウッ、ウウッ」

一筋毎に呻きます。初めにやった辺がもう赤く筋がついて居る。十五位叩いて一息入れると、

「舌大丈夫か？」

「嚙まして」

それから猿轡を咬まして、やり直します。三十位からもう苦痛の色は消えて、陶醉に入ります。袋の中で体を揉んで転ります。私は台の周囲をぐるぐる廻って叩き続ける。やがてその中ぐったりして余り動かなくなりま

す。中止、叩くのを止めると、目を閉じたま

ま、うっとり体を弛めてあえいで居ます。

「どう？」、「訊いても一寸頭を振って肯くだけ、じっと痺れるような快感を味って居るのでしょう。もう一枚皮を着た違う獣のように肩を震わせて、呼吸を整えて居ます。

「水！」

薄く目を開けて呑む水が胃に落ちて行くのが分ります。

「あとは？」

「少し休もう」

「いや!! もっとして、何でもいい!!」

目を閉じたまま、奈津子の魂は何処を歩いて居るのでしょうか。奈津子の魂は心の暗闇か

ら起き上って首を上げ、ふわふわ歩き出したのでしよう。或は一週に四千年の時間を越えて、ナイルの畔にでも居るのでしょいか、神々の前にひれ伏す白い犠牲、火の神アンモンに捧げる血の滴る乙女の躰になったのかも知れません。若しかしたら阿房宮の地下室で、密通を責め苛まれて居る美女に変じたのか――

「ねえ、もっと、もっとうんと！」

ぎよっとする程鋭い叫びです。

「よーし、泣くなよ」

歯を噛みしめてそう言くと、今度は針金を取りました。十番位の鉄線をしっかりと輪にすると、袋の上から、肩、胸、腹、腰、腿、胫足と嵌めます。そして俯伏せにして丈夫な棒を背に当てて針金の輪を一つ宛縛り附けます。

最後に目隠しをしてそれも棒に結えんと、棒の両端を滑車のロープにつけて引上げる。台の上から二米位の処へ宙吊りに吊すのです。そしてブランコのように悠り振る。針金が体に喰い込んで深くくびれ、それが振られるのでごくわずか動きます。一分位すると喰り始めます。

「うむっ」初めは息を止め、唇を噛んで堪えてるが、喰込みが段々ひどくなるにつれて、濡れた布に包まれた体が、ヒクヒク痙攣を起

した様に震えます。

「ウワーッ、ウワーッ」

体が揺れ動く度に喰りとも悲鳴ともつかない物凄いい叫びを上げる、その叫びが塔のまわりの壁に反射し、一層情惨な雰囲気醸し出し、天井の窓から抜けて行きます。

台に上って、奈津子の体を抱き止めると、奈津子は目を開いて、悲しみを堪えてる様なそれで居て、何とも言えない満足そうな目、

「下そうか」

ロープを離してそっと下すと、針金が肉を千切る程激しく喰い込み、青虫の体の様に幾つもの段に分れてしまつて居る。猿轡を外してやりますと、はーっ、はーっ肺中の空気を吐き出す様な激しい吐息。

「でもいいわ」

声にならない声、私には分るのです。

「解いてやろうか？」

プルンと首を横に振って、薄い微笑を付けて来る。思わず頬を擦り附けました。

「どう、これは」

「とってもすてき」

呼吸とも声ともつかない囁きです。

「大丈夫かな？」

何だか少し心配になって来たのです。針金

で血行障害が余りひどくなったら大変だと思つたのです。

「少し針金外そう、危いぞ」

肯いたので胫と腹と胸を外しました。外した痕が赤く血さえ滲んで居る。

「痛いだろう？」

「びりびりするわ、でも半分痺れてるの、余り痛かないわ」

「止そうか？」

「イヤ」鋭い声が反響して『ヒヤァッ』と言う風に塔中駆け廻りました。

「あたし今日、とっても、どうにもならないの。こう、何でもいいんだけど、エイって言う様な、何、針金で胴を真二つにでもされて見たいのよ、何でもいいんだ、こう、キューッと――アァア」

最後に溜息ともつかない、地の底に吸われ行く様な絶望に似た吐息でした。

「危いな、本当に大丈夫か？ それに何だか今日は薄気味の悪い日だぜ」

本当にその時に止めればよかったのです。

でも魔がさしたと言うんでしょうか。理由は分りません。或は一寸でも奈津子の希望を叶えさせてやろうと思ったのかも知れません。魔の誘惑、死のさそい、何か分りません。

瞬間、大した事は無いだろうと思いました。

「よし、じゃ一寸だけだぞ」

そう言うのと、肩と腹と足首だけ残して針金を除きました。

「目隠しするか？」

「顔出しておいて、息が苦しいから」

素顔の儘髪の毛で棒に頭を結えしました。その儘水を一杯飲ませて（あれも今考えると死水と言うのだったのです。奈津子は始める前に水が欲しいなんて言った事は無かったんですが）そろそろと、滑車のロープを引きました。重い体が細い針金で肩腹足首の三箇で吊下げられます。中でも腹の処は臍のすぐ下、俗に言うウエストの辺でしょうが全体重がその一線にかかります。体が台の上を離れる。

一纏、二纏

二三秒すると、痛みを耐える呻きが洩れました。唇から血が出る程噛みしめて、「止めて」と言えば直ぐ下すのですが、奈津子はじっと痛みを耐えて楽しんでる様でした。

十纏、三十纏

体は綺麗に二つに分れて、腹の針金が背骨迄届くと思われる程深く深く喰い込んで、いいえ、腹を喰い切って

「奈津子！」

呼ぶと、静かに頭を廻して泣きそうな顔で

微笑かけました。

「大丈夫か？」

「……………」

「危いから下すぞ」

にこっと笑ってうなづいたその時です。つるつと肩の針金が滑って、喉にかかってしまったのです。

「シマッタ!!」

大急ぎでロープを弛める。いきなり離すわけに行きません。体は一米近く上ってました。でも、もう遅かった。

体が台につくと、いきなり走り寄り、すぐ針金を外して抱き上げました。腹の針金は奈津子の希望通り体を真二つにした程深く深く喰い込み、奈津子は死んでしまったのです。

無我夢中で袋の布を裂き破ると、人工呼吸をして見ました。併し、人工呼吸は習っておくものですね、私にはほんの真似しか出来ません。いくらやって見ても、奈津子は生き返りはないのです。体は未だ温く、眠ってると思えないのですが、両頬を激しく打って、叫びました。

「奈津子!! 奈津子!!」

でも奈津子は、あの悲しそうな、苦しそ

な、それで居て堪らない嬉しさを籠めた不思議な微笑を浮べたま、目を開かないのです。

指で目を開けて見ました。だが黒眼が無いのです。ゾーッとしました。激しく名を呼び乍ら、胸をゆすり、肩をゆすり、揉みくちやになる程振り廻して呼醒そうとしました。

「ワッ」

子供の様に泣きました。その時今迄静かだった塔に突然グラグラと音がして続いて激しい轟、雷鳴と夕立でした。

「アア、素晴らしい、ぴったりだ、奈津子の魂が抜けて行くんだ。奈津子が雷を呼んだんだ、アアアアア」

それから数日して私は奈津子の希望通り、体を白い灰に焼き、それと一緒に

「此れは神の子、イエスの孫なり、汚れ無き魂は天に昇り、肉体の灰は此の塔の原に撒かる、我は此の塔を今日よりマゾの塔と改める奈津子よ左様なら」

こう書いた紙と、奈津子の肖像画とを灰にして混ぜると、遙か塔の上から撒きました。灰は粉々になり、月見草の原に散ってゆきました。

(おわり)

妊婦秘蔵写真特集

ここに分譲いたします妊婦写真、読者有志の提供になるもので、モデルは二十才になる美貌の若妻です。本誌上にて関谷夫人が登場したことに對して感激された某氏が特に自ら撮影の秘蔵のネガを提供されたのでありますが、提供者の希望により誌上での公開が許されませんでした。分譲品としてのみ発表いたします。

○妊娠八カ月の股間縛

大手札印画紙鮮明焼付

三枚一組 四〇〇円

モデル 児玉 昌子

略号(には)

妊娠八カ月の二十二才の若妻がペンペンたるはちきれそうな大きな腹をつき出して立った全身裸像、しかも可憐な美貌でチャームングに微笑んでいるというマニヤ垂涎のアイデアに加うるに妊婦の股間縛りという最高のアイデアによる秘蔵品。

○妊娠八カ月のヌード縛

大手札印画紙鮮明焼付

三枚一組 四〇〇円

モデル 児玉 昌子

略号(にあ)

後手に縛られ猿ぐつわをされた八カ月の妊婦が大きなお腹をつき出してすくくと裸で立った正面像。見事にふくらんだお腹が妊娠線もあざやかに、目の前に見ることが出来る妊婦写真の決定版！

○妊娠五カ月の緊縛

大手札印画紙鮮明焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 児玉 昌子

略号(にこ)

同じモデルの妊娠五カ月のときの緊縛フォト。八カ月のときのお腹の大きさと比較すると如何に差があるか一目で見分けることが出来る面白いです。

○妊娠前のヌード緊縛

大手札印画紙鮮明焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 児玉 昌子

略号(まさ)

妊娠中の写真と比較するため同じモデルの妊娠前の常態の写真焼増いたします。如何に妊娠中のお腹が大きいかということがよくわかりますから一緒に求め下さい。

大好評 妊婦緊縛写真分譲追加発表

先月号にて児玉昌子さんの妊娠中のヌード並に緊縛写真の分譲を開始しましたところ、妊婦マニアの方から非常な喜びを以って迎えられ、その膨満した腹部は、まさにマニア垂涎の逸品として絶讃を博しました。ここに更に変わった姿態の臨月近き妊婦写真を御覧にいたします。何卒はちきれんばかりの巨大な腹部に御期待下さい。

○妊婦、股間縛 (九カ月)

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号(にふ)

妊娠線もあざやかに、ふっくらと膨隆した腹部は、妊婦ならではの美しさをぞくぞくとする魅力をもっておりわしている。黒ずんだ乳量を中心に、大きくふくらんだ巨大な乳房は、紐に締めつけられて、なお一層素晴らしい盛り上りを見せている。あのほっそりとスタイルのよい昌子さんが妊娠したら、このようなポリウムのある腹部、腰部になるのであるか。芳紀二十二才の美しい若妻のはちきれそうな妊娠時の健康体をごらんに入れます。更に近々、同じモデルの分娩後の緊縛フォトも分譲できる予定です。

○妊婦、股間縛 (六カ月)

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号(にと)

提供された同じモデルの中、比較の便をはかるため、更に六カ月目の股間縛りを分譲いたします。御参考にごらん頂くと面白いと思います。

○妊娠初期の

緊縛とヌード

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号(ぬろ)

膨らみかけた腹部を露出して恥かしげに顔を掩ったヌードの妊婦と洋装の高手小手縛り。なお、妊婦フォトについては、今後出来るだけ発表したいと考えておりますので、モデルについて御心当りおありの方は御連絡下さるようお願いいたします。

「今月の新版分讓品」

○女体争斗場面十二態

大手札印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円

略号「おん」

モデル 春日ルミ、愛川悦子

代表的なサジスチン春日ルミ女史がバーのマダムという忙しい仕事の寸暇をさいてモデルとして登場。野性的な肢体の持主、愛川悦子嬢を相手に、組んずはぐれつの激しい争斗場面。互いに相手の急所を攻めて完全に屈伏させた上、尻の下に敷いてしまおうと全力をつくして争うシーンの数々。

○オムツの股間しばり

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号「むく」 モデル 東浦ひかる

口には頬もくびれよと厳しい狼ぐつわ、ゴムのオシメカパーの半ばはずれかけたボタンの間から浴衣地のオシメがむざんにものぞいている。胸から腹、そしてカパーの上からの股間縛り。荒々しい男の足で踏みつけられて喘ぐひかるの豊かな裸身。

○強烈責め、被虐の果て

大手札印画紙 五枚一組 五〇〇円

略号「りお」 モデル 梨花悠紀子

完全に飼育し終えた梨花嬢が吊責めやエビ責め、逆エビ責めなどにも満足せず、被虐の

終局点として誠に強烈きわまりない縄目を、全身くびれきつてしまいう程施され、男の手でさいなまれ足で踏みつけられ、感極まって嗚咽の叫びを挙げた数コマを生来の天性による被虐モデル梨花悠紀子の代表的ポーズとして紹介します。

○乳房いじめ

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号「とお」 モデル 大塚 啓子

乳房の上下に紐をかけて、ねじり上げ締めつけ、豊かな乳房をむっくりと盛りあがらせて可愛い啓子の苦痛にもだえる顔を見る。

○強制浣腸三態

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号「きか」 モデル 絹川 文代

臀部を高々ともち上げて髪ふり乱して浣腸のポーズを無理矢理にとらされた後手しばりの文代嬢に対して、もろもろの浣腸器具が男の手によって悪魔のように襲ってくる。

○激痛！逆エビ責め

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号「きえ」 モデル 大塚 啓子

後手縛りの縄と両足首の縄とが若々しい女体がしなう程締めつけられて、その連結した縄をぐいぐいと持ち上げられる。全身は背中を二つ折りとなり、さすがの啓子嬢もその激痛に、うううと呻めきながら目に涙をためて

許しを乞う全くトリックのない迫真的な強烈な逆エビ責めのシーン四態。

○美貌の裸身に縄目

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号「きん」 モデル 絹川 文代

絹川文代の美貌にきっちりかまされた豆絞りの狼ぐつわ、一糸まとわぬ麗身に黒ずんで手垢に汚れた縄が厳しくまといつき、しなをつくって悶える表情と全身のうねりとを刻明に描写して絹川文代ファンに捧げる。

○腰元吊り責め

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号「こり」 モデル 村井知可子

高島田に矢張り、白足袋姿の腰元が、一人の武士のために庭の木に、後手縛りのまま高々と宙に吊り上げられ、刀の鞘を縄目にこじ入れられて折檻される時代劇映画の一場面の如き華麗にしてロマンな被虐シーン。

○腰元間諜の拷問

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号「こく」 モデル 村井知可子

昨日までは腰元として御殿に仕えた身も、今は敵方の間諜として、庭の樹に縛りつけられ、情容赦なく白状を強いられる哀れな一人の乙女に過ぎなかった。刀を手にした侍は、庭に晒された可憐ないけにえに対して、嗜虐的な興味をもって拷問の手を下すのだった。

◆強烈マゾ絵画

春川ナミオ画

〃巨臀に屈伏する〃

略号「まか」

B 6版感光紙焼付 四枚一組 五〇〇円

人間トイレ

洋式トイレの中、美しい女御主人の御用便の下に仰向けとなつて人間トイレの使命を果すコプロマニヤの天国の図。

人間椅子

逞ましい豊満な臀部が男の顔の上にデンとのっかって、全体重で押しつぶすと瘦せた男は今にも押し潰されそう。

臀部に潰された顔

洋椅子の上に仰向けになったMの顔の上に、びったりと大きなお尻を据えた娘のニヤニヤした誇らしげな表情

太股に埋れたM男

男の首はポリウムのある女の両脚に跨がれて、その間に埋れてしまい今まさに窒息寸前の恍惚境にあえいでいる。

新作マゾ・フォト

「股責の地獄」

大塚啓子嬢の新作

男の首の上にどっかりとまたがり股で責める大塚啓子嬢の新作をここに分譲品として発表いたします。従来マゾ物の御注文がS物に比してその何十分の一しかありませんでしたが、マゾ画の「まか」と共に要望が多いようでしたら、更に引続いて新作を発表する予定です。今回の

大手札印画紙焼付

四枚一組 五〇〇円

略号「まそ」

分はすべて啓子嬢の股の間に挟まれたM男が鼻をあぐらにかかされ、首を両股で力いっぱい締めつけられるなど、大切な男の顔が女の太股によって、さんざんになぶられ辱しめられ、上から侮蔑の目で眺められるといった汚辱ぶりを表しました。御注文の如何では、M物はこれにて一応発表中止します。

滝れい子画 〆娘と娘の斗争場面画〆

女体血斗『女が女を降伏させるまで』
略号「りる」

A 5版感光紙焼付 七枚一組 一〇〇〇円

○若々しい肢体のはちきれそうな健康美の二人の娘が組んずはぐれつのあられもない死闘を繰りひろげる女斗美絵巻を滝れい子さんの麗筆によって絵画化して頂きました。

○激しく相争う二つの美しい女体、やがて、一方が力つきて屈伏し勝者の大きな臀部の下に首を顔を下敷きにさせられ、涙に

むせぶという過程を順を追って描いて貰いました。

○女斗美、女斗マニヤ、女相撲マニヤの方々に捧げるべく、写真では表現できない味を出すため特に寸暇をさいてれい子画伯に描いて頂いた画集です。マニヤの方々のお気に入れば幸いです。

どうか御一見下さい。

東浦ひかる 『黒フンドシの女』 二題

第一組

股に喰い込む黒フン

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

略号「とし」

豊かな尻の割目にぐっと喰い込む黒フンドシの有様を三枚のフォトによって、刻明に描き出し、揮マニヤの方々にその美しさを味って頂きます。

第二組

股を開いた黒フン

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

略号「とひ」

びったりと股に締められた黒フンドシのしめ具合を正面から十分に股をひらいてマニヤの方々にごらんにいれようという特殊フェチ・フォト。

三条春彦画

極彩色印刷

時代物責絵巻

画帖

詳細解説付 八枚 一組 三〇〇円 略号「時代」

女スリと岡っ引き

牡丹の刺青が女盛りの脂ぎつた肌に鮮やかにうかぶ女スリが今や美男の岡っ引きに捕えられて取縄をあられもない姿を白昼下にさらけ出す美しさ。

犬公方と侍女

お犬さまに無礼を働いたという美しい侍女が、お庭先でぐるぐる巻きに縛られて激しい折檻を加えられている。恐怖におののく美女にとびつく土佐犬。

新撰組と芸妓

祇園の名妓に難題をふきかけた横恋慕の隊士が後手に縛り上げた手首の間へ短槍をねじ込んで締めつける。忽ち盛り上る二の腕の縄目のむごたらしさ。

山法師と静御前

義経の行先を白状させようと賞金目当の荒法師たちが、可憐な静御前を剥玉子のようににはがして後手に縛り上げた。恥しさにもだえる美女のもたえ。

小紫と悪旗本連

水野邸へかつぎ込まれた小紫が白柄組の悪旗本に囲まれて猫に弄られる鼠のように股間縛りにされて天井から吊り下げられなぶり者にされるのであった。

十郎左衛門と腰元

意に従わぬ美貌の腰元を腰巻一枚に剥いで、その雪のような白肌に刀の提緒できりきりと縛り庭先へ逃げようとする黒髪をむんずと掴み引き寄せる。

淀君と千姫

大阪落城迫る頃、淀君の指図によって、侍女たちが千姫を後手に縛り上げ敵方への逃亡を防ぐのだった。はかない運命をなげきながら端坐する千姫。

八百屋お七

引廻しのために裸馬にのせられたお七は、白装束にひしひしと掛けられた本縄の痛ましさと非人の荒くれ男にかこまれたお七の白い素足が目にしみる。

梨花悠紀子逆吊り写真特集

吊り責めが大好きだという梨花悠紀子嬢の強烈にしてトリックのない真正正銘の吊り責め写真は誌上に分譲写真に大好評を博しております。殊に「りつ1」「りつ2」は注文殺到の大盛況のため、ここに新作の嗜虐味あふれた逆さ吊りのフォト三集を発表いたします。美貌の梨花嬢が苦痛と悦虐にあえぐ表情と全身、殊に吊られた足首の喰い込む縄目に御注目下さい。

第一集 両足首括り逆吊り

略号「さか」

大中判印画紙(13×19種) 焼付 五枚一組 一〇〇〇円

足首を揃えて括られた縄を滑車に連結されて、足を上にして逆さに吊り下げられた美女梨花悠紀子両手は背中後手に縛られ、胸に耐えうるのも梨花嬢なればこそ。

第二集 逆吊りの女体折檻

略号「させ」

大中判印画紙(13×19種) 焼付 五枚一組 一〇〇〇円

逆さ吊りにあえぐ梨花悠紀子に對して、更にあくなき暴虐の手は情容赦なく竹の棒にて女体のあらゆるところを叩き、こじ入れ、踏みつけ激しい折檻を加える。美しい折檻に耐えうるのも梨花嬢なればこそ。

第三集 手足逆宙吊り

略号「さと」

大中判印画紙(13×19種) 焼付 五枚一組 一〇〇〇円

両足首と両後手首を括った縄を滑車に連結して、じりじりと宙に吊り上げてゆく。顔、胸、腹を下にして、足首と背中を上にして宙に浮いてゆく梨花悠紀子、柔肌によろ。

新版分譲品案内

分娩後縛り

略号

(につ)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 児玉 昌子

妊婦のヌード縛りと股間縛りとでファンの大好評を博した児玉昌子さんの分娩後の豊満な乳房や臀部、縮小した腹部を、あの妊婦ファトと比較して頂くために、ここに特別提供いたします。

分娩後股間縛

略号

(にて)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 児玉 昌子

分娩によって縮小した腹部は股間縛によって更に痛々しくくびられていく。しかし、さすがに乳房だけは豊かに息づいて、経産婦の貫禄を示している。妊婦の頃の腹部と分娩後の腹部を同じ児玉昌子という女性によって具さに比較して下さい。

相撲着用

略号

(すま)

大手札 11枚一組 一〇〇〇円

モデル 大塚 啓子

素裸になった啓子嬢が相撲着用を股に当てて締めてゆく有様を順を追ってキャッチし、更に相撲着用をキリリと着用した前後左右、いろいろポーズを変えた姿態をマニヤのお好みによって開陳しました。

乳房いじめ

略号

(とき)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

ぶつくりとした東浦嬢の乳房は何重にも掛った縄で一層ふくれ上っている。この乳房に加えられるいたぶりの数々。ヘヤーブラシで紅の乳首が無惨に痛められる。

六尺 縛

略号

(ろい)

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 東浦ひかる

蒲団に悶ゆ

略号

(なき)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

悦虐の果て

略号

(なみ)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

椅子エビ責

略号

(おき)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

六尺 縛

略号

(ろは)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

東浦の切腹

略号

(えん)

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 東浦ひかる

浣腸シリーズ

略号

(れち)

大手札 12枚一組 一〇〇〇円

モデル 梨花悠紀子

弓吊り責め

略号

(つき)

大手札 二枚一組 二五〇円

モデル 梨花悠紀子

手足宙吊り

略号

(つた)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 梨花悠紀子

強烈エビ縛

略号

(もい)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

乳房責の苦悶

略号

(もろ)

大手札 二枚一組 二〇〇円

モデル 関谷富佐子

全裸ムチ打

略号

(もた)

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 関谷富佐子

六尺 縛の女

略号

(くろ)

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 関谷富佐子

強打に泣く

略号

(むち)

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 関谷富佐子

レインコートの拘束

略号

(いろ)

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 大塚 啓子

ゴム布に包まれて

略号

(こま)

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 梨花悠紀子

狙われた和装の娘

略号

(ねい)

大手札 12枚一組 一〇〇〇円

モデル 愛川 悦子

裸女繃帯!!面

略号

(ふく)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子



○ 過日封切られた大蔵映画の「肉体のゴルデンゲート」のスクリーンを見て驚きもしすっかりコーフンさせられてしまった。海岸で甘人ばかりの若い美女が揃ってビキニスタイルの水着姿、一枚は波打際に四ツ這になった男達の首に一人宛、この美女がまたがってズラツと横隊に並んでいる。一枚は、この男女のコンビが肩車で騎馬戦の大奮闘。あとの一枚はビキニスタイルの水着女性の下半身だけの大写し、グッと股を開いている。その股倉に男三人が首を突ッ込ん

で今にもその豊満な女性のお尻に潰されんとしてる処。大体、映画のスクリーンは、実際の画面に出て来ぬシーンを客寄せの為に刺戟的煽情的に写し出したものが多い。前出の「御免遊ばせ花婿先生」の女学生の男生徒組伏「温泉芸者」の叶順子様男馬騎乗もその例に漏れず、偽りの看板、実際のフィルムにはなかったので全く落胆させられました。然し、そういう時小生は屢々それを上映してる映画館に電話をかける。そして若い女性の声が応答すると、例えば「スクリーンで叶順子が男を馬にして乗り廻す処があるけれども、本当に画面にそういう処が出ますか」というように問合わせ、電話の終りに「ああ貴女のお馬になりたいノ」などと言ってみる。或る時は相手の女性に「いやらしいノ」とどやされ「変態ノ」と罵しられ、或は冷笑される。いずれにしてもマゾにとつては喜びである。一度「銀座のお姐ちゃん」だったか、やはりスクリーンで団令子他二人の女性が男を馬にしてるのがあり、そのような電話を北野劇場にした時、「そんな場面はありませんよ、そんなのあった方が宜しいの?」と言われ「うん大好きなんだ」と答

えたら「ホホ」と高笑いで冷笑された時は本当に嬉しかった。さて話を戻してその「肉体のゴルデン・ゲート」では、さすがにその三枚のスクリーンの中、終りの一枚は実際のフィルムには出て来なかったが、海岸で夫々十人位の男女の紅組、白組が対抗先ず号令で、両組の男は女性の足許に背を向けて跪まづく。次の号令で、両組の女性は、グイと男の首にまたがり肩車に乗る。戦斗開始の合図により、両軍入り乱れての大騎馬戦が展開され、約5分余りだろうか。その熱斗が詳さに写し出される。男馬の馬上で相手を捻ぢ伏せ合い揉み合い、激しく争う美女達、その尻の下、股の間で男の首は滅茶無茶に痛めつけられている。素晴らしい光景、やはり「痴人の愛」の如き芸術作品とは違つて、ドギツくて品がないのは止むを得ないが何んといつてもマゾヒスト必見のフィルムと言うべきでしょう。前述のようにこのような映画のスクリーンを誌上に集めて頂き、マゾさることを、切に切に希望致します。扱て話は変わりますが、この間国電の中で美しい脚の持主の若い女性が正面に坐ったので、私はそ

の足先を舐めるように見つめていた。然し不幸にも電車が混んで来て、そのおみ足も見えなくなってしまうたので、あきらめて私は新聞を読み始めた。その後暫くして少し車両もあいて来て、ふと再び前を見ると、先刻の女性の前に私に背を向けて稍々脚を開いて之亦美しく脚の若い女性が立っており、その脚の間から最前の女性のおみ足が垣間見られる。思わず私は妄想した。手前の立っている女性の脚の間に這いつくばって首を突ッ込んで、向う側の女性のおみ足に口づけし、更にはペロペロ舐めさせて頂けたらと。貴誌のマゾ・フォトもそのような場面、男一人を二人或はそれ以上の女性と組合せた構成、或は逆に女性一人が二人或はそれ以上の男性共を虐めつける場面等、変ったアイディアを探り上げて下さるよう猶種々と研究の程お願いします。小生の長期海外出張で奇クを入手出来ぬ間に待望のM特が出版され、帰って来た時は既に在庫なく、あきらめて居りましたが、本日神田の書店で入手、その素晴らしさに感激しております。殊にグラビヤと夫々の小説の挿画が仮定よりはるかに魅惑的にマゾ心を揺さぶります。

是非共又近い中にM特を御願ひ。
(横浜八姫島痴人V)

はじめて読者通信に発表をお願いいたします。小生が女の相撲に興味を持つようになったのは次の理由による小生の住む近くの青梅の諏訪神社の夏祭があり、毎年小生の都市など近隣から青年団体の相撲部が招待され対抗試合を行います。二年ほど前このお祭の中に六人の女の力士が余興の相撲を行いました。非常に肥った三十位のおかみさん達で女が相撲をとる事は全くはじめての事なので驚きました。小生達の相撲はこの女相撲にくわれてしまいました。小生はその時から女の相撲が頭に残りいろいろの人に聞きましたところ、友達から貴誌にくわしく出ているということを知ったわけです。それから一年になる。本が出る日を楽しみにして愛読しています。観戦記など本当に面白く読んでいます。月によって記事がないので残念です。楽しみに待って本屋に行き中を調べてがっかりして、そのまま帰る読者の気持を考えて下さい。それからさし絵は全部スクラップしました。写真のせてくれないのはどうしたわけか。毎月一枚位

はのせて下さい。分譲写真では安サラーマンなので無理です。是非お願いいたします。それから貴誌をみて山形とか伊万里とかいろいろ女の相撲のあることをのせてくれませんがはっきりした所や月日など調べて下さい。近くの場所曜日なら見に行くことも出来ると思っています。よろしく小生の声を取り入れて下さい、お願いいたします。
(立川市A・C生V)

小生長い事御誌をたのしく拝見させていただいて居る者ですが小生学生時代からのオムツと綿ネルのお腰のマニアで小生もここ四年間と云うもの一日ともかかした事なく毎夜床に入る時にはオムツ三枚股にあて、桃色の綿ネルのお腰をかけて、それらの直接肌にさわるあたかみを感じながらねて居ります。全国的御誌愛読者の女性のかたで着用すみの桃色か赤の綿ネルのお腰をおもちのかたは居りませんか。又女性の方が着用されましたオムツがありましたら、ぜひ小生にお知らせ願ひ度、何卒お世話下されます様編集部の皆様よろしく願ひします。小生は唯今はパンツ、ズロース、割ポイ着の製造業をし

最近版分譲品案内

バンド開股

略号「はこ」

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

ナマのアテゴムもあらわに、月経帯をびったりと肌に密着するように着用して、両股を大字に開いて、バンドの中心部分を大写真でとらんていれます。

バンド責め

略号「はん」

大手札 五枚一組 五〇〇円

モデル 東浦ひかる

後手にひしひしと厳しく縛られた豊満な女体は、メンスバンドを無理矢理つけさせられて、手当てをする部分をさらけ出させ、両股を八の字に開かせられる。脱がさせられた月経帯が股のまわりに散乱していても自分ではどうすることも出来ない。

バンド足挙

略号「はと」

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

月経帯を穿かされ、あからさまにアテゴムを見せるのさへ恥しいのに、男の手で片足を高々と無理に真直上に挙げさせられるのは、耐えられない恰好である。縛りなしの片足挙のポーズを強要する触手。

目下着用中

略号「もか」

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

メンスバンドを自らの手で穿きつつある様子を前後からキャッチした。

夫人の表情

略号「せや」

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

いろいろの事情から口絵には発表できない関谷夫人の素晴らしい悦唐の表情をとっておきのネガから特別提供します。一回の撮影に僅か数ポーズしか撮影できなかった際のムチ打ちに悶える夫人のすべてがこの三葉のフォトに集約されています。

若妻の切腹

略号「わか」

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 甘木 春子

お臍の下に、ぐっと刺し込まれた短剣の刃先が皮下脂肪に突き刺った有様をフォト化した切腹マニヤとそのパートナートによる若妻の介添切腹。豊かな下腹部を男の手によって切り裂かれる若妻の被虐のポーズ。自ら切腹させられて他人の手によって介添切腹の新作。

て居ります。女性の方でオムツマニアの方が居りましたら、文通し度く思つて居ります。出来ましたらこの方もお願い致します。(埼玉八羽生)〇

私はマゾヒストで五十年もすごし「奇ク」を何より愛読している者です。しかし私にはいわゆるMSプレイなるものが、プレイなるが故に物足りないのです。マゾ、フオトはいつも緩慢な表情や、冗談めかしたポーズなどのみで一向に迫力なく、むしろ私を失望させるのが常です。私はもっと真剣なものと実力的で戯れのない、男女間の真の倒錯を夢想しています。いや、夢想ばかりでなく、その実証を求め、その実現に弱々しくも努力して来ました。明言すれば、私は真に強猛な女性にあこがれているのです。柔道の黒帯、空手の修練者、或はまた女ながらもケンカの名手であるとか言うような。ですから、何月号でしたかの諸岡夫人の話などは私にとって全く何度読み返しても飽きない文面でした。そういう異性と私は充分の敵愾心、ないしは憎悪をもって本気に斗いたい。手加減やプレイはしないつもりです。しかし私は大し

て強くありませんから、諸岡夫人のような真の強者には恐らく敗北するでしょう。しかし最後まで抵抗し、遂に半死半生の眼にあつて仕方なく降参し、屈伏する。その上で私も心からの忠誠を感じるようになるのです。女性が富貴だから、美貌だから、グラマーだからなどという条件では私には全く忠誠心が起りません。私もこんな線に沿って、実際にいくつかの経験もしました。それは私にとって此の上もない人生の収穫だと思つて大切にしています。しかし、それでも私にはまだ不足があるのでそれは私の実例に出てくる女性が根が善良なことなのです。だから彼女らは許すのが早く、その責めにも真の恐怖を起すに足りないものを感じるのです。これはプレイではないのだが何かプレイ的な後味を思わせるものがあるのです。そこで私のおこがれは遂に、悪い女を求めるに至りました。女ギャング、女強盗、硬派の非行少女など、昔でいえば強力犯的な毒婦、そんな女たちが金銭を奪うために私を襲う。私はむしろ財産を守るため必死に争うが、彼女の組打ち上手のため、あえなくその股の下に抑えられ、詫びるのもきかず、

短刀が私のノドへ向つてくる。そんな場面をいつも脳裡に描いています。こんな願望は何かピントが狂っているのでしょうか「奇ク」をいくから見ても、こんな実悪的な記事にぶっかりませんが。私の夢想は何かアブ道のルール外に逸脱しているのでしょうか。いささか迷っています。諸氏のご意見おきかせください。(東京都八第二フーテン老人)〇

数年前より時折奇クを拝見したり代理部写真を手して楽しんでるサディストの一人として希望を申述べます。サディストにも種々な好みがあり、しばり、吊り、ムチからゴム、浣腸と私には一寸理解出来ない種類もありますが何れにせよ常識を外れていればこそと思います。ところが時折愛読者通信や記事を読んでいると一つの好みとしてアクロバットの世界があります。かく申す私も其の一人です。何時頃かははっきりしません。私が幼少時代にサーカスのアクロバットを演ずる少女を見て異常な感じを取った記憶がありますから私の此の道の好みと思えばいい分と早熟であつたと思います。戦前は青山文子とか岡本姉妹の様な代

表的なアクロダンサーの舞台を見てひそかに楽しんでいたり、又時々たま来日するマーカス・ショウ、パンテージショウ等の海外スターの演ずる本格的アクロを見る機会はありませんが現在からみればダンサーの体格も悪く又風紀取締りも厳しい時代故妖しくうねるダンサーの白い線を充分楽しむことは許されませんでした。それに比べれば現在は全く百花咲乱れる観があり、ストリップ全盛時代を迎えてステージにフロアーに美しく均勢のとれた姿態を惜しげもなく最少限度の部分を覆う他は全てを私達の眼前にさらし、白蛇の如く輝くヌードを堪能出来るのに全く感謝に耐えません。然しサディストとしてアクロバットに異様な興味をひかれる私にとり物足りないところがあります。それは之等のダンサー諸嬢の踊りが非常に早いテンポのためあの難しい且つ苦しいテクニクをいとも楽々とやっつけずい分無理な姿勢をとり乍ら何の苦もなさそうにニコニコ笑つたりすることです。其の点戦前派のダンサーのアクロはテンポも非常にゆっくりと難しいポーズの時は笑うどころか額にシワを寄せ如何にも苦しうでした。且つ岡

乙組七十集

大手札判印画紙 (9×13 匁) 焼付

各組一枚一組（送料共）

Z1	ゴム猿轡	(梨花悠紀子)
Z2	囚女六三号	(柳初子)
Z3	猪手足吊り	(梨花悠紀子)
Z4	逆エビ縛り	(大塚啓子)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z
 2221201918171615141312111098765
 逆手足吊り (東浦ひかる)
 臍なぶり (大塚啓子)
 ハリッケ (梨花悠子)
 無茶な猿轡 (竹野ひろ子)
 裸身の受縄 (前本妙子)
 くこの字の足指 (桜井葉子)
 喰込む白縄 (東浦ひかる)
 強烈荒縄責 (梨花悠子)
 黒縄高手小 (四方清美)
 足吊り嬌態 (絹川文代)
 黒髪いじめ (大井小夜子)
 豊満被虐縛 (大塚啓子)
 全裸後手縛 (加茂良子)
 引き回し (東浦ひかる)
 ザリガニ (梨花悠子)
 淫らな縛り (愛川悦子)
 豊腎責め (絹川文代)
 ローソク責 (東浦ひかる)

Z
46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23

美肌いじめ (絹川文代)
鼻ゼメ仰向 (加茂良子)
恐怖の瞬間 (若原明子)
火箸責め (梨花悠紀子)
全裸海老責め (熱海容子)
ベッドの痼態 (絹川文代)
足の裏擦り (大塚啓子)
閨の女体飾 (竹野ひろ子)
首絞めゼメ (大塚啓子)
鼻孔責め (若原明子)
悦虐放心 (梨花悠紀子)
手枷足ぐさり (四方清美)
寢室のプレイ (花本京子)
猿雪の妙味 (梨花悠紀子)
首繩柱しばり (絹川文代)
巻煙草責め (大塚啓子)
尻立てポーズ (桜井葉子)
エビ責 (東浦ひかる)
彼女の好物 (竹野ひろ子)
ワンピース (花本京子)
荒縄竹棒責 (梨花悠紀子)
浣腸責ポーズ (大塚啓子)
鏡に映す裸 (山路ミヨ子)
苦悶に喘ぐ (大塚啓子)

Z
706968676665646362616059585756555453525150494847

恥しさに耐えて（愛川悦子）
亀甲乳房責（梨花悠紀子）
強烈的全裸晒（愛川悦子）
強制的開股縛り（絹川文代）
白肌全裸縛り（田中芳代）
女大生恥態（梨花悠紀子）
縄トゲ責め（竹野ひろ子）
ゴム人形（桜井葉子）
胴縄の重量感（田中芳代）
オムツ逆エビ（絹川文代）
全裸股間縛り（愛川悦子）
檻の緊縛裸体（愛川悦子）
セーラー服（梨花悠紀子）
鏡の中の全裸像（大塚啓子）
痛めた全裸像（大塚啓子）
被虐の果て（館典子）
庭園の惨虐（梨花悠紀子）
荒縄仕置室（絹川文代）
全裸逆エビ縛（梨花悠紀子）
欄間宙吊り（東浦ひかる）
全裸猿轡（大塚啓子）
逆十字エビ（絹川文代）
酔後の緊縛（大塚啓子）

本姉妹がある映画館のアトラクションとしてアクロを演じた時、最も難しいと思われる体を反らせて殆んど三つ折とし両ひざの間からのぞいた顔はむしろ悲壮に近いものでした。しかもこの時余り無理なテクニクを使ったためか体元素に戻すことが出来なくなりポーズがくずれ顔一面に苦痛が走り舞台の下手で見ていたマネージャーがハッとして舞台に飛んで出そう

になりましたがやっと立直って体を元に戻しました。此の時の苦しみを客席にあって感知した私は胸の内から締め付けられる様な気がしました。こうした異様な感覚を何とかして再び味わいたいと思っておりますが其後はこんな難しいテクニックを使うダンサーもなくいささか物足りなさを感じている次第です。之は個人の好みでしょうが私は貴社のモデルとして梨花、絹

川、両嬢の様に適当にしまった体を好みます。然し之等の諸嬢もアクロバットのポーズが本格的に出て来る程充分訓練されていないと思いますので現在アクロバットダンサーとして活躍している人の仲から特に協力を求めて本格的アクロポーズによる責め写真が作って頂けたらどんなに有難いだろうかと思ひます。(鈴木生)

春の気配も一段と色濃くなり、皆様如何お過ごしですか。女相撲マニアとして春の兆を受けながら既刊誌雪崎京人氏提供の女斗美絵巻を開き眺めながら楽しんでゐる雪崎京人氏の読物類もさることながら、同氏提供の女斗美絵巻は誠に傑作ばかり、我々マニアには貴重な存在となった。特に口絵の色彩女相撲は実に素晴らしくクリン・ヒットと言えるし、稽古場の

女力士は限りたいた愛着を感じさせる。最近号では岡平氏が小説懐古談などを発表されており、一応楽しませてくれるが、迫力や大胆さが乏しい。小生の観察する限り、岡平氏は女斗美を以て、うしろ暗さ、控え目が文体を一貫しているが、女斗美自体、決して社会的に非難されるものではない。あの女子プロレスのグロストリップのエロは女相撲以上のエログロが公然と公開されそれを好んだからと云って同氏の人格的評価をなじられることもなからう。同氏の将来の活躍を期待し、苦言を呈する。扱て、KK誌も十年前の如く三百ページ以上のポリュームのあったころであれば女相撲類の読物の掲載も無理ではないと思われるが、二百ページに圧縮した今日では、毎月女斗美を望むこともむずかしいかもしれない。長年の読者としてその点は編集子の苦勞を理解できるので、むしろ従来の女斗美シリーズを他の画伯を起用、続行するほうがマニアにとっても喜ばれるのではないか。写真の掲載についても数多くの要望があることであるから、是非とも実現してもらいたいものだ。今年に入り、しばらく沈滞気味だった女子プロレスも

いよいよ巻き返し戦法を試みる兆が現われはじめた。現在の女子プロレスは小人プロレス協会に所属し、十数名のレスラーに減少したが、今年が勝負と秘策を練っているようだ。このままの状態では女斗美マニアは女子プロレスに変わり女相撲を最高とするマニアにとつて、さらに仲間作り？が後退する女相撲に関する限り、KK誌以外取り上げる月刊誌のないことを思えば、何としても半頁の絵巻の続行または写真の掲載を切望してやまない。(女俵居士)

始めてお便りします。私は私に本誌を愛読している二十四才のサラリーマンです。私のマニアは色々のマニアの中でも非常に数の少ない鼻マニアの一人です。私の鼻マニアは女の人の鼻の孔を見たくて見たくてしかたがないのと、それとも一つは自分の鼻の孔を女の人にさせる事の二つです。道を歩いている若い美しい女の人の鼻の穴、或は映画女優の鼻の穴がどんな形をしているかを考えるだけでも体じゅうが興奮します。しかしこれらの女の人の鼻の孔なんか、そう簡単に見る事は出来ません。それは女の人だれもが上を向いた

東浦ひかる強烈縛写真特集

第一集 後手吊り足挙げ縛り 略号「うら」

大手札印画紙 (13×9 種) 焼付 五枚一組 五〇〇円

肥り気味の割に柔軟な姿体のひき足首にも縄をかけ、その縄をぐいめるの辛抱強さと柔軟さを試すたぐい吊り縄にて引き上げ、恰も一と床につく位に吊り下げ、片方の許しを乞うまで晒しておく。

第二集 二つ折りエビ責め 略号「うり」

大手札印画紙 (9×13 種) 焼付 五枚一組 五〇〇円

これは、流石辛抱づよいひかるとを連繫、両方の足が高々と挙りも、早く解いてくれといつて悲鳴丁度赤ちゃんがオシッコをさせてを上げた一コマ。丁度腰のところ貰うときのような恰好で床に坐らで二つ折りになるように膝と後手されて許しを乞うひかる。

第三集 足挙げ椅子責め 略号「うる」

大手札印画紙 (9×13 種) 焼付 五枚一組 五〇〇円

責めが終ってからマゾ女性ひか足の間から顔がのぞくといった、苦痛と羞恥に満ちた強烈な緊縛。かきうきうきう力一杯締めつけた両足が高々と頭の上まで挙って両試みることの出来ないポーズ。

り、仰向いたりして他人に鼻の孔 っている写真を沢山集めています。なんか、はずかしくて見せたがらないからです。ですから私はヌーの写真や絵なども沢山集めています。ド写真なんかで女の人が仰向けにす。私の鼻は男のくせに少し団子寝ていたり上を向いていたり頭を鼻で上向いていて女性の様な鼻で後の方へそらして鼻の孔が写す。そして鼻の孔の形はダエン形

昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭
和和和和和和和和和和和和和和和和
363636363636363636363636353535
年年年年年年年年年年年年年年年年
12111098765432新121110
月月月月月月月月月月月月月月月月
号号号号号号号号号号号号号号号号

(定) (定) (定) (定) (定) (定) (定) (定) (定) (定) (定) (壳) (定)
 価 価 価 価 価 価 価 価 価 価 価 切 価
 —————
 ○○○五五五五五五五五四 四
 ○○○○●○○○○○○○○○○ ○
 円 円 円 円 円 円 円 円 円 円 円 円 円

昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭
和和和和和和和和和和和和和和和和和和和
3838383838383737373737373737373737373737
年年年年年年年年年年年年年年年年年年年年
5 4 3 2 新 2 1 12 11 10 9 7 6 5 4 3 2 新
月月月月年月月月月月月月月月月月月年
号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号

定定定定定定定定定定定定定定定定定定
 価価価価価価価価価価価価価価価価価価
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 円円円円円円円円円円円円円円円円円円

本誌最近号在庫案内

△新装特大号より以降▽

を二つ八の字においた様な形をしています。自分で毎日小さな鏡を口にくわえて鏡台に向って自分の鼻の孔を一人で見て楽しんでいました。又は自分で上を向いたり仰向けになったりして、自分の鼻の孔を写真に写したりして持っています。プレイに關しては今までに私は三十人程の女の人の鼻の頭を自分の親指でもって思い切り上へ押し上げたりしました。又自分の鼻の孔も十分間程女の人に見てもらったり、親指で鼻の頭を上へ押し上げてもらったり、鼻の孔の毛をハサミで切ってもらった事もあります。又今までに私の鼻の孔を見

た女の人は一万人程いるでしょう。それは私が道を歩いている時、前から女の人が歩いて近づいて来ると、自分はすぐに上を向いて歩くのです。そうすると、その女の人には私の鼻の孔をいやでも見なければなりません。その瞬間私は女の人に自分の鼻の孔を見られているというはずかしさで非常に興奮します。又女の人と向い合って坐ったりする時は必ず私は上を向いて鼻の孔を見せます。そうすると又私は女の人に自分の鼻の孔なんか見られていると言うはずかしさで非常に興奮します。どなたか私と一緒に相互に鼻の孔を見せ合つた

り鼻責めをやったりする女性の方
はいないでしょうか。もし希望の
方があったら、この本誌の読者通
信を通して呼びかけて下さい。(

新潟の石山正枝様五月号の貴女の御便りを拝見させて頂き胸がどきどきしましたわ。すぐA子にもみせ一緒にこおどりして喜びました。本当に私達丈けかと思っておりましたので、嬉しさでいっぱいです。男の人の様に中々グループも作れませんものね。新潟の貴女も、きっと豊山関のファンでいらっしやる事でしょうね。でも大阪場所は本当に口惜しいと思ひましたわ。岡平様には一度御便りをさし上げた事がございますが、男の人の前ではやはり恥しさが先になります。女性丈の集いが理想的と思います。A子と三人でプレイが出来ましたらとてもすばらしいと思いますわ。この御便りを書いても胸が熱くなります。ぜひ御便り下さいませ、たのしみにして居ります。岡平様の所でそっと私の連絡先を御聞き下さい。岡平様に連絡先を御知らせして置きますからそれから何処かで一度御逢いし女性丈けでぜひすばらしいプレイを

致しましょう。A子も私も小がら
ですから、貴女にはとてもかなわ
ないと思います。でもA子も私も
相手が代りきつと体中がしびれる
と思います。貴女の御作りになつ
たデニムの生地のものも拝見させ
て頂き度いと思います。私達の求
めましたのは中学生のまわしで、
運動具店で弟に頼まれたと云いま
した。でも一寸かたくて、締めに
くい事と、締めた後、すれますの
で皮ふを痛めます。値段は千二百
円でございました。豊島間和様、
誌上で御便り頂き有難うございま
した。でも私達は女性丈けでプレ
イをしたいと思えますので、御許
し下さいませ。(村田武子)

本誌を手にする都度、編集部の皆様方の日々たゆまぬ努力を真近に感じ心より御苦勞様と申し上げたく存じます。さて「奇ク」愛読の皆様初めまして。二十一才のB Gです。それに「M」七十%「S」三〇%程度ということも御報告すべきでしょう。今にして思うのですが、幼少の頃より責めに対して快感を味わっていた様です。それと申しますのも、私を育てて呉れた人がとてもひどい人で（当時はその思いで一杯でした）縛る、

打つ、絶食、お灸をすえる、蹴る等書いてしまえばそれまでの様ですが、苦しさは並大抵ではありませんでした。ある時は口答えをしたという事で、ある時は戸棚の菓子に手を出したとか、又ある時は兄弟げんかをしたという理由等数えあげる事が出来ませんが、子供なら誰でもすると思われる事をその人はとても嫌がり徹底的に「さんげ」させられたものです。いつの頃からか苦しい、痛い、哀しいと思う中で、どうすれば少しでもそれらの苦痛からのがれることが出来るだろうかと思う様になりました。「そうだ!!それらの全てを喜びに替えてはどうだろうと思つたのです—確か小学校三年生と覚えています—実際そう思ってみれば快いではありませんか。それからというものの責めが激しければ激しいほどしびれる様な喜びを味わえていたものです。その私も一人の女性とみなされる様になり、そんな責めは不要とされる様になりました。(私の思いに反して)そこでSの男性の方々、私の心中お察し下さいまして一日も早くお互に嬉びあえる日のあることを望むものです。それから浣腸責に大なる興味を感じています。それら

も加味して以後よろしくお附会いの程お願い致します。(広島県八沢原洋子V)

寒さも過ぎ去って漸く春めいた頃になりました。読者通信では本当に大勢の方々が女斗美について投書をされて居りますので一筆差し上げたいと存じます。私も実は「女角力」ファンなのですが「奇ク」を読む事によって同じファンの多い事に強くしている様な状態です。私は雪崎京人の作品を拝見し、それが原因となつて一度もみた事のない「女角力」を空想するに至りました。雪崎京人が筆をたたれてからは全く「奇ク」も縁遠くなりしましたが、最近新しい人々が出て再び楽しみが出来ます。この上は「女角力特集号」が出るのを首を長くして待っておりますが、どうも御迷惑なお願いと思ひますが読者の声も取り上げて下さい。女斗美といわれる中でも「ふんどし」一つの裸女が短刀や刀を持って相手を斬り倒す無きん絵を好む人と単に「女角力」を好む人があるようですが私は後者がいいのです。女性で角力をとろう、それも「ふんどし」をしめてという事は大変刺戟的だと思います。

す。三人ほど実際に女性の方々も投書されている様ですが、どうか実際にそんな行事が現れたら楽しいと思ひます。毎月貯金しても会員になりたいと思ひます。編集部の皆様も協力して下さい。次に大勢の通信にもみられるように写真の掲載をお願いしたいと思います。「奇ク」の絵では見ましたが今一つ実感が湧きません。勝手なことばかり書きましたがよろしくお願ひします。(東京八古橋下生V)

奇ク御愛読の皆様御元氣ですか?編集部の方、五月号に私のバンドフォト雑感を載せていただき本当に有難う御座居りました。本郷綾子様、中川フミ子様、針井美香様そして素晴らしいサジスチンの原口里子様貴女の強烈なバンド責めは全く私共の垂涎のまです。ぜひこの様な素晴らしい女王様の親しい御便り拝見いたしたく存じている私をあわれんで御情けをかけていただけて下さい。御意見や御感想の皆様もどしどし御意見や御感想を御寄せ下さいませ。御希望の方には私の所蔵の月経帯を御送りしても結構です。そして出来れば、この周辺の女性の方でこの哀れな男を苛めて見たいと思われる方が

御られましたら御便り下さい。良識あるお互に迷惑のかからない純粹なプレーを楽しみたいと願ひします。(徳山市八安田隆夫V)

近頃女装愛好者が増加しつつある事は私にとっても喜ばしいと思ひますが唯一つお願いしたいのは真面目に振舞って戴きたいのです。少数の方達がこっそり女装し灰色の人生を少しでも美化し心のうろおいを持つ事は決して社会問題ともならず女装愛好者の永続性上越した事はありますが、増加し大人数の方々が勝手気ままな振舞いに及ぶ場合必然的に社会問題となり強いてはつまらない法案が成立する恐れもあながち無いとは申せません。だからと言って増加しつつある愛好者の方々を制するのは無理で女装の醍醐味を知った上からは死ねと云わんばかりの事と同じでしょう。女装愛好者の皆様、真面目に行動致しましょう。家庭の一室でこっそり女装して楽しんで下さい。自信のある方は外出も仕方ありませんが此の場合絶対見破られないようにしなければなりません。疑われる、気取られる、こうなると二度と外出が出来ないばかりか、いやな眼で日常を見詰

められ、しいては他の愛好者に迄迷惑をかける事になります。外出し女性として扱って貰いたい。お嬢さん、奥さんと呼んで欲しい。たまらない喜びです。でも出来るだけつつしみましょう。外出の折は化粧は薄く服装は地味なありふれたものを利用する事です。あの町この町十人寄れば五人も六人もいる娘さんや奥さんの服装に合わせる事です。黒っぽいものもいいですね。赤系統のものはいけません。本当は赤が身に付けたい方が沢山いらっしゃるでしょうね、でも我慢して下さい。次に言葉には充分気を付けて出来れば黙って通すのが理想ですが、まさかそんな事は出来ません。短く単的に話すのです。裏声はいりません逆効果です。次に時期は冬の夜が外出には最適です。七時から九時頃迄、これ以上おそくなるといかがわしい女と間違われて痴漢に襲われる心配もあります。あくまで良家のお嬢さんであり奥様ですから自重して下さい。あまり明る過ぎる所も禁物です。又人前でこれみよがしに化粧直しや、靴下直しにスカートを上げやたらにスリッパのレースなどをチラチラさせるのもどうかと思ひます。不可抗力で見え

る事もあります。これは仕方のない話です。風の強い日などは和服姿でお腰など見せたくなくとも見えるものです。はずかしそうにそつと歩きましょう。小股で女らしく、イミテーションではありま

せん本物として行動する事です。
(京都市八佐倉美津)

「駿府城女曾我」の出来栄は、女の生首マニヤにとつては只讚嘆あるのみ、他の頁が総て白紙に感じられた位でした。無残な中にも妖艶美あふるメルヘンの白眉として「裸女血斗の果て」「霞ヶ城女合戦」を凌ぐ超Aクラスの傑作かと存じます。物語の卓抜さもさることながら我々マニヤの意表をついた「和製ヨカナン」の挿入も新機軸として感服させられました。只惜しむらくは他の二葉がどうも戴きかね、その点過去の欠点を脱去し得なかったことに物足りなさを抱かせます。つまり物語とはアンバランスに挿絵への配慮が及んでいないことです。二葉の香しからぬ挿画にかえて、美人の誉れ高き琴姫の首が胴体から切り離されて絹毯のように畳の上を転がる場面。血糊の懷剣を咥え、剔ねられた琴姫の生首の髪を左

大好評！浣腸特集

浣腸マニヤ東浦ひかるの真迫的浣腸フォト、圧倒的人気の東浦ひかるのポーズをくらん下さい。

浣腸実施中

略号

(かみ)

大手札 三枚一組 三〇〇円
モデル 東浦ひかる

強制空気浣腸

略号

(かく)

大手札 三枚一組 三〇〇円
モデル 東浦ひかる

百CCの浣腸

略号

(かな)

大手札 三枚一組 三〇〇円
モデル 東浦ひかる

浣腸責の極

略号

(かむ)

大手札 三枚一組 三〇〇円
モデル 東浦ひかる

強烈エビ責

略号

(えひ)

大手札 三枚一組 三〇〇円
モデル 水本 茂美

ゴム衣緊縛

略号

(みす)

大手札 三枚一組 三〇〇円
モデル 水本 茂美

全裸の羞恥

略号

(みろ)

大名刺 五枚一組 三〇〇円
モデル 田原美佐子

全裸後手縛

略号

(みに)

大名刺 三枚一組 二〇〇円
モデル 平野 笑子

股間しばり

略号

(みと)

大名刺 五枚一組 三〇〇円
モデル 絹川 文代

寝台の全裸

略号

(みほ)

大名刺 三枚一組 二〇〇円
モデル 平野 笑子

全裸股間縛

略号

(みへ)

大名刺 五枚一組 三〇〇円
モデル 絹川 文代

手に掴んで目より高く持ち上げ、その妖麗な死顔を自分の方へ捻じ向けている絃姫の雄姿。又は雪肌も露わに腹掻き切っている絃姫の首級が、琉璃姫の小太刀の下血飛沫を噴いて切られた胴体から飛んでいる光景などにして頂けたらと思います。欲をいえば生首の描写がいささか簡略に過ぎ、もう少しリアルな凄艶美を謳って欲しかったとも感じられるのですがこの点杉江美津子嬢の「私の生いたち」における姉妹の生首の描写の方が秀れていたと存じます。久々に接した「生首シリーズ」に対する喜びの余り、無理かとも思われる注文も述べ立てましたが、誌上での発表が不可能ならば分譲品になりともぜひ我々の夢を満たして頂きたいものです。末筆乍ら同好諸兄の御活躍を期待しております。(新潟市八前川茂雄V)

寺島様の投稿を幾度か読み返し只、私は敬服するばかりであります。『流腸』何とすばらしい行為でしょう。か。すばらしい言葉。あなたの方法に今、又大きく自分に参考、又プラスになったことか知れませんか。特におむつに関して、

私は深い精神をはらいます。三枚オムツカバー持っています。私は瑞穂区に住んでいる一女性です。あなたがB・Gであるごとく私も一介のB・Gです。共に力を合わせて、私達の性格の合った者同志世の中の平凡な人間に対抗して生きたい。是非一度、貴女にお目にかかりたい。と、願っています。貴女は一米七〇センチ、御立派な体の持主でいられます。私は一米五三センチのやや小型の女ですが必ずやあなたに満足を与えるだけの努力を致します。先程も申し上げた通り、千種区に住まれるあなたに、私の住所は近い。夜でも一度お逢いして下さい。私のつとめは朝八時から夕六時まで。毎日曜休みです。あなたの休みもお教え下さいませ。あなたの御希望は男性とのことでしたが、女同志で理解出来ればそんなうれしいことはありません。まじめに私共の性格を考えたい。決して私達はひけ目をかんじることはないのですから。この投稿が「キク」に掲載されたとき、あなたは私に必ずお呼びかけ下さることを私は信じて居ります。そして、私もあなたによるこんでいたただける丈の、いえそれ以上の努力をし、あなたの

御希望にむくいたいです。では逢えることの出来る日をたのしみにして、今日からがんばります。お元気ですね。追伸、どのような方法でも今度のキクに投稿されて、連らく方法をお報せ下さい。必ず私は守ります。申し上げておきます。ここに記した名はペンネームです。(名古屋八山岡久子V)

辻村、塚本両先生の「緊縛フォト撮影の実際」は毎号大へん興味深く読ませていただいています。フイクションでないだけに真実さが行間ににじみ出て私どもの心を強く捉えらるからです。今後できればグラビヤ口絵のフォトはそのつど撮影の実際を本文に記載して下さい。ただ単に悦虐フォトだけなら現在市販各種雑誌にあふれるほど出ていますのですでに食傷気味になっています。読者の多くもおそらくフォトの撮り方やモデルさんのエピソード、諸先生たちの御苦心、時にはカメラマンの失敗にいたるまで広く知りたいのではないかと思います。ことにマゾフォトについてはモデル嬢の服装、お化粧、その動き、撮影場のふんいき、撮影状況など詳細にお洩しいただけたらマゾマニヤ

にとってこの上もない好読物かと思えます。更に一歩進めてモデルになられた方々の御感想なり、手記や告白をほんの数行でもお加え下されば一入精彩をそえることでしょう。次に御誌の最も特色である読者の体験記や告白などは生の素材をそのまま活字化されるので常にうれしく拝見しています。そこでこれらの中で優れた作品を選び出しそのクライマックスの幾場面かを口絵写真に作り本文と同時に発表して欲しいものです。またできれば作者自身が好きなモデルを推せんする方法をとれば投稿者の意欲を一段と刺激し将来益々応募作品も増えましょうし、一面御誌のマネリズム打破にも一役買ふことになるのではないかと思います。二月号で呼びかけの東京の川田行子様。私の承っているところでは真実のM男性はなかなか見当らないそうです。自称Mなる者は雨後の筍のように次々と名のりをあげてくるようですが、その大部分はフイクションのみにあてられ、少し本格的な責に乗り出すとすぐ悲鳴をあげて中止するよう哀願し、その無気力さには全く興味がなくなくなってしまふとか。これはあるS女性の述懐です。同じこと

はSの女性にも言えそうです。多く彼女らは単に相手の要求によってごく控え目に、至って消極的に動くだけで、そこには殆んど自主性もなく、ほんのおつきあい程度甚だしいのになるとお金目的の偽装S女性さえあるらしいのです。真のサド女王も又えがたいかなでありません。さて私のあこがれるSの女性はプレイの時は常に積極的に相手に働きかけてあらゆる機会に指導権をとり、その精神も肉体も完全に支配した上、如何に些細なことでも自分の意にそぐわない相手の言動を丹念に探し出して処罰の口実として、緻密な計画と伶俐な工夫による責の折檻を用意し徹底的に男性を苛め抜くことに無上の悦楽を感受する方です。川田行子様。あなたはきっと男性を責めることそれ自体に最上の愉逸を覚えられますでしょう。もっととはっきり申せば男性を苛めている間は恍惚とした状態になられるのではないのでしょうか。もしそうだとすると理想的なSの女王様です。ただその場合御言動が積極的且能動的かどうかは気がかりです。それにしても嬉しいのはプレイの場所やむちやなわまで準備されていられることです。どうぞ一日も

早く真のM男性を入手され、悦虐の醍醐味にとう酔われますようお祈りします。私も自信があります。んが都内ならず御連絡の上プレイに奉仕させていただきますので只今はすが余り離れていますので只今は不可能です。それでKK誌上で御体験や御気持をお話し下さいませんか。もしそれも駄目ならせめて読者通信で私奴にお呼びかけ下さいますよう切にお願い申します。

(豊橋市八木越修)

奇クの愛読者の仲間入りをしてから、まだ三ヶ月位のホヤホヤです。古本屋で三十四年四月の奇クの臨時増刊「サド特集第2集」を見て、その中に絹川文代さんの「麗囚」という写真を見て、すっかり奇クファンになってしまったのです。なんとという素晴らしい雑誌があるのかと思いました。その写真は、後手にしぼられて身動きも出来ない絹川さんの形のいい高い鼻を呼吸も出来ない位きつくつまんだ写真でした。最初彼女は鼻をしっぴばなの様につき上げられて、眼をとじ大きく口をあけて苦しみに耐えています。次の写真は鼻を完全につままれて、眼をとじぐったり口をあけて、苦しい乍ら

もいかにも観念した表情。三枚目は更にきつくつままれて、眼をカッとひらいて口を大きくあき、「もう許して」という表情をしていのです。女性の形のいい高い鼻や、肉の厚い鼻をみると、ああの鼻を自由につまめたらと思ってみつめるのです。手足をしぼって自由を奪って、その女性の鼻を思う存分つまみ。それを口をひらいて苦しうにこらえる女性の表情を想像するだけでたまらないのです。形よくあいた孔を水ももらさぬ位きつくつまんでびちゃんにとじさせてみたい。形のいい鼻をつまんで面白い形にしてみたい。愛読者の女性の方よ。どうか私のこの願いを叶えて下さらないでしょうか。鼻の形に自信のある人、形はよくなくても肉の厚い鼻の女性の方で私に鼻を自由にさせて下さる方はいらっしゃいませんか。もしこの私の長年の希望を満足させて下さる方がいたら、どんなにすばらしいでしょう。他のことをお望みならどんなことでもいたします。どうかお返事下さい。それから編集部の皆様にお願ひ。梨花悠紀子さんの鼻が私にとってはおごく魅力的です。いつか彼女の鼻を思い切りつまんだ写真をのせて

下さい。楽しみにしています。(東京八幡藤香根雄)

四月号口絵の四馬孝画「女城主の最期」はいままで挿絵の中で特に感銘を受けた作品です。小生はもう六年ほど前からの愛読者で特に「女体切腹」に深い関心と愛着を抱いておる者です。書店で奇クを発見したとき、待ち切れずに立読みのままラパラッとページを開いて口絵がグラビアの女体切腹場面を探します。それから目次を抜いて女体切腹の文献や作品を何かこれは、といったものが載っていないだろうか、と息を詰め眼を睜けてその場所を追うのです。感動させられるものがあります。その号だけは家で書斎に閉じこもり飽かず眺め読み返します。最近こうして大切に段していた作品を全部本から切り取って女体切腹のみの挿絵、グラビア、文献、作品でかためました。遺憾ながらこれらを開陳してともに語りあう同好の士に未だ出会わず、依然孤独な趣味として、そうしたコレクションをひそかな楽しみとし、あためておる次第です。四馬孝画伯の作品は仔細に観察いたしますとき、その表情の細かな動きがよく

描かれておることについていつも驚嘆させられるのです。悲愁、憤怒、そして恍惚美の素晴らしさは画伯の中に実に鮮やかに織り込まれ、見る者、眺める側に、胸に迫る激しい感動を与えるのでございます。それに描かかれている女体の妖艶な柔かい線、纏っている衣裳の崩れていく現実感、異常なまでの迫力を以て私の心にせまります。願わくば全国の、私と同好の多くの士のために今後女体切腹の四馬孝画伯作品を毎号一頁でも多く執筆され、掲載されんことを。そしてつけ加えて希望を申し上げますがこれからはこの種テーマとしては是非絵の場合は四馬孝画伯の筆で、官軍江戸に進駐、攻囲の銃口に立腹の最期を遂げんとする江戸芸者“或いは、会津城陥落、幕軍家老夫人奮戦の最期”といったものをその流麗な筆致で描き出していただき度いと思います。悲壮美の世界を描いた作品は矢張り、関心の薄い人達にも相応の感動を与えてはいるようで、知人に見せまると一瞬必ず眼を睜り食い入るように見つめているのを屢々目撃するのです。ポーズは全裸よりも半裸、薄ものを纏った方がきれいで、リアルな面からいっても最も重大な

クライマックスの瞬間が描かれている訳ですから必然的に足もととは乱れ、裾が高々とまくれあがって白い太腿など大きく露出されているのが普通です。仮に足もとを縛っておいても乱れるのが本当であろうと思うのです。ですから絵やグラビア写真のポーズは大膽な方が迫真感が強いと思います。柱に寄りかかって、のけぞらんとするポーズ、悲痛な表情に期待いたし度いと思います。四馬孝画伯の立派な絵、大塚啓子さんらの緊迫感あふれるフオートに絶讃と感謝の辞を送り、併せて希望を卒直に申し述べさせていただきます。最後に編集部の方々の努力による充実したレイ・アウトや編集振りの見事さに謝辞を捧げ度いと思います(大津S生)

編集部の皆様、初めて投書致します。私は東京で働いて居る二十才のBGで御座います。この間初めて奇クを見ました所、私みたいな性格がサドであることを知りまして。私は高校時代クラスの男の子を家来に使っていました。それと言うのは小さい時から勝気でケンカしても男の子には負けませんでした。よく自分のスカートの中に

男の子の顔なんか入れた事をおぼえています。私は女性か男性なのかバカ見たいでしょう！男性を「家来にするのが無情の楽しみなん」で「今は働いている身過去の男性とは別れています。読者の中のマゾの方、特に東京に住んでいる人で私のドレイになって命令には一切服従し女王の足下にひれ伏し、顔を尻に敷かれ、足でふみにじり馬乗りして遊んだらどんなにすばらしい事でしょう。それから読者の中で女王様の便器にしてくれとか書いてありますがそれは真実なのでしょいか！私も一度トイレの代りに男性を便器として使用できたらと毎日毎日夢みております。私は今、姉と二人でアパートに住んでいます。仕事が終れば毎日たいくつで時間を持て余しております。読者の皆様、いえドレイ諸君私の満足する毎日を叶えて下さいそれに今下着の汚れ物がいっぱいありますのでマゾの男達に洗濯して戴き、特に汚れたパンティをお礼として提供します。あら私こんなすごい事書いて「こわい人だと思っただでしょう」それでは人間では無く、自分は世の女性の方のマスコットであると自信のある男性は是非御申し出て下さい。(東京

△三原康子▽

読者通信欄の発展を心から喜んでます。当地は三月だというのにもう菜種の花が咲きはじめプレーするとぐっしょり汗をかくほどです。妻は京マチ子にも優る絶大なポリュームの所有者で年も京マチと同じ三十八才。斯く申す小生は五つ年下の三十三才。いわゆる姉さん女房には初めから頭が上らず、結婚後一年目に日頃のうっぷんを晴らすべく腕力を揮ったところ、彼女の逆襲に遭い、三十分近くも揉み合ったでしょうか。力でもスタミナでも加寿子(妻の名)の方が優っており、いやになるほどドヤされてしまいました。それからの加寿子は「柔道を習ってあんたがわたしの命令に背いたら足腰立たんほどドヤしつけてやる」と豪語しはじめたのです。だが当地には女子が習いに行ける道場がないので、柔道の手引とか何んとかいくつもの参考書を買集めて来て小生を稽古台にし、子どもがなるところから毎夜のように虐めつけ、ここ二三年来小生も加寿子のお相手をし加寿子に投げとばされたり屈服の誓を立てることに自己の幸福を見出すようになって了い

ました。彼女から「意久地なし」
「それでも男か」「お前は一生わたしの奴隷だぞ」「この百万ドルのポリュームの下敷きにされてるお前は世界一の幸福者と思え」といわれるとぞくぞくするようになつてしまいました。先日指宿温泉（鹿児島島の有品なジャングル温泉）で遊んだとき、生い茂る熱帯樹の密林から悠々と全裸の姿態を現わした彼女は世界で最も美しく逞しい女王のように見えました。ほかに浴客もいなかったので小生は思わず彼女の足許にひれ伏し、感激にむせびました。女王さまは満足そうにうなづき「よしよし馬にしてやる、馬上のまま温泉プールに入るのもまた一興じゃ」と仰有いました。ポリュームがあるのでお乗せするのも大変ですが、最近はおトイレへ行くのも御乗馬で、そのときのお言葉は「一鞭あてるぞ」というのです。馬はもちろん御用が済むまで御待ち申上げ、ときには命じられた後始末もします。小生は高校出の地方公務員、大学を出ていないのだから出世したところで係長が止まりです。しかし家にはお慕しい女王さまが待っていると思うと仕事にも精が出ます。この頃では加寿子などとは面と向

うと言えなくなりました。女王さまと呼んでも不自然には感ぜず、妻もまた満足気にうなづきます。世間から見れば異常な夫婦かも知れませんが、小生はこのために魂が浄化されたようにすがすがしく加寿子もまた、この上もない征服感を満喫することによって世帯の苦勞も忘れ幸福でいっぱいです。
(宮崎市SY生)

皆さんお変わりご座居ませんか。早速ですが本誌に対する私の我がままを云わせて下さい。まず此の「読者通信」欄の増頁です。雑誌編集上のスペースの問題や本欄への投稿が少いとかいろいろあると思いますが、私達同好者の生の声を一人でも多く知りたいし又内向にしている各人の悩みとかいうものに勇気や安らぎを与えます。私は本誌を購入して最ず初めに見るところはグラビアと本欄、読者通信です。編集部の方々、どうか一頁でも半頁でもいいですからスペースを取って一人でも多くの同志の声を聞かせ下さい。それと「読者サロン」の復活です。読者の中には貴重な体験や奇抜な文才を持つて居ながら仕事の都合上ペンを執る時間のない方がたくさん居られ

ると思います。そのような方々のために又少しの時間をさいて読むコント風なものに多忙な読者に好まれると思います。モデル嬢にも筆を執ってもらいたいのです。モデルさんへのアンケートでも座談会風のものでもいいですからお願いします。では最後に各モデル嬢へのアイデアを書いてみます。絹川文代嬢太いロープを一本づつに腋の下へ通し天上から吊り口まわりにもロープで縛り両足は一本の丸太棒でやや足を開せ足首を固定縛り、首へもロープを通し其のロープを引っぱってのプランコ責め梨花悠紀子嬢学校の運動場にある鉄棒にぶら下りX字型に固定若しくは両足だけ自由で地面は汚物池この時鉄棒は低いもの使用。又足かけ上りの足をかけた時の姿の縛りに両手でぶら下り両足は前からヒザで鉄棒をまたぎ股の間から顔を出させた姿で縛る（極短ブルマーを使用）関谷富佐子嬢全裸の上パンティの代りに白い縋帯使用しての海老責又は逆海老責め。東浦ひかる嬢にはGパンをパンティ代りに短く切ったものをはき自転車かオートバイを小道具にヒップを強調した縛り。大塚啓子嬢には両股の間に一弁ピンをはさませ

た鎖りか木馬責め。海藻のパンティをフンドシ風につけるかなワフンドシをさせゴミ捨場にころがすか、ゴミ捨場に木を立てハリツケ縛り、いずれも肌にゴミ汚物をなすった上で荒ナワで堅く縛り近くにカラスでも居れば感じが出ます又竹馬を使い片方は極端に低く片方は高くして股を極度に開せた写真などです。今度はサド役としては関谷、大塚、東浦の諸嬢を希望します。大塚啓子嬢のサド役の写真は顔に表情を出してもらいたいです。大塚さん、もう少し大胆に責めて下さい。尻敷きもM男の顔と啓子嬢の尻をアップさせて、しかもサド役が啓子嬢だと分るような写真をお願いします。（千葉八間泉好男）

SMファンの皆さんお元気ですか。私の奇ク愛読歴も可成り長いものです。毎号欠かさず目を通すというわけには参りませんが、それでも時折購入する奇ク誌がもう随分集まりました。現在は読書と空想による、しがない毎日を送っておりますが、かつてはガールフレンドとマンマープレイ（捏造語で申し訳ない）程度のことは行ったことがあるのです。この経験プラ

ス空想の結晶としまして。最近私は、動的プレイということを考えております。私のいう「動的」とは、通常いうところのそれとは若干ニュアンスを異にするのです。それでは一体、どういう状態を指しているのか、という、いわば概念規定の説明に入るわけですが、話が少々かたくなりそうですから一例をあげることにし、説明を補足したいと思います。適切な例とは申せませんが、笞打ちの場合について説明いたしますと、一般には、笞打ちの行為は動的であると考えられます。緊縛された被虐者それ自体は静的であるけれどもそこに笞打ちという動作が加わることにより、動的なプレイとなるということです。しかしながら私のいう「動的」とは、もっと限定された意味をもっておりまして、被虐者自体が動作を行う状態を指すのです。ですから、この場合はたとえば被虐者が笞から遁れるために、種々の動きを行う。そのような状態を指すものです。したがって、テーブルとか、柱とかに被虐者を固定してしまつては意味がなくなるのです。ですから緊縛するにしても、或る程度の動作が出来るように配慮することが必要に

なつて参ります。勿論、被虐者を固定しましても、体のクネリ位いの動きは得られるでしょうが、その程度の動きは私のいう「動的」の範囲には入りません。右は単に一例をあげたに過ぎませんが、おおよそそのところは、おわかりいただけだと思います。この例ですと被虐者の動きは遁れるためのものですから、いわば自分の意志に基づくものです。しかし私の動的プレイが最も効果的にあらわれるのは、被虐者自体の意志に基づくものではなくて、加虐者の意志による強制された動作を、被虐者が余儀なくされるところにあります。緊縛された被虐者が、答に追われてアチラコチラと歩き廻される、などは、まさしく效果的プレイの一つに数えられるでしょう。しかし、私自身は余り答打ちを好みませんので、腹案として持っているいくつかの方法は、この例としてあげたプレイとは異った、そして私自身としてはもっと効果的であると考えられる方法なのです。さて、如何なものでしょうか。この動的プレイに興味を感じになりましたでしょうか。興味を抱かれた方、または私と同じ考えをお持ちの方は、またはお便りを下さい。人それぞれ

分讓品御注文の栞

○代理部の分譲品は、すべて前金にて御注文願います。直接販売並に代金引換はしておりません。

○御送金は、現金書留（封筒は一枚三円にて局で売っています）、小為替、定額小為替（小額るときは御便利です）、振替（用紙は郵便局に備えてあります）、切手代用（五円、十円など小額のもので絶対に紙にはりつけないでお送り下さい）等を御利用願います。

○御注文品は、雑誌では何年何月号、或は略号の付してあるものは略号、フォト類はすべて略号をお書き下さい。（品名だけですと略号との対照に手間をとりますから略号だけお書き下さい）

○送料は日本国内に限り当方にてすべて負担させて頂きます。外国便は実費御負担願います。

○局留にて御受取り希望の方が最近大変ふえてきておりますが、左記の点御留意願います。御注文の際、お受取りなられたい郵便局名（特定局でも可）とお名前とを御連絡下されば、当方では御指定された局宛発送します。別に局からは通知がありませんから、到着している日頃を見はからって、その

局へお出向きの上、お受取り下さい。局での郵便物の留置期間は十日間です。十日を超過すると差出人に返戻されます。お名前は仮名にても差支えありませんが、認印（市販されている）の必要な郵便局もあります。

○御注文の宛先は阿倍野郵便局私書函第十四号天星社です。（今度郵便局からの通達で、必ず私書箱番号を明記するよう依頼されましたので、私書箱第十四号とお書き願います。）

○フオト類は原則として密封の上第一種便（封書扱）としてお送りいたします。但し大型にて破損の虞れあるものはアテ紙をした上で第五種便にてお送りします。雑誌はすべて第三種便です。

○尚、御注文の際、若し第二希望品がございましたら添記頂けますと、万一、分譲中止、品切などの時迅速に処理できて助かります。

○分譲品の新しいものは毎月新版案内として掲載しておりますが、御希望の趣向がありましたら、お申出下されば幸甚です。

○宛先は、必ず楷書ではっきりとお書き願います。（肩書きがありましたら、それもお忘れなく）

○金額にして五千円以上まとめ御注文の節は、金額に応じて優秀フオトのサービス品を贈呈させていただきます。

れ好みがありますから、好まないプレイについては一向に考慮を払うことはしないものです。例としてあげました答打ちについても、答愛好者の方なら、もっと興味ある方法を御存知に違いありませんですから、いろいろの方と知りあいにすれば、それら不得手のものについて、互に補充しあえることになろうと思います。老若男女を問わず、どなたでも結構です。

(東京都八小沢栄一)

初めてお便りいたします。私は今年二十一才になる男で、マニヤです。特に女性の禪姿に異常な興味を持っています。下着店から買った禪(モッコ)型の女性下着を数種類持っています。毎日着用しています。ところで最近グラビヤに禪姿がないので少々残念です。女性の読者の方で禪に興味を御持の方と一度せひ文通したいと願っております。出来れば禪姿でプレイ出来れば幸せですが、大阪地方の女性の方で文通でもプレイでも御相手をして下さる方の便りを願います。(大阪府高槻市八多)

賀原宏之

○

東京の川田幸子様、神奈川の中川フミ子様。この度図らずも奇ク誌二月号読者通信欄にて私どもM男を狂喜さす御通信をお寄せ下さり、早速不躰けを願みずペンをとりました。私は二年以来奇クを座右に離さず愛読致す三十三才独身男子です。生来の見果てぬマゾ願望に空しい悩みを続けてきました。が、この際勇を鼓し貴女様方のお呼びかけに応じ、一ときも速かに唯一最高の生きがいを得ようと決心致しました。支配的S女性の足下に跪き、耐え難い辱しめと残酷な折檻を受け献身のご奉仕に一身を委ねることは畢生の夢でありましたが、プレイとして私の描く構図は、犬馬同様、鞭による仕込みを受け乗り廻され、奴隷として細引で身体を緊縛された上、なるべく汚ごされた下穿きなどによる猿轡をかまされ、息絶える迄ヒップにて顔乗り、足蹴り、踏みつけ、ハイヒールでの蹂躪を受けること。ときにはS女性の足で踏みについたり、口中でぐちゃぐちゃに噛み

砕かれた糧を畜生のように投げ与えられ喜々として頂戴させられたり、痰コップ、足拭い雑巾として取扱われ、又便器代用に放屁を蒙り、おしものものの始末を舌と胃袋にてご奉仕致すよう命ぜられるなど、浅ましく賤しい生物として扱われましたら、どの様に仕合せかと考えております。(東京八早野生)

○

私は本誌を愛読致す35才のマゾ男性です。他の類型誌を常にひき離す格調高い編集と、広範な取材に精進される編集部の方の御努力を感謝致します。又読者通信欄を見ましてもここ三四年に亘って定った投稿者諸氏の御名前をかなり多く見うけられることも一つに本誌の不動の權威を示唆するものと思えます。ここで私の勝手な希望を述べますなら、もっとサド女性からの体験記を何らかの方法で掲載数を増していただけたら私共M派にとり何よりの励ましになることでしょう。私共マゾ男子として理想のサド女性を現実容易に求められないことは不幸ですが、2月号の通信欄に通信を寄せられた東京の川田様のように世にはMの男性を欲して得られず悩まれる

S女性の方もおられる事実を知り一縷の望みと勇気を与えられました。他一般人に弊害を及ぼさず責任をもちあう同好者個人の合意にもとずく交歓に臆するいわれの無いことを信じ、勇を取って全国の女王様にお呼びかけ致します。何の遠慮もなくM男を玩具同様に弄びたい方、奴隷として殴打、蹂躪、鞭打ち等あらゆる折檻、凌辱を加え嗜虐の願望を叶えられたいと希うサド趣味の女性の方とおつきあい致したく思います。勿論如何なる場合でも秘密厳守、有形無形のご迷惑はかけません。(東京八望月志郎)

○

小生貴誌の愛読者で毎月二十五日を心待ちにしています。小生の最も熱望する記事は美しい女性の鼻及び肛門に関することです。最近の記事は、この小生の好みからすれば必ずしも満足ではありません。小生はこの十数年来この趣味に関係する写真を約二千点程集めました。内外の雑誌は勿論、パンフレット医学書、写真集から女性の美しい鼻、特に鼻孔の写真を集収したものです。肛門の方は僅かに医学書から集めた十種類位なものです。(東京青山八KK生)

次号(七月号)は五月二十五日に発売いたします。

(昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌 第一二二号)